

山田吉太郎

明治十一年十一月九日生
麻布區宮下町二十八番地

東京洋傘同業組合副組合長として又麻布宮下町々會長として、行く處可ならざるなき氏の如きは、蓋し棟梁の材たるを失はぬ。氏は神奈川縣都築郡山内村をその搖籃の地とし喜太郎氏の長男に生れた。その祖は曾て前田砲術指南番を勤めた、由緒正しい家柄でその血を享けた氏が、武士道氣質の燃えるが如き熱情と氣魂とをその奥底に秘めてゐることは疑ふべくもない。此の精神を以て氏は明治三十三年上京し洋傘製造業を始めたのである。『士魂商才』と云ふ事があるが、氏こそまさに此の心を以て心となし一意斯業に精進した人であらう。けれ共それから今日に至る約卅年といふ可成永い年月は必しも幸運の連綿ではなかつた。否寧ろ大小幾多の困難は時に澎湃として其行手を遮り其進路をはさんだ併し荆棘の道を過ぐれば纏て懐しい人里に出ることを確信して已まなかつた。氏は大なる勇猛心を以て凡ゆる世の辛苦と闘つたのである。果して其は事實となつて現れた。成功が遂に彼を迎へたからである。かくて衆望の歸する處推されて、東京洋傘同業組合の副組合長となり、専心斯業の發展と組合員の福祉を増進した。之が爲大正十五年一月組合創立十週年紀念祝賀會が催されるや、組合では氏の功勞を多とし表彰狀を贈つた。然しその性來の世話好きは常に斯業關係にのみ止まらなかつた。即ち繁忙なる業務の傍ら宮下町々會役員として多年事務に執筆する處があつたが、本年推されてその會長となり、愈々町政の發展と改善に努力して居る。以て氏の公共的觀念の半面を知る事が出来る。氏資性濃厚篤實にして思慮圓熟謙讓有徳の君子人である。夫人を禮子と云ひ子實なく現在公三氏を入籍せしめて家業を護つてゐる。

伊東鎌吉

明治十二年七月九日生
府下大岡山六五

『人間必須の智力には、理論的智識、實用的智識、鑑別的能力の三種である』と昔しアリストートルは斯く云つた。吾が伊東鎌吉氏は、東京府教育界に於て此の三拍手を備へた新人である。氏は愛知縣の出身、嚴父鎌次郎氏は篤學實踐窮行の人格者として夙に小學校を經營し、農村の開發と子弟の教育に當り、時の縣知事から表彰された名譽の人であつた。氏は其長男に生れ幼より父君の嚴格なる訓育を受けて人となつた。長ずるに及び將來教育界に名をなさんと欲し明治三十三年名古屋第一師範學校を卒業するや直に愛知縣下の小學校に教鞭を執り教育界に於ける新智識として到る處に名を轟はれたが、後幾何もなく拔擢せられて名古屋下川小學校の校長に任ぜられた。以來職に留ること拾有七年、又以て氏が如何に兒童教育に熱心にして而も父兄の信頼を博してゐたかを最も雄辯に物語るものである。かくて大正八年、氏は東京府の招聘に應じて、荏原郡視學となり、次いで北多摩郡に轉じ更に大正十五年七月遂に現府視學に拔擢されるに至つた。今や吾が教育界は、複雑な社會の思想に刺戟されて、兒童教育指導方針の益々多事多忙を極めつゝあるの秋深遠なる學識堅實なる思想を有する氏の如き人物を、府の視學に有することは國家將來の爲め、また吾が教育界の爲め誠に欣ぶべき事である。氏資性剛毅にして内に溢るゝばかりの温情を湛へた細心周到の好丈夫、而かも書畫に固基に趣味を有する處その情操の豊かなるを見るべく蓋し今後の活躍は正に注目しに値するものがある。



堀内忍

明治廿七年八月一日生
東京市麻布區永坂町十三

火星には人類が棲息してゐる。火星は地球よりも遙かに進歩してゐる。火星人は、あらゆる文明機關を利用するが爲めに、手足に逆比して素晴らしい頭が發達してゐると、蝸の様な想像圖を書いた人があつた、またそれは是認した多くの人もあつた。火星はさうかも知れぬ、だがそれは火星だけではない。この地球に於ても、所謂近代人と呼ばれる我々の體軀は、原始人のそれと比較して、どんなに退歩しつゝあることか、それは流轉して止まない文化の罪である。だが毒をもつて毒を制すとか、この文化によつて衰へつゝある體軀の健康を、我々は文化によつて求めなければならぬ。さ即ち進歩しつゝある醫術によつて我々の全き健康は救はれるのである。されば我々は心から醫術の進歩を願ふと共に、之れに携はる醫師に對して大なる感謝の念を寄せなければならぬ。我が堀内忍氏は前途有爲の刀圭家である。静岡縣小笠原郡西郷村は、氏の懐かしい播磨の地で、夙に自己の將來歩むべき途を刀圭界に求め、上京して慈惠大學に學び、斯學の研究に心を砕くこと數年、大正十年芽出度同校を卒業するや、職を松山病院に奉じ十有三ヶ年の永きに亘つて實地研究を積み、大正十三年遂に現住所に醫院を開業するに至つた。専門は外科の花柳病だが、多年の蘊蓄と、優秀なる技能とは忽ち信用を博し、日を逐ふて益々隆盛を極めてゐる。氏資性剛毅、血あり涙ある正義の士である。夫人を靜枝と云ひ、貞淑の譽高く二人の間に覺、要の二君、及都嬢の二男一女があり、家庭は常に蕭々として常春の和氣に包まれてゐる。

井本常作

明治十三年四月十八日生
東京市本郷區湯島天神町
電話下谷二七〇四番

噴煙のたへまない淺間山にしても、眞赤なつゝちに燃え盛る赤城山にしても、また眞白なしぶきを上げて岩に岸に、激しながら流れてゐる利根川の清流にしても、上州長陽差を生んだ群馬縣には、ふさはしい山であり、川である。この山と川とは、仁侠の二字に笑つて生命を投げ出した人々の健氣な態度と情熱をシンボライズしたものが、また國定忠治や大前田英五郎が、群馬縣の山や川のシンボルであるのか、兎に角、情熱的で雄大な群馬縣の環境が、群馬縣人に何物かを訓へ、其の胸底に眞赤な血汐を湧き立ててゐることは群馬縣多野郡神流村に呱呱の聲を擧げた、井本常作氏の氣魂と性格に裏書される確たる事實である。氏は群馬縣の人井本孫一氏の二男にして家督を相続したのは明治三十年の事であつた。學序を追つて明治大學に學び、明治三十五年同校を卒業するや、直ちに判檢事試験に登第して司法官試補となつたが、四十一年感づるところあつて、之れを辭し辯護士を開業したのであつた。かくて大正十三年五月には、群馬縣第六區より推されて衆議院議員となり、憲政會に屬したが、昭和二年六月、同會が政友本黨と合體して、立憲民政黨の成立するや、其の常任幹事に擧げられ、現在に及んだのである。氏は代議士たるの外日東印刷、帝國土地證券、日本相互各株式會社の監査役及び東京齒科醫學專門學校理事として知られ、實業界に、學界に、政界に、其の一片稜々たる氣骨と、熱血的な性格とをもつて重きをなしてゐる。家庭には、はな子夫人との間に三輪田高女在學中の靜子嬢がある。

伊藤勝藏

明治十八年二月二十三日生
本郷區湯島切通坂町
電話 小石川 一九七五番

日本三景の一なる松島を、我物顔に引つ抱へてゐる松島村は、時めく東京市會議員たる伊藤勝藏氏の出生地である。嚴父を五郎氏と云ひ、氏はその第五男である。幼より才に秀で、郷校時代から早くも前途を囑望されてゐた。東京に出で都文館中學を終へ、ついで郷里仙臺なる第二高等學校に進み、次いで東京帝國大學法學部に入る。獨法を撰んで専心これが研究を積み、優秀なる成績を以て、大正三年の春法學士の榮冠を見事かち得たのである。併しこれで氏の望は果された譯でない。氏の高邁なる理想は、あく迄氏を驅つて、法律の研究をなさしめた。刻苦勉勵して遂に辯護士となり、法曹界に奮ひ立つたのである。かくて氏は法曹界に於て少壯有爲な材として認められたばかりでなく、社交方面に、又實業方面に非凡なる才を現して來た。殊に實業界に對しては智と徳とを持つて、着々とその腕を延して鋭鋒を向け、益々その敏腕を發揮し、沼津製氷冷蔵會社創立の主力となり、遂には推されて社長となつた。此の他横濱棧橋倉庫、日立電氣、東神土地、山田金庫等の取締役となり、又有坂製袋、第一信託等の各會社に監査役として、隆々たる勢力を持ち、腕敏を揮つてゐる。氏は又一面公共事業に志厚く、切通町會を創立し、これが副會長に推され、更に十四年には區會議員に、近くは市會議員に何れも最高點を以て當選の榮をかち得た。これ全く氏が孜孜として公共事業に力を盡した徳の現れである。かく實業界法曹界に令名を馳せる氏も、家庭に於ては母堂に孝、夫人その子に對しては愛、人も羨む圓滿の家庭の主人公である。

戸倉嘉市

明治二十二年三月生
本郷區本郷四丁目五十二番地
電話 小石川 三一六番

振古未曾有の天譴に見舞はれてより茲に三年、復興の回天の大業は市民の熾烈な期待に叛いて滯滯難進し徒らに疑獄醜職の醜事件のみが滿都の耳目を聳動したに過ぎない特に之れ更始一步の秋庶政改革の大斧鉞は市政内外に亘つて加へられなければならない。此際吾々市民は市の議決機關に人格の高潔な而して市政に通曉した實業家を一人も多く渴望して已まない。本郷區民の輿望を背負つて市會の議政壇上に送られた我が戸倉嘉市氏は將にこの市民の要望に酬ひんとする奉仕の念に燃えてゐる一人である。氏は多年辯護士として法曹界に活躍してゐるが、犀利な頭腦と辯論の雄を以て訴訟事務も可成繁忙を極めてゐるらしい。氏は明治維新以來多くの人材を輩出した山口縣に生れ、少年の頃ほひ青雲の志を抱いて上京したけれども家庭の事情は氏の遊學を許すべく餘りに貧しかつた。併し堅忍不拔の氏は苦學力行して大成中學に入學した。生活しつゝ學費を得るのは實に並大抵の苦心ではなかつた。併し一心は恐ろしいもので健氣にも活世界の荒波と闘ひつゝ、到頭所成の學業を成しとけて了つた。この堅忍不拔な青年の涙ぐましい奮闘を見て其將來を囑望したのが救ひ主浦部辯護士であつた、而して卒業後其の美しい同情によつて悉なく三高を経て東京帝國大學法科に學び、大正三年優秀なる成績を以つて卒業した。後辯護士を開業し、多年鍛へた敏腕を振つて折界を縦横に潤歩して來た當代稀に見る立志傳中の人物である。吾人は氏が聽て議政壇上に獅子吼して市民の幸福の爲に奮闘するの日を多大の期待をかけてゐるものである。



小川織三

明治九年十一月生
芝區白金志田町八
電話 高輪 五一八八

水道局長と云へば直に小川織三氏を聯想せしむる位、氏は東京市には是非共無くてはならぬ人となつて來た。それと同時に從來氏の致した偉大なる其功績は、當然我が水道發達史の上に記されなければならぬ。彼の忠臣義士を以て名高い播州赤穂郡は氏の懐しい幼時を物語る故郷だが、かうした環境に人となつた氏が滿々たる霸氣と血が環つてゐたことは云ふ迄もない。夙に雄志を抱いて上京し、東京市役所に入つたのは今を去る二十八年前の明治三十二年の事であつて、氏が出世の端緒は此處に開かれたのである。先づ土木部市區改正課を振出しに、總務部築港調査課から庶務課と轉々する裡に、氏の聰明にして勤勉なる資質が理事者の眼に止まらぬ筈はなかつた。三十八年には遂に拔擢せられて土木課の技師となり、次で四十二年には土木課河港課長に、大正二年には東京市の主事に、更に同四年十月には水道課長と、恰も無人の野を行くが如くトーン／＼拍手に昇つて行つた。以來精勵大に力め、太正六年には選ばれて大連に於ける上水協議會に參列して萬丈の氣を吐き、次で同九年には水道検査委員特別任用試験副委員長となり、更に震災後帝都の復興に際し帝都復興院土木事務囑託を兼ねる等、其功績は實に擧げて數ふべからざるものがある。かくて大正十三年六月水道施設視察の爲歐米諸國に出張を命ぜられ、新智識を齎して翌年五月歸朝し、職制變更と共に現職に就き、其卓越せる手腕と技能とを以て益々令名を馳せてゐる。氏は明智なる頭腕と明るい性格の持主で、殊に世路風霜を経てゐるだけに、部下を愛すること厚く、信望が益々高い。

大山斐瑗

明治十年九月一日生
淺草區松葉町五八番地
電話 下谷 八七三番

現に商業會議所副會頭として名聲囂々たる吾が大山氏は、岡山縣吉田郡津山町の人、大山達開氏の次男に生れ、資性英明幼時既に有爲の材を以て稱せられ、郷里の中學校を卒業するや直に青雲の志を抱いて上京し、日本大學に入學して法律を専攻したが、通學校とは名ばかりで毎日下宿屋で好きな讀書に耽つてゐた。然し性來天才的閃めきを有する氏は、何時も學業は優秀で、而も明治三十六年同校に入學してから一ケ年も経たない内に、見事に高等文官試験に合格して學友を驚かしたものだ。後職を大藏省に奉じ、臨時煙草製造準備局に勤務したが、明治三十七年七月彼の日露戰爭當時之が財源に充當すべく新に煙草專賣制が實施せらるるや、氏の長官宅に氏を始め、當時次官たりし阪谷芳郎男は若くして非凡の才能を有する氏を抜擢して野に下らしめ、特に全國元賣捌店收拾の難局に當らしむるに至つたのである。そこで果斷と不退轉の勇猛心とを有する氏は自ら此難局に處して努力奮闘の結果、全國に散在してゐた二千三百の元賣捌店の中、七十名を網羅して東京煙草元賣捌株式會社を組織して其專務取締役兼支配人となり、傍ら日本煙草元賣捌株式會社の專務を兼ねてゐたが、後同社の解散するや、翌年二月日本模造皮製造株式會社を起して之が社長となり、大に天賦の才能を發揮し令名を擡にした後、之を辭し翌年下谷煙草合名會社代表社員となり、更に大正三年現在の元賣捌所を開いて精勵今日に至つてゐる。氏は稀に見る篤學の士で、殊に文を能くし、家事經濟の著がある。夫人をひさ子と云ひ貞淑の譽高く、その間に三男五女がある。



三宅 龜吉

明治十八年十二月十四日生
小石川區戸崎町三番地

慎密の思慮と着實なる性行とを以て、而かも凡ての情實に超越し、忠實に職務に精勵しつゝある人に、電氣局經理課用地掛長三宅龜吉氏がある。氏は生粹の江戸ツ兒として下谷區池の端仲町に生れ、花の上野公園や、夏の不忍池は氏の少年時代を樂しませてくれたものだ。幼にして學を好み、明治三十五年優秀なる成績を以て京華中學校を卒業し、東京市電氣局の前身たる東京市街鐵道株式會社に入社したのは、實に今を去る二十四年前、即ち明治三十六年の事であつた。當時同會社は時勢の推移に伴ひ、電車が舊式の馬車鐵道に取つて變らんとする所謂劃時代の時勢であつたから、内外共頗る多事多端の折であつた。此時に當り氏の奮闘は實に目覺しいものがあつたことは云ふ迄もない。かくて明治四十四年東京市街鐵道株式會社の用地掛として勤務するに至つた。以來明晰なる頭腦と鮮かなる事務的才能とを以て大に奮勵し、功績の見るべきものが多かつた。而して其業務に熱心なると、卓越せる技能とは遂に認められ、大正十年六月被擢せられて主事となり、臨時建設部庶務掛長に任じたが、大正十三年職制變更と共に經理課用地掛長となり、以て今日に及んでゐる。氏は流石に苦勞人丈けあつて人一倍思ひ遣りが深く、良く部下を愛し、殊に職務に熱心なることは實に驚くばかりである。信望の隆々たるもの決して偶然ではない。夫人を貞子と云ひ、二人の間に三男一女があり、家庭は鶯々とし清福を惠まれてゐる。

服部 久吉

明治三十三年一月二日生
神田區千代田町二四番地
電話 神田一九七七番

東京ボンブ商會主として、少壯有爲の材を以て斯界に令名を馳せつゝある人に我が服部久吉氏がある。氏の懐しい搖籃の地は愛媛縣新居郡西條町原の前である。氏は夙に其光輝ある未來を工業界に求めんとし、曩に合資會社高田商會に入つて實際的手腕の養成に力め、大正十一年四月、獨力を以て現在の地に東京ボンブ商會を興し、水道、燈房、衛生、防火、ボンブ諸機械据付工事並に諸機械器具の製造販賣に従事するに至つた。以來多年の蘊蓄と、絶倫の精力とを傾けて専ら之が經營に當つた結果、信用日に加はり、販路次第に擴張して遂に嶺南斯界に頭角を抽んずるに至つた。試に其創業當時からの主なる工事施行所を擧げると、池田侯爵邸内の水道給水工事を始めとし、新潟縣相馬武邸、陸軍自動車調査委員研究所、立川陸軍飛行大隊、朝鮮慶尙北道尙州金山、東京市療養所、風山堂病院、逕信省船舶試験所等各衛生給水工事、東京市役所、東京工業試験所、傳染病研究所等の各ボンブ揚水装置、佐久間莊邸及貸商店の水道鑿井工事、王子電車の燈房水道衛生工事等で、其範圍は内地は勿論遠く朝鮮等に及び、而も一流の名家並に官公衛會社等で、殆んど枚舉に遑のない位である。之は明かに氏の信用と工事の確實さを裏書すると共に、その半面に於て同商會の隆盛を物語るものである。氏はかうして事業に對して熱心なるが如く、亦公共の事に對しても頗る熱心で、殊に燃ゆるが如き仁侠の義氣を有し、曾て震災當時の如きは身を挺して罹災民の救助に力め、其活動は實に目覺しいものがあつた。夫人を千代子と云ひ、琴瑟相和してゐる。

鈴木 寅彦

明治六年三月廿三日生
東京市本郷區西片町十
電話 小石川二〇番

財界の恐慌は殆んど、其の極に達して、企業といふ企業は、憔悴の姿を其のどん底に横へて、懊惱呻吟してゐるといつた有様だが、ひとり我が東京瓦斯株式會社のみは、増資、擴張の活況を呈して、萬丈の氣を吐いてゐる。これは一面、時代と共に普及してゆく瓦斯の需要を物語るのである。然らうが、其の半面には、同社のパイロットとして健闘しつゝある人々の、炯眼と指導よろしきを得てゐる事を、裏書するものと云へるだらう。我が鈴木寅彦氏は實に其の一人として、常務取締役の重要な椅子を占め、豪放にして快活膽大にして細心なる性格は、よく部下を督勵し、また自らは獻身的努力をもつて、其の陣頭に立つてゐる。稀にみる事業家である。氏は明治六年三月二十三日を以つて、福島縣人岡井豊次郎氏の長男に生れ、十五年先代リキの養子となり、十九年家督を相続したのであつた。學序を追つて、早稻田大學の前身たる早稻田專門學校に學び、研鑽の甲斐あつて同校の邦語政治科を卒業したのは明治二十九年の事であつた。卒業と同時に雄志を抱いて實業界に一步を踏み出し、遂に日本曹達株式會社取締役社長、朝鮮鐵道、東京瓦斯株式會社常務取締役、泰平銀行、日清生命保險、日本電燈工業、東京乗合自動車株式會社取締役、上毛モスリン、北海道瓦斯株式會社監査役、帝國鐵道協理理事等の榮職に就任して現在に及び斯界に重きをなしてゐる。氏はまた福島縣郡部より代議士に選ばれた事三回に及んでゐる。家庭には東京美術學校在學中の重成君の外四男三女あり、賑かである。



鹽澤 達三

明治十九年六月生
東京市牛込區南横町廿二

都會生活にはセンジュアルな華々しさがあつても、少しも水々しい潤ひと云ふものがない、それは塵芥にも似た、餘りにも自然の恩恵に浴さない乾からびた生活である。されば日々都人士の食膳を賑はしてくる處の、濃潤たる魚介と、新鮮な野菜とは、どんなに無味乾燥な都會生活に更生的氣分を與へてくれる事だらう。此意味に於て都人士は、これ等の魚介や野菜を供給してくれる人々に對して満腔の謝意を送らねばなるまい。我が鹽澤達三氏は東京市魚商組合常任相談役、東京市魚市場湖待茶屋組合顧問、東京魚市場發送組合相談役として令名のある人である。搖籃の地は教育園として知られた長野縣の上伊那郡赤穂村で、鹽澤太一郎氏の三男として生れた。夙に青雲の志を抱いて獨逸協會中學校に學び、優秀な成績をおさめ、同校を卒業したのは明治三十九年の江戸川べりの櫻が綻び初める彌生の頃であつた。青年時代から文筆に親しんでゐた氏は、卒業後時代の趨勢に鑑み、同志と共に日刊幼年新聞を創刊して大に才筆を揮つたものだ。後第一興業の常務取締役を始め、各種の銀行會社等に關係して八面玲瓏たる才幹を講えられてゐたが、後幾許もなくして東京市魚市場湖待茶屋組合顧問、東京魚市場發送組合相談役、東京市魚商組合常務相談役等に推され天稟の才能を揮つてゐる。因に東京市魚商組合は初め大東京魚商組合と稱へ、微々たるものであつたが、氏が常務相談役たるに及んで根本的に組織を改め今では東京府の公認として會員二千有餘名を有し侮る可からざる勢力を把持してゐる。氏は明るい性格の持主で血と涙のある奮闘家である。

林邊賢一郎

明治十三年六月廿五日生
東京府下駒澤下馬引澤三五二

コンクリンは、オランダ山の上の住者の如き哲學的平靜をもつて人類の理想なりとしたが、我が林邊賢一郎氏は、家庭をもつて地上に於ける唯一の樂園とし、其の常春の平和に専念するをもつて家憲としてゐる。其の言葉も變り、其の目的とする處も變つてゐるけれども、二つの言葉の中に包まれたある明るさ、と美しい愛の輝きには少しも變りがない、而して二つの言葉の中に、光風霽月、玉の如き人格を見出すことが出来るではないか。氏は福島縣双葉郡富岡町岡義賢氏の三男として生れ、後米澤藩士たる林邊家を繼いだのである。氏は郷費を終るや十九歳の時單身北海道に渡つて事業を営み同地に留まること五ヶ年、後轉じて關東州に赴き、商業に従つた。かくて同地にあつて奮闘すること實に十ヶ年、即ち大正二年、去つて帝都に出で、同四年九月、芝區新堀河岸七號地に合資會社東京石炭商會を設立し、其の代表社員となり、燃料販賣業を經營したのであつた。氏は此外株式會社ケイオー商會の取締役、三星商會の營業主たる外、三四石炭株式會社の取締役をも兼ねてゐる。同社は芝區田村町四丁目にあり、十三年三月の創立で、諸機械器具鐵材の販賣を目的とし資本金は十萬圓である。而して令兄の岡義千代氏、令弟の岡秀實氏と共に其の常務取締役の椅子を占め經營の衝に當つてゐる。氏は明るい性格の人であるばかりでなく、多年世路風霜を嘗め盡した苦勞人丈けに人一倍思慮りが深く、殊に其友情の厚きに至つてはまことに涙ぐましいものがある。家庭にはヒサ子夫人のみで和平圓滿を極めてゐる。



田口達三

明治十六年十一月三日生
東京市京橋區築地二ノ六

富士山の雄姿は、富士山に立つてゐては見られない、富士山を離れて、はじめて其の靈峯を眺める事が出来ること云ふ。だが、近づけば近づく程、云ひ知れぬ親しみを覚え、遠ざかれば遠ざかる程、限らない懐しみを抱かざる者は苦難の道程に忍苦の修業を積んだ成功者である。東京魚市場理事として令名ある我が田口達三氏が即ちそれである。氏は埼玉縣南埼玉郡岩槻村に呱呱の聲を擧げたが、十八歳の時青雲の志を抱いて單身上京し、堺大に入つた、爾來日夜孜々として陰日向なく立働きの、恰も十年一日の如く忠勤を抽んでたものだ。次いで京橋小田原町に獨立して魚商を開業したが、偶々堺大の主人が長逝した爲め、氏は其の幼主を補佐して専ら之が經營の衝に當り大に奮闘する處があつた。かくて大正九年に至り、再び小田原町に華々しく魚問屋を獨立開業し業務日を追ふて益々隆盛を極むるに至つたが、大正十二年不幸にして大震災に遭遇した爲め、遂に現住所に移轉し、精勵今日に及んだのである。氏は公共の志極めて篤く夙に組合の代議員に擧げられ又曩に魚市場移轉委員長及都市價格調査員等にも推されて大なる功績を残し、現在では東京市魚市場理事として同業者の信望を双肩に擔つてゐる。資性重厚にして襟度廣く、珍らしい責任觀念と犠牲的精神の強い人で、義の爲め人の爲めとあれば、水火をも尙且辭せざる仁侠の持主である。家庭には靜子夫人との間に、府立第一商業卒業の篤一郎君、麻布中學在學中の完二君、府立第一商業在學中の順三君と外に隆三君及榮子嬢があり、家庭は常に和氣霽々として賑かである。

池田平吉

明治十二年十月八日生
淺草區福井町一丁目七



氏がこれ迄の生涯は、これ悉く金剛不壞の努力であつた。詩人バリモントは、人生とは坂を下る石塊だ、と云つたが、實に氏の通り來つた道程は、汗と膏によつて表象された苦闘史だと云へる。そして今やそのなから燦爛たる光榮の花が咲き亂れてゐるのだ。淺草區田邊町尋常高等小學校を卒業した若き日の氏は、繁忙な家事の傍ら、夜間休憩の時間を利用して、漢學、商業簿記、商品學、英語等各科目に亘る商人必須の課目を修得したものである。やがて麻布歩兵三聯隊に入營、その軍紀嚴守の故を以つて伍長に累進し、除隊後二年、かの日露の戦端が開かれるや、出征して金州、南山等の激戦に、生死の間を出入し更に、旅順第一回總攻撃に従ひ、硝煙彈雨の間に馳驅して拔群の勳功をたてたのであつた。戦中不幸疾病に襲はれて澁谷分院に送還され、快癒後軍曹に進み補充兵教育掛を命ぜられ、勳七等青色桐葉章を賜はつた。祖父作太郎氏は仁侠で知られ、區長等の公職に推され福井町會の創立にあづかつて力あるの人だつた。父君亦各種の公職につき區役所、東京府廳等に官職を奉じ、水道敷設には卓功のあつた人と聞く。この麗しい流を掬んだ氏は、明治三十九年福井町睦會幹事に推舉せられ、爾來一日の如く町政自治のため大馬の勞をとつてゐる。その外に在郷軍人淺草分會の創設にも關與し、班長、分會長、評議員等の役員に擧げられ、更に市勢調査委員、區劃整理委員等にも推されたことがある。現在では福井町々會長として町勢の隆替を變肩に負ひ、また氏子總代として神社の造營に盡すこと一通でない。まことに淺草區内の有力者だと云へやう。



桑原熊吉

明治九年十二月十四日生
豐多摩郡戸塚町字下戸塚五〇〇

氏の祖先是代々戸塚に居住して、この地方での舊家であり、氏はその四代目である。嚴父長右衛門氏の時に、傳來の農を廢し時世の推移に鑑みて植木職となり富の蓄積に努めた。又その頃になつて東京市の大膨脹に伴ふ隣村町の地價昂騰に伴れて、氏の家は其の豊富な土地で巨財を得たのである。でその土地に家作をして利殖を講じ、日毎に産を加へて行つた。さてこの家に生れた氏は現戸塚町小學校の前身なる、睦合小學校を卒業後は父君の業を扶助して見るべきものがあり、家督を繼いでからは心を町内の事に注ぎ、大正十二年の補缺選舉には町會議員に當選し、更に翌十三年五月の總選舉に再度當選し、衆望を擔ふて町民のために働いてゐる。その外協和會幹事、戸塚町小學校後援會幹事に推され、更に大正二年以來消防に關係して、その小頭部長を十年餘も勤めたが、十三年に辭して目下町警備委員となつてゐる。警備委員としての氏の活動は甚大なもので、大正十二年の大震災後よりは、氏等は同志と謀つて自動車ポンプ購入を思ひ立ち、遂に翌十三年度正月から寄附金募集に着手し、殆んど半歳以上に亘つて奔走の結果、七月に九千餘圓を投じて一臺を購入した。なほ雜費を含むと一萬八千圓を要したと云ふことだ。これこそ氏等の熱誠ある寄與の然らしめたところと云はねばならぬ。なほ水稲神社の氏子委員として、大正四年より今日に至るまで熱心に敬神のまことを盡してゐる。夫人なを子との間に二男があり、長男長太郎君は當年二十一歳の若き紳士で、早稻田實業學校卒業後、三越呉服店に勤務し、恪勤の譽を得てゐる。

西尾 正左衛門

明明九年一月生
本郷區眞砂町三七
電話 小石川 九五三番

家庭に於ける炊事場の必需品として、龜の子たわしの尊稱は、三歳の女子にも口誦されてゐるだらう。そしてその効用は今更縷言を要しないと思ふ。さてその龜子たわしの製造元は本郷區眞砂町の一角を占めて、めまぐるしいほど製造に忙殺されてゐるのを見出す。この大繁榮を示す工場、現經營主こそ、わが西尾正左衛門氏なのである。先代を正左衛門と云ひ、氏はその養嗣子として前名松五郎を改め、先代の名を襲ふたのである。抑も龜子たわしは先代が棕櫚製品を營み、南方の温暖地方から棕櫚皮を輸入し、各種製品を製造してゐる内に、棕櫚皮が厨房や食器、さては炊事道具の洗滌用に最も適してゐることに想し、製造し始めた品である。ところがその非常に安價であることと、強靱であることが、豫期以上の大歡迎を受け、ついに今日では家庭にはなくてはならぬ一調度品としての位置を築いて行つたのである。仄聞するところによると、近時悪辣な企業者共が、盛んに模造品を濫造する相ではあるが、長い歴史と尊い苦心の結晶である龜子たわしに及ぶべくもないのは、理の當然だと云はねばならぬ。抑もその價額のかく低廉であるのに、その需要のかく廣汎であるところに、龜子たわしの必要品の價値が裏書せられてゐる譯で、之が發明者の機才と製造者の努力とは、敬意を表せなくてはなるまい。眞砂町の外に府下龍の川にも堂々たる工場があり、其業績は斯界の驚異だとせられてゐる。氏は趣味として謡曲を能くし、既に文人藝にまで達してゐる。尙業餘私財を投じて公事に盡してゐるので、近隣の信望は彌が上にも高まつて行きつゝある。

黒川 傳次郎

慶應三年一月生
小石川區久堅町九二番地
電話 小石川 五九七番

人造絹糸染色界の大恩人として、又小石川自治團體の香宿として、區民の間に名噴々たるわが黒川傳次郎氏は群馬縣桐生の出身にして、郷黨に學を修め、絹織業を經營してゐたが、後同地に日本織物會社の設立さるゝや、入社して整理部長、染色部長等の椅子につき、専心社運の發展に努め在社十有八年の長きに及んだ。その間氏は、近時海外諸國に於ける人造絹糸が、光澤において、又質において決して天然絹糸に劣らぬものあるを見、わが日本に於ても何等かこれに優る新機軸を生み出さんとして、獨逸人クローン氏並びに佛蘭西人トラミエル氏等について人造絹糸を學ぶこと多年、成算を得て明治三十年上京し、現地に精練所を設立して専ら人造絹糸に從事し、遂に今日の如き、人造絹糸のとき、その染色術に一大紀元を劃し、斯業の第一人者として知らるゝに至つたのである。而も氏の研究によつて、數十種の色彩を自由自在に染め上げること成功し、社會亦これを實用視するに至つて、人造絹糸の要需は日とともに多きを加へ、今やその工場は數十名の職工を以つて一日參千ポンドの染め上げをなし得るまでに隆昌に赴いた。今では事業は令息勝太郎、與次郎の兩氏に委ね、只管自治體の發展につくす所あらんと夙夜盡瘁して倦むことなく、既に區會議員たること三期に及ぶ外、東京市方面委員、久堅町々會長、青年團副團長、千川改修委員長等、自治體の發展に寄與するところ甚大なるものがある。長女きん子は有賀少佐に、次女よね子は寺師軍醫少佐の許に嫁してをり、何れも清福を得てゐる。

品田 末藏

明治二年五月二十九日生
小石川區水道端町一の二三
電話 小石川 二四二四番

人類は一日と雖も自己單獨で生活することを許されぬ。従つて社會の進歩發達を圖るには何うしても互に相倚り相助け所謂共存共榮の實を擧げなくてはならぬ。世界人類文化發展の歴史を訪ねると東西古今を問はず文化の著しく發達した國は何れも其國民が自治的精神に目覺めてゐること、治國修身の要道も實に此處に存するものである。我が品田末藏氏は深くこゝに思ひを寄せて努力精進すること多年、誘導大に努めてゐる。即ち氏は其理想の實現方法として居町住民の自治的精神の涵養に力め、而して之を基礎として共存共榮の完全なる町會を組織し以つて勤儉力行の美風を養ふと同時に町民の福祉を増進すべき各種の公共事業を遂行して自治の本義を發揮し範を次第に確して近くより遠くに漸次一般社會に及ぼし健全なる社會の建造に資せんとして常に満空の誠意を披歴し公共の事に力を注いでゐる。氏は新潟縣古志郡上組村の生れで高橋藤藏氏の令弟に當つてゐる。郷里に於て暫く耕耘に従事してゐたが、明治二十三年の交、志を立て、上京し後日清日露の兩役に従軍して硝煙彈雨の中を衝いて各地に轉戦し功を樹て勳七等に叙せられてゐる。明治二十九年品田松兵衛氏に懇望せられ入つて其後を襲ひ貴金屬美術工藝品の製作に従事し日夜孜々として業務に眼めた効があつて家運日に月に隆盛に赴き今日では宮内省を始めとし其他高貴の方々の用命を受け巍然として斯界に重きをなしてゐる。氏は現に小石川武水町々會の事務理事として町事に奔走してゐる外、小石川區會議員として區政の樞域に參詣し區民の衆望を一身に集め致々として盡瘁してゐる。

金子 寛

明治八年七月生
府下目黒小瀧四九八
電話 高輪 四五八〇番

建國以來二千有餘年。長い々々歴史を持つ出雲村の藩士として氏の家は代々武技のほまれが高かつた。明治の新政を布かれたといへども、世をあげて未だ殺伐の氣の漲つた明治八年、君はその末裔として東京に呱呱の聲をあげたのである。そして祖先の血をうけついでたものか、當時の君は全く腕白ものとして、その名すでに近隣にあきれかへられたものがあると聞く、しかし稍長じて中學に學ぶころ、君の殺伐た武藝を好む氣分は次第に内へへと向けられて行つた。沈思默考大いに考へる日がつゞいたが、つゞいて仙臺第二高等學校に入るとともに、緻密な頭腦は工科へと君を志させた。由來東京帝大に入るや工科を選んで専門學の淵奥を究め、明治三十六年良好な成績を以て赤門を出たが、その明敏の資は、いくばくもなく母校弟二高等學校に聘せられて教鞭をとり子弟の信望を一身に集めて立てるの觀があつた。かくて居ること二年、三十九年これを辭して鐵道省建設事務所に入り、帝國交通機關の發達に參與すること十餘年、氏になつて完成せられた各種の業は枚擧げないほどであつた。次いで大正八年秋願によつて職を免ぜられたが、大正十一年東京市の招聘によつて敏腕再び擧用せられたの日に會ひ、今や道路局工事課長の要職につき、兎や角非難の多い東京市道路の完成に向つて健闘を續けてゐる。君は寡言にして學者肌の人、夫人との間に二男あり、多年の功勞によつて正五位勳六等に叙せらる。

飛田 春次郎

明治十八年一月五日生
芝區三田臺町二の二〇
電話 高輪三一二三番

日本海の荒波は、富山縣下新川の一寒村にも、よせ返し、打ち返してゐた。そしてどんより曇つた空はたえず下界の人生を壓しつけてゐるものやうに見えた。深遠な哲學も、藝術も、こうした自然の腹から生れる、ましてこの氣候風土の關係は人の性格に及ぼすところ極めて多い。不撓不屈堅忍不拔の精神も、こうした自然の力に育ぐまれて子供の大になる如くに育つて行つた。わが飛田春次郎氏はかうして、下新川の一寒村に幼年を送つたのである。幼にして衆に優れて意志の強いことは郷黨の師をして驚倒せしめたほどで、君が將來の大きな望みを囑せられて國を出て遙かに東都へと志したのは、それから程へた或る春の日であつた。ここに君は都文館中學に螢雪の功をつむや、海への憧れは鬱然として若い君の胸に高鳴り一時の猶豫する暇もなく遠洋航路汽船の乗組員として人生の門出に極したのである。ここに君は激務の傍ら機械構成及び運輸方法等について熱心に研究した結果明治四十一年機關士海技の免狀を得て、將來大いに期するところがあつたが、當時自動車の使用が激増する實際を見るに及んで從來の職を擲つて内國運送會社自動車部に入り、大正二年京橋區橋町の地に日進自動車部を創立し、經營五ヶ年の久しきに亘つてここに業精大いに顯はれ、なほ實業界の逸才朝吹英二氏の愛するところとなり、遂に今日の大をなすに至つたもので、市内交通運輸のために貢献するところ多く遂に衆に推されて芝區會議員となる。夫人をしづ子と呼び男揃ひの三子をかかへて今や更て大飛躍を試みんとしてゐる。

島 鑄 吉

明治二十四年五月一日生
赤坂區青山北町六の四六
電話 青山 一六五七番

在郷軍人分會の班長として又新進氣鋭の實業家として行く處として可ならざるなく八面玲瓏たる材幹を有する島鑄吉氏は青山學院の出身である學苑を出づるや暫く實業にいそしんだが、明治四十四年徴兵検査に合格すると共に歩兵第一聯隊に入營して精勵格勳隊中の範を以つて稱され果進して伍長に任ぜられた。除隊後家にあつて業務に精進する傍ら在郷軍人會の爲に力を注いでゐたが後實業界に身を投じて帝國製氷商事株式會社の專務取締りとなり若いに似合はず洗練された手腕を以つて社務一切を切り盛りして銳意社運の發展に力めてゐる。其他日本製粉株式會社の監査役、城北製氷株式會社の相談役等を兼任し實業界に重きをなしてゐる。氏はこうして各方面に終日多忙な身を運んで活動してゐるが流石に軍隊教育を受けただけあつて凡ての事が凡帳面で、精力家と來てゐるから奮闘して毫も倦む所を知らない。氏は又公共に志篤く青山北町六丁目分會の理事として約十ヶ年の久しきに亘り町政自治の樞機に參畫して献替の實を擧げてゐる外、芝、麻布、赤坂、澁谷、目黒、世田ヶ谷等の同業者を以て組織せらるゝ氷榮會の會長として牛耳を執り組合の發展に貢献する所が尠くない。其他在郷軍人赤城分會の第五班長として熱心に軍人精神の振興に或は會員の指導誘掖に力めてゐる。今や射利輕薄の風潮は焰々としての社會上下に浸潤し忠良謹厚の美風良俗を破壊し國家の基礎精神を危くせんとする時氏が在郷軍人分會の班長として軍人精神の振興に力めつゝあることは大に意を強うするに足るものがある。氏は當三十六歳、洋々たるものがある。

高 澤 義 智

明治二十年九月十三日生
府下瀧野川町田端四九五

東京驛を中心として描かれた半徑二里半の圓周内を大東京の都市計劃地城とする。由來一國文化の進歩は其の首都の施設の上に表現される。されば當に我が帝都の都市計畫事業こそ、對外的國家的文化施設の代表的隨一のものでなくてはならない。目下東京府道路主事の重職にあつて専ら此の都市計劃事業の大任に當つてゐる我高澤義智氏は、多年の蘊蓄と經驗とを傾倒して克く其の責務を果し、今や廳の内外に好評を博してゐる。氏は山陰の名邑鳥取市に名望家として知られた高澤克己氏の長男として生を享け、幼にして好學、明治三十八年鳥取中學を卒業後越へて四十年十一月職を鳥取縣廳に奉じ、爾來同廳に止まること十有三年ひたすら職務に精勵して業績大いに擧り、傍ら余暇を偷んで讀書に親み特に行政事務の理論と實際に精進した。氏が今日行政事務に就て卓抜せる才幹を發揮しつゝあるは當時の研鑽の功に負ふ所多しと云ふ。されど俊髦は徒らに僻陬の地に埋もるゝことなく大正九年一月遂に拔擢せられて内務省土木局に轉じ、後十二年一月東京府に都市計劃課の新設さるゝや、乃ち聘せられて東京府廳に轉じ都市計劃事務に關して縱横の奇才を發揮し多大の貢獻を爲した。其の優秀なる才腕は忽ち上司の認むるところとなり、十三年七月遂に道路主事に任ぜられ、爾來恪勤今日に及んでゐる。氏は又頗る研究心に富み、目下は都市計劃の研究に没頭して其の蘊奥を極め府廳の重寶とされてゐる。資性淡泊にして任侠の心強く人に接して温情厚く、一度事に當れば勇往邁進されて後已むの概がある。家庭には利代子夫人との間に五子がある。

深 田 良 輔

明治 日生
府下荏原町小山五一九

道路は都市の根幹とも云ふべきものであつて大都市の建設は道路の完備にまつ處が極めて多い。現在の復興途上にあつて多難なる東京市の道路課に道路橋梁の設計工事に獨特の才能を發揮しつゝある我が深田良輔氏を有する事は慥かに大東京の誇である。氏は神奈川縣の産、父を利三郎氏と云ひ三人の兄に生れた。夙に中學に學んだが、家庭の事情は遂に氏をして永く學に止まらしめず、中途退學するの餘儀なきに至つたが、鬱勃たる霸氣を有する氏は、前途に輝く希望を抱いて上京し工手學校土木科に入り明治三十六年螢雪の功なつて同校を卒業するや直に遠く北海道廳に技術員として勤務した。次いで技手に進み土木部に轉じたが四十四年の五月、京都市役所に招聘され工務課土木掛に勤務して精勵する處があつた。かくて大正十年の四月東京市に招かれて道路局道路課に榮轉し、大正十五年更に深川區役所出張所長に拔擢せられ恪勤今日に及んでゐる。資性豪放にして襟度廣く而も仁慈の念極めて深く、部下を督勵するにも自ら身を以て範を示すと云ふ風で、到る處大なる感激と尊敬とを以て迎へられてゐる。そして此の上下一致の美しい團結が北海道では勇佛橋橋樑の竣成釧路港の大修繕工事の完成となり、京都では先帝陛下御大禮の際に重任を完うして大禮記念章及び金一封の賜に浴する等其功績は實に枚擧に遑がない。殊に震災後自ら班長となつて人夫を督勵して燒灰の整理道路の修繕に身を忘れて奔走した事は、復興に専念しつゝある東京市民の忘れてならない貢獻である繪畫に興味を有し家庭にはつる子夫人との間に一男一女がある。

太田長五郎

明治十四年十一月十一日生
芝區田町九丁目十四番地
電話高輪一六〇九番

氏の故郷は神奈川縣橋本郡生田村で、父を源次郎氏と呼んだ。家は代々の農家であつたが、四男坊に生れた氏は早くから獨立せん事を志し、高等小學校を了へた十五の歳に、故山を後に單身上京したのであつた。それは明治二十八年の事で、先づ薪炭商太田房次郎方へ業務見習として入つた。他人の飯を食ふ事の辛さは、親の膝下を去る時に已に覺悟はしてゐたが、一步を活社會に踏み込んでみると、現實は其處に甚しい相違があつた。働けば食へると思つてゐた世の中には、働いただけでは食へないで世路に行き悩んだ人がゐる。起きんとして斃れ、進まんとして退く等、事こゝろざしと違つた人達が血で血を洗ふ戰場の様な世の中であつた。然し氏は少しも落膽はしなかつた、苦しければ苦しい程緊縮して獨立せんとする志を益々固くし、文字通り眞黒になつて實直に働いたのであつた。かくて慘風悲雨の十年を過ぎた明治三十八年には、多年に亘つて開拓した廣い地盤と、絶大なる信用を唯一の資本として田町九丁目に薪炭商を開業し、一段の忍苦と努力を續けて専心經營に當つた。現在では十數名の店員を使ひ、年十五萬圓の莫大な生産能力を有する帝都有數の大薪炭商として隆々たる繁榮を招いてゐる。寧ろない家業の傍ら、東京薪炭商同業組合の爲めに盡瘁し、芝八幡神社の總代理となり、世話人となつて町内のために奔走し、町民の敬慕を一身に集めてゐる。氏は謹嚴寡言の精力家で、わか子夫人との間に二男四女あり、駘蕩たる春風に惠まれた家庭である。

北村民也

明治二十三年六月二十二日生
芝區白金今里町三九
電話高輪六五九九番

豪毅朴訥、精悍氣鋭は由來九州人の特質にして明治維新の鴻業も大半は此の大なる氣魄の賜で、以來九州男兒の名は鬼神の如く全國に轟くに至つた。就中佐賀縣人は葉隠れ武士の流れを汲んで一段の異彩を放つたものである。我が都市工業株式會社專務取締役北村民也氏は實に佐賀縣小城郡蘆刈村の産にして流石に葉隠れの名に背かず豪毅精悍内に滿々たる霸氣を藏してゐる。氏は頭腦頗る明晰郷賢を出づるや策を負ふて上京し、東京高等商業學校に蠶雪の功を積み、明治四十四年拔群の成績を以て同校を卒業し後二三の會社に敏腕を揮つたが、性來不羈にして獨立の風志を抱ける氏にとつては如何なる大會社も豆大の天地にすら比すべくもなかつた。氏は小ながらも獨力を以て事業を經營し、以て自由の天地に活躍せんと欲し、初めに時期の到るを待つてゐた。かくて大正十三年三月同志と共に都市工業株式會社を創立して、之が專務取締役に就任すると共に、一方相模鐵道株式會社砂利部を一手に請負ひ、日夜奮闘努力の結果遂に今日の如く堅實なる地歩を獲得するに至つた。此外氏は現に關東砂利聯合理事として同業者の向上と發展の爲に力を注いでゐる。氏資性測達人に接するに毫も城府を設けず、而かも責任觀念の極めて深く誠に親しむべく、尊ぶべき人格者である。殊に部下を愛すること甚しく温情流露玉の如きものがある。蓋し氏の如きは正に將に將たるの器と云ふべきであらう。家庭には夫人タネ子との間に一女マサ子あり、目下聖心學院在學中で才色兼備の譽が高い。

新田定五郎

明治五年二月十六日生
東京市牛込區納戸町一九
電話牛込四八五番

曾て北陸に於ける實業界にあつて令名を恣にし、今や閑地に悠遊して自ら英氣を養ひつゝある新田定五郎氏は、雪で名高い新潟縣は南蒲原郡今町を其懐しい搖籃の地とし、新田健治氏の長男として生れた。家は代々農を業とし、近郷に開えた舊家であつたが、明治十四年不幸にして父君の計に遇ひ、年少十歳にして家督を相続するに至つた。然し母堂きせき刀自は、夙に賢婦人の譽高く、良人の歿後は健氣にも自ら婦人の身を以て家政を整理し、愛兒の撫育に涙ぐましい程の奮闘を續けて行つた。こうした美はしい母性愛の裡に、氏の玲瓏玉の如き人格は育ぐまれて行つたが、長ずるに及び青雲の志を抱いて慶應義塾に學び、經濟學を専攻して芽出度く同校を卒業したのは明治二十六年の春であつた。かくて二十九年五月株式會社今町銀行を創立して之が專務取締役となり、更に中野興業株式會社監査役、中野殖産興業株式會社取締役等を兼ね、實業界に重きをなしてゐたが、昭和三年各會社を辭し、目下閑日月の裡に英氣を養ひ、他日の大成を期してゐる。氏容貌魁偉、一見大西郷を偲ばしむるものあり、その巨大な額と骨とは絶倫な精力を徴し、粗野で嚴肅な容貌の裡に、どことなく美しい愛情の閃めきを宿してゐる。實に氏はその風手が物語つてゐる如く、稀に見る美しい人間味の所有者で、義に強く、友情に厚い、親しむべく敬すべき人格者である。趣味を畫に有し、又閑あれば讀書に耽り旺盛な知識慾を満足せしむると云ふ。たけ子夫人は越後の石油王故中野貫一氏の女で才色兼備の譽が高い。



古川卓一

明治廿一年五月廿五日生
東京市芝區白金三光町廿一

シエクスピアも言つた通り、人間は役者である。社會といふ廣大なステージに立つて、斃れるまで熱演しなければならぬ役者である。そして、いかにそれが素晴らしい出来栄であつても、決してアンコールといふ事がない。されば人々は、苦惱な貧乏人の役を厭ひ、心から金持の役を求めて巴まないのだ、間斷なく醜い闘争が續けられ、ステージが絶えず血でもつて洗はれてゐるのも、それがためである。だが貧しくとも闘ひ得る人には一縷の光明がある。焦燥と憂鬱に悶えながら、當てられた役割に甘んじて斃れてゆかねばならない病人の何處に光明があるだらうか、貧しくとも良い、健康な身體の所有者になりたいたいは、人々の誰しもが心からの願ひである。されば病める人々を暗黒から光明へ、失意から希望へと甦らしめんとする醫術は畢竟仁術である。我が古川卓一氏は常にこうした心持を以て病者を迎へ、病者をいたわつてゐる。氏は廣島縣豊田郡船木村の人、夙に廣島忠海中學校を卒業するや、前途に輝く希望を抱いて帝都に出で、慈惠病院に入つて實地研究に身を委ね、大正六年遂に機熟するに及び、現住所に内科小兒科専門の醫院を設け精勵今日に及んでゐる。かくて氏は其後衆望を負ふて芝區醫師會の理事に推され斯界に重きをなしてゐる。氏人となり磊落、内に温かい人情味を湛え、稀に見る友愛の人で、將來の活躍を期待されてゐる。夫人を政子と云ひ貞淑の譽高く、二人の間に忠男、華慶の二君及び府立第六高女在學中の恵子嬢があり家庭は極めて圓滿である。

平林良知

明治八年 月 日生
東京府下新井町不入斗二七二

カール・マルクスは、凡ての社會組織の基調をなすものは經濟であると云ふ、この唯物史觀的な言葉に對しては、理論的に批判され論議されるべき處が勿論あるだらうが、兎に角、政治が經濟の上に建てられて居り、また建られるべきものでなければならぬのは、各時代の各社會の政治が一樣に強く裏書してゐる事實である。故に内閣に於ても大藏省が樞要の地位を占め、豫算編成が政治の第一歩をなしてゐる状態である、されば、最近ダイナミツクな發展をしてゐる新井町の町政は模範的であると共に、其の收入役たる人の卓絶した手腕を物語るものである。我が平林良知氏は實に其の收入役であつて、爲政者として推稱されるべき人格者である。氏が呱呱の聲をあげたのは、現住所たる新井町不入斗二百七十二番地で、所謂土地の人、生家は二百有餘年から續いた、古い古い舊家であつた、そして家業は農であつたが、今では地所、家作持として近隣に知られてゐる。氏が收入役として町政に執掌するやうになつたのは長い事で、前收入役の増井光次郎氏と共に、八ヶ年其の職にあつた、そして大正十五年増井氏の辭職するや氏は専心其の職にあつて、町政のため碎身粉骨する事となり、現在に及んだのである。昭和三年度に於ける新井町の財政は、一般會計二百四十三萬七千圓、特別會計四千九百四十八圓といふ龐大なもので、天稟とも云ふべき氏の手腕によつて亂麻を斷つがごとく處理されてゐる。氏は穩健なる思想と、明晰な頭を有する眞摯の人、團扇を好愛し、家庭には喜代子夫人との間に八人の子女ある。



山本庫吉

明治三年八月十日生
東京市芝區三田豐岡町二

衣食足らずして、マルクスを知るとか、日本が思想的困難に遭遇して泥池としてゐるのは、要するに金に恵まれてゐないからである。唯物論に従へばあらゆるものゝ基調をなすところの經濟に於て日本が行き詰つてゐるからである。而してこの經濟的破綻を來すに至つた原因は二三にして止まらないが、何事によらず國民の多くが悉く舶來品に魅惑せられて輸入超過を來すに至つた事も、儲かにその有力な原因をなしてゐる。故に若し舶來品に比べて何等遜色のない純國産をもつて輸入防壁につとめてゐる人があるとしたら、何人も其の人に向つて感謝の意を捧げるに躊躇しないだらう。我が山本庫吉氏が實にそうした敬すべき人であつて、また腕一本でたゞき上げた成功者である。氏は東京府下荏原郡荏原町に生れた。幼にして大度あり、明治十六年、松井兵次郎氏の許に勤めて十六年間と云ふ長の年月を々として奮闘し他日擡頭の地步を固めて行つた。かくて明治三十二年の二月現住所に獨立して機械製造工場を設け専ら之が經營の衝に當つてゐる。製品ではエトロボリターエンゼクター、エンゼクター等が最も知られてゐる。同機は從來輸入品のみであつたが、多年氏の苦心と努力によつて舶來品と何等遜色のない優秀なる製品が造られる様になつてから、輸入額は三分の一に減じたといふ。販路は、内地は勿論、遠く朝鮮、滿洲、支那等に及び、製紙並に製糸家若くは暖房装置を有する各種工場等に於ては殆んど本機の設備を見ざるなき盛況を極めてゐる。家庭には、いさ子夫人の外に、二郎若久子、富美子、歌子、春子、智恵子嬢の一男五女がある。

城口權三

明治二十年四月十三日生
東京府下品川町大字北品川
一本木三三七四
電話高輪三九五四番

都市の膨張につれて當然起る問題は糞尿處分方法である。之に付ては夙に爲政者、都市研究者、化學者及び事業家等々によつて色々研究せられてゐたが、名案がない爲に今日迄其儘となつてゐた。然るに嶄新な化學の威力を應用して、汚物糞尿の淨化方法を案出した眞獻者に城口權三氏がある。氏は長野縣上伊那郡美和村溝口の出身で、城口金太郎氏の長男である。弱年志を立て、上京し、醫學の研究に没ぐまじい苦學を續けて、明治三十七年美事醫師開業試験に合格し、茲に多年の宿望を達するに至つた。かくて日本郵船會社囑託醫師として入社し、船客の診療に幾春秋を重ねたが、大正七年遂に東洋汽船會社に勤務することになつた。此間氏は夙に衛生上汚物處分法の極めて必要なることを痛感し、傍ら芝區源助町に汚物處分研究所を設け、切實に之が研究を進めてゐたが、大正八年遂に斷然東洋汽船會社を辭職し、専心之が完成に向つて努力した。かくて多年苦心の結果、漸く其前途に一縷の曙光を認むるに及んで、同年神田區錦町に營業所を變更し、遂に所期の目的を達成するに至つた。茲に於て大正十五年組織を變更して株式會社とし、新に研究所を千代田町に移轉擴張すると共に、更に大阪へも支社を設けて一大飛躍を試みるの盛況を來し、之を取締役社長として専ら經營の衝に當つてゐる。現在氏が此淨化装置に關し專賣特許を得たるもの七件、別に實用新案十一件を數へ、顧客は宮内省を始めとし、廣く各官衙會社等に及んでゐると云ふ。家庭には貞淑の間えある幸子夫人との間に長男一君外二男がある。

川村卸次郎

明治二年四月二十一日生
東京府下巢鴨町染井一
電話小石川六八六八番

北に淺間の噴煙が、鬱勃たる胸懷を物語る如く天に沖し、願望すれば、千曲の清流が心事の高潔を象徴するが如く蜿々と連つてゐる。若し信州の自然を人格化し、純化したる者を長野縣人に求むれば、現に大安生命保險株式會社常務取締役として令名ある川村卸次郎氏に指を屈せねばならぬ。氏は南佐久郡田口村の名望家川村清吾氏の二男として生れたのであつた。明治十九年松本中學校を卒業後、第一高等學校を経て、更に東京帝國大學法學部に學び、明治二十七年優等の成績を以て卒業した。初め大藏省に奉じて、少壯有爲の才幹を讀へられてゐたが、自己の資質が多く實業界に適するを見て、斷然官を辭し大阪の中立銀行に勤務するに至つた。後同行が合併せられて第三十四銀行となつた後も、引き続き行務に執掌してゐたが、明治四十一年遂に迎へられて京都市の高級助技となり、高遠なる理想の下に、市政の刷新を行はんとする道もなく、同年直に南滿洲鐵道株式會社の理事として赴任するに至つた。爾來同社に於て、大に非凡の才能を發揮し、諸般の施設制度を改めて社運の伸張に培ひ、功績の見るべきものが多かつた。かくて職に留まること實に十有三星霜、恰も一日の如く格動して絶倫の精力を見せてゐたが、大正九年去つて帝都の實業界に雄飛し、前記大安生命保險會社及幾多會社の重役として重きをなしてゐる。資性恬淡にして識見高く、眞に棟梁の偉材たるを失はない。團扇將棋等に趣味を有し、はつ子夫人との間に、長男景一君、二男一次君がある。

富田 敦純

明治八年五月生
東京府下野町寶仙寺
電話 中野七八番

新しき酒は新しき革袋に盛られなければならない、新らしき社會は、新しき信念の下に建設され、統一されなければならない。けれども現代の人々は、社會の制度的改造をのみテレーに加へることを知つて、形而上のあらゆる問題を放擲して顧みない。豊山大學々長として名高い富田敦純師は夙に之を憂ひ、國民の胸裡に深く宗教的の信念を植付けて、國運の伸張に資せんとする高徳の師である。師は長野縣下水内郡水内村の人、幼にして更級郡更府村長勝寺の富田交純師の佛門に歸依し、聖なるものを懐かれ、美しきものを慕ひ、慈愛と感激に溢れる心境に只管精進したものであつた。後東上して東洋大學に入り、深遠なる哲理を求めて多年心身の修養に力め業成つて歸るや、師の後を繼いで長勝寺の住職となり、常に廣大無邊なる佛の道を説き、修身齊家の要道を知らしめて、大に其高徳を讃へられたものであつた。後山緒ある中野の寶仙寺に迎へられて住職となり、傍ら中野高等女學校及び感應幼稚園を創立して、熱心に子女の教育に力むる等、師が社會に貢献したる功績は、擧げて數ふべからざるものがある。現に眞言宗豊山派宗務長たるの外豊山大學々長として、彌が上に信望を高からしめてゐる。師は人格高潔にして襟度廣く、二十二才の時、眞言宗史綱を世に公にしたのを見て、師が如何に高邁なる識見と、學殖の深いかを知ることが出来やう。此外秘密辭林、新義眞言宗史、行者須知、四國遍路、双脚を切斷して等の著がある。目下中野町に郷里長野縣人會を組織して郷人の親睦につとめてゐると云ふ。

丸山 萬五郎

明治四年十二月十五日生
東京市下谷區上野町一ノ一九
電話 下谷二六〇九番

如何なる弱き人と雖も、其全力を單一の目的に集注すれば、必ず其事を成し得べしとカールは云つた。成功は畢竟努力の賜で、努力してこそ初めて成功の榮冠を贏ち得るのである。裸一貫から身を起して、遂に今日の大をなした丸山萬五郎氏の過去の道程は、最も雄辯に之を物語つてゐる。氏は長野縣上高井郡仁禮町字仁禮の人で、丸山岸行氏の長男である。年少十七歳の時、健氣にも裸一貫を資本に、自己の新生面を拓くべく帝都に出た。然し別に寄る邊とてない此可憐の少年は、自らパンを求むべく、濟生會發行の書籍を夜店に鬻いでゐたが、氏の燃ゆるが如き事業熱は、その書籍の内から美しく芽ばえ、藥種之製造販賣に従事するに至つた。爾來鐵の如き鞏固なる意志と、不屈の勇氣とを以て有ゆる困難と闘つたが、人生は何時迄もさう苦難の連鎖のみではない。氏にも其後麗かな幸運の日が訪れ、幸甚の花が業續の上に大きな實を結んだ。氏は之に力を得て更に醫師を招き、京橋區桶町に醫院を開業したが、抑々生司堂醫院の創設である。要するに同院は、確信ある良藥を、安價に然かも廣く患者に頒ち、以て時代の要求に應へんとする、即ち新經營方法であつて、今では東京に三ヶ所大阪に五ヶ所、名古屋神戸等に各二ヶ所の醫院を經營してゐるが、其犀利なる洞察眼と獨創力とは、齊しく醫界の驚嘆を購つてゐる。蓋し氏の如きは、現代青年の範とするに足るであらう。氏は流石に世路風霜を経た苦勞人丈々に、その質實剛健なる半面に於て温かい涙を持つてゐる。



近藤 榮助

明治七年三月十七日生
牛込區若松町一七番地
電話 牛込三一八番

卓越せる技能と溢るるばかりの學殖とを以てよく學理と實際との調和を得せしめ、孜孜として子弟の誘掖に努めつゝある人に府立工藝學校長近藤榮助氏がある。氏は財界の巨頭大倉喜八郎其他の偉材を輩出して居る新潟縣と郷里とし、夙に東都に遊學を志し、長ずるに及んで上京して東京高等工業學校に入り、明治三十五年學成りて直ちに郷國新潟縣立工業學校に教諭として赴任し、汽機機關部を擔任し、爾來十有餘年一日の如く同校にあつて育英の業に不斷の努力を續ける傍ら、同地方工業界の發達を促すに腐心した結果、同校の名聲頓に加はり、遂に今日斯界に冠絶する迄に至つたのである。後大正五年宮城縣立工業學校長に榮轉し、同縣技師を兼任して業績大いに擧つたが、大正八年被擢せられて東京府立工業學校長に進み、同時に府の地方技師をも兼任して今日に及んで居る。氏は教育者として特別に實際方面に留意し、大正十二年大震災の後を承けて財界の不況を來し、幾多の人々職を失ひて路頭に迷ふの状態を見て、之等の失職者を救濟するの急務を思ひ、府に上申して家具養成所を設立せんとし、遂にその志を容れられて大正十四年之が設立を見、今日に至る迄技術を授けて就職難に溺する數多い人々の救済に努めて居る。氏は更に逕信省の依頼に應じて航空機機師士の養成にも努め、優秀なる成績を收めて各方面より驚異の眼を以て見られて居る。尙今日の學校制度の不備なるを慨して、氏は益々その充實と改革に奔走しつゝあるからその實現亦近き將來にありと云ふべきであらう。家庭には夫人ます子との間に一男を擧げて居る。

米山 保

明治十三年二月生
四谷區内藤新宿一帯地

復興途上にある東京市の區劃整理に際し、其第一線に立つて奮闘よく重責を全うしつゝあるわが米山保氏は、鳥取縣の産んだ逸材である。夙に燃ゆるが如き前途の希望を抱いて上京し、先づ學を築地工手學校にかけ、業成るに及んで職を陸軍省に奉じて久しく軍事工作物の工事に従事し、幾多の功績を擡して來た。其の特記すべきものは既舎の建築で、今日の改良工作は殆んど氏に依つて工夫されたものと云ふ。そして經理部にあつては松戸工兵學校を始めとし、陸軍衛生材料廠、野砲兵學校、靜岡縣下三島軍砲兵旅團附屬病舎等の建築工事に當り、或は父島要塞設計工事に従ふ等其功績は擡げて數ふべからざるものがある。就中大正十二年九月大震災災當時の如き、我陸軍省管下の建築物は尠からず被害を受けたが、軍部の中樞は一日も之を放擲して置く事を許さな關係上、氏は其復興工事の爲殆んど晝夜を分たず奮闘し、彼の陸軍大臣の官舎を僅々二十五日間の短時日を以て完成したるが如き、殆んど異數と云ふを得べく、一面氏の熾烈なる責任觀念の反映と見ることが出来る。大正十四年此緣故淺からぬ陸軍省を辭し、東京市に入り、區劃整理局第三出張所技師として益々天稟の才能を發揮し今日に及んでゐる。思想横溢精力綿綿にして忠直、温言よく人をして懐かしむるものがある。別に之と云ふ程の趣味を有たないが、唯だ専門の技術的方面の研究には、今も尙ほ學生時代と變る所なき熱を以て精進し、向上を怠らないと云ふ。夫人をこまと云ひ一男がある。

石原隆一

明治二十年二月三日生
小石川區林町二六番地

今や人心輕跳浮薄に流れ、動もすれば極端なる個人主義に傾かんとするの時よく時流に超越して鋭意公共の爲に献身的努力をなすつゝある人に石原隆一氏がある。氏は快潤な氣象を惠まれた純粹の江戸ッ兒で、小石川區白山前町に生れ、故石原徳昌氏の次男である。京北中學に入學中、不幸にして卒業の前年父君徳昌氏が長逝した爲、氏は早くも一家を背負つて立つたのであつた。そこで明治三十八年同校を卒業するや、直に刀圭界に志し、慈惠院醫學專門學校に入學して大に研鑽する處があつたが、一朝病魔に胃された爲、中途にして退學すべく餘儀なくせられたので、遂に明治三十九年志を變じて職を芝區役所に奉じ、庶務掛を振出しに會計掛を経て、大正十一年衛生道路掛長に拔擢せられ、精勵今日に及んでゐる。氏は頗る熱心に事務に執掌し、殊に後年掛長に就任して以來、道路並衛生の發達に心を盡き、私立財團法人衛生組合の理事をも兼ねて幾多の改善を行ひ貢獻する處が尠くない。彼の大震災の折には物品配給の任に當ると同時に、死體搜索收容火葬事務等に執掌し、殆んど寢食を忘れて精勵した爲、後震災同情會より特に表彰せられた程だ。以て其責任觀念の熾烈なるを知り得るであらう。氏は又従來日本赤十字東京支部芝區委員及帝國水難救濟會委員として十有五年間其任にあつて寄與する處極めて多く、明晰なる頭腦と流るるが如き鮮かなる事務的才能とを以て信望を馳せ、芝區政の爲にその生涯を捧げんとする抱負を持つてゐる。夫人をとも子と云ひ其間に三男三女あり長男は京北中學に、長女は跡見高女子に在學中である。



神谷貞夫
明治二十年二月二十七日生
府下代々幡町代々木一五〇

さつみや滋賀の都と詠まれけん、その大津市は史實床しき情調の水都であつて、琵琶湖を周る靄影水光の中でも秀でた絶景の地であるが、氏の出生地は實にこの大津市である。人間の性質はその地の風習や傳統や、乃至は又自然の美などに依つて多く支配されるものである。氏はかうした自然の美と歴史的環境とに依つて育まれただけに、雄大にして而も風流な性を多分に持つてゐる。氏が此の世に呱呱の聲をあげたのは明治二十三年二月のこと、少年時をこの惠まれたる環境に成長したが、早く東京に出て中學を麻布に卒へるや、遠く熊本に去つて第五高等學校に入り、次いで最高學府たる九州帝國大學工學部に電氣科を選んで入學し、大正七年七月優秀な成績をあげて卒業した。そこで直ちに上京して東京市役所の電氣局に入り、調査課に勤務した。爾來氏の忠勤と事務的手腕とは次第に認められ昇級して遂には現職たる電力課配電掛長となつたのである。已にその學殖に於て衆を抜き、實際運用に當つては更に天才的技能を有する氏が、今配電掛長として發電、受電、變電、配電等の事務に稀に見る優秀なる技術を見せてゐるのは當然である。氏は非常に多趣味で、現代行はれてゐる運動と云ふ運動には悉く手を付けざるなく、外に寫眞と銃獵とを愛好し、共に名人の域に達してゐるといふ。家族としては喜久子夫人との間に長男道也君(市民幼稚園通學中)長女廣子嬢とを儲けて鍾愛し、喜久子夫人は御茶水高等女學校卒業の才媛であつて、よく團樂の實を擧げて和樂してゐる。

須山徳太郎

明治十二年十月十四日生
東京府下蒲田町女塚四一

眞の愛はエゴ的色彩を帯びてはならない、隣人を愛し、敵をも愛するやうな、深い博い愛でなければならぬ、されば凡人、殊に巧利的な物質慾に汲々たる人々には出来ない事である。キリストのやうにまた殉教者のやうに慾情を超越した人ならは出来ない事である。我が蒲田町々會議員の須山徳太郎氏が、稀にみる人格者として近隣の人々から崇敬されてゐるのも、朝早くから夜晩くまで營々として家業に精勵すると同様に、町會のため町民のため奔走してゐる氏にしては、當然の事である。氏は常に「家業は自分のものだから人まかせに出来ない、町會も亦自分達町民のものだから他人まかせには出来ない」と云つてゐる。誰が其の美しい雄々しい心根に同情し感激しない者があるだらうか、氏は現住所たる蒲田の女塚に呱呱の聲を揚げたが、嚴父權三郎氏は夙に陸軍の馬糶納入商をはじめ盛大を極めてゐた。氏は三十歳の時分家して父の業を繼承し、震災後支店及び事務所を日本橋區元大工町に設置する等隆盛今日に及んだのである。氏は此間信用組合理事、學務委員等に推され、大正十四年には榮ある町會議員に選出されるに至つた。氏が公職にあつての貢獻は、其の不退轉な努力と共に没すべからざるものがある。また令兄須山金太郎氏は昭和二年に至るまで二十有餘年間、町役場の収入役をつとめ、喜藏氏はじめ令弟は、また公共の職にあり、一家一門擧つて町政自治の爲めに盡瘁してゐる。夫人かね子は、よく氏を助けて名あり、其の間に五男一女がある。長男勝重君は四中卒業の後、慶應大學の理財科に學び、長女靜江嬢は日の出高女在學中、一家は常春の霽々たる和氣で一杯である。



鈴木六藏
明治十一年一月十三日生
東京市芝區新錢座町三

ものみな凡て流ると言つた人があつたが、まことに絶對の靜止といふ事の無いのが世の中である。進歩か、退歩か、兎に角凡てのものは流轉して止まない。それはみな刻々と流れてゐる時に支配されるのである。だから世相の序を流れる時を無視するならば、いかなる事業と云へども、アナクロニズムの中に、醜い屍をさらさなければならぬ。即ち、賣家とからやうで書く三代目の、憐むべき運命に陥らなければならぬのである。驚天動地の事業が種花一朝の夢と歸するもの、時に對する適應性を缺くからである。それを思ひ、これを思ふ時、我が蟹屋菓子店が、三百年の久しきに亘りて連綿として今日迄繼續したといふ事は、慥かに驚異に値するものである。殊にそれが最も變化しやすい嗜好品の菓子たることに於て、一層其感を深からしむるものがある。それにしても之が經營に當つた人の努力と烟眼には些か驚かさざるを得ない。我が鈴木六藏氏は、蟹屋菓子店の長井工場支配人として令名ある人である。夙に早稻田大學を卒業するや、直に横濱の小野生糸輸出會社に勤務し實社會に第一歩を踏出したが、明治三十五年當工場が創立せらるゝと共に聘せられて之が工場長となり、精勵今日に及んだのである。當工場はビスケット製造が主であつて、今日では職工八十有餘名を便役し、日を逐ふて益々隆盛を極めてゐる。氏人となり、氣宇廣く、而かも創始の才と、統御の徳を備へ、支配人として上下の信望を双肩に擔つてゐる。夫人をいね子と呼び貞淑の譽高く、養女嘉子嬢は山脇高等女學校出身の才媛である。

木村正

明治廿一年十一月五日生
東京市赤坂區田町四ノ十二

氷河で有名な北國のノールエーが、幾多の冒険家を輩出してゐる様に、雪の深い、北海道に生れた人々の多くは、亦堅固な意志の所有者、理性の人達である。そして島國の人としては珍らしい位ひの、大きな度量を持つてゐる。それは、狩勝峠にしても、石狩平野にしても、十勝川や、また大沼公園にしても、島國には見る事の出来ない雄大な自然の感化裡に人となるからであらう。我が木村正氏が實にそうした敬すべき性格の人であつて北海道函館市に呱呱の聲を挙げたのであつた。函館は津輕海峡をへだて、陸奥半島を望み、五稜廓あり、湯の川、根崎温泉のある風光佳絶の地である。氏が陶冶され刺激された處も亦多いといはねばならぬ。郷費を了へると共に將來國手として刀圭界に驥足を延べんとし、直ちに上京して慈惠大學に學び優秀なる成績をおさめて同校を卒業したのは、大正四年の、芝山内の櫻が色づく彌生の頃であつた。かくて卒業後氏は直に職を木澤病院に奉じて活社會に乗り出し、多年學び得た學理を實地に應用して技能を磨き他日擡頭の地歩を築いて行つた。職に留ること六ヶ年、後現住所に獨立して醫院を開業し、只管之が經營の衝に當る事となつた。専門は内科及小兒科だが明晰なる頭腦、該博なる知識、火をも踏む快氣、溢るゝばかりの温情とは、日を追ふて氏の信用を次第に重からしめ、斯界に令名を恣にしてゐる。氏となり廉潔にして謙讓の美德を有し、家庭には妻子夫人との間に、守君、功君の二男及日出子嬢の一女がある。因に令兄恒一氏は目下府下代田橋に醫院を開業し、頗る隆盛を極めてゐると云ふ。

渡邊錦太郎

明治十七年五月廿五日生
東京市芝區本芝一ノ廿八

成功すれば、それは運がいゝのだと云ひ、失敗すれば、運が悪いのだと云ふのは、ひとりフエータリス、ばかりの言葉ではない。世の中に誰しもがさう云ひ、亦さう信じてゐる。だが成功者の過去を省み、さうして其性格を知り、風貌に接する時、我々は運不運と云ふ事よりも、寧ろ失敗者に決して見出す事の出来ない強い意志と、超人間的な努力に驚かされるのである。世の中に運と云ふこともあるかも知れぬが、その運を捉へるのも即ち努力で、成功の花は畢竟努力によつて美しく開くのである。之から此處に記さんとする渡邊錦太郎氏の如きも、實にこの努力によつて今日成功をかち得たその一人である。氏は芝に生れた生粋の江戸つ子だが、生家はあまり裕福でなかつた爲め、氏は少年の頃より労働に服すべく餘儀なくせられてゐた。そこで氏は年少十三歳の時、京橋區木挽町の金津機械工場に入り、八年間と云ふ長の年月眞黒になつて働いたものだ。後二三工場に轉じて、他日擡頭の地歩を築くべく餘念がなかつたが、明治四十年遂に機熟するを待つて、現住所に印刷機械の製作工場を創立するに至つた。爾來多年の蘊蓄と尊い經驗とを以て日夜機械の製作に従事した甲斐あつて家運頗る榮え、現在では年産額四萬圓の多きに及び、頗る隆盛を極めてゐる。氏は多年世路風霜を経た苦勞人丈けに、人一倍同情の念も篤く、熱心な奮闘家である。氏は又繁務の傍ら宮總代をつとめ、土地の人々から崇敬されてゐる。夫人さく子は先年逝去し、家庭には總一郎、利助、力三郎君の三男、及裁縫女學校在學の文字嬢とあや子嬢がある。

恩田民夫

明治二十二年三月廿九日生
東京市麻布區筈町十七番地
電話 青山三五七番

帝都の復興に伴ひ、恰も群雄割據の觀ある建築事業界に於て、多年の經驗と、優秀なる技術とを以て敵の牙城に肉迫し、目覺しい奮闘を續けてゐる恩田民夫氏は、信州舊松代藩士恩田達次郎氏の二男である。十九歳の時前途に輝く希望を抱いて帝都に出で、眞田伯爵家に仕へつゝ、餘暇を偷んで築地の工手學校に學び、苦學力行を續けて行つた。明治四十四年同校卒業後も、引續き眞田家に仕へ、傍ら目黒競馬俱樂部に營繕係として眞面目に働いてゐた。後義父に當る持田角太郎氏の許に赴き、氏に代つて建築請負業に手を染めること實に十星霜、其間大正八年には郷男爵の青山別邸、上野公園内日本美術協會々館、同十一年には日本醫師共濟生命相互會社、千代田生命相互會社等の大建築に腕を揮ひ、次第に大建築業者たるべき地位を築いて行つたのであつた。かくて大正十五年獨立して恩田組を組織し、大に奮闘努力の結果、纏て夏の光のやうに熾んな氣運が家中に漲り、清棲伯爵邸の竣工に次で、赤十字病院の指定請負人となる等その發展は實に著しいものがあつた。現に世田ヶ谷病院を始め、岩佐伸銅會社東京支店の建築を請負ひ、斯界に重きをなしてゐる。氏は感激に生き、感激に死する意氣の人、其處に部下の者が命を打ち込み、打下ろす小さな槌の音にも眞劍味が籠つて、勇しい發展の響きを傳へてゐる。夫人をてい子と云ひ、二人の間に三女があり、家庭は常に温かい平和の光りを以つて満されてゐる。因に杉並幼稚園主として令名ある恩田夏野女史は氏の令姉である。

森藤治郎

明治元年十月月生
東京府澁谷町惠比壽通り一ノ七
電話 高輪七七八番

隣邦支那の心臓と呼ばれる上海から、揚子江を溯つて南京、蕪湖、九江、武昌、漢口、宜昌、三峡、慶昌に至る航路の通商と日支間の海運に従つて對支貿易の上に、日本海運界のために一大貢獻をなしてゐるのが、日清汽船株式會社である。而して其の社長として令名高らかな我が森藤治郎氏は實に長野縣が生んだ逸材である。即ち氏は、阿知川の清流が天流の奔端に合流して、幽邃の勝景をなすところの天龍溪に程近い、下伊那郡三穗村の人で、林美射男氏の次男に生れ、後年岐阜縣の人森家を繼いだのであつた。郷費を了へるや、直ちに上京して東京專門學校に入つて雪の功を積み、明治二十年優秀なる成績を以て卒業した。直に職を日本郵船會社に奉じて海運界に最初の一步を踏出し、懸命に努力したものであつた。成功は畢竟努力の賜である。氏のこうした不斷の努力は、纏て輝かしい支店長の椅子を以て酬ひられ、極めて對外的關係の複雑な天津や香港で、快刀亂麻の手腕を見せ、遂に抜擢せられて大阪支店長に擧げらるゝに至つた。大正十年日清汽船株式會社に迎へられて、専務取締役となり、茲に多年の經驗と、天稟の才能とを揮つて新生面を拓き、斯界の視聽をそばだてしめたものだ。大正十三年七月遂に推されて之が社長となり、多端な社務に精進して、絶倫な精力を見せてゐる。水晶のやうに透徹した頭腦と、聰明な資質の持主で、岡本や音楽に興味を有する處を見れば、氏も亦其半面に於て感激の涙を惜しまぬ愛情の人であらう。夫人をかづ子と云ひ貞淑の譽が高い。

上原才一郎

慶應二年二月三日生
東京市神田區通神保町六番地
電話神田三〇八七番

出版業は文化促進の車輪である。而してその車輪の回轉によつて、其處に初めて燦然たる文化が築かれるのである。上原才一郎氏は、現に東京書籍組合副會長として、將亦同書籍組合評議員として、東都の出版界に明日を期待せられてゐる人である。氏は嚴父を上原七左衛門氏と云ひ、長野縣出身で、名湖諏訪のほとり中津村に産聲をあげた。夙に郷里の小學校を卒業して諏訪中學に學び、優秀なる成績を以て同校を卒業するや、書籍出版界に驥足を延べんとし、明治二十二年の初夏、神田區今小路に書籍店を營み、光風館と稱した。爾來拮据經營の甲斐あつて、次第に幸運に恵まれ、遂に明治二十七年現在の地に移轉擴張すると共に、更に出版業を兼營し漸次斯界に鞏固なる地歩を獲得するに至つた。かくて世界の文化に伴ひ、國民の間に翕然として讀書熱が勃興するや、大正二年三月以來専ら出版業に主力を注ぎ、就中文獻奉國の高遠なる理想の下に、全國教科書及び教育學術書を刊行して、同業者中嶄然一頭地を抜くに及んだ。而して現在に於ては、全國出版業者中屈指の大商店として、光風館の名は普ねく津々浦々に知られ、氏は目下中等教科書協會幹事として重きをなしてゐる。人と爲り高潔、思慮圓熟、常に中正穩健の態度を以て人に接するのみならず、仕事に對しては頗る熱心で大なる責任觀念を以てゐる。趣味は性格の反映である。氏が常に讀書を好み、書畫を愛するばかりでなく、圍碁將棋にも長じ、兼ねて園藝に心を寄する等、極めて多藝多趣味なるを見ても、其才氣の横溢せるを窺ふことが出來やう。

圓山田作

明治廿九年二月十三日生
東京市京橋區具足町十三
電話京橋四七五一番

果敢なる闘ひを闘ふものには、苦痛の中に積極的な創造がある、發展する信念がある。この創造と信念とは、暗い陰鬱な消極性を超えて進んでゆくのである。人間苦の行者として波瀾の人生を歩み、遂に今日の恵まれたる地歩を築いた我が圓山田作氏の過去が實にそれである。氏は信州上伊那郡飯島村の人、嚴父を源吉と呼び、其の長男に生れたのであつた。十才の時、單身上京して某乾物商に徒弟奉公し、超人間的な奮闘史のスタートを切つたが、年と共に青雲の志は燃え上つて寸暇を惜んで修養を怠らず後辯護士の書生となり、其餘暇を利用して中央大學法科に學んだのであつた。かくて大正九年、螢雪の功なると共に辯護士試験を受け、僅か二十五才の若年をもつて見事にパスしたのであつた。爾來、辯護士を開業して、各種訴訟事件を取扱ひ、先輩の間に伍して少しも劣ることなく、若き法曹家として其の將來を囑望さるゝに至つた。かくて氏の熱誠と、努力と其の卓絶せる才腕とは、常に事務の多忙を招き、門前には訪問客の影を絶たないと云ふ。しかし氏はこの順調なる發展に遭ひつゝも、世の法曹家の如く野望に走らず、華やかなる政治的方面に對する憧憬も、決然として捨て、全幅的努力をもつて天職のために不斷の研究を續けてゐる。自己の利慾を省みず大衆の利福と大衆の權利擁護のために、精進する氏こそ實に稀に見る殉教的精神の所有者であつて、明日ある人と云ふべきであらう。人となり眞摯にして義侠に富み、家庭には會子夫人との間に長男勝彦君の外一男一女がある。

野村鑒太郎

文久元年十一月二日生
東京市麻布區市兵衛町二ノ一三
電話青山六五六一番

池田正義

明治十六年九月一日生
府下大久保町西大久保五〇八

東京府會の長老として常に正義の爲に闘ひ將た又東京府醫師會理事として刀圭界に重きをなせる我が野村鑒太郎の如きは、蓋し棟梁の材たるを失はぬ。氏は生粹の江戸つ子にして夙に刀圭界に驥足を延べんとし、栃木縣立醫學校を卒業後、直に縣立宇都宮病院に勤務し親しく實地に付いて研鑽する處があつた。併し胸中に燃ゆるが如き功名心は押ゆるに由なく、更に進んで本郷區湯島醫學專門學校に學び、明治十二年優秀なる成績を以て同校を卒業するや、後幾何もなく斯界の登龍門たる内務省醫術開業試験に合格して現住所に醫業を開始し、現に東京府醫師會健康保險部理事並に審査委員等の重職に推され斯界に重きをなしてゐる。氏は又公共の志極めて厚く、曩に三河臺高等小學校保護者會副會長並に市兵衛町々會長等の要職に擧げられて奮闘する傍ら、衆望の歸する處推されて區會議員となり、而かも副議長として區政の樞機に參畫すること前後十有六星霜、其間學務委員に擧げられ區の教育に盡瘁する等其功績は寔に擧げて數ふべからざるものがある。更に大正三年府會の改選に際し馬を逐鹿場裡に進めて鹿を争ひ見事大多數を以て當選の榮を擔ひ、現に府會議員として令名を馳せて居る。此外氏は大正三年京都市に於ける御即位式に參列して大禮記念章を下賜せられ、又大正十年より十二年に亘る麻布島居坂並に六本木兩警察署警官合宿所建築常務委員長となり、警察官の爲に合宿所を建設したことも忘るべからざる功績の一つである。氏人格高潔、光風霽月の襟度を有し趣味を諳曲に有する處、氏も亦一面情の人たるを失はぬ。

由來九州人には何物をも動かさずんば已まざる大なる氣魄と豪快な血潮が其血管に漲つてゐる。九州福岡縣生れの氏も又郷土九州人特有の資質を惠まれ、夙に青雲の志を抱いて縣立福岡工業學校建築科に學び、明治三十七年優秀なる成績を以て卒業するや、直ちに下ノ關要塞司令部臨時營繕係に勤務する事となつた。營々として獻身的努力を盡し、日露戦争の勃興と共に召集せられて、征露の途に就き戦功によつて勳八等瑞寶章及び一時金を下賜せられた。かくて三十九年の五月には八幡製鐵所に計畫課圖工として勤務し、次いで四十二年帝國大學建築係現場監督に轉じ到る處に獨特の手腕を發揮して令名を馳せてゐるが大正五年の二月、愛知縣より招聘されて、學校、病院、警察署等の設計並に現場監督の任に當つた後幾何もならずして職を東京市に奉じて建築課兼學務課に勤務し、専ら小學校の建設設計、設計調査、並に建設費補助に關する事務に執筆して、該博なる智識と非凡の手腕を見せ爲に大正九年母校たる福岡工業學校より特に建築學會の正會員に推薦せらるゝの榮を擔つた。かくて大正十五年一月木田建築事務所に入り主として、銀行商店並に工場等の設計調査事務を擔當し三面六臂の奮闘を續けてゐるが、後再び東京市に舞戻つて京橋區役所學校建設營繕係主任となり多年の蘊蓄と天稟才能を發揮して事務に精進してゐる資性豪快明晰なる頭腦と周密なる思慮を有し稀に見る高潔な人格者である。趣味を登山に有する處其實實剛健にして氣魄の大なるを知るべく家庭には母堂の外夫人との間に三人の子があり至つて圓滿である。

荒木繁次郎

元治元年十一月生
麻布區谷町三十八番地

醫學の進歩は吾々人類に對して、限りなき幸福を齎し、往昔の思ひ及ばない文明の恩澤に浴せしめてゐる。されど現代社會組織の欠陥は遺憾ながら吾人同胞の總てが醫家の門をくゞる能はざる現状にある。斯くして醫學の進歩と共に賣藥業は社會政策的に重要な地位を占むるに至つたが、この重要な賣藥業に對し、印紙稅法の適用は極めて不合理にして、社會政策的見地に悖る處甚だしく、當然撤廢せらるべき事柄であつた。全國賣藥業團聯合會理事荒木繁次郎氏は、夙にこの欠陥を憂ひ熱心に之が改善を力説して遂にその目的を貫徹し現に斯界の信望を一身に集めてゐる。氏は浪花の人明治十八年笈を負ふて上京し忍苦の間に年を重ねる事幾春秋、同二十五年埋立の地に店舖を構へ獨立するに至つた。が、業漸く盛んならんとする時、祝融の厄に遭ひ、勞苦も遂に一朝にして水泡に歸するの己むなきに至つた。されど堅忍不拔の精神を有する氏は之に失望することなく却つて勇氣を鼓舞し惡戰苦闘實に三十年遂に酬ひられて、今日の成功を贏ち得るに至つた。氏は一面極めて公共に志厚く町民救済の的となつてゐる大正二年區會議員に選ばれ爾來三期に亘つて當選せられ區政に貢獻する處尠からざるものがある。尙大正十三年には町内の共存共榮親睦和合を主唱して町會設立の中堅となり、これを設立せる外種々の公共的の事業に盡す處多く爲めに大正十四年麻布區より表彰せられ、金盃及感謝狀を贈られた。家庭はとく子夫人との間に二男あり、長男憲三氏は米國に遊學した新進の秀才で現在父君を助けて家業に精進してゐる。

織田智

日本橋新場橋警察署長として、日夜匪徒管内の安寧秩序に向つて警察行政を司つてゐる人に、我が織田智氏其人がある。由來新場橋管内は帝都の警察署中淺草の象湯管内と並稱せらるゝ樞要の場所管内には兜町の兩取引所を始め、大銀行大商店揃ひしその抱擁する商業地區は實に四十餘町の多きを數へ、司法行政共に其警察事務の複雑なることは蓋し想像の外である。華やかさの裡には罪惡が根を張る難踏の巷には必然的に事故を生ずる、この條件を具備する警署長として異數の好成績を擧げて、住民渴仰の的となつてゐる事は氏の卓越せる手腕と燃ゆるような犠牲的精神と高潔なる人格の反映であらねばならぬ。氏は大正十一年その帝國大學法科在學中既に高等文官試験にパスして俊才振りを發揮し、越えて十二年學憲を出つると共に警察界に入り大正十四年三月、原署署長を振出しに現新場橋署に榮轉し警察界の俊魁として將來を矚目せられてゐる。因に新場橋署は斯界の登龍門として知名の人士を輩出してゐる。其創署當時よりの署長を擧ぐれば左の通りである。

明治四十二年五月	警部	室内宗之助氏
同四十二年十二月	警部	中山力太郎氏
同四十三年十二月	警部補	村上蘇太郎氏
同四十四年	警視	白上佑吉氏
大正二年三月	警視	鈴木元吉氏
同四年一月	警視	白井友貴氏
同七年七月	警視	高野多助氏
同八年八月	警視	大久保留次郎氏
同九年三月	警視	山口竹造氏
同拾年九月	警視	花井誠郎氏
同十一年七月	警視	中村知三氏
同十二年七月	警視	中村知三氏
同十三年十二月	警視	小林長彦氏
同十五年十月	(現署長)	警視總出智氏

水谷久吉

明治十三年五月十日生
東京市芝區芝浦二ノ三

ハンマーが高く振りあげられる時の、玉と流るゝ汗、赤銅のやうな筋肉のむくみと動き、それは何といふ嚴肅な姿だらう。また何といふ男性的な雄々しい努力だらう。こうした尊い努力が幾度となく繰り返されてこそ、初めて其處に鎗刀が鍛え上げられるのである。努力によつてあがなはれる處の成功がまたさうである。それは成功者といふ成功者が一様に辿り來つた過去の道程をみてもうなづかれると共に、其處に横つた嚴肅な人生の姿と、超人間的な努力の跡とは、薄志弱行の徒を感動せしめずにはおかないのである。共立機械製作所々長として斯界に名のある我が水谷久吉氏が實にさうした成功者であり、懦夫をして立ちしむべき美しい血と膏の奮闘史をもつてゐる。氏は廣島縣安藝郡倉橋村に呱呱の聲をあげたが、幼にして九州に渡り、機械製作業に従事すべく餘儀なくせられた。後上京して石川島造船所の分工場に入つたが、將來雄飛せんとするアンビツションに燃えた氏は、傍ら築地の工手學校に通學して文字の如く苦學力行を續け、優秀なる成績を以て同校を卒業した。かくて同工場に勤務すること實に十有三ケ年、恰も一日の如く汝々として働く内、漸く擡頭の地步を固め、現住所に獨立して各種機械製作場を經營するに至つたのは、實に大正九年の事であつた。爾來日夜寢食を忘れて奮闘した結果、逐日幸運に恵まれ、現在では王子製紙太工場を始め、富士製紙、淺野、岩磐の各セメント會社、東京瓦斯、三井物産及三菱商事等の各會社工場等に製品を納入し頗る隆盛を極めてゐる。蓋し氏の如きは立志傳中の人として推稱に足るであらう。



齋藤愛三郎

明治十四年七月二日生
東京市芝區白金臺町二ノ六四

爛漫たる櫻花に浮れ、明月や紅葉を愛でて、酒杯を傾ける事の出来る人は、幸福である。一杯五錢の水水に、夏の暑さを忘れ、秋雨にも、秋の寂しさを知らない人々の人生程、恵まれたものはない、だがそれは富めると貧しきを問はず、健康な人々にのみ與へられた唯一の特權である。病める人と云へば、花の春にも、云ひ知れぬ焦燥と憂鬱に陥り、病葉の散る秋には、殊に限りない寂寞と無情を覺えるばかりである。同じ世に生を享けながら、實に病める人ほど悲惨なものはない。これら病める人々にとつて、心ある醫者の存在はどんなに喜ばしい、力強い事であらうか、我が齋藤愛三郎氏は、小兒科を専門とするだけに、優しい、親しみのあるお醫者さんである。氏は明治十四年七月二日をもつて、茨城縣猿島郡勝鹿村に呱呱の聲を擧げた、學序を追つて、郷里の中學校を卒業すると共に、將來、刀圭界に名をなさんと欲し、前途に輝く希望を抱いて上京し、日本醫學專門學校に學んだが、級中常に異彩を放ち、在學中己に醫師の免許を取つて大に學友を羨ませたものだ。同校卒業後更に帝國大學醫學部選科に學んで小兒科を専攻し、學成るに及んで、現在地たる芝區白金臺町二丁目六十四番地に醫院を開業したのは、明治十四年の事であつた。以來十有餘年星霜内科小兒科専門醫として知られ、門前市をなすが如き繁榮を極めてゐる。資性温良玉の如く稀に見る仁侠の持主で現に芝區醫師會の理事として重きをなしてゐる。氏は又謡曲に興味を有し家庭には志奈子夫人との間に和久君、壽子、昌子嬢があつて、至極圓滿である。

木島傳次郎

明治十四年八月十五日生
東京市芝區三田四國町二ノ十九

汝を成功へと運ぶ最も速い馬は苦難であると、セネカが言つてゐる。まこと成功は温かい褥からは生れない、苦難は成功へと運ぶ唯一の馬であるかもしれない、それは成功者のことごとくが實に苦難と闘ひ、幾多の血と膏を流して來てゐるからである。だから、不運とか不幸とかを嘆げく人々は、歡樂の間に成功をのぞみ、享樂の杯と共に成功を得やうとするフアンタステイストか、然らずんば恵まれたる逆境にありながら、苦難の馬を乗りこなし得ない所謂薄志弱行の徒と云ふべきであらう、されば裸一貫から身を起して今日の成功を贏ち得た我が木島傳次郎氏の過去に對しては、絶大の尊敬を拂はざるを得ない。氏は明治十四年八月、新潟縣西頸城郡の根知村に生れた。嚴父を伊三郎と云ひ、氏は其次男であつた。幼にして大度あり、明治四十年青雲の志を抱いて單身上京し、芝區松木町なる福井勘四郎氏の許にあつて忍苦の修業を積むこと二ヶ年、後芝區愛宕町一丁目の高橋電氣工場に轉じ、他日擡頭の地歩を築いて行つた。後再び福井氏の許に歸り致々として働いたが、大正四年、漸く機熟するに及んで現住所に電氣工場を獨立經營するに至つた。爾來日夜寢食を忘れて奮闘した甲斐あつて、家運頓に榮え、斯界に確固たる地盤を築くに至つた。氏は又公共の念極めて篤く、昭和元年迄町會の參事勤め、震災當時には我を忘れて献身的に努力した爲め、土地の人々から非常な感激を以て迎へられたものだ。氏は人格が高潔で正義の念が強く、ちせ子夫人との間に博男君の外、東京女學校在學中の京子嬢、フレンド女學校在學中の久子嬢及文子嬢がある。



篠原純治

明治十七年三月十五日生
東京市芝區白金三光町八五

九州を代表するのは、薩南の地である。だが其の風光は、櫻島にしても其の麓を洗ふ錦江灣の靜かな波にしても、亦遙かに霞む大隅の山々にしても、靜かで穩かである。然し其の平靜の裡には、ダイナミックな活氣が多分に漲つてゐるのを、見逃す事が出来ない。九州男子を代表するものは、薩摩軍人である。だがそれは、武骨一片の猛者ではない。琵琶を弾じ、柴笛を吹き、詩を吟ずる、情の人であり熱の人である。それは限りない懐しみをもちた、大南洲をみても知る事が出来るだらう。病院長として令名ある我が篠原純治氏も亦鹿児島縣の人である。氏は同縣大島郡名瀬町に生れ夙に勉學を了へて後、縣立川邊中學校に學び、優秀なる成績を以て卒業するや、將來自己の歩むべき途を刀圭界に求め、熊本醫學專門學校に入學した。爾來専ら醫學の研鑽に身を委ね、明治四十四年、同校を卒業すると共に、直に熊本市の渡邊病院に勤務し、少壯氣鋭の醫師として大にもて囃されたものだ。かくて大正八年上京して、現住所に醫院を開業し、多年の蘊蓄と經驗とを以て銳意業務の擴張に力めた結果、大正十四年九月遂に警視廳の認可を得て病院組織となし精勵今日に至つたのである。氏資性温雅、趣味を讀書、音楽等に有し、暇あれば和洋の書を精き旺盛な知識慾を満足せしめてゐる。家庭には、貞淑の譽高き千代野夫人との間に、麻布小學在學の達郎君、及び茂君の二男、東洋英和高等女學校在學中の恵子嬢と可愛盛りの降子嬢があり、春の様な鶯々たる和氣が、絶えず漲つてゐる。

一城増太郎

明治二十四年九月五日生
南葛飾郡寺島町一三一一五
電話 墨田 三四五番

從來我が國に於ける玩具製造業は、總てが屋内工業で、産業として殆ど其の存在を認められなかつた。即ち構想も實質にも甚しく劣るものがあつたからである。其後幼兒の薰育上其の智能啓發には玩具の影響が最も顯著な事が識者に依つて提唱せられ、其の理一般に普及するに至つて玩具製造には重大なる意義を齎す様になり、爾來遽然勃興して我が國に於ける有數なる國産事業となり、輸出雜貨中其の主位を占むるに至つたのである。わが一城増太郎氏は又斯界の重鎮として知られてゐる人である。父君の山田米吉氏は吾嬭町下木下川に貴金屬商として知られ、其の徒弟中現に成功して居る者も少くないが、氏は同時に鐵力玩具の製造をも兼ねてゐた。當時一城氏は、父君と計り、營業中玩具部を獨立せしめて、腐心の結果セルロイド玩具の製造を創始したは明治十三年の事である。以來幾多の苦心と工案を凝らして一段の活氣を加へ、爲に異常な人氣を呼び、需用頓に加はるに至つた。大正四年遂に工場を擴張して現在の地に轉じ、益々盛況を極めて居るが、氏は常にこれを以て天職となし深甚なる興味を以て之が研究に従ひ、從來の玩具の上に新生面を開かんと苦心を續けて居る。斯くて今日では使用人四十名、年産額優に四五十萬圓を越へ、遠く滿支、歐米に及んで販路を有するに至り、宮部末高商會、コンミッション商會、ゼーウトコスキー商會等を主なる取引店とし、數千坪の工場からは盛に嶄新な玩具が製出されて居る。其の國産的事業の貢獻亦偉なりと云はなければならぬ。夫人ふじ子との間には二男四女がある。



宇田宇一

明治八年四月十五日生
澁谷町下澁谷百十七番地

氏東京府西多摩郡橋原村を搖籃の地とし、學究數年を了へて後、即ち明治三十二年も押し詰つて師走の九日、始めて鐵道書記に採用されたのが其の振り出しで、當時二十三歳の若者たりし氏が官界に對する懷れは、身を驅つて一意専心職にいそませたのであつた。格勳精勵の裡に幾歳月は流れて行つた。氏の一人一倍優れた此熱心な執務振りが次第に上長に認められ、年と共に累進して行き、遂に大正十一年六月には鐵道副參事に任命され、更に同年八月二十九日には過去二十有餘年間の精勵と、其の職務に對する幾多の功勞によつて勤績者表彰の恩命に浴するの光榮を擔ひ、兼ねて勳六等に叙せられ、瑞寶賞を賜つた。越えて十三年十一月十一日正七位に叙せられたが、十四年一月二十一日過去二十六年のゆかり多い思出を後に、東京市主事として電氣局に職を奉ずるに至り爾來今日に及んでゐる。氏は目下同局車輛課主事として車輛の設計に關する庶務及び其の保管維持分配等の掌理に當り、相變らず熱誠を以て天稟の才能を揮つて居る。現在の東京市に於ては、市電は市民交通の必須機關であり、市民生活とは密接不離の關係にあるを以て、各線の車輛案配等は當局者の常に頭腦を絞る所であるが、氏は常に思を此所に致し、慎重職責を盡して居る。寡黙にして温厚な氏の三十年の過去の生活は、敬虔な奮闘で一貫して居るといへやう。かうした人の趣味として、閑を偷んでは靜かに讀書に親しみ、不斷に心の糧を求めて精神生活の充實を期するものだ。本年知命を越える事僅に二年、今後尙電氣局の爲めに堅固すべき長日月が残されて居る。

瀬戸喜重郎

澁谷町中澁谷二五七番地
電話 青山二二三六番

舊き信用と新しき智識とを以て刀圭界に一家をなし、患家の來訪絡驛として絶えずと云ふ盛況を示し、而かも業餘町政に参畫して自治の發展に奔走し、町民思慕の的となつて居る人に瀬戸喜重郎氏がある。氏の醫界に身を投ずるや、終始一貫斯業に精勵し、己れを顧みず暇なき程に日夜研鑽した効は、遂に結ばれて醫師會の重鎮として認めらるゝに至つたのだ。東京府醫師會常任理事としては諸種の協定に臨み、同業諸家に率先して之が便宜を計り更に日本醫師調査會を始め、豊多摩郡病院組合常設委員、郡下醫師會常務理事等の要席に推されて其の重大なる職責を全うする等、實に同業者中稀に見る貢獻者として推稱されて居る。而かも氏の家にあるや、日夜多忙の身に置かれながらも一度患家の請ひを受けるや直ちに之に應じ、其の席の温まるを知らない程に精勵之を續けて居る。人格、手腕共に並び稱せられて居る氏は、現在望まれて同地小學校醫となり、兒童保健増進に貢獻し、更に居所の區醫として住民の便宜を計り、其の名聲は汎く知られて居る。斯くも刀圭界に名を成した氏は出で、公共の事に當り、或は町政の改善、或は後進の指導に任じ、眞に町内の慈父の如く思慕されて居る。現に豊多摩信用組合理事、澁谷町教育會評議員、郡教育會評議員等の要職を占め、更に在郷軍人分會評議員、青年團評議員等に任じて、顧問となつてゐる。又衆望の歸する處、推されて町會議員となり、縦横の奇才と明快の辯とを以て一異彩を放ちつゝある。實に氏の如きは澁谷町に於ける屈指の有志であり、偉勳者と稱すべきである。

土屋倫啓

明治八年十二月十二日生
日本橋區數寄屋町一
電話 大手一〇八一番

多士儔々たる辯護士界にあつて特にその頭角を顯はし、推されて東京辯護士會常議員議長の要職にあり、その盛名を謳はるる人に土屋倫啓氏がある。氏は靜岡縣駿東郡深良村の人與三郎氏の二男である。郷校を卒へて後、家兄を扶けて農事に努め、傍ら漢籍を學ぶこと數年、後感んずるところありて明治三十三年上京し、私立小學校に教鞭をとりつつ明治大學に學び、専心法學にいそしみ、三十五年優秀なる成績を以つて同大學を卒業し、直ちに辯護士齋藤孝治氏の事務所に入り、實務に執筆すると共に深奥なる學理に身を委ね、後法曹界の登龍門たる辯護士試験に應じて見事に合格し、獨立して業を開始するに至つた。氏は明治三十九年以來、業務の傍ら萬難を排して試験制度改正及帝大特權廢止運動に奔走し、尙大正元年以來試験制度の統一不權衡を慨し、その根本的改正を企て、惡戰苦闘すること數年、遂に世論の容るゝところとなり、大正三年遂にその法律案をして貴衆兩院に通過せしめ、以つて學制改革の根本的基礎を確立したその功績は、特に推賞に値するものがある。氏は民刑商法中、借地法に關しては殊に造詣深く獨特の手腕を有するといふ。かくて衆望の歸する所、東京辯護士會常議員議長に推され、又合名會社保善社、東京建物株式會社、安田銀行、安田商事、帝國商業銀行等各會社の法律顧問として重用されてゐる。氏の如きは眞に奮闘努力、苦學力行の士として推賞に値する人傑である。家庭には淑徳温良の譽れ高きと子夫人があり、長男一郎君、長女二葉嬢、二男八郎君をあげて、よく和合し、瀟々たるものがある。

今井健彦

明治十六年七月生
東京府下千駄ヶ谷八五四

「光は東方より」とは、今や世界の聲となつた。新しき東洋の心臓として、全人類の文明に參すべき、若き新日本を建設することは、我々日本國民の、凡てが持つところの使命である。日本國民の凡ては、近代文化の頂點に立つて、廣大無限の大未來を展望し、一致協力して、其處に光輝ある新日本を打建てなければならぬ、いま將に西洋文明の晩鐘は消えんとしてゐる。今こそ東洋文明の曉鐘が鳴り出さなければならぬ時である。この秋、國民の先驅者であり、中堅の闘士であるところの政治家に、何等の狂奔なくまた耽溺なく、眞深の洞察に基礎を置くところの正鵠を、公正を中庸を、確實性を健全性を持つて、國政に精進してゐる我が今井健彦氏を見出す事は、明日を嚆望する國民にとつて、大きな喜びであり、また大きな誇りでなければならぬ。氏は千葉縣佐原の人、今井信夫氏の令弟で、大利根が育てあげた一室の綠野に播種を求め、呱呱の聲をあげたのは明治十六年の初夏であつた。幼にして穎悟、夙に身を操觚界に投じ、中央新聞、中外商業新報に記者として、大いに健闘し、圓熟の筆を揮つて大に令名を馳せてゐたが、後聘せられて福井日報社長に就任し、また東京毎日新聞社長として、歩一步、社會的地位と名聲を高めていつたのであつたかくて大正十三年昭和三年の二回千葉縣より推されて衆議院議員に當選し今日に及んでゐる。此外氏は千葉水力電氣株式會社の取締役として實業界に重きをなしてゐる。又邦子夫人は、女流歌人として普ねく世に知られ、其の間に幸彦君があり、家庭には春のやうな和氣が絶えず漲つてゐる。

飯野繁次郎

明治十七年十月十二日生
東京市京橋區南小田原町二ノ九

氏が夢寐にだも忘れ得ない、播種地は、新潟縣西頸城郡の鬼伏村である。新潟縣の西頸城郡と云へば、東鞍山、白馬山、大連華山を背負つて、富山縣、長野縣に隣りあつた處、澎湃たる日本海の怒濤が絶えず押し寄せ、て親不知の難險を以て普ねく世に知られてゐる。されば此の地方に生れ、育つて来た人々の多くは、北國的な堅い意志と、理性を多分に持つてゐると云つて兩國の熱情を全然持たないといふ譯ではない、新潟縣人が、財界、業界に成功してゐるのをみて、この天地に育成された人々の人格を、徳ぶ事が出来やう、飯野繁次郎氏は亦、こうした人格の所有で、令名ある産婦人科醫である。幼にして穎悟、夙に將來刀圭界に身を立んとして學序を追つて、慈惠大學を卒業したのは、明治三十九年の春であつた。卒業後氏は直ちに、慈惠病院産婦人科に勤務し、欣求と思慕を以て日夜實地研究に身を委ねること一ケ年、次いで東京帝國大學選科、産婦人科に勤務し、格勤の譽れが高がつたが、後幾許もなくして、北海道に赴き室蘭の日本表鋼所病院産婦人科に勤務し、明哲なる頭腦と卓越せる手腕とを以て大に其前途を嚆望されてゐた。かくて大正八年上京し現住所に獨立して醫院を開業するに至つた。爾來赤誠を以て業務に精進した結果家運日に延び業務月に榮え、今日では區内有數の醫院として斯界に重きをなしてゐる氏となり聰明にして氣宇瀾大、内に溢るゝばかりの温情を湛え、患者に對しては頗る懇切を極めてゐる。家庭には、貞淑の譽高い志も子夫人との間に、早苗、昌央、敏孝、光俊君の四男あり、愛々たる和氣が絶えず漲つて賑かである。



當間 當三

明治十二年九月生
東京府下蒲田町新橋四七八

梅屋敷は近郊に於ける梅の名所として著名であるが、また明治大帝の御遺跡があることに於て其の名を知られてゐる。そしてこの梅屋敷と共に、蒲田の梅の名所として讃へられたのが、我は當間當三氏の屋敷であつた。一時は一町餘歩といふ宏大な梅林であつて、明治大帝の側近奉仕者山岡鐵舟等が絶えず訪れた爲、鐵舟の書畫は、今では當間家の家寶となつてゐる。この當間家は、豪農として庄屋として、五百二十有餘年間連綿と續いた舊家であり、また蒲田近郊の舊家當間一家の總本家でもある。當主當三氏は現在蒲田町第十四區長として噴々たる令名を馳せてゐるが、性來愛町の念極めて篤く、夙に公共の事に心を砕き貢献した處が尠くない。即ち從來義勇消防員、小頭、組頭として奮闘すること實に十有五年、また區長代理としても四ヶ年其の職に留り没すべからざる幾多の功績を残してゐる。現區長に推されたのは昭和二年で、外に衛生組合會計、八幡神社氏子總代、南蒲小學校保護者會幹事等にも推され、町政の發展、町民の和平に不斷の努力を續けてゐる。またかつて氏は、品川稅務署所得稅調查委員、國勢調査委員、荏原郡農會委員たりし事もあつた、氏はこうした公共の職にあつて寧慮する處もない有様だが、家業たる地所家作業に精進してこれを隆盛ならしめ、植木苗木栽培にも従事してゐる、殊に桃の栽培には特殊の技能を有し、第五回勸業博覽會に於て一等を得、各品評會にも常に受賞者であり、趣味としての菊造りも亦立派なものである。家庭には夫人うた子との間に二男二女あり、至つて圓滿である。

今井 五介

安政六年十一月生
東京府代々木初臺六二七
電話四谷一八八〇番

みすじかる信濃の國が生んだ實業家中、王者の席に据る人は我が今井五介氏であらう。政界法曹界學界等人材を輩出する所まことに多い信州に於て、獨り實業界は片倉の獨り舞臺の觀がある。今を全盛の同門に八人の多額納稅者を出し、氏が帷幕の中心に其の總帥として勢力を示して居る、生糸の本場諏訪郡平野村の出身で片倉市助氏の五男に當る。明治十六年六月先考今井太郎氏の養嗣子となり、我が國産業開發の一大理想を抱いて蠶絲業の振興に八方意を濶いで寄與の實績亦見るべきもの多く、信州をして今日我國第一の蠶絲國たらしめたる上に顯然たる功勞があつた。先年其の功に依つて綠綬褒章を賜つて居る。夙に平野岡谷を中心に全國に及んで製絲工場を分置し、本邦唯一の大倉製絲會社の今日の基礎を培つた。目下片倉製絲紡績會社副社長たるの外に實業界各方面に發展して片倉生命保險を設立して其社長たり、兼ねて日華蠶絲、長野製絲、片倉殖産、信濃鐵道、歐亞産業各會社に社長となり、日本共立火災保險、中央電氣各株式會社取締役、富國火災保險會社顧問等の椅子を占め今や老練圓熟の大實業家として各方面の尊信をあつめて居る。猶亦公共事業に對しては松本商業會議所會頭、帝國經濟議員、大日本蠶絲會理事、海外協會中央會々長、長野縣生絲同業組合聯合會中央會議員、協同會評議員、信濃海外協會顧問、長野縣蠶品検査委員會等の多數公務に執筆し、功勞頗る多く、さきには貴族院議員に勅選せられて國務に參畫し、老來愈々絶倫の意氣を見せて居る。家庭には令閨くみ子あり、長男眞平君は松本製絲を經營して居る。



中井 辰之助

明治十一年四月三日生
北品川宿袖ヶ崎四百八〇番地
電話 高輪 四一四六番

一萬哩に及ぶ蜿蜒とした鐵路に正比例して、その盛名を購つてゐるのは鐵道關係工業會社と中井鐵道製作株式會社である。その兩會社の代表社員として、經營に非凡な敏腕を振つてゐるのが中井辰之助氏である。氏の出生地は祇園の名を以つて知られ、その雅びた情景を誇つた京都なのである。京都府第三中學で中學課定の學科を修めた氏は、明治三十八年に東上し、芝區兼房町高木商店に入つて店員生活の苦酸を嘗めること十四年の久しい間に亘つた。が貯蓄心に富んだ氏は、その間に貯へた金を資本として獨立し、まづ鐵道保安裝置の不完全であるにも拘らず、その方面の事業の不振であるのを觀取して、之が製作工業に着手したのである。がなんと云つても、創業當時は産褥の苦のみで、資本は尠し優良な職工は來ず、その間に處した氏の苦心は想ふだにさこそと肯かるるものがあつたが、剛腹にして敏腕な氏は、よくこの窮境を打開して日一日と業績を計つて已まなかつた。ところが創業の翌大正七年より、歐洲戰爭の勃發に伴つて財界は日に好轉のクライマックスに達し、一方資本援助の士も出ると云ふ有様で、瞬く間に先進同業者を凌駕して、その設備にその販路に、大繁榮を示すことゝなつた。で今では鐵道省指定工場として、押しも押されぬ地歩を築き、販路は遠く滿洲・朝鮮・臺灣にも及び、更に私設鐵道會社は争つて注文すると云ふ状態だ。曩に株式會社に組織を變更し、氏はその代表者として今後に於ける層一層の活躍を期してゐる。良妻千代子との間には一男があり、團樂の實をあげてゐる。

村 越 進

明治十六年四月十八日生
府下千駄ヶ谷町原宿三二〇

氏は鹿兒島市稻荷町に孤々の聲を擧げた。薩摩人の有する非凡な才氣とそれに加ふる熱情とは、氏の胸底に深く秘められてゐるとも見えやう。が由來薩摩人は決して表面にはその才人ぶりを露骨には現はさない。そして模倣として總てをばかす不得要領の中に、得要領の妙味を有してゐる。茲に薩摩人としての傑さが介在してゐると云へやう。さてその流れをくんだわが村越氏は、東上して日本大學に學んだが、明治三十九年には今の村越家に懇請せられて入婿となり、前姓野村を改めた次第である。大學を卒業後は明治神宮造營局に職を奉じて才腕を認められ、轉じて日本青年會館主事として、行くところ可ならざるなき力量を示した。と同時に漸次衆望を集めて自治政方面に驥足を伸べ、豊多摩郡十三ヶ町村組合病院會議員に選出されたのを始めとして、千駄ヶ谷町會議員に選舉せられ、三期に亘つて町政自治の伸展に献替してゐる。此間更に豊多摩郡會議員に選ばれ、同郡政治上に盡瘁するところが尠少でなかつた。氏は曩に叙した薩摩人氣質の如く、偉容あつて偉容を示さず、非常に恭謙であり、かつ着實さを好み、毫も奇を衒ふところがなく、決して他人との間に牆壁を築かない。その上に抱懐する思想は、常に時潮の趨勢を達觀するの明敏さを有し、世の所謂老朽から遙か遠ざかつて、非常に穩健味を有してゐるから、今後千駄ヶ谷町民は勿論のこと、豊多摩郡民は、氏に俟つところが實に大であると云ひ得られやう。夫人むら子氏との間に四男一女あり、長女である子嬢は實踐女學校を卒へて現に家事を修得中、長男芳男君は府立第八中學に學んでゐる。

山口 政吉

明治二年十二月二日生
芝區芝浦町三丁目

歌々一片の俠氣はよく男の中の男として、幡隨院ばりの氣魄をシンプラ
イズしてをり、常に扶弱控強の精神に生きてゐる人に、芝區芝浦四ヶ町聯
合會顧問山口政吉氏がある。氏は大阪市の近郊に當る大阪府豊能郡中村
の人である。僅か十三歳の時に遙々上京して、當村の俠客に近づいて絶え
ず心膽の練磨につとめてゐたと云ふ。その頃はまだ純然たる江戸氣風が残
つてゐた東京のこととて、一諾水火をも辭せないの風骨を養ふには適して
ゐたと云へる。やがて請負業と共に薪炭雜貨商を營むやうになつた氏は、
各所の工場や大會社等に人夫供給をなし、勞働者間の顔役になつた譯であ
る。大正九年に居を芝浦に移し、只管荒野にひとしい同地の開發に努めた
のであつた。氏は近隣の有志と謀つて道路を開き、あるひは鐵道省と交渉
しては田町に通ずる橋下の通路を築成して、彼我交通の便を計り、又は自
家の水道を開放して附近住民の利便につとめるなど、その隣保非榮的な善
行は牧擧に遠くない程である。なほ芝浦三丁目見町一二丁目、新芝町四
ヶ目を打つて一丸となす聯合町會を組織し、自らは顧問となつて町政自治
に盡瘁し、道路の開通水道の敷設や橋梁の架設等に關し、參與して功績が
多かつた。一面町會俱樂部の新設につとめ、中樞の地所を選んで最新式建
築様式になる町會事務所を新設し、同俱樂部を設けたのであつた。市内に
數多い町會があるが、同町會會程完備してゐるところは尠いだらうとの故
も、また氏等の如き人物が指導誘掖してゐるからだ。夫人や子子は仁俠の
人の妻に相應しい女性で、内助の功につとめてゐる。

瀧澤 藤三郎

明治元年二月日生
淺草區松清町五一番地
電話 淺草一五六二番

自己の塔壁をのみ築き利益にのみ没頭するエゴイズムの風潮が、せち辛
い社會苦と共に蔓延して世は所謂淺季とならうとし、同時に、その昔にあ
つては仁術を誇つた醫道も、今は醫術本來の大使命に反馳して來たのは悲
しい現象だと云はねばならぬ。さてこの點につき常に憤慨してゐるのは、
やはり醫業とするのが瀧澤藤三郎氏である。かくて氏は五十九歳の今日
まで、高下貴賤の區別なく、門を訪れるものには一切平等に診療を與へ、
特に貧しい者には喜んで施薬して病苦を救つてゐる。醫の仁術なのは氏に
よつてこそ雄辯に裏書きされてゐるのを知る。抑も氏は日本齒科專門學校
出身で、その専門は口腔外科である。氏が卒業した頃は、齒科醫と云へば
何となく内科外科の一般醫よりは低級なものであるかのやうに心得てゐた
ばかりか、政府當局とても獨立の發達を誘致する施設に無關心であつたも
のだ。かうした無理解な周圍に置かれた氏の、當初の苦心はさこそであつ
たらう。然し我國とても醫術の進歩に伴ひ、その専門とする獨立部門が多
岐を告げるやうになり、齒科が完全な單科として認められて來た。特に口
腔は直接に外部に接觸する關係上、内部の構造は非常にデリケートなもの
で、之が身體に及ぼす影響は最も大なるものがある。で氏の業も日を逐ふ
つて繁榮を示し、今日の基礎を築き上げたのだ。さて氏はこの多忙の間にあ
つて町會創設以來の會長として、日清戰爭の際に英兵會の爲に誕生した由
緒の深い同會のため、不斷の貢獻を拂つてをり、一方七軒町警察署協議會
理事とし、或は東京方面委員として官公私の重職を帯びて盡瘁してゐる。

平林 瀧藏

明治四年 年生
東京府下入新井町新井宿二六二〇

オーストリアの社會學者ルードウィヒ、グムプロウイツツは、闘争軌
が社會進化の原動力であるといふ學説を提唱した。だがそれは異人種間に
於ての軌轢や闘争であつて、自治體に適用される言葉ではない、自治體は
文字の通り、自ら治めるものであつて、平和な零團氣の裡に、刷新され、
進歩されなければならない。されば入新井町々會議員、平林瀧藏氏の如き
圓滿主義者は、自治體にとつて眞に理想的な人と云はねばならない。氏は
明治四年、現住所たる府下入新井町新井宿二千六百二十番地に呱呱の聲を
あげた所謂生えぬきの人である。氏の生家は世々農を業としてゐたが、氏
の不斷の努力は遂に家運を隆盛ならしめ、現在では地所、家作持として近
隣に其の名を轟はるゝに至つた。氏は繁忙な家業の傍ら、町の共存共榮の
ために奔走し、爲めに大正三年には推されて耕地整理、大井耕地委員とな
り、また碑倉東部耕地整理審議員にも擧げられ、永い間紛争を醸してゐた
耕地整理の問題を圓滿の裡に解決したばかりでなく九尺道路組合幹部とし
ても献身的努力を盡して、人々の敬崇の的となつてゐる。殊に氏が町會議
員となつてからの奮闘は實に目覚ましいもので、其の自己の利害を超越した
働きぶりは、氏の信望をいやが上に高からしめてゐる。氏は人格高潔にし
て、一度意を決すれば徹頭徹尾初志を貫徹せんば已まざる男性的氣魄を
持つてゐる。嚴父孫四郎氏も亦多年在原郡農會評議員として自治政發展の
ために盡瘁した功勞者で、氏の美しい愛町心も亦故ある哉である、子息榮
二君は法政大學在學中で氏に似て鋭敏、外に一男三女がある。

相澤 春吉

明治二十二年一月十日生
東京市芝區目ノ出町



オリンピックに於て、勝利の月桂冠を得るものは、最も美しきもの、最も
強きものにあらずして、實に善く闘ふものなり、蓋し勝利は闘ひより出づ
ればなり、とアリストテレスが言つてゐる。實に隆盛を極めつゝある合資
會社芝浦合金鑄造所の所主として、斯界に重きをなす我が相澤春吉氏も亦
超人間的な奮闘家である。氏は史蹟に名高い神奈川縣鎌倉郡の人、生家は
あまり裕富ではなかつた爲に、年少十六の身をもつて、横須賀海軍工廠海
兵器支工廠に勤務すべく餘儀なくせられ波瀾曲折を以て満された氏の奮闘
史は茲にその第一頁が開かれたのである。此鐵石の心を持つ可憐の少年は
食る程の熱心と思慕をもつて、業務に精勵し、他日擡頭の地歩を固めるた
めに日夜研鑽を惜まなかつたが、胸中に鬱勃たる功名心は少年をして永く
同所に止まることを欲せしめず、遂に二十一歳の秋、前途に輝く希望を抱
いて帝都に出で二三工場を流轉して實地に腕を磨くことになつた。次で池
貝鐵工場に入り愈々確信を得るに及んで、遂に大正十年獨力を以て現住所
に合金鑄造業を開始し、新銳の意氣を以て新なる努力が繰返へされて行つ
た。苦難は畢竟成功の母で、氏にもそれから間もなく幸運が踵をついで訪
れ、現在では職工二十有餘名を役するの隆盛を極め、其製品は海陸軍兩
省等に納入せられ斯界に絶大の信用を博してゐる、氏は又繁務の傍ら公共
の事に力を致し、現に芝浦目ノ出町青年團長を始めとし、町會の理事並に
芝小學校評議員等にも擧げられ、町内有志の中堅として其前途を囑望され
てゐる家庭にははな子夫人との間に康正君の一男あり至つて圓滿である。

小川明

明治二十二年六月十七日生
東京市淺草區田原町一ノ四九

バナアド・シヨオは、この世の中は凡て、錢金づくで、二二が四で割り切れるものだ。戦争なんて云ふものも、人々が考へる様な、決して美しいものでも、また勇ましいものでもない。それは商賣の騙引と同じやうに、理性と論理と、計算との問題である。やはり二二が四で形の付く問題であるといつてゐる。だが、人情といふものを芥子粒ほども持合はせないこのシヨオ翁でも、一度小兒科病院を訪れたならば、必ず理性と、論理と、計算以外に、愛の力の尊ぶべきことを、悟らすには措かないであらう。我が小川明氏は、淺草で有名な小川小兒科病院の院長で、小兒科醫として該博なる知識と、優秀なる技能とを有する人である。氏は雪で名高い新潟縣古志郡山本村に呱呱の聲を擧げ、學序を追ふて縣立長岡中學校に學んだのであつた。卒業後刀圭界に青雲の志を求めて上京し、慈惠大學に入學して醫學を専攻し、大正二年雪の功なつて同校を了するや、直に囑託として帝國大學小兒科教室に勤務し、日夜實地研究に身を委ぬること、三星霜、後轉じて三井病院の小兒科に勤務してゐたが、幾許もなくして吉松小兒科病院に入り、大に其前途を囑望せられたものだ。職に留ること二年にして、遂に小川小兒科病院を經營するに至つたが、氏の卓越した技能と、眞摯なる態度とは忽ち信用を購ひ、毎日三四百名の患者に接し、殆んど席の暖る暇もない繁忙を極めてゐる。資性温雅、趣味を書畫骨董に有し、暇あれば讀書に耽り、旺盛な知識慾を満足せしめてゐる。夫人を春重と云ひ、二人の間に、尙一、泰正、眞明、與洋の四男があり、家庭は極めて圓滿である。



岸上春吉

明治四十年生
東京府下入新井町不入斗二五四

入新井町土木委員として噴々たる令名のある我が岸上春吉氏は多年、町村自治の發達のために努力した功勞者であると共に稀に見る立志傳中の一人である。氏の故郷は、岐阜縣養老郡の牧田村で、それは長良川の下流に近い一寒村であつた、若いアンビションに馳られた氏は、當時芝區愛宕町に肉店山口屋を經營してゐた實兄をたよつて、出京し、七年間といふ長の年月致々として實兄の下に骨身惜まらず立働いたものだ。かくて明治三十九年頃、大森の停車場附近に同家の支店を設くるに至つたが、當時大森は至つて閑散で、従つて顧客も少なく、創業、經營の苦心は實に想像の外であつた。然し超人間的な氏の努力は遂に酬ひられて、家業はいやが上り發展するに至つたので、昭和三年五月同店を他に譲渡し、今では地所家作を持ち閑雅な生活を營んでゐる。之より先氏は家業に精進する傍ら、夙に同區の革正に志し、同志石井孝三郎、平林良知氏等と力を合せ、日夜寢食を忘れて奮闘したものだ。今日入新井町が異常の發展を遂げたのも、畢竟氏の努力に胎胎する處が極めて多い。然しこうした氏の隠れたる努力が何時迄も町民に認められぬ管けなかつた。後幾何もなくして同區評議員又は岩井神社委員等に果選せられ、更に昭和二年には固辭するも許されずして遂に入新井町土木委員に推されるに至つた。此外氏は大正六年創立以來引續き城南賣肉同業組合長として組合員の指導誘掖に任ずる等其功績は定に没すべからざるものがある。夫人をとき子と云ひ二人の間に二女一男あり長男慎二君は日大在學中である。



行宗菊次郎

明治九年六月九日生
豊多摩郡野方町下沼袋

在職二十有餘年間、恰も一日の如く孜々として其業に勵み、犀利なる頭腦と鮮かなる事務的才能とを以て其前途を囑望せられてゐる人に我が行宗菊次郎氏がある。氏は維新以來幾多の人材を輩出せる九州福岡縣企救郡會根村の人、多三郎氏の三男として生れた。夙に郷費を卒へるや直に豊津中學校に入學したが、家庭の事情は遂に氏をして永く學苑に止まることを許さなかつた。仍で已むなく中途退學して暫く家業を補けてゐたが、胸中に鬱勃たる雄心は厭ゆるに由なく、前途に輝く希望を抱いて東都に出で、明治大學に學び専心法律學の研鑽に身を委ね、明治三十五年同校を卒業するや、翌年普通文官試験に應じて見事に登第し、三十九年職を神田區役所に奉じて書記となり、庶務掛りとなつた。以來茲に止まること四ヶ年、後戸籍掛に轉じて精勵の裡に幾春秋を累ね、遂に大正十四年拔擢せられて戸籍掛長となり、繁雜なる戸籍事務に執掌して非凡の才能を見せてゐる。氏は又去る大正十四年七月より十一月に亘る四ヶ月間に於て、最も至難とされてゐた震災後の區勢調査に任じて之を完成し、功績の大に見るべきものがあつた。かの關東大震災の當時、氏は慘死者の埋葬事務に没頭すること四ヶ月、其間殆んど不眠不休の活動を續け、毫も倦怠の色を見せなかつたのは、一面氏の精力の絶倫なることを裏書すると共に、麗はしい責任觀念の顯現と云へやう。清廉至直、而かも稀に見る努力家で、草花、盆栽、書畫等に趣味を有し、優しき情操を培つてゐる所、一面亦涙の人たるを失はぬ。菊子夫人との間に二男一女がある。

根岸耕司

明治二十一年三月四日生
北豊島郡長崎町大和田一九六五

道路は都市の血管で、之を措いて到底完全なる都市の發達を望むことは出来ない。今や復興途上にある東京市が、都市計畫事業に於て街路築造工事に最も力を注いでゐるのは當然の事である。従つてかうした工事に従事する人々の責任は云ふ迄もなく、就中幹部諸氏の勞や亦察するに餘りがある。我が根岸耕司氏は即ち其幹部の一人として自ら第一線に立ちて活動し、豊富なる學殖と優秀なる技能とを以て稱せられつゝある人で、任侠の義氣とその稜々たる氣骨を有し、普ねく長脇差の名を以て知られてゐる群馬縣大類村字下大類と云ふ一寒村に生れた。夙に群馬縣立高崎中學校を卒業するや、直に金峽城下の高等工業學校土木科に入學して土木學を専攻し、明治十四年優秀なる成績を以て卒業するや、技師として職を東京市役所に奉じ、市區改正工務課に勤務して大に其才能を讃へられたものだ。後橋梁課を経て大正三年十二月臨時水道擴張課に勤務し、在職七年、其間格勤其物のやうな忠實さと、卓越せる技能とを以て職責を全うし、功績の大に見るべきものがあつた。大正九年水道事務視察の爲山梨長野兩縣に出張を命ぜられ、大正十年一月遂に拔擢せられて東京市技師となり、更に大正十三年四月水道局擴張工事課第一工事掛長に榮進するに至つた。かくて大正十三年四月幾多の功績を水道局に残して道路局に轉じ、第二道路課に入り、擧げられて工事掛長に任じ、更に第三出張所長を経て、昨十四年現職たる第四出張所長に榮轉したのである。清廉にして穎智、而して其内に溢るるばかりの温情を蓄へてゐる。將來の發展は期すべきものがあらう。

森 與三郎

明治二十九年一月三十一日生
府下世田谷太子堂三七九
電話 世田谷八

わが森與三郎氏の先代蔵吉氏が、現在の地に米穀商を始めたのは明治初年の事であつて、其の當時の世田谷と云へば全くの農村で、米穀商と云つても單に其の近在の産米を買ひ入れては東京の市場へ出すと云ふに過ぎない一の仲買業であつた。従つて其の頃には澁谷から世田谷に至る大山街道の沿線にも、米穀商を営んでゐる店は蔵吉氏と外一軒しかなかつたといふ。併しそれだけ商ひは繁昌して、明治二十年から三十年に至る十年間と云ふものは素晴らしい景況を見せてゐた。然るに不幸蔵吉氏は長逝し、相續者たる與三郎氏未だ幼弱にして家業を繼ぐ事が出来なかつた爲、さしもに榮えた家運も次第に衰へ、遂に苦境に沈淪するに至つた。茲に於て氏は長ずるに及び、家運再興に志し、朝夕悲壯なる奮闘を續けた爲、頓に頹勢を挽回するに至つた。かくて漸く前途に曙光を認められた氏は更に奮闘を以てして遂に今日の盛大に迄進る事が出来たのである。此處に恒産を得た氏は更に力を社會公共自治に注ぎ、大正九年世田谷町會議員に選ばれたや、町の伸展の爲に全生命をも打ち込まんずる眞劍味を以て盡瘁し、後町會議員中より建築委員に選ばれて小學校増築其他に非常なる敏腕を見せ、目下之地の發展の爲、道路改正問題の實行進進に奔走中だが、蓋し氏の如きは立志傳中の人として推稱すべきであらう。趣味を撞球と旅行に持ち、殊に撞球の如きは友人に達するの腕を見せてゐる。家族にはる子夫人との間に長男一雄君(世田谷中學校在學中)次男昌雄君(小學校在學中)長女教子(小學校在學中)嬢を擧げ、美しき家庭愛に浸つてゐる。

藤 倉 桂 助

明治 五 年 生
府下大崎町下大崎四八〇番地
電話 高輪三三番

成功は畢竟誠實と勤勉の賜である。徒手空拳を以て今日の成功を贏ち得た我が藤倉桂助氏の過去の道程は遺憾なく之を物語つてゐる。岐阜縣羽鳥郡正木村は氏の夢寐にだも忘れる事の出来ない故郷である。幼にして穎悟、長ずるに及んで、其胸中に燃ゆるが如き功名心は遂に氏を馳つて遙々東都へと運んでくれた。そして先づ職を藤倉善八氏の經營に係る深川電線工場に求めたが、他日の雄圖を胸に描き、其素地を造くるに餘念のない氏の奮闘は實に涙ぐましい程であつた。その熱實にして勤勉、剛健にして質朴なる氏の人と爲りが、主人善八氏の眼に末たのもしき青年として映らぬ筈はなかつた。遂に明治三十三年憲選せらるゝまゝ入つて藤倉姓を冒すに至つたが、勤勉其もののやうな氏は、毫も傲ることなく心から職工を劬りつゝ依然として粗末な作業服を着けた氏の姿を職工の群の中に認める日が多かつた。其後家運が日増しに隆盛に赴いたのも、かうした氏の勤勉とデモクラツトな性格に依る處が尠くない。かくて大正二年同志を糾合して池上電車を設立し、自ら之が經營の衝に當り、多年の積蓄と卓越せる手腕を以て益々才能を發揮し、大正十二年遂に之を辭するに至つたが、同社今日の隆盛は一に氏の献身的の努力に胚胎するものと云へやう、現在氏は在原土地株式會社、五反田自動車株式會社の各取締役として董事に在り、素晴らしい才能の閃めきを見せてゐる。氏は又義に大崎町會議員に推され、町政の振興に盡瘁して自治の發展と町民の福祉を望望し、其實現に向つて精進を續け、年と共に聲望を高めてゐる。

赤 羽 隆 次

東京市麻布區永坂町九番地
電話 青山六八六番

我が労働運動の指導分子は、大體に於て、思想的宣傳家の域を脱しない知識階級出身の少數者によつて構成されてゐるから、ハンマーを持つものシヤベルを持つもの等々の、所謂筋肉労働者にとつては、公然にも、陰然にも、何等の影響を與へない、寧ろ額に汗して、生きてゆく神聖なる労働を冒瀆するものである。労働者を救ふものは、労働者の仲間から出なければならぬ。労働者に不當の光明を與へるものは、人生苦のあらゆる悲惨と闘ひ、而も身を切られ、肉を削がれ、餓に當面して、陰慘と苦痛を体験した人でなければならぬ。労働運動の逆宣傳に乗せられて、労働プロカーの走狗たらずとも、四海鼓腹の樂天境は、労働者の世界にも求めることが出来るのである。即ち我が赤羽隆次氏によつて統帥されてゐる土木業赤羽組こそ、これを最もよく立證するものだらう。氏ははじめ政友會院外團の雄であつたが、全労働者を救はんとの至高なる精神から、まづ土木業を興して、労働者の實生活に觸れ、尊い血と汗の洗禮をうけて、労働立國を提唱したのであつた。かくて相互扶助をモットーとしての惡戰苦闘は効を奏し、手を握り合つての美しい融合は、やがて労働者の生活を安定せしめ向上せしむる美しい實を結ぶに至つたのであつた。然し氏はこれに満足せず、更らに一步をすすめて、日本禁酒軍を起し、街頭に演説するとかパンフレットを配布するとかして酒によつて前途をあやまらんとする人々に警鐘を亂打してゐる。この救世主の如き氏こそ、まことに労働者の味方であつて、義の人、俠の人、情の人、涙の人である。



佐 藤 眞 助

明治十八年三月十二日生
東京府下蒲田町御園三二一

健全な精神は健全な身体に宿るとか、世界に誇るべき武士道も、日本魂も實に劍俠の時代に生れたのであつた。殊に最近發揮性の過激思想に妄動する主義者の大部分が、不健全なる体格、肉體の所有者であるのをもつても思想善導の第一歩は、体育から始まらなければならぬ。また体育の中でも、日本古來から傳へられた劍道柔道は實に其尤たるもので、この道に精進する人々の人格には、武士道の片鱗を見出すことが出来るからである。まこと、劍道を修業すること二十有餘年、眞影流の達人である蒲田町名譽助役の我が佐藤眞助氏には、近代人の共通性とも云ふべき輕々しさが少しもない、全く重厚であり、沈着であり理智的であり、豪壯である氏の性格は、劍によつて鍛練され、レファインされた、敬すべくまた親しむべきものである。氏は埼玉縣北埼玉郡の人、明治十八年、關東平野に潑瀾たる春色が流れて萬物が更生しやうとする三月、川俣村に呱呱の聲をあげたのであつた。學序を追つて帝國大學に學び、芽出度く獨法科を卒業したのは明治四十四年の事である。開業こそしてゐないが立派な辯護士の資格所有者で、また幼少の頃支那にあつたので頗る支那語にも堪能である。かくて氏は越後の西脇氏が經營せる西脇銀行に入りて、精勵すること九年、副支配人として重きをなしてゐたが、大正九年株式會社米十商店に轉じ、昭和二年八月辭職した。かくて翌年二月蒲田町名譽助役に推されて今日に及んでゐる。劍道の外梅若流の謡曲にも堪能で、家庭にはゆき子夫人との間に五男一女がある。

林 政 藏

明治十九年四月生
東京市麻布區筈町一五四
電話青山六一六九番

道路が都會の血管であるならば、交通機關は血管を波打つて流れるところの血液である。まこと、交通機關は、都會を發達の過程に導いたところのパイロットであり、パトロンであつた。殊に交通機關の寵兒とも云ふべき自動車の完成への一步一步は、都會が膨脹への一步一步であつたのである。されば我が平和タクシー自動車株式會社が、自動車發達の上にもたらしたる貢獻は、また文化史の上にレコードされなければならない。同社は、大正十二年の創立にして、現在では市内の重要地點に十二の營業所と、優秀なる數百臺の車輛を有し、信用確實、賃銀低廉をもつて、確實なる躍進的の發達を遂げつゝある。社長林政藏氏は熊本縣上益城郡の人、有力なる山林業者として近隣に知られた溜淵清太氏の三男に生れ、後官吏林米吉氏の養嗣子となつたのであつた。氏は夙に上京して早稻田大學に學び明治四十年同校を卒へ、タクシー自動車株式會社に入社したのは大正六年の事であつた、これ實に氏が自動車界に入つた第一歩であつて、事に對して誠と熱をもつた氏は忽ち拔擢されて營業主任となり、また工務課長の要位に就き、精勵恪勤、同社のために貢獻した處は極めて多かつた。大正三年六月同社を辭して翌七月平和タクシー自動車株式會社長に就任し、業界稀にみるの才腕を振つて業績を擧げ斯界に重きをなしてゐる。前途洋々たる自動車界に、氏の今後の活躍こそ囑望に値するものだらう。趣味として圍碁將棋及び撲球を愛し、家庭には雅子夫人との間に三女をあげ、霽々たる和氣に恵まれてゐる。



桃 井 眞

明治二十年十二月卅一日生
東京市芝區白金臺町一ノ一五

岩の様な、また鐵の様な原始人の巨大な軀體を禮讃して、昔に還れと高く叫んだ人があつた。まこと、針鼠の様な神經を、高踏的なジャズによつて、まぎらしてゆく近代生活が、アブノーマルにあらずと誰が言ひ得るだらう、モヒ中毒の患者にも比すべきものが實に近代人であつて、原人の軀は、近代人の憧憬する處である。だが其處には時の大きな隔りがある。故に我々はたゞ文化の恩恵によつて、健康者たらんと欲するのである。されば醫術は人間の大きな要求から生れたものだ云へやう、そして其處に横つた大きな使命と業績に、限りなき感謝を寄せざるを得ないのである。我が桃井眞氏は産婦人科醫として名あるのみならず、かの皮膚病の妙藥、コゼダンスの發明者としても知られてゐる。宮城縣互理郡互理町は氏の夢寐にだも忘るべからざる懐かしい故郷である。氏の家は代々醫を以て業としてゐたので、氏も亦將來醫を以て身を立てんと志し、夙に縣立角田中學校を卒業するや、直に上京して慈惠大學に學び、優秀なる成績を以て同校を卒業したのは、大正四年の春であつた。かくて卒業後直に慈惠病院産科婦人科に勤務して實地研究を遂げ、後職を廣島縣吳市海軍共濟病院の産科婦人科に奉じて手腕を揮ひ、大に其前途を囑望せられてゐたが、大正六年の秋現住所に獨立して醫院を開業するに至つた。患者に對して親切なものと婦人科に關する造詣が深いので頗る繁榮を極めてゐる。人となり温厚にして思遣りが深く高潔な人格者である。家庭にはタカ子夫人との間に、國忠、孝親、照彦、不二磨、希滿君の五男がある。



神 前 清 次 郎

明治六年五月廿三日生
東京市芝區今里町廿五

子供は大人の父なりと、ウオズワスが言つてゐる。それは子供がやがて大人となり、また更らに父となる、その洋々たる將來と、春秋に富む子供が、いかに大切であるかを教へた言葉である。最近胎教が唱へられ、産兒制限の聲が高いのも、畢竟これがためで、實に子供ほど大切なものはないされば之に従ふ小兒科醫の使命は重且つ大と云はねばならぬ。我が神前清次郎氏は現に白金小學校醫として令名ある小兒科醫である。氏は夙に刀圭界に驥足を延べんと欲し、學序を追ふて濟生學舎に學び、優秀な成績を以て業を卒るや、明治三十二年刀圭界の登龍門たる醫術開業試験に應じて見事に合格し、後内務省の醫師免許を得て、二三の病院に勤務し、實地研究を積んで行つた。然し旺盛なる知識慾と、研究心に篤い氏は之に安んずる處なく、更に進んで米國に留學し、親しく泰西の醫學を研究して歸朝するや、明治四十四年、現住所に小兒科専門の醫院を開業するに至つた。爾來新進の醫術と多年の蘊蓄とを以て奮闘した結果、逐日隆盛に赴き、現在では傍ら白金小學校醫を始め、今里町衛生會副會長、白金小學校保護者會幹事等を勤めて、寧處するところなく、土地の人々から感激の的となつてゐる。氏人格高潔にして温良玉の如く、温容人をして自ら敬慕の念を生ぜしむ。夫人を、たま子と云ひ貞淑の譽高く二人の間に帝大法科在學中の和雄、帝大醫科在學中の章雄君の二男と外に香蘭高等女學校在學中の遊子同泰子嬢及び小學校在學中の敬子祐子嬢の四女があり、恵まれたる家庭である。

木 村 此 助

明治二十六年三月一日生
東京府下蒲田町新宿六四

社會生活は文明に追隨して向上してゆく、だが人間の價値は生活とセークハンドして向上してはゆかない、低下するばかりである。そこで生活が益々逼迫し、人々は離離として此世に闘ひつゝ生きてゆかねばならない、生活難、就職難、それは畢竟明日の日本を生まんとする過渡期の悲鳴に外ならないのだ。而してこの陣痛を救はんがために識者によつて産兒制限と海外移住が提唱されてゐる。單に人口食糧問題を解決するにしても、消極的な産兒制限に比較して海外移住は何と積極的な男性的な事だらう、生活に悩みつゝあるものは、國を愛するが故に國を離れて鵬程萬里の海外へとゆく移住者に心から感謝の辭を送らねばならない、現在蒲田町助役の椅子を占めてゐる我が木村此助氏は、二十有餘歳の時南米ブラジルのサンパウロに渡つて、同胞のために奮闘し、先年一先づ歸朝したが、最近再び移住組合理事として同地に赴任せんとする人である。氏は北海道の人、札幌市南四條西二丁目に呱呱の聲をあげ、學序を追つて札幌中學を了へると共に上京して慶應大學の理財科に學び、大正七年目出度卒業したのであつたかくて力行會の永田彌平川平吉氏、今井五介氏等と共に移住組合を組織し、南米に渡航して大に奮闘する處があつたが大正十四年歸朝し、横濱生糸株式會社の綿糸綿布部總務部に勤務することとなつた。後三年にして同社を辭し、昭和三年六月蒲田町の助役に推され、傍ら婦人小間物洋品販賣商を營み現在に及んでゐる。夫人となり襟度廣く俳句、論曲、圍碁等に豊かな情操を見せてゐる。夫人をふさ子と云ひ貞淑の譽が高い。



田中實義

明治廿二年十一月五日生
東京市芝區車町

豪放そのもの、様な九州男子をシンボライズするものは、雄大な火口をもつた、かの阿蘇山だらう。だが、九州の北半を洗ふ玄海灘の逆巻く怒濤にも、九州男子の面目を躍如たらしむるものがありはしまいか。その昔蒙古來襲の當時死をもつて國難に殉じ皇國の稜威を中外に發揚したのは、實にかの北半の丈夫であつた。こうした九州の北半は、歴史上山嶺ある土地だが、また峨々たる筑紫山脈と、廣漠たる筑紫平野と頼山陽の詩で有名な筑後川の自然に恵まれてゐる。さればこの佐賀縣が、大隈重信はじめ幾多の英傑を生んだのも、當然な事だと云へやう。我が田中實義氏もまた此の佐賀縣の人で、情と熱の所有者である。幼にして俊敏、夙に醫師たらんと志し學序を追つて、日本醫學專門學校に學び、優秀なる成績を以て卒業するや、職を本所區の佐々木病院に奉じて、實地研究を遂ぐることに二年、後更に進んで帝國大學の廣田博士の教室に入り、小兒科の蘊奥を極めて、現住所に醫院を開業したのは、實に大正二年の事であつた。氏は一般内科就中小兒科に關しては殊の外造詣深く、現在では嶄新なる病室の設備もあり、氏の卓越せる技能と相俟つて、いやが上に繁榮を極めてゐる。仁侠の血に富む處の氏は、又こうした繁榮の傍ら、城南醫師會常任幹事として會務に執筆して餘す處なく、別に高輪小學校保護者會副會長、高輪衛生會、高輪美容組合各名譽顧問、及び高輪小學校々醫等として活動を續けてゐる。資性温良、頭のよい學者肌の人で、家庭には芳子夫人との間に、義博、義孝の二君、及び千鶴子、三千子、佐代子の三嬢がある。

小泉丑治

慶應元年四月十七日生
東京市淺草區諏訪町六

文化は時にのみよつて、創造されるものではない、また人にのみよつてプロダクトされるものでもない、實に時と人との合一によつて、燦然たる文化が築かれるのである。その昔奥山と云はれて、低級興業のみしかなかつた淺草が、十有餘年後の今日、東京の淺草か、淺草の東京かと云はれるまでになつたのは、其處に低級趣味から、高級趣味への大きな時代の流れがある。然し、時代の流れに先行して、それに順應せしむべく、不斷の努力を惜まなかつた人々の、大きな力を忘れてはならない。我が常盤興業株式會社取締役の小泉丑治氏が實に其の一人である。氏は茨城縣筑波郡小田村の生れ、明治二十二年、單身上京して、根岸濱吉氏と共に常盤座の經營に當つた。然るに偶々三十七八年の日露戰爭に従軍した結果、一時斯業を放棄するの已むなきに至つたが、退營後捲土重來の勢ひを以て、専心興業界の刷新と淺草の發展に向つて不斷の努力を續けて行つた。當時淺草の常設館でも畫間興業のみであつたのを、特に夜間をも興業せしめるとか、或は休日をも廢して無休興業に改め、若くは一流の俳優を淺草に迎へて時代に順應せる藝術的興業に改めしむる等、氏が淺草開發の爲に奮したる功績は實に枚擧に遑のない程である。之が爲め氏は昨年まで而かも十有餘年の間淺草興業組合長の榮職にあつた程で、先年組合長を辭する際にも組合員は氏の功勞を多とし、特に金時計を贈つた程だと云ふ。氏は現に常盤興業株式會社創立以來引續き取締役として隱然斯界に一大勢力を把持してゐる。資性剛毅仁侠の血に燃ゆる實行家で、榮子夫人との間に三女あり、何れも他家に嫁してゐる。

植松七九郎

明治二十一年十一月三日生
東京市外灘谷町松濤
電話青山三九五七番

我が國醫界の進歩は將に獨逸國を凌ぐ有様で、學壇は大家相ついで出で絢爛咲亂れた花の如き感がある。就中現慶應義塾大學教授植松七九郎氏の如きは其の尤たるものであらう。即ち氏は精神科のオーソリティーとして我れ人共に容す人で、刀圭界切つての國手としてすでに折り紙をつけられて居る。出身地は長野縣諏訪郡本郷村、植松九郎氏の二次で諏訪中學卒業後東京第一高等學校を出で、帝國大學醫學部に修業して常に同窓中の秀才として光彩を放つて居た。大正四年之を卒業するや、更に専攻の精神科を研究すべく京大に於ける斯界の第一人者三浦博士に就いて親しく指導を仰ぐこと三ヶ年、大正七年洋行して米國ハーバート大學に入學し、精神科に關する一層蘊蓄をひろめて同十年卒業し、直ちに歸朝して再び三浦内科に入り、實地診療に従事する傍ら、從來の研究を綜合して論文を提出し、翌十二年には醫學博士の學位を得るに至つた。越えて同十三年には招聘を受けて慶應義塾醫科神經科助手となり、兼ねて同大學の講師として教壇に立つた。其後尙引き續いて教職に就き、目下同病院神經科を專任し病患者及び學徒の尊信を一身にあつめて居る。木々齒不惑を越ゆること僅かに二年、前途尙ほ春秋に富む。今後熱心な氏の研究と努力に依つて斯界に貢獻する處が尠くないであらう。氏は温良玉の如き學者肌の人で、殊の外研究心深く閑あれば専門の書を獵渉して倦む處なく、將來の大成に望してゐる。家庭には貞淑なる錦子夫人との間に令息俊彦君がある。

土屋好一

明治十二年七月十五日生
東京市芝區愛宕下町四ノ一番地
電話芝一四八三番

流石の江戸つ兒も先年の天災には、殆んど再起の方途に迷ひ、たゞ满目荒涼たる燒土を眺めて徒らに嘆息するのみで、全財産をあげて灰燼に委した中産階級以下の人々は如何にして住宅を建設するか、殆んど其の術を知らなかつたのである。此の秋に當り之等の急を救ふべく、第一線に立つて活躍したのが即ち建築信用組合で、其中心人物は誰あらう、我が土屋好一氏である。氏は長野縣東筑摩郡新村の出身で、松本中學を卒業後直に東上して早稻田大學政治經濟科に學んだが、中途不幸にして眼病に罹り、爲に學を退く餘儀なきに至つた。然し堅固なる意志の所有たる氏は毫も之に屈する色なく、岡田氏の許を訪ふて靜座法を試みる等各種の治療に心血を濺いだ甲斐あつて、さしもの難病をして遂に根治するに至つた。かうして一度健康を恢復するや氏は、大正九年八月同志と共に前記の建築信用組合を組織して更生の途を拓き、七分五厘の低利を以て十ヶ月賦償還の方法を立て、一般市民のために多大の便益を供するに至つた。たゞく、大震災に見舞はるゝや、氏は率先して之が利用の途を講じ業績大に擧つた。氏は現に之が専務理事として事務に精進しつゝあるが、同組合は内務大藏兩省及び東京府等の後援もあり、府下二百七十組合中最も堅實なる營業方針と、内容の充實とを以て斯界に頭角を抽んでゐる。氏人と爲り高潔にして襟度廣く、殊に公共博愛の念と、愛郷心に富み、村基金及び公會堂建設費を寄附して出身地の發展に資する等、その篤行は二三にして止まらないと云ふ。氏の令弟觀一氏は郷里新村々長として名望が高い。

藤森良藏

明治十五年七月十五日生
東京市外巢鴨町二二七二番地
電話大塚二四三九番

考へ方の藤森良藏氏と云へば全國の學徒から恰も慈父の如く、多大の尊敬と、親しみを以て迎へられてゐる。氏は長野縣上諏訪町、諏訪藩士藤森良知氏の長男として生れ、透徹せる氏の頭腦にも比すべき、諏訪の名湖を見て育つて来た。夙に村校を抜群の成績で卒業し當時彼の音楽家牛山充氏文學者茅野儀太郎、天文學者藤原咲平氏等と共に同窓の四天王として並び稱せられたものであつた。次で諏訪中學に入學し、轉じて長野師範に學んだが、中途上京して東京物理學校に入學し、専ら雪の功を積んだ。かくて明治三十六年優秀なる成績を以て卒業するや、直ちに中等教員として郷里長野縣に赴任し、長野商業に教鞭を執るに至つたが、其後各校に奉職して只管數學教授の経験を積んで行つた。此の間に於て氏は各中等學生が最も頭腦を悩ます數學を緩和すべく、良書を提供せんものと務に之が研究に着手し、遂に苦心の結果彼の考へ方解き方の一書を世に公にするに至つた。而して同書一度世に出づるや、教師學生間殊に受験生等は恰も大旱に雲霓を視るが如く、忽ち好評を博し、一躍して天下に其の名を轟かせるに至つた。其後幾時もなく多數學徒の希望の存する所を察して神田一つ橋に日土講習會を開き、晝夜熱心に受験生を指導して多數學徒から慈父の如く仰がれて居る。其の明晰なる頭腦は凝つて彼の一書となつたが、殊に日常の指導振りに於いて天才的理智の閃きを見せ明日の發展を期待されてゐる。資性温雅貞順な勝子夫人との間には目下物理學校在學中の良夫君があり、外に四男一女がある。

島田廣

明治二十二年十月十六日生
東京市麻布區北新門前町十番地
電話青山五九五三番

都人士に好んで嗜好される名物更科の蕎麥の花咲く信州更級郡中津村は東都刀圭界の香宿島田廣氏の懐しい産土の地である。博士は島田半藏氏の次男で、郷里中津の高等小學校を卒業後、飯山中學校に入學し、明治四十年修了した。後笈を負ふて大阪に出で、大阪醫科大學豫科に學び、中途病を得て一時休學するの餘儀なきに至つたが、後健康を恢復して再び復校し大正六年優秀なる成績を以て卒業した。後直に選ばれて母校附屬病院の助手となり熱心に働いて居たが、後轉じて大阪赤十字病院産科婦人科に勤務し、數年の間實地経験を積んで行つた。かくて學殖經驗共に備はるに及び大正十年獨力を以て外科及び婦人科病院を大阪市内に開設すると共に、傍ら京都帝國大學泌尿科及び産科婦人科に於て實地研究に耽ること四星霜、大正十五年七月「高張葡萄糖液注射の實驗的研究」外十二篇の長論文を提出して醫學博士の學位を得たに全く多年の宿望を達したのであつた。昭和二年の春、上京して、新に牛込區岩戸町に病院を設け、其最も得意とする産科婦人科を専門に開業するに至つた。爾來日を追ふて隆盛に赴き、遂に病室の狹隘を感ずるに及んだ結果、本院を麻布區新門前河原町に新築し、舊岩戸町を分院として兩々兼ね營み、一路幸運を辿つてゐる。氏人となり忠直、内に溢るゝばかりの温情を湛へ、對者をして自ら敬愛の念を生ぜしむ。野球に興味を有し、閑あれば讀書に目をさらして實力を養つてゐると云ふ。夫人をよしと云ひ、才色兼備の佳人である。

福島眞澄

明治十八年一月二十九日生
荏原郡品川町南品川九一九
電話高輪 四四五九番

都下土木建築界に頭角を抽で、噴々たる名聲を放つと共に、自治制の參畫者として同志の間に重きをなして居る品川町々會議員福島眞澄氏は、福井縣丸岡町の人、少時上京して東京正則英語學校に學び、次で築地工手學校に轉じて同校建築科の課程を修了し、明治三十八年警視廳建築技手として設計監督に當ること數年、後職を退いて東京人造肥料株式會社に技手兼書記として入社し、會社の建築主任として本社及各工場の建築事務を總轄し果進して技師に進み、同社のために盡瘁する所なく寄與甚だ見るべきものがあつた。大正十一年鑑みる處あつて職を辭し獨力を以て福島工務所を麹町區下二番町十番地に設け、専ら土木建築設計の請負業を開始するに至つた。爾來氏は誠實を旨とし、工事の如きも力めて正確に、多年銀へた手腕を揮つて事に當つた爲、工事毎に信用も加はり業務も次第に擴張し今日では押しも押されぬ立派な請負業者として斯界に重きをなすに至つた。一方氏は深く思ひを自治の進展に致し現に品川町の町會議員として町政に參與し理想的な自治の實現に向つて努力すると共に現在の普通教育制度に懐かず、教育の機會均等を絶叫して義務教育費國庫負擔を提唱し更に現時の小學校高等科を改善して最新獨逸式の制度に改め一面産業の振興に資すると共に國家總動員に備へしめんとす如き持論を有し中々高邁な識見を持つて居る。氏は潤達度量と云ふ性格の人で、所信を奉ずる事堅く續々たる情實や利害にかられて節を二にする様な事は断じてなく、高潔な人格者として衆に景仰されて居る。夫人との間に二男一女がある。

古市愿

慶應元年十月二十五日生
荏原郡品川町二日五市市一九〇
電話高輪 四四〇六番



氏は熊本縣菊地郡田島村の出身である。そのかみの南朝の忠臣菊地氏一門が、立籠つて給職を嗣したのには、この氏の故里附近一帯の地であつたといふ。この南朝熱情の里に生れた氏が、上京したのは明治四十年頃だ。若い頃から事業慾に燃えてゐた氏は、故里に在つて已に煉瓦製造業を營み、更に進んで耐火煉瓦製造を試みたが、餘りに時代に進みすぎてゐたがため忽ち一敗地にまみれたので、その創業を癒すため捲土重來の決心を抱いて上京した譯である。すると偶々あの著名な東京瓦斯株式會社試験所長内藤博士より、懇々と瓦斯火器用耐火煉瓦の製作を勸説されたので、氏は大いに發憤し國産獎勵輸入防遏の目的で、その製作に着手し苦心慘僧の結果遂に之に成功した。所が翌四十一年には、早くもその製品は全國の瓦斯會社から注文殺到と云ふ状態で見ると、氏の製品は遠く海外にまで輸出せられ、わが産業界のため萬丈の氣を吐くやうになつたのである。その後更に電爐用耐火煉瓦や諸種の高級な耐熱器の製作を開始するやうになると、より一層の聲價を收めるに至り、大正十三年度の如きは東京瓦斯會社の注文のみでも、應じきれないと云ふ盛況を呈した。あの震災の際には工場全部を破壊されたけれど、氏はこれを單に天與の試金石であるとなし、一層の努力を拂つたので隣りに掘り戻し今日では却つて工場を増設するの好況を示してゐる。夫人いと子との間に一男一女があり、長男庸一君は明治學院高等部の出身で、父君の事業を輔け若い實業家として囑望せられてゐる。

小池 勇 一 郎

明治二十年四月生
本郷區林町一五二

氏の出身地は巢鴨町である。そして現住所には大正五年以來居住してゐる。青少年時代は學序を経て現東洋大學の前身である、哲學館に學んで國語・漢文のエッセンスを修得し、更にあの命名あつた境野黄洋先生に師事して印度哲學の蘊奥を極めたものである。世を擧げてエキゾチックな學理に陶酔する時、東洋人としての正しい見識を失はず、その東洋人の唯一の矜持である印度哲學に興味を見出したことは、氏の人間としての深さを示してゐるはずまいか。社會に乗り出してからの氏は、單に一學究としては終らずにその事業家風な色彩を、段々に濃厚に染め出して行つた。まづ氏は今より十年以前に、長野縣下の免租地を利用することに想到し、高井郡の荒蕪地に杞柳栽培を試みた。ところが元來杞柳は如何なる荒蕪地にも成長するものだから、豫期の如くに非常な好成绩を擧げるやうになり、今では六町歩を所有するに至つた。そればかりか長野縣特産物として知られるやうになつたのは、偏に氏の功績だと云ふことが出来る。かくて家産をなすに至つた氏は、今では多くの地所と家作を有して、林町有数の勢力家となつた次第である。一方氏の仁俠的な性格は町民の畏敬するところとなつて、林町東部會常任幹事に推され、町民自治のため萬全の策を講じてゐると共に十四年度の國勢調査、市勢調査、失業調査等には何れもその委員に任命せられた程であつた。趣味としては書畫骨董品を愛し、謡曲では梅若流をよくしてゐること。家庭には夫人との間に二男一女の外に伯母君が在つて、和氣霽々としてゐる。

寺 田 六 郎

明治十年五月生
府下東中野一七二〇

由來文化は都市の記録である、とは文明批評家の言葉だ。エジプトの文明も、チグリス、ユウフラット兩河岸に發達した都會文明だつた。羅馬文明亦然りだとすればわが國の最高文明を代表するものはわが東京の文化でなければならぬ。この意味に於て東京の整備は國民として等閑視してはならぬ急務だ。特にあの大地震には東京の美観は勿論萬般の秩序は殆んど崩壊されつくした。で區劃整理そのものは、東都復興上第一の目でも云ふべき急務である。この大任を帯びて同整理局第二課課長として、日本橋神田、麴町の一部、本所、下谷、淺草諸區の區劃整理を擔當し、非凡の才腕をふるつてゐるわが寺田六郎氏は、土木課長の要職をも兼ねて眞に卑日なしと云ふ大忙ぶりである。大帝都の復興は實に氏に負ふところが甚大であること云へやう。氏が東京帝國大學農業土木科を卒業したのは明治三十六年のことで、それから岐阜縣、長野縣を歴任して農商務省技師に榮轉し更に大正十三年五月に東京市區劃整理局に轉じて技術課長に就任し、更に現在の第二課課長兼土木課長に榮轉したのである。一方多年の功績によつて五位勳四等に叙せられてゐる。氏は純粹な江戸つ子であつて、高等學校は仙臺のそれに學び、在學當時から秀才を以て知られたものだ。特に江戸つ子の特長である清廉潔白な氣風は萬事に處して明るい氣風氣をつくり、常に官界の師表として、多くの下僚から尊敬を拂はれてゐる。本年漸く五十歳、今後氏にまつところのものが多しことを思つて、多幸な前途を祝福しやう。



口 羽 雅 介

明治十五年二月十五日生
東京市芝區二本榎西町

山口縣の萩町は、阿武川のデルタに發達して、兩側に指月山と鶴江臺が突き出し、笠島や羽島が波に浮んで、美しい繪の町であり、また歌の町である。だが、こうした女性的の明媚な風光の反面には、澎湃たる日本海の怒濤が、絶えず岸を洗つてゐる處の、男性的な雄大さを持つてゐる。それに此地は先覺者、吉田松陰が、松下村塾に多くの子弟を薫陶して、大維新の烽火をあげた歴史上山嶺ある土地である。されば長州人の中でも、この萩生れの人々は、人をアトラクトせずにはゐない優しさ、同時に凛々しい男性的氣魄とを持つてゐる。吉田松陰がさうであり、さうした性格の持主たる軍神乃木大将がまた、萩の人である。こゝに於て、萩の町に呱呱の聲をあげた我が口羽雅介氏が、芝區城南醫師會の役員として儕輩に重きをなし、多くの患者から敬慕されてゐるのも當然の事だと云へやう。學序を追つて、萩中學校を卒業すると共に將來醫界に身を立んとし、上京して慈惠大學に學んだ、明治四十二年優秀な成績をおさめて同校を卒へるや、直ちに職を高輪病院に奉じ、雄々しくも實社會に第一歩を踏み出したのであつた。爾來同院に精勵すること實に十星霜、大正七年遂に現在地に獨立して醫院を開業するに至つたが、卓絶した技能と、氏の優れた人格とは忽ち多大の信用を博し、現在では、殆んど寧日のなき多忙を極めてゐる。氏人となり快活にして思慮圓熟し、義の爲人の爲には鼎鑊の苦も敢えて辭せざる男性的氣魄と、仁俠の持主である。家庭には麻子夫人との間に正雄、次郎君の二男雅乃百合子嬢の二女があり、極めて圓滿である。

加 藤 靖 一

明治廿三年八月六日生
東京市日本橋區本小田原町十六

那須、赤城、榛名、妙義の連山が起伏する三國山脈は、峨々として西北に横つてゐる。那珂、利根、隅田がゆるやかに注ぐところ、其處には澎湃たる太平洋の怒濤が押し寄せてゐる。廣漠たる關東平野には、實に大空の様な、大海原の様な雄大さが漲つて居る。環境は人を生むとか、山來關東人が、關西人や奥羽の人々に見る事の出来ない大きな度量を持つてゐるのも、こうした自然に恵まれたものと云へやう。また關東人の誇りである仁俠の二字も、かの那須火山脈に教へらるゝ所が多い、だらう、殊に水の清い奥多摩川に呱呱の聲をあげた人々には、美しい人情味をもつた人が多い。醫者として近隣の人々から敬慕されてゐる我が加藤靖一氏は、南多摩川郡の鶴川村に生れた、美しい性格の所有者である。學序を追つて、早稲田中學校を卒業するや、氏は將來刀圭界に驥足を延べんとし、次いで慈惠大學に學び、優秀の成績をおさめて同校を卒業したのは大正七年の春であつた。後直ちに母校の附屬病院に内科の助手となつて實地研究に身を委ねること二ヶ年間、而かも氏の英材は忽ち認められ抜擢せられて福島縣湯本病院長に推され、更に大正十一年麹町病院副院長となり、柳川博士をたすけて格別の譽が高かつた。かくて大正十四年、日本橋本小田原町十六番地に内科専門の醫院を開業するに至つたが、明哲なる頭腦深遠なる學識卓絶した技能は、氏の美しい性格と相俟つて日に日に隆盛を極め一路幸運を辿つてゐる。氏は明るい性格の所有者で、趣味としては運動を好み、家庭には、靜子夫人との間に一男一女あり、鬢々たる和氣が漂つてゐる。



吉田 忠次郎

明治十六年五月五日生
東京市淺草區高原町十二

町會長として、土地の人から慈父の如く崇敬されてゐる人に、我が吉田忠次郎氏がある。氏は淺草高野町の町會長たる外に、方面委員會計、區劃整理委員、東京金物同業組合顧問、建築復興信用組合理事、田原小學校保護者會幹事、在郷軍人名譽會員等幾多の公職に擧げられてゐるのを見て、氏が公共の事に志篤く、如何に公務の爲熱心なるかを想像することが出来る。嶮々たる秩父連山を背負つて、廣漠たる關東平野にのぞんでゐる埼玉縣の川越市は、氏が夢寐だにも忘れ得ない搖籃の地であつて、家は代々川越藩士として知られてゐた。嚴父は新平と云つて金物業を經營し、氏はその四男として呱呱の聲を擧げたのであつた。幼にして櫻井塾に入り、漢學、英語、柔道等を學んだが、明治三十三年、青雲の志を抱いて、單身上京し、赤坂區青山北町の金物商、小宮彌平氏の下に寄寓して、金物商としての修業を續けて行つた、かくて三ヶ年の後、即ち明治三十六年四月、現住所たる淺草區高野町に金物商を開業し日夜寢食を忘れて奮闘した結果、家運頓に榮え其の後、幾許もなくして川越市に支店を設けるに至つた。以來業務日に榮え、信用月に加り目下同業者間に嶄然頭角をぬきんでゐる。氏人となり温厚にして襟度廣く而かも内に仁侠の氣を湛え繁務の傍ら、土地有志の中堅となつて、町内の共存共榮、町民の親睦和合のために精進して倦む處がない。家庭には、糟糠の妻せん子夫人との間に、中央商業卒業の榮枝君、小學校在學中の邦男君の外、府立第一高女在學中の花子嬢があり、至つて圓滿である。

久保田 規美之亮

明治十六年九月九日生
東京市芝區早町五一

スイスの國が、歐洲唯一の仙境として謳はれてゐるのは、精巧なる貴金屬細工の産地であるがためではない。スイスの國が、絢爛たる美術品をプロダクトするに相應しい、山紫水明の自然に恵まれてゐるからである。されば、甲斐の國山梨縣の誇りは、甲州葡萄酒や水晶細工であるよりも、寧ろ峯巒重疊として、積翠瀟らばかりの甲州連山と、水晶細工にも勝る透明な清流ではあるまいか。富士山や富士川は云ふまでもない。一步に一景、十歩に十景殆んど送迎の途がない、かの昇仙峽も、他國には見る事の出来ない甲州の誇りである。環境は人を生むとか、こうした大自然の懷ろに生れた山梨縣人の多くが、高潔な人格と美しい人情味の持主であるのは、寧ろ當然だと云ふべきであらう。甲斐の國の中央、甲府盆地の東八代郡英村に生れた我が久保田規美之亮氏は、甲州人の美點を多分に持つた人格者である。夙に青雲の志を抱いて上京し、各塾舎に、漢學、英語、數學等を學んだが、將來醫を以つて立たんと思ひ、慈惠醫學校に入學した。然し性來明晰なる頭腦の持主たる氏は級中常に異形を放ち、在學中己に醫師の免許を得て、大に其前途を囑望せられたものであつた。かくて明治四十一年精力を以て現住所に醫業を開始するに至つたが、患者に對する懇切なる取扱ひ振り、稀に見る其蘊蓄とは忽ち信用を博し頗る隆盛を極めてゐる。氏人となり温良玉の如く、内に一片仁侠の義氣を存し親しむべく敬すべき人格者である。家庭にはきく子夫人との間に亮治、正規の二男及び美代、喜代子の二女があつて圓滿である。

船津 新四郎

明治十七年五月五日生
府下入新井町新井宿一、二、三

復興事業局庶務課長正七位船津新四郎氏は、靜岡縣加茂郡中川村船田に生れた。夙に教育家たらんとして靜岡縣師範學校に入り、明治三十九年卒業するや、直ちに加茂郡小學校に教鞭をとり、次第に累進して校長となり、在職十ヶ年餘にして仁科村立小學校を最後として教員生活を止め、大正五年八月同縣下引佐郡に入り郡視學となつた。大正七年二月には榮轉して靜岡縣屬となり在職四年、其の間縣の行政及び教育に對して大いに貢獻する處があつた。後大正十一年六月靜岡縣藤原郡長となり、次いで藤原郡長となるに及んで、同郡の爲に縣立藤原中學校建設の懸案を立て、又清水市制施行の衝に當り、その實施を見るに至らず、十三年には磐田郡長となつたが氏の功は報ひられて今は中學は設立せられ清水は市制を施行されるに至つた。大正十三年五月功勞に依り日本赤十字社特別社員に列せられ、又十月には高等官六等となり正七位に叙せられた。かくて大正十三年十一月上京して東京市吏員となり、復興總務部に勤務して、區劃整理、道路、橋梁、運河、學校、公園、電氣事業等に關する連絡事務に従事し、非常なる功績をたてた。後大正十五年六月社會局庶務課長に同年十二月現職に榮轉して今日に至つてゐる。心を持する公正、身を保つ清淨、而かも年と共に才識圓熟し其敦厚なる資質と相俟つて信望を高めてゐる。趣味を弓術に持ち、百田流の免許を受けた程の達人であると。家庭には母堂きみ子(八十歳)夫人りつ子(四十一歳)長男忠夫(東京市立第一中學校在學中)二男忠司、三男忠正(各新井尋常小學校在學中)二女若子(七歳)四男忠(四歳)等がある。

坂本 寅吉

明治二十年生
大塚坂下町一七七



家業に全生命を打ち込むと云ふ事は、富國と云ふ立場から見ると、經濟的に相當重大なる事ではあるが、併しそれは物質的にのみ生きる事を知つて精神的方面を閉却した輩のみ進み得る路である。本當に生きると云ふ事から見る時は、この精神的に生きるか否かに依つて決定せられなければならない。殊に社會公共の爲に全生命を投げ出し得ると云ふ人に至つては、人間生活と云ふ意味を最もよく體得したと云はなければならぬ。わが坂本寅吉氏が、常に社會公共の事に意を盡き、孜孜として倦まざるが如きはその好問の例ではあるまいか。氏は加賀の生れで、上京當時は早稲田の地にあつて腰辨としての生活をしてゐたが、酒類商に進む事の有利なるを知るや、大正元年大塚坂下町に同商を始めた。その當時の坂下町と云へば、全く田舎町にも劣る程の場末町の淋しい處であつたが、次第に發展すると共に氏の家業も伸張して來た。かくて相當の恒産を得る様になつた氏は、生來の趣味たる政治運動に意を注ぎ、現在に於ては一方の急先鋒として、相當の勢力を見せてゐる。而も清廉の氏は仰々しく役名を誇り、功績を鼻に掛けられたが、いつも固辭して受け入れず、却つてその陰にあつて町の爲に働いてゐる。殊に震災直後の町への貢獻の如きは、熱烈及ぶものない程で町民の感謝の的となつてゐる。併し氏は「働きて得る人が働くのは當然だ」といつて豪も誇らない。以つて其一斑を察し得よう、家庭には夫人との間に長男武男君二男録櫻君三男泰廣君がある。



西川武雄

明治二十四年九月十日生
府下井荻町上荻窪五七五

五十三次の宿場で知られ殊に日本武尊が向火で賊徒を討滅し給ふたその名も徳津町は氏の故山である。土地の中學校を了して間もない二十二歳の身を提げて東京市の雇員として始めて經理課に入つた。それは市役所勤務の振出しで更に明治四十五年のことであつた。當時は市區改正事務の山なす書類の整理に携つたが、次で地理課に轉じ、公園設置改良等の事務を分掌すること三ヶ年にして更に經理課に移り會計事務に執筆することになつた。大正十一年總務部の前身たる調査課に掛長の椅子を占め復興計畫に依る區別整理事業に従事して大に手腕を振つたものだ。大正十三年職制變更と共に總務部に轉じ、同十五年更に復興局事務局に主事として歴任し現在に至つて居る。勤績實に十有六年に亘りて其盡瘁する所少くない又事務の精進を以つては他に譲らない人である。敦厚な性を恭順な質、對談する人をして平和な寛ろぎを覚えしめる性格は廣く掛員一般にも敬愛されて居る。稠密な注意と盡きる所のない精力とは自然事務方面には鮮かな手腕を見せ而も督勵と愛撫と相俟つて統御よろしきを得て居る所に氏の特異性の躍如たるものがある臨時急設された復興事業は多岐繁雜而も其の悉くは機宜の施設を要し、艱難的な仕事でない所に當局者の人知れぬ苦心と努力とを要する事は勿論で況んや頭腦を要する總務部に就ては言をまたない市民生活の直接利害關係を支配することとなり東京市の將來を卜する重責を擔つて居ることを見ても如何に氏が絶大の努力を傾注しつゝあるか察せられる家庭にはみつ子夫人との間に二男一女あつて平和な氣分がみちてゐる。

推橋孝治

明治十七年生
府下矢口村矢口七四三

目黒蒲田電車の新田神社停留所前に、此の界限には稀に見る、大きな瀬戸物商がある。それは矢口村々會議員推橋孝治氏の經營に掛る商店である。氏は家は代々新田神社の南方近くの地に住し、農を以つて累代の家業としてゐた。氏も又農家の子として其處に生れ、早くより田畑に出で、父を助けて農事にいそしんでゐた。かくて大正十二年目黒蒲田電車の開通し、近くに新田神社停留所の設置せらるゝや、機を見るに敏なる氏は、此の附近は商業に於て將來發展すべきを觀破し、いち早くも停留所前の目抜き場の所に、瀬戸物商を撰んで店舗を開いた。ところが從來秘められてゐた氏の才能は、商業に身を入れるや忽ちその手腕に現れ、恰も商業に對する先天的才能の持主であるかの如く發揮された。氏は先づ薄利多賣主義をモットーとして、確實なる商品の提供に重きを置き、又仕入先は直接原産地に求めて、仲買商の手に入る利を省いて、需用者に供給したので、忽ちにして店頭市をなすの盛況に達し、可成遠隔の地より信用と薄利を辿つて、當店に吸ひ寄せられる華客があると云ふ。而も此の附近には瀬戸物屋がない爲、氏が世間並の商人であつたとしたなら、暴利をむさぼる事はいと安き事であるが、目前の利に目を止めず、百年の計を立てる處に、氏の非凡なる商業の手腕は窺れる。又それは、此商業道徳上に現れた氏の人格である。氏は又六年以前より村會議員を續け、その他調査委員として、村の爲に盡してゐる。夫人との間に不孝子なきも、家庭は羨むばかりの愛の光に満されてゐる。

山川金藏

明治二十六年二月十二日生
東京府下蒲田町字御園三一

一人の超人「スパアマン」を造るためには多數の人が、其の踏臺とならなければならぬといふ、ニイチエは言つてゐる。そして其處に優秀の競争があるのだといふ。まこと、人の長たるべき人は多くの人と闘ひ、そして多くの人に勝つた、奮闘の人でなければならぬ。三百八十餘戸を擁する蒲田第十九區の區長たる我が山川金藏氏が實にさうした奮闘努力の人で、榮ある成功者である。氏は神奈川縣橋本郡日吉村宇鹿島田の農家に二男として呱呱の聲を擧げたが、大正二年に至るまで致々として鋤鋤に親しんだものだ。かくて現蒲田町々會議員たる西山米吉氏方へ寄寓して、忍苦の修業を續けること六ヶ年、即ち大正八年に及んで同家を辭し、現住所たる蒲田町御園に白米商を獨立開業するに至つた。氏が獨立してからの奮闘は實に素晴らしいもので、家業はみるゝ幸運の一路を辿つて隆盛に赴き、昭和二年には、堂々たる店舗を新築更に大正十五年の暮には大森町城南女學校通り鶴渡しに支店を開設する等店を日を追ふていやはや上にも發展して行つた。氏はこうして粉骨碎身家業に精勵する傍ら公共のために東奔西走し大正十四年區制施行と共に推されて區長代理となり、更に昭和二年區長に選み今日に及んでゐる。此の外氏は現に東京白米同業組合原那六ノ部乙の會計、耕地整理組員、御園衛生組理事等の榮職に擧げられ又大正十五年別に町の商業振興と消費者の利便を目的とした女團會を創設し、昭和三年女團會々長に推され信望を一身に集めてゐる。氏資性濃厚人格高潔、家庭にはかつ子夫人との間に一男一女がある。

鳩山春子女史

文久元年三月生
東京市小石川區音羽町七ノ十

日本の孟母、良妻賢母女性の典型として世の聲望を一身にあつめて居る鳩山春子女史は長野縣下の出身で、松本市が生んだ偉人である。明治七年四月文部省直轄竹橋女學校を首席で出で、御茶水女高師別科英學科に學び米ハミセスワイコツプに英語を、中村元起氏に漢學を學び、十一年七月首席で卒業するや直に同校本科二年に入り十二年五月フキラデルヒヤ女子師範に入り、中途御茶水女高師に轉じて十四年終了、同年同校教授となつた同一年鳩山家に嫁し十七年六月東京女子師範學校御園を被仰付、同二十一年ミスブリンズ姉妹主唱のもとに婦人質問會を組織し、二十八年小澤俊夫氏等と共に大日本女學會を起し、小松宮彰仁親王妃殿下を奉戴して鍋島侯夫人を會長に其他名流夫人と協力して高等女學校通信教授を開始し、同十九年三月宮川保全氏と共立女子職業學校を創立し、同三十一年婦人讀書會を始めとし各種婦人團體を組織して貢獻し、大正十一年十二月共立女子職業學校長に擧げられた。十四年下田、吉岡、嘉悦諸女史と共に少年保護婦人協會を創立し、同年日本教育協會に推舉され、此の他主なる公職に、愛國婦人會理事、大日本婦人衛生會理事、大日本婦人教育會理事、婦人修養俱樂部理事、生活改善同盟會評議員、日本安全協會評議員、東洋婦人會評議員、花の日會評議員、東京ウイメンズ俱樂部會員、義務財團海防義會婦人部委員等がある。著書に、婦人の修養、模範家庭、我が子教育、家政の巻、婦人改善等があり、大正十三年功に依つて勳六等瑞寶章を賜つた。良人は明治政界の大立物、令息は兄弟揃つて秀才を誦はれ、長男一郎氏は現内閣書記官長、二男秀夫氏は法學博士民法の大家である。

伊藤武七郎

明治元年六月四日生
東京府下荏原町下蛇窪三五〇

「チヨイチ・アンカチルの諷刺小説『悪魔の指揮する舞踏會』には、無数の善男善女が、樂長に化けた悪魔の指揮するオーケストラに魅惑されて、踊り狂ひながらたあひもなく奈落の底へと落ち込んでゆく事が書かれてある。これは勿論、享樂の渦巻く紅燈酒池の世界を描いたものであらうが、また其處に、今日の政治の世界を見出す事が出来るだらう。即ち革新とか改造とか、また庸正とかの轟惑的な言葉で、徒らに國民や市民を奮躍させながら、自己利潤の追求を第一の要旨としてゐる今日の政治も、サタンによつて奏せられるトーンであり、テムポであり、リズムではないだらうかけれども其の暗黒な裡に寶玉の如き我が伊藤武七郎氏の存在を見のがす事は出来ない。釋迦の慈悲、孔子の仁、キリストの愛に一致するところの、人類至高の愛他的利他的イデオロギーをもつて政治の公道を猛進してゐる氏こそ、まことに明るき政治への曉鐘をつくものだらう。氏は東京府の人、伊藤受房氏の二男として明治元年六月四日呱呱の聲をあげたが、嚴父の逝去によつて、家督を相続したのは大正六年の五月であつた。かくて氏は先代のを承けて、東京府下平塚界隈の大地主となり、常によき地主として其の信望を高め、崇敬をあつめ令名をはせていつたのである。現在東京府會議員及び平塚町々會議員として、公共のために日夜奔走し、府會では十日會に屬し、重きをなしてゐる。氏はまた田園興業株式會社の取締役をつとめてゐる。家庭にはしげり夫人との間に、貞子、常子、和子、安子嬢あり、霽々たる常春の和氣が漲つてゐる。

片倉兼太郎

文久二年十二月生
東京市神田區駿河臺袋町十一

氏は人も知る片倉組の頭業である。諏訪郡川岸村の長野縣下でも最も生糸の産額高を示して居る地方に生を享けて居るのも偶然ではなく、縣下の蠶業の發達、延いては我が國製糸業の一大發達をいたした實際的功勞者として没することは出来ない一人である。父君は片倉市助氏と云ひ、其の四男で、明治十年先代兼太郎氏の養嗣子となつて大正六年家督を繼承するに及んで前名の佐一を改めて兼名して居る。現在我が國最大の製糸會社片倉製糸紡績會社社長として東西の全土にわたつて工場を設けて居る。同社の采配を振ると共に、日本紡績會社社長をも兼ねて紡績業界の第一人者と見なされて居る。外に天龍川船渠運送株式會社に社長の椅子を占め、十九銀行、高島鐵道、片倉殖産等の諸會社各取締役として重大なる社務に參畫する外、長野貯蓄銀行監査役、片倉合名會社代表社員、片倉生命會社顧問等に推される等地方産業の開發、公共事業の施設等實際に奉仕寄與する所の功績甚だ多く、縣下の公人として事業家として最も重んぜらるゝ一人である。氏はかく財界に不拔の實力を扶植して居るのみならず、東都に於ても今や重きを以て遇せられて居る。一門には今井五介氏あり、猶令甥に當る今井眞平氏は松本銀行の頭取たり片倉製糸紡績の常務取締役等々一方の顯者である。ことに令室との間には、三男二女があつて、長男の修一氏は富國火災海上保險の社長、二男萬平三男耕介兩氏は各分家し、二女かづ子は日本絹紡績片倉三平氏の夫人である。

松岡鐵五郎

明治三年四月十二日生
府下寺島町四〇〇番
電話墨田一四五〇五番

ゴム工業界に嶄新な製作品を以て頗る好評を博して居る小島ゴム工業株式會社の社長の椅子を占め、經營の全體に涉つて采配を振つて居る人こそ松岡鐵五郎氏である。嘗て化學者に依つて唱へられて來たゴム時代は已に展開され、斯業者の努力と創意とによつてゴムの應用が各種の既製調度を征服して行き、その用途は今後那邊に展開されるか豫測されない状態となつて來た。氏は此點に於て實に偉大なる貢獻者であつて、近來の重大問題たる性病問題に想倒して、これが豫防に腐心し、ゴムの應用をこの方面に用ひて着々實効を擧げ來つたのである。其の爲普く世に知られて居る美人印ルーデサツクは實に氏の創案であつて、本邦の鼻祖として之が製作に従事し、一舉に需用者を造つて素晴らしい發展を來し、目下同業者數十ヶ所の中、八ヶ所は悉く氏の工場より分岐したものであると云ふ獨占的繁榮振りを示し、其の年産額は實に五十萬圓に上り、近時は盛に海外にも輸出をして居る。尙同所の製品は此の外醫科用ゴム、指囊、氷囊、乳クビ、ゴム調帶等の新製品があり、枝舉に遠なき程である。明治三十六年の創業以來、擴張に次ぐに擴張を以てし、大正七年合資組織に改め、十年更に株式組織に更めて長足の發展を見るに至つたのである。氏は廣島市の出身で、土地の商業學校を卒業するや、直に上京して一時雜貨商を經營したが、後ゴム工業界の將來を洞察して轉業し、遂に今日の成功も見るに至つたのである。夫人きみ子また内助の功多、その間に一男一女をあげ、極めて圓滿な家庭を營んでゐる。



宮崎清吉

明治二十九年三月生
芝區日出町七番地
電話四四一一番

年少志を立て、上京し、徹頭徹尾流汗主義によつて自己の運命を開拓した我が宮崎清吉氏の過去の道程は、儘かに推稱に値ひするものがある。氏は千葉縣下の出身で、夙に郷里の小學校を卒業するや、燃ゆるが如き功名心は、遂に氏を驅つて東京へと來らしめたのであつた。然し少年の胸に畫いてゐた社會と現實とは、餘りに其間に隔りがあつた。而して世の憂きことの數々を克明に見せ付けらるるに及んで、少年の悲哀を泌々感したものだ。けれども氏の不退轉な勇猛心と強固なる意志とは、氏をして益々奮起せしめ、幾年か涙ぐましい程の奮闘が續けられて行つた。其内大正三年兵役に合格して近衛歩兵聯隊に入營したが、精勵克く軍務に服し、隊中模範兵として上長の愛撫を受け、上等兵に進んで滿期除隊となつた。かくて大正八年芝浦埋立地の將來有望なるを洞察し、酒及食料品の販賣店を現在の地に營み、日夜營々致々として業務の刷新に力めた結果、日に月に殷盛を極め、遂に南濱橋角に支店を設置する迄に至つたのである。氏は又同地の草分けとして土地の發展に力を注ぎ、有志と協力して日出町々會を組織し、衛生施設の完備、通橋橋梁等の完成に努力する外、在郷軍人會の組長として軍人精神の振興に力を注ぎ、或は氏子總代として神社の修理に盡瘁する等、其功績は寔に擧げて數ふべからざるものがある。殊に芝浦に於ける各種の運動には事毎に委員に擧げられ、常に第一線に立つて活動して毫も倦む處がない。資性温良玉の如く、趣味としては旅行を好み、遠く俗塵を避けて山間を跋渉し、自然の大氣に接するのを唯一の樂としてゐる。

遠藤駒之助

明治十五年四月廿五日生
府下世田ヶ谷太子堂四一番地

東京府警備第二掛長として従業員の指揮監督の任に當り、匆忙裡にあつて能く之を處理し、令名を馳せて居る人に遠藤駒之助氏がある。氏は東北福島縣双葉郡長塚村の一隅に呱呱の聲を擧げ、郷里の小學校を卒業するや直に將來育英の業に其身を献げんと欲し、同縣立師範學校に入り、螢雪の功を累ねたが、自己の特異性を知らずに及んで奮然として教職を擲ち、専ら技術方面に新生面を拓かんとして父兄に懇請する處があつた。偶々一家學つて岡山縣に轉ずるに及び、氏は同縣の工業學校に學び、同校の業を卒業するや直ちに故山福島縣廳に職を奉じ、管下の各廳舎、學校、警察、郡役所等の營造物建築方面に従事し、見るべき幾多の功績を残して更に岡山縣廳に轉じ、益々天賦の材能を發揮したが、後幾何もなくして大阪府廳を振出しに和歌山縣廳、北海道廳、神奈川縣廳等に歴任し、大正十年五月東京府に招聘せられて警備課に入り、府立各中學校の建築等に從事して益々其技を認めらるゝに至つた。目下は同課第二掛長として豊かな識見と卓越せる手腕とは衆人美望の的となり彌増に信望を高めてゐる。今や復興途上にある帝都は、多方面に別れて忙殺されて居るが、殊に同課の如き其中の尤たるもので、此の難關に直面してよく之を處理して遺憾なきを期すが如きは、蓋し氏に於て始めてなし得る事と云ふべきである。而かも温容且つ敦厚なる態度はよく吏員崇拜の的となり、圓滑に事務は進捗されて居る。氏の齡未だ四十五歳、尙洋々たる天地はその前途に開かれんとして居る。趣味亦豊富、家庭には夫人と間に三男がある。



小野 二郎

明治二十一年十月十八日生
府下中野町西町三六〇六番地

會で薩長一藩が明治人材の淵藪地であつた如く、今や東北地方が之に代り、平民宰相として其名を誦はれた故原敬を始めとし、前東京市長後藤新平子其他多くの人材を輩出するに至つた。氏はこの東北の盛岡に呱呱の聲を揚げた。幼にして學を好み、郷里の中學校を卒業するや、高等學校中最も難關とせられてゐる第一高等學校に優秀なる成績を以て入學し、學友間に大に羨まれたものだ。卒業後將來建築界の有望なるに思を馳せ東京帝國大學建築科に入り、日夜學理の研鑽に力めて大正三年卒業するや直ちに學習院女學部の新築工事に従事し、實社會へ最初の一步を印したのであつた。當時氏は新進の工學士として而かも若やいだ血潮が胸にたぎる頃であつたから、燃ゆるが如き熱と意氣を以て大なる苦心と努力が拂はれたことは云ふ迄もない。後招かれて會根中條事務所に入り、各種の建築事務に執筆して鮮かな手腕を見せてゐたが、更に轉じて朝鮮銀行警備課長に任じ、其間支店數ヶ所を新築して益々天賦の才能を發揮し、大に其前途を囑望せられたものだ。後市の建築局警備課市場設計掛長に聘せらるるに及び、専ら市場建築に携はり、以て今日に及んでゐる。今や時代の要求は市場増設の必要を促し、従つて帝都に於ける市場も年を逐ふてその數を増加しつゝあることは、市民の經濟上定に喜ぶべきことだが、之が施設は一に與つて氏の双肩にかゝつてゐるのであるから、氏の任たるや亦重いのである。因に最近完成した眞砂町市場は氏の設計監督の下に造られたもので、各方面に非常な好評を購つてゐる。夫人を靜子と云ひ、貞淑の譽が高く、



三木友七

明治二十二年五月生
東京府下入新井町不入斗三三三

峨々たる讃岐山脈を背負つて、湖水の様に波の穏かな瀬戸内海に望んでゐるのが、四國の香川縣である。環境は人を造る。こうした自然の裡に生を享けた所謂香川縣人が、重厚で理智的であると共に、半面には燃えるやうな熱情をもつてゐる。我が入新井町々會議員三木友七氏が稀に見る實行家で而かも明るい性格の持主たる事は寧ろ當然である。氏は香川縣大川郡三木松町に於ける農家の二男坊に生れた。郷費を了つた十五歳の時、前途に輝く希望を抱いてはるる、上京し、まづ深川區大和町の木村六一郎氏方に奉公し日夜營々として實直に働いたものだ。翌年木村氏が入新井町不入斗に支店を開業するに及び美馬氏と共に支店詰となつたが、後同店を譲受けて經營し、離脱として奮闘すること實に十有五年、遂に村木卸商として近隣に其の名を轟はるゝに至つた、現在氏は茨原村木商同業組合副會長茨原村木同業組合五部長の榮耀にあり、斯界の重鎮として重きをなしてゐる。氏はまた公共の志極めて篤く、繁務の傍ら、常に町政の刷新に力を注いだ結果大正十四年には、推されて町會議員に當選するに至つた。此外氏は現に同區の評議として自治の發展に涙ぐましい程の奮闘を續けてゐる。氏となり襟度廣く、而かも烈々たる犠牲的精神と大なる責任觀念を有してゐる。目下氏の使用人は十數名の多きに及んでゐるが、その何れもが慈父のやうに敬慕してゐるのを見て、氏が其半面に於て亦涙の人たるかを知り得るのである。夫人をよね子と云ひ、貞淑の譽が高い。

齋藤 又一

明治廿一年一月廿三日生
東京市外巢鴨町二、〇一八

五月雨をあつめて早し最上川、と芭蕉も歌つてゐる最上川は、三急流の一つであつて、また風水の美をもつて知られてゐる。この最上川流域には幾多の大小都會及び村落が散在し、白糸の瀧や櫻んぼと共に、それを大きな誇りとしてゐるのが、山形縣である。我が齋藤又一氏は、その山形縣長井町の人である、長井町は、附近の赤湯温泉、荒砥町と共に、坂上田村麿の戀のロマンスを傳へる阿玉櫻をはじめ、稱壽櫻、十二櫻、藥師櫻等の老木で有名な櫻の名所である。氏は郷里の小學校を卒業すると共に、この故郷をあとに、上杉氏の舊城下として知られた米澤市に出で、縣立米澤中學に學んだ。螢雪の功なるに及んで氏は將來醫をもつて立たんと思し單身を負ふて上京し、慈惠大學に學んだ。大正元年の春、優秀なる成績をおさめて同校を卒業するや、直に現住所に醫院を開業し、新銳の意氣を以て奮闘大に力めたものだ。然し性來研究心の熾烈なる氏は、傍ら東京帝國大學の入澤教室に勤務して日夜實地の研究に餘念がなかつたが、大正六年同教室を辭するに至つた。以來専心家業に精勵する處があつたが、氏の眞摯なる態度と、卓越せる技能とは、忽ち顧客の信用をいやが上に高からしめ、有數の内科醫院として、頗る繁榮を極めてゐる。氏となり襟度廣く、然かも物に對して頗る熱心で、一度意を決すれば何事も徹頭徹尾初志を貫徹せしむるに已まざる男性的氣魄と、熱を以つてゐる。眞に敬すべく親しむべき人格者たるを失はない。家庭には貞淑の譽高き千代子夫人との間に二男二女がある。

酒井熊次郎

明治二十二年十二月五日生
東京府下入新井町新井宿二六八二

入新井町名譽助役として令名ある我が酒井熊次郎氏が、多年同町の爲に致せる功績は、當然入新井町發達史の巻頭を彩るべきであらう。氏は四百年來連綿として傳はる土地の舊家に生れたが、幼にして大度あり、夙に土地の小學を卒業するや、直に開成中學に學んだが、後近衛歩兵第一聯隊に入營して、伍長勤務上等兵に進んだ。退營後、職を入新井町役場に奉じて書記となり、實社會に最初の一步を踏出したのは、實に大正元年の事であつた。爾來汝々として熱心に職務に精勵したが、氏は其後幾許もなかつた。爾來汝々として熱心に職務に精勵したが、氏は其後幾許もなかつた。爾來汝々として熱心に職務に精勵したが、氏は其後幾許もなかつた。...

肥後博

明治廿九年十月廿日生
東京市中野町六〇七

濃厚な色彩と、強烈な刺戟とを求めてやまないのが、大東京行進曲の裡に生きる人々の、生活のための生活である。されば歡樂境淺草に醸されるあの狂激なジャズは、これらの人々に、どんなに限りなき陶醉と、慰藉とを與へてゐる事か知れない、殊に帝國館のエキゾチックな情緒はどんなに近代人の先行を唯一の誇りとするモガ、モボ連を喜ばせてゐる事だらう。この帝國館の名支配人として知られてゐる人に我が肥後博氏がある。氏は明治廿九年の蕭條たる秋風が城山の樟の葉をさらりと鳴らす頃、薩南の地鹿兒島市に呱呱の聲をあげた。學序を追つて明治學院を卒へると共に海上保險株式會社に入り三ヶ年勤務したが、藝術天分の豊かな氏は永く此處に止まることを屑とせず、大正九年遂に松竹に轉じた。當時松竹は全國に常設活動寫眞館を設けて、現代劇を宣傳せる際とて、氏は地方宣傳の任務を帯び、横須賀、津等を往來して活躍してゐたが、偶々北海道に支社が設けらるゝや、選ばれて之が支社長となり縦横に其快腕を揮つたものだ。後松竹の花岡三氏と共同して静岡に常設館を設け、氏は松竹を代表して其の任に轉じた、越えて大正十三年新宿の武藏野館に入り、角間氏の信任を受けて昭和二年の五月神田シネマパレスを經營し、其の經營者たると共に帝國館支配人として卓絶せる才腕をふるつてゐる。帝國館が、またシネマパレスが映畫愛好者にとつて絶大の魅惑を與へてゐるのも當然な事と云はねばならない。氏は創始の才と統御の徳とを兼備した苦勞人である。家庭にはかす子夫人との間に葉子禎子の二嬢があり至極圓滿である。

穴原万平

明治十七年三月廿日生
淺草區八幡町五番地
電話 淺草 三五四七番

上州長臨差しといへば、昔から有名なものである、そして國定忠次のやうな大貨元の出るに及んで、遂に任侠の本場たるの名を生じたのであつた。その弱きについて強きをくちくのが男子の本領。彼等博徒の輩と雖も、こうした難に赴くことは、朝飯前のまゝごと位ひに考へられてゐたのである。後、明治の御代となるに及んで、隣縣の朽木からは、奇傑星亨を生じ横田千之助を生んだのに比べて、政界では僅かに武藤金吉位ひしか出して居らぬ。有爲轉變の世の中とはいへ、一縣一國においても、こうした盛衰の悲哀をなめねばならなかつた。今や群馬の地は、絹織物の産地として知らるゝ以外何等世に出るものなく、長臨差は唯遠い昔の語り草としてこのされてゐるに過ぎぬのである。けれども一面それらの人達のはらわたを割つて見るとき、そこには決して赤い任侠に燃える血が流れて居らぬことはない。わが穴原君を拉し來つて、こゝに一文を草する所以も亦其處にあるのである。君はもと郷里の中學校に學び、後醫業に志し、研學數年、郷里に開業してゐるが、雄心勃勃々、遂に長く故山に止まる事が出来ず、上京して現地を選んだものである、こゝに君の生活は一轉機を告げ、町事に盡瘁するところ多年、遂に居町八幡町々會長の職につくとともに、帝國軍人會淺草分會副分會長として貢獻多く、その他自ら區内少年の訓練に任ずるのみならず、日本聯合少年團理事、東京聯合少年團理事等として、後進の指導誘掖に任じ、些かも自己を顧みる所なく、區内數多の團員よりは、慈父の如く敬慕せられてゐる。亦以つて男子の本領といひ得やう。

寺岡省

明治二十三年十一月廿八日生
荏原郡品川町西廣町一一一四
電話 高輪 四六二七番

最近文明の精髓は社會事物の電化に在る。わが國も長足な電氣事業の勃興に伴つて、之に従屬する諸種の電氣材料の製造も亦異常な發達を示して來た。そして千紫萬紅を競ひ巧を争つて、業界は益々發展してゐる。その中であつて電氣絶緣材料である各種タイプの製造に従つて推賞せられてゐるのは寺岡タイプ製作所で、これ品川町の有力者寺岡省氏が經營する所である。氏は静岡縣志太郡の出身で、嚴父定吉氏が海員であつたがため、都合上氏を伴つて上京し、荏原中學校に入學せしめた。それから氏は更に中央大學經濟科に學び、傍ら逡信省に奉職して苦學力行したのである。卒業してから大正七年にフラーテノーブル會社の營業主任として入社し、大いにその手腕を揮つたが、同十二年に遂に花々しく獨立の舞臺に乗り出して現在の場所に工場を設立し、電氣絶緣材料であるメンタイプ、ゴムタイプ、コンパウンドタイプ等の製作を開始した。今では關東に於ける同種の製品の半ば以上は、氏の工場の製品であると云ふまでの盛況を呈してゐる。東京電燈、帝國電燈、静岡電力、臺灣電力等の有力な大會社を始めとして、各地の官衙諸會社に供給して異常な賞讃を購つてゐる。しかも氏の經營に對する勤勉さは、ある時は職工と共に働き共に休息、和共談笑裡に之を指揮し、また利益の一半を割いて新研究に不斷の努力を拂つてゐる等、一日として倦むところがない。調達でそして仁俠的な氏の性格は、常に從業者から慈父のやうに慕はれてゐることだ。夫人とし子との間に三男一女があり、平和な家庭愛にひたつてゐる。

榎本政吉

文久元年一月二十五日生
芝區車町四十七番地
電話 高輪 一一八五番

十九世紀末から二十世紀に互る時代は、その思想線上に於て個人的權利の獲得に狂奔して来たのであるが、その個人主義はともすると利己主義に墮落し、徒らに自己の城壁をのみ築き上げた、他人を陥穽に投げ込むのは茶飯事と心得るやうになつた。従つて麗しい相互扶助的な人情美や、他人のために盡す犠牲的な精神は地を拂はうとしてゐる。その時にあつてもわが芝區車町々會顧問榎本政吉氏のみは、常に愛他的な精神の支持者として人心の振興を計つてゐるのは稀に見る人物だと云はねばならぬ。氏は神奈川縣足柄下郡小田原の人榎本儀三郎氏の次男として生れた。父君は氏の幼年の頃に氏を同伴して上京し、土木請負業を營んでゐた。で氏も亦長じて後其の業を繼いだが、體質の魁偉と氣象の果斷さは、斯業の人の第一要件を完全に具備してゐる上に、計數的に閃く頭腦の明敏さは遂に今日の繁榮を築き上げるに至つた。山梨縣下に通ずる青梅街道、日本鐵道會社の東北線の大工事、さては馬車鐵道會社の上野品川間の工事は、氏が完成した往年の大きな請負ひであるが、今でも引續き各大會社各官廳等の請負工事に従つて、重きをなしてゐる。一方氏は思想善導の見地から、國粹會の創立に參與し、次いで大和民勞會創立にも關係した。が民勞會とは其後意見の相違から絶縁してゐるとの事。大震災の際には嗣子六郎氏と共力して、異常な活動振りを示したので、府知事、警視廳から夫々表彰された。なほ車町々會の顧問として町會の利福増進に盡す等、社會人としての功績は枚舉に遑がない。夫人との間には、三郎、六郎、政雄氏等三男がある。

安部寶作

明治十一年一月十一日生
牛込區八幡町十八番地
電話 牛込 一七一七番

靜かに民衆の心を心としてなつかしんだチエホフもお醫者さんだつた。八幡町々會長として、物優しく町民の世話をしてゐるわが安部寶作氏も又醫師なのである。勿論氏はチエホフのやうに文學はよくしないとしても、大衆の心を心として、人生の脈搏に觸れやうとする美しい人間愛に變りあう筈はない。この點に於て氏は枯淡無味な科學者ではなく、亦寂しい病理學者のそれでもない。そこに通俗な醫師を超越した醫師としての非凡な才腕があり、更に温かい人間味が溢れてゐる譯である。抑も氏は大分縣宇佐郡八幡村の出身で、郷里の中學を卒へてから熊本第五高等學校を経て東京帝國大學醫學部を卒業したのは、明治三十八年のことである。赤門を出てからも研究心に富んだ氏は、直ちに市井に飛び出やうとはせず、大學に踏み止まつてあの名醫入澤博士の内科助手として、明治四十一年まで研究室に立て籠つてゐたのだ。そこに一面學究的な氏の性格が見える。やがて充分の自信が出来た氏は、明治四十一年には現在の場所を開業して今日に至つてゐる。ところが氏の潤ひのある態度と、飽く迄も醫は仁術なりと云ふ信條とがいたく好評を博し、患者は常に門前に雜圍すると云ふ繁昌ぶりを示してゐる。で衆望は日に日に加はつて、町會長に推薦される外、牛込區醫師會幹事の要職に就いて、刀圭界に重きをなしてゐる。趣味としては書畫骨董を愛してゐるが、殊に萬事に對し滋味のある情趣を好む。夫人久子との間に二男二女があり、次男己志君は目下靜岡高等學校に學び、長子淑子嬢は三輪田高女に在學し、共に秀才である。

瀧山米太郎

明治二十一年四月一日生
東京市麹町區平河町三ノ四

氏は愛媛縣の人、瀧山丈太郎氏の長男に生れ、夙に身を實業界に投じて惡戦苦闘、遂に榮光によつて祝福されるに至つた成功者の一人である。氏は慧眼はやくも屋根材料の革命と、淺野によつてのみ製せられる人造スレートの將來を洞察して、淺野スレートの販賣に従事し、東洋唯一の淺野セメントを背景としてスタートを切つたのは大正四年の事であつた。殊に大正十二年の關東大震災に遭遇するや、忽ち非凡の才能を發揮して益々業界の信望を昂め、僅に一販賣商店に過ぎざりし合名會社瀧山商店をして、遂に淺野スレート販賣株式會社たらしむるに至つた。また淺野セメント會社より迎へられてスレート部長の要位に就き、親しく石綿工業の樞機をも把握したのであつた。十三年には大阪石綿工業株式會社を創設してスレイト界の統一を圖る等、終始一貫、東奔西走し、超人間的な奮闘をつゞけたのであつた。昭和三年九月日本ヒューム管株式會社の監査役より轉じて専務取締役となり、萎微として振はざりし同社をして、一路隆盛の過程に導いた事は、氏の絶へざる努力と共に、卓絶せる手腕を最も雄辯に物語るものである。とまれ氏は我國石綿工業發達史上逸すべからざる功勞者にして、將來すべき斯界も亦、氏に負ふ處が尠くないであらう。氏は現在淺野セメント株式會社スレート部長、淺野スレート株式會社取締役會長、日本スレート販賣株式會社専務取締役、大阪石綿工業株式會社代表取締役、日本ヒューム管株式會社専務取締役の重職に在る。

宮澤文作

明治十七年十二月二十五日生
本郷區西片町一〇番地二ノ一四
電話 小石川 六〇九〇番

都下の警察保安の大任にあたる各署長中名警察官の名を讃へられて居る宮澤文作氏は、其の出身地を長野縣北安曇郡高家村とし、宮澤今朝吉氏の長男である。二十三歳の年まで家庭に在つたが、胸中常に鬱勃たる雄志を以て充されてゐる氏は永く故郷の小天地に踏躡することは、到底氏の忍び得る處ではなかつた。明治四十年辯護士志望で上京し、翌四十一年警視廳に入り勵精恪勤する傍ら、寸暇を利用して大學法科に學び、法律學の政廳に涉頭し、上席で卒業した後累進して警部となつた。献身的な氏はかうして熱實に職責を完うして四十五年には榮轉して福島縣警察部に轉じ、大いに敏腕を鳴らしたものだ。警視廳に復歸したのは大正五年十月のことである。大に事務的才能を發揮してゐたが後轉じて警務係長となり、更に同十二年遂に澁谷警察署長に榮轉して一地方の警察全權を委ねらるゝに至つた。爾來日比谷警察署を始めとし、富坂警察署長等に歴任し、此の間幾多の問題に直面したが、常に最善の努力を傾注して事に當り、能く管内の治安を維持して、其職責を完ふし、信望の甚だ篤いものがあつた。其後更に築地警察署長となり、職に止まること多年、其間屢々管内の大移動が行はれたけれども何等身邊に危険の及ばなかつたのを見ても如何に氏が公正無私の心に富んで居るかを知らざるを得やう。現在錦町署長として其職に勵み、管内の治安、部下の操縦に多年の經驗を見せ、彈が上に信望を高めてゐる人となり温厚にして襟度廣く、殊に劍道に長じ文子夫人は貞女の聞えがあら。長男明政君は高師附屬中學在學中である。

高橋保

明治十六年八月八日生
東京府下荏原郡黒町三田五一
電話 高橋 三三二一 番

連山峽谷に富む、我が國に於て、特に水力電氣事業は最もその天恵を利
用することに於て真に有望なる事業として、明日を期待されてゐる。此の
有望なる電氣事業に對してその尊き半生を捧げて來た人に我が高橋保氏が
ある。長野縣東筑摩郡川手村は氏の懐しい播種地である。夙に松本中學
校を卒業して第三高等學校に進み、次いで京都帝國大學工科電氣科に學ん
だ。爾來同校に於て電氣學の蘊奥を究め、明治四十二年遂に芽出度同校を
卒業して工學士となり、實際社會に一步を踏み出したのであつた。即ち故
初郷里に近き伊那電氣株式會社に勤務したが、後幾許もなく拔擢せられて
技師長となるに至つた。越えて同四十四年長野電燈會社に技師長として聘
せられたが、若くして其の技術の優秀と頭腦の明晰とを以て社内信望を
博し、大正八年遂に推されて取締役となり、同社經營の衝に當ることにな
つた。此の間氏は更に布引電氣軌道、梓川電力、千曲川電力等の諸電氣會
社の創立のために力を注ぎ、設立後は推されて之が重役となり、深遠なる
學殖、偉大なる抱擁力、實際的手腕等を以て令名を馳せてゐたが、現在で
は東信電氣會社理事として斯界に重きをなしてゐる。氏はかくの如く技術
家であると共に事業家として多大なる力量を備へ關係方面からの信憑は頗
る厚い。父君澄彌氏母堂みよ子の兩親家庭にあり長野高女出身の牧茂助氏
三女むつ子を夫人としその間に貞子嬢がある。

天沼藤太郎

明治三年八月十七日生
東京市芝區櫻田太左衛門町七

古來幾多の成功者が歩み來つた過去の道程を見ると、其處には不退轉な
努力と、鐵石の如き鞏固なる意志の力を見逃がす事は出來ぬ。我が天沼藤
太郎氏が、苦難な逆境の裡に、絶えざる惡戰苦闘を續けて、遂に今日の成
功を獲得したのは、氏が亦、こうした稀に見る不退轉な努力と、鞏固な意
志の所有者である事を如實に物語るものである。氏は埼玉縣の人、北埼玉
郡須賀村をその懐しい播種地として、明治三年八月十七日呱呱の聲を擧
げたのであつた。生家は豪農として近隣に其名を轟はれ、氏は其二男とし
て幸福な幼年時代を送つて來た。長ずるに及び、青春の血漲る氏の胸には
奮勃としてアンビションが萌え出し、遂に帝都に出で、印刷界の巨星たる
秀英社に入つたのであつた。これ氏が奮闘史の第一頁で、以來日夜粉骨碎
身の努力をした甲斐あつて、其後幾許もなく拔擢せられて鉛版課長となり
、同社の爲に大に忠勤をぬき込んだものだ。後同社を退き明治三十六年現
在地に、紙型鉛版製造業と、圖書出版業を兼營して大に奮闘した結果、家
業は一路幸運を辿つて隆盛に赴くと同時に、斯界に重きをなすに至つた。
現に東京印刷同業組合芝支部長及び代議員として衆望を一身に集め、其他
芝區兵事義會役員、在郷軍人後援會委員たる外、立憲民政黨院外團東京支
部幹事として令名がある。氏は弱きを助け、強きを挫く所謂一片饒々の氣
魄と、人間味の所有者である。其處に氏としての偉大さがあり、同業組合
の支部長として多くの同業者を統御し啓發し得るのである。

廣中一之

明治二十二年十二月九日生
府下三河島汚水處分場内公舎

三河島汚水處分場の完全なる設備は、東京の一つの誇りであるが、同所
長として優秀なる技術と高邁なる學殖とを以つて謳はれてゐる人に我が廣
中一之氏がある。氏は明治二十二年十二月二日を以つて、山口縣玖珂郡
岩國町平田に呱呱の聲を擧げた。長州は由來幾多の偉傑を輩出してゐる地
だけに、氏も幼少の頃より一塵の英雄を志してゐた。殊に軍人政治家は氏
の最もな憧れでまた理想であつたが、山口縣立岩國中學を卒へる頃には、
氏の思想も次第に現實化し社會をはつきりと見詰める様になり、己が進む
べき生活の方向を、自分の能力趣味等から割り出して考へる様になつた。
中學卒業後名古屋高等工業學校に土木科を選んだ事は、全く氏が己の天職
を見抜いたのである。明治四十四年三月優秀な成績を修めて此處を卒業し、
直ちに大阪府役所に入り、技手として土木課下水道改良掛に勤務し、よく
職責を果すと共に、下水道改良の爲に大いに貢献する所があつた。かくて
大正九年三月には、市區改正部にも兼務し、幾多の功績をたて、同年四月
擧げられて、土木部下水道改良課調査係の主任となり、大正十四年四月遂
に大阪府技師となつた。こゝに於て氏は大阪府を去り、同年九月上京して
東京府役所に入り、技師として下水課に職を奉じ、次第に累進して、大正
十二年三月には臨時調査掛長となり、大正十四年十二月下水課に轉じ、同
十五年十二月職制變更と並に土木局に三河島汚水處分場長としての椅子を
占めるに至つたのである。性資調達胸中豁然として光風霽月の如く而かも
眞言人を懐かしむるものがある將來の發展は期して俟つべきものがあらう

平林市太郎

文久元年五月拾日生
府下池上町久ヶ原四六五番地

池上と云へば直に日蓮宗の總本山として有名なる本門寺を聯想するが
その池上久ヶ原の地にあつて、濃厚なる資質と、熾烈なる公共的精神とを
以て町民敬慕の的となつてゐる人に我が平林市太郎氏がある。氏の家は代
々此地に住し、土地の名望家として近隣に聞えてゐた。氏は先代遠右衛門
氏が天保五年逝去すると共に家督を相続し、爾來父祖傳來の農を營み、晨
に星を戴いて出で、夕に月を踏んで歸り専ら額に汗して奮闘した結果、家
運日に榮え月に盛んにして、遂に倍する繁榮を招來するに至つたのである。
氏はかうした繁榮の傍ら、公共自治の爲に力を注ぎ、遂に衆望の歸する處
大正九年推されて之が村會議員となり、大正十年小學校の改築に際しては
特に之が工事の監督の任に當つて貢献する處極めて多く、或は衛生施設の
改善に或は財政の釐革に努力する等其功績はまことに没すべからざるもの
がある。氏は又敬神崇祖の念強く、或は宮總代として社殿の修葺其他財産
の委管に任じ、或は木近寺の檀徒總代として寺務の整理に力むる等何れも
十有餘年の久しきに亘つて其職に精進し毫も倦む處がない。以て徳望の程
が察せられやう。大正十二年關東大震災の折には、挺身避難民の救護と
救恤品の配給に狂奔し、爲に晝夜を忘れた程で、其人情の敦厚なる稀に見
る處である。氏資性高邁、身を處すること厳にして而かも其内に無限の愛
情を堪へてゐる。夫人をえい子と云ひ、貞淑の譽高く、その間に四男一女
があり、常に和氣霽々として、見る眼も羨ましい程である。



小野基樹

明治十九年十月十三日生
府下高田町雜司谷一一一
電話牛込四六七六番

現今水道局の要位にありて東京市二百萬の市民にとつて最も大切な親たる水道工事の管掌に任ずる小野基樹氏は、明治十九年北海道函館元町の士族の家に生をうけたのであつた氏が學序を遂て京都帝國大學理工學部土木科を優秀なる成績を以つて卒業したのは、明治四十三年七月の事であつた。そして直に京都御所水道工事掛廻託となつた。氏の水道事業に關與しての生活の第一頁はこの時開かれたのである。其後間もなく一年志願兵として、近衛工兵聯隊に入隊したが、除隊の翌年四月東京市技手として水道課に勤務し、爾來次第に登用せられて大正二年には東京市技師となり、水道擴張事務所工務課に勤務した。其年又陸軍工兵少尉に任ぜられ、次いで正八位に叙せられた。八年七月には工務掛長に昇進し、鐵管敷設掛長をも兼任し、水道擴張工事に大いに盡瘁する所があつた。後幾程もなく函館區に聘されて土木課員となり、水道擴張工事に當つてこれを竣工せしめた。後轉じて函館區技師として上下水道視察のため歐米に派遣された、歸朝後は直ちに東京市に戻り、技師として下水課兼水道局擴張工務課に勤務し、十四年には技師岩崎富久氏の海外出張の爲、水道局擴張工務課工務掛長事務取扱をも兼ね、六月には技師原全路氏海外出張の爲、下水課長代理兼務となり、事務多端にもめげずよくその職務を完了した。かくて大正十四年七月、遂に現職たる工務課長に昇進し、水道局に於いて重きをなすに至つたのである。年齢はなほ壯前途の程測り知れないものがある。

鹿野壺太郎

明治廿一年十二月生
芝區新堀町三一番地
電話高輪四三二〇、四三二一

前途有爲の實業家として將た區會議員として、行く處として可ならざるなき其八面玲瓏たる材幹を以つて令名を馳せたる鹿野壺太郎氏は、郡馬縣吾妻郡中之條に生れた。幼にして穎悟、長ずるに及んで胸中に鬱勃たる雄心抑ゆるに由なく、前途に輝く希望を抱いて上京し、靜かに時勢の推移を洞察して慶應商業學部に學び、明治四十年優秀なる成績を以つて卒業し實社會に最初の一步を印することになつた。時偶々我國の電氣事業は將來勃興せんとする進運に逢着してゐたので、氏は之が實際的手腕を養成せんが爲千代田電氣株式會社に入社し、職務に精勵する處があつたが、明治四十三年徴兵検査に合格して軍隊生活を營み、能く軍務に服し隊中の範を以つて稱されてゐた。除隊の後大正二年途に現在の地を相し、獨力を以つて多年の宿志たる電氣器具材料商を營み爾來拾有餘年一貫専心業務の刷新に力められた結果、逐年盛況を極め、現在では十數名の店員を使用し一路幸運を辿つてゐる。氏は又こうした繁劇の間に力を公共自治の爲に用ひ衆望の歸する處推されて區會議員となり、區政の樞機に參畫して貢獻する處極めて多く、年と共に信望を高めてゐる。氏資性豪放磊落、膽斗の如く而かも從來世路風霜を嘗めて來た苦勞人丈けあつて人一倍思ひ遣りが深く光風霽月の襟度と明晰なる頭腦の所有者である。氏は本年三十九歳今後芝區の發展は氏の力に俟つもの多く趣味を大弓に有し豪爽なる氣を養つてゐると云ふ。極めて圓滿なる氏の家庭には兩親を始め夫人子女等多人數を擁してゐる。



仲井榮熊

明治七年九月十四日生
東京市芝區豐岡町十三

現に芝區醫師會理事として刀圭界に重きをなし、多年の蘊蓄と優秀なる技術を以て令名ある我が仲井榮熊氏は、山口縣の人、阿武郡須佐町に呱呱の聲を擧げたのであつた。山口縣と云へば、すぐ軍人を聯想する程、軍人を多く輩出した處である。本州の尖端にあつて、九州に對立するばかりではなく、武をもつては九州男兒に一步をも譲らず、薩摩と共に併び稱された軍人の本場である。従つて山口縣の人は、ナポレオンが失戀に對しても其の態度は敵軍に對する如く英雄的であつた様に、凡てに軍人らしい氣魄を顯如たらしめるものがある。失望はし、落膽することはあつても、決して絶望する事がない、失敗を悲しんでも、次の瞬間には、全精神を傾注して活路を見さう出とするのが、山口縣人の通性である。従つて傳統的にこうした男性的氣魄を惠まれてゐる我が仲井榮熊氏が、苦學力行して成功の金字塔を築いたのは當然のことだと云へる。氏は夙に國手たらんと志し明治二十六年單身京都に赴き、山田病院に勤務したが、時恰も日清戦役に遭遇した爲、兵に徴されて征途に上つた。除隊後明治三十四年上京して土肥博士の門に入り、傍ら清世學會に通學して、文字通り苦學力行を續け、在學中醫師の免許證を得て、大に秀才の名を擡にしたものだ。三十七年偶々日露戦争勃發するや、氏は軍醫として出征し、功により正八位に叙せられ勲六等を授けらるゝに至つた。かくて三十九年現住所に醫院を開業し、更に芝區醫師會理事として斯界に令名を馳てゐる。資性快活、劇と義太夫に豊かな憧憬を見せ、操夫人との間に二男二女がある。

土屋清三郎

明治十五年四月廿日生
東京市神田區表神保町十
電話神田三一九三番

代議士として令名ある土屋清三郎氏が、多年醫學雜誌の經營に蘊蓄の深きを見せ、今では遠く海外までも其驥足を延ばして、我が醫學界の爲に萬丈の氣を吐きつゝある事は、些か意を強うするに足るものがある。氏は千葉縣山武郡豐岡村を其懐しい搖籃の地とし、土屋清左衛門氏の長男として生れた。明治二十年舊名清を改め、大正十一年家督を相續した氏は將來醫學界に名をなさんと志し、學序を追ふて済生學舎を卒業後、東京慈惠醫學校に學び、専ら醫學の研鑽に餘念がなかつた。螢雪の功なつて芽出度卒業するや、直に内務省傳染病研究所の囑託となり、實社會に最初の一步を踏出したが、幾許もなくして警視廳検査官となり、更に岐阜縣衛生技師等を経て、後開業醫となつた。氏は又東北醫師大會常務委員、大日本醫師會醫師政調査委員等にも擧げられ、斯界に重きをなしてゐたが、後日本之醫界社を興して之が社長となり、雜誌「日本之醫界」を創刊して自ら樞軸の筆を揮ひ、大に我醫學界を啓發したものだ。現在では此の外ジャパン・メヂカル・ワールド支那文「東亞醫學」等を出版し、頗る隆盛を極めてゐる。氏は又郷里千葉縣より推されて衆議院議員に當選する事二回に及び、現に立憲民政黨の幹事として其前途を囑望せられてゐる。氏獨立不羈、稀に見る雄辯家で、胆もあり又思想も極めて穩健で、趣味を運動に有し、質實剛健の氣を養つてゐる。夫人を貞子と云ひ、才色兼備の譽が高い。

町田平次郎

明治十四年七月生
東京府下入新井町新井宿三三七

現在の社會制度は完全無缺なものではない、然し不完全だからといって破壊を敢えてしやうとする人々に、おまかせすることが出来るだらうか、それ等の人達は、要するに破壊の容易な事を知つてゐても、建設の困難な事を知つてゐないのであるまいか、建設する力のない、建設に對して自信のない人々が、不完全だからと云つて破壊せんとする思想ほど世に恐るべきものはない、殊に社會と呼び國家と云ふも、畢竟個人の集りに過ぎない、従つて社會を改造し國家を完全にするには、先づ各個人の自己改造が先決問題である。自己さへも治めえない人に、家庭の平和さへも保ちえない人に社會制度の否を論じ、國家の改造を叫ぶ資格はない、されば穩健な思想をもつて、自己完成のために、最善の努力を盡してゐる我が町田平次郎氏にして、はじめて、洗練された人の姿を見ることが出来るだらう。氏は土地の生れ、郷愛を了へると共に直ちに實社會に出でて、つぶさに世の辛酸をなめ、後父祖の業たる居酒屋業を繼承したのであつた。かくて機をみるに敏な氏は明治四十二年頃、早くも氷卸業の將來有望なるを洞察して業をかえ、爾來營々致々として文字通りの奮闘を續け、今日では地所家作をも有する程の隆盛を極めるに至つた。主なる得意先は別荘、屋敷等で廣大なる販路をもつてゐる。氏は繁務の傍ら町の共存共榮、町民の親睦和合にも留意して奔走し、八景坂區長代理に推選されたのは昭和二年の四月であつた、土木衛生下水、神明神社記念事業等にも功績がある。氏人格高潔穩健實の奮闘家で家庭にはたけ子夫人との間に三子がある。



關岡有二

明治八年九月六日生
東京市外北品川宿一九九

攝津の國の九鬼藩に、代々醫をもつてつかへ、名侍醫の名を擅にしたのは、小兒科醫として嘖々の名がある、我が關岡有二氏の遠い祖先であつた氏はその七代目に當り、嚴父一郎氏は、醫を業として近隣の人々から崇敬された人格者であつた。明治八年の九月、その次男坊として呱呱の聲を擧げた氏が亦早くから醫をもつて世に立たんと志したのは、先天的のテンペラメントが然らしめたものか。兎に角、醫者としての傳統的な血が、氏の五體にも流れてゐた事は確かだ。播磨の地は、兵庫縣九馬郡三田村であつて、清流武庫川に沿つた風光明媚な土地に、氏は陶治され刺戟されて育成されたのであつた。夙に上京して、神田の錦城中學校に學び、更らに慈惠大學に入學し、優秀なる成績を以て同校を卒業したのは明治三十二年の若草の萌え出でんとする彌生の頃であつた。卒業後直に吉松小兒科病院に勤務し、欣求と思慕を以て職務に精勵すること六ヶ年、大正五年一月遂に現住所たる北品川宿に小兒科専門の醫院を開業するに至つた。以來多年の蘊蓄と、尊い經驗とを以て患者に見ゆるに至つたが、其懇切なる態度と、卓越せる技能とは、忽ち信用を博し、逐日隆盛を極めてゐる。氏資性溫雅、温かい人情美の所有者で、對者をして自ら尊敬の念を抱かしむるものがある。趣味として書畫を好愛し、豊かな情操を培つてゐる。夫人を重子と云ひ、二人の間に徳雄君の外、璋子、晴子、櫻子、普子、通子嬢の一男五女があり、恵まれたる子福者にして家庭は常に霽々として常春の和氣が漂つてゐる。

鈴木市子

明治二十二年四月八日生
府下大崎町下大崎二二三番地
電話高輪四四〇〇番

裸一貫から身を起して自動車界に馳名を馳せてゐる鈴木市子氏の成功は氏の不撓不屈の精神と、粒々辛苦血と膏とによつて購はれたことは勿論だが、靜かに過去の道程を辿る時、其處に偉大なる夫人の努力と苦心が織込まれてゐることを否定することは出来ない。夫人は府下五反田一二三番種南米山運次郎氏の令姉で、夙に學序を経て、茶道生花等を親しく師に就て學び、二十有餘歳の時縁あつて鈴木市子氏の許へ嫁したのであつた。當時鈴木氏は凡ての事業が未だ緒に就かなかつたので、夫人も亦纖弱い身を以て生活苦に直面し、家にあつて只管家事にいそしみつゝ、夫君を扶け、涙ぐましい程の奮闘を續けて行つた。然しそれは躰で酬ひられる日が來た。鈴木氏が多年心血を濺いで苦心してゐた水書草紙が成功し、物質的に恵まれたからである。水書草紙の成功！それは慥かに經濟的に家庭を潤はしたけれども、事業慾の旺盛な鈴木氏の満足は購ふべく餘りに小さかつた。滿身若やいだ血潮と、澄潤たる向上心とを以て充されてゐる鈴木氏は、其後遂に萬難を排して五反田に東京自動車學校を創立するに至つた。夫人が最も重大な會計の役を承り、學校の事務所に優しい姿を見せる様になつたのは、それから間もない後の事で、以來多くの事務員を劬りつゝ致々として職務を勵んでゐたが、震災後同校が田無驛前に移轉するに及び、只管家庭にあつて愛兒の教養に任じてゐる。夫君との間に繁雄、利定の二君があり何れも學術優等で家庭は常に霽々たる和氣を以て充されてゐる。蓋し夫人の如きは眞に良妻賢母の範と云ふべきであらう。

石原萬助

明治十三年三月生
日本橋區小舟町二丁目
電話浪花一七六九番

氏の家は父祖幾代か引き繼ぐ乾物商で、市内の同業者には舊くから知られた輕節問屋である。昔からの得意と業固な業礎を以て賑盛を誇つて居たが、先年先代萬助氏が若年の當主を残して夭折するにあつた、先代の實弟辰之助氏が後見人となつて輔佐してをり、舊と變らぬ繁榮ぶりを見せ、商取引に於いては辰之助氏が亡兄萬助氏の名で通つて來た有様であつた。だが當主はまだ幼少のことであり、將來新時代に處せんが爲には今の内に營業を改革するに如くなしとなし、炯眼にも從來の營業を全廢して宅地家作を手に入れてこの方面に發展せんとした。ところが計畫よく時期を得たので爾來一層産を成すに至つた。爾來その事業的才幹は忽ち町内の推す所となり、各種公共事業にありて重きをおかれるに至つた。小舟町にはもとから町會らしき形體は存してゐたが、それを現在の組織的機能を有するまでに發達させるまでには、氏の長い間の努力が與つたものだ。即ち前に睦會と稱して敬神信仰の團體の如きものがあつた、後これに衛生組合を合併し更に隣保扶助の精神を加へた一般公共機關たる町會となしたのであつて、その間に氏は睦會の役員衛生組合の會計等に要位に推舉せられ、多くの貢獻を爲してゐたのである。現在は更に町民の熱烈なる興望を擔ひ、小舟町二丁目町會長に推され、別に第十一地區々劃整理委員等にも擧げられ、いそ／＼として盡力せられてゐる。資性動直にして而も淡泊なる所あり、人に接して城府を設けず、熱心を以つて事に當る所がよく町民の愛敬を得てゐるのだといふ。



細川正也
明治十一年二月五日生
芝罘芝浦町二丁目三番地
電話高輪二八三八番

帝都の關門たる芝罘埋立地發展の爲に、永の年月常に第一線に立つて不斷の努力を續け、遂に今日の殷盛を齎したる細川正也の功績は、令弟力藏氏の創業の功と相俟つて、當然芝罘發達史の巻頭を彩るべきであらう。氏は石川縣龍登の人、夙に郷賢に學び、次で中學校に入つて攻學に餘念がなかつたが、雄圖を藏してゐた氏は所詮一販地に身の安きを計るべくもない。遂に志を決して東都に上り、城北中學校に轉じて一意學にいそしんだ。かくて同校を卒業するや、更に進んで明治大學の豫科に入り、傍ら外國語學校選科に籍を置いて獨逸語を學び、私に他日の雄飛に備ふる處があつた。後日本大學に轉じ法學を專攻すること三ヶ年、螢雪の功空しからず、遂に優秀なる成績を以て同校を卒業するや、直に職を稅務監督局に奉じ、在職四星霜、氏が熱誠眞摯なる人格と卓越せる手腕とは、益々上長の信望を購ひ、氏に其前途を囑望せられてゐた。時偶々令弟力藏氏が、東京灣頭廣袤二十有餘萬坪を有する芝罘埋立地の管理に任する事になつたので、氏は職を辭して専ら令弟輔佐の任に當り、能く守成の功を全うして今日の大をなさしむるに至つたのである。氏は又早くより心を公共の事に用ひ、同志を糾合して芝罘二丁目町會を組織し、推されて之が會長となり町民の非榮福社に寄與するの外、芝罘に於ける各種の問題に對しては常に急先鋒となつて目覺しく活動し、現に芝罘公會堂建築委員長として之が完成に努力し、熱實至誠一に土地の開發を以て自ら喜び自ら慰めてゐる。曩に國勢、市勢各調査委員に擧げられ、今は芝小學校保護者會幹事として令名を馳せてゐる。



松下專吉
明治三年四月十四日生
小石川區原町一三三番地

多年我が教育界の重鎮として衆に抽んづる識見技能を有し、名譽を擅にしてゐる人に本郷尋常小學校校長松下專吉氏がある。氏は生粹の江戸兒として神田淡路町に生れ、幼にして教育界に名を成さんとし、土地の小學校を卒業後青山師範學校に入り、明治廿三年之を卒業し、先づ職を京橋區文海小學校に奉じたが後一年にして青山師範學校の訓導となつた。人に教へんと欲すれば先づ自ら修めなければならぬ。氏はかうした熾烈なる責任觀念の下に、餘暇を見て専修大學理財科を卒業し、更に外國語學校の業を終えた。學究心の熾んなること亦想ふべしである。後明治卅五年九月遂に本郷尋常小學校の校長となり、爾來二十有餘年間同校にあつて兒童の指導教養に不斷の努力を惜まず、今日に至つたのであるが、此間學務委員に選ばれたこと二回、又教育界の功勞者として文部大臣より表彰され、大正六年には奏任待遇を受け、八年には正七位に叙せられ名實共に兼備するに至つたのである。が更に府より拔擢せられて朝鮮、滿洲、北部支那の教育を視察して見聞を廣むること二回、尙ほ北米合衆國に渡つて學事視察をなす等に斯界の貢獻者として衆に範を垂れて居る。氏の實際教育に當るや、常に兒童の精神修養と體育の發達に重きを置き、之が具體的方法を講じ、同校をして帝都小學校の模範校たらしむるに至つたのである。氏は趣味方面に於て又豊かなものがあり、殊に園藝には一家を成して居ると云はれて居る。家庭には夫人と子との間に一男四女をあげ、長男信君は帝大經濟科を出て目下三井銀行に奉職中である。

高村増太郎

明治十二年三月十五日生
東京市日本橋區長濱町二

砂塵と喧騒と焦慮とに生命をすり減らして生活してゐる都人士にとつて新鮮な魚類と野菜は、自然の香味と、一抹の生氣を興へてくれるところの清涼劑であり、刺戟劑である。殊に盤上に躍る鮮魚は、仁俠を誇りとして來た江戸つ子に、限らない懐しみと、慰めを興へるものである。都會生活が、科學の上にモダンテイツな生活様式を求めてゆけばゆく程、それに比例して、都會生活を營むものゝ誰れにも渴望されるところの自然味、それは鮮魚と野菜を外にしては、何處にも求められない。されば築地魚市場の躍進的發展は都會生活者のために欣快とするところであつて、幹事たる我が高村増太郎氏等の努力にまつところが極めて多い。氏は岡崎市十王町の人、郷里の中學校を卒業すると共に、青雲の志を抱いて東都に出で、現地に魚商を創業したのは明治三十五年の事であつた。かくてダイナミツクな奮闘を續けること、實に二十有餘年、即ち火災の厄に遭遇してなほ屈せず、悪疫の流行とたゝかつて、また挽まず、魚問屋としての萬全を期するため貯蔵部及び鐵道上の機關の完成につとめる等々、遂に今日の大をなすに至つた。また美味求真の食通に喧傳されてゐる名刺店大増を經營して大いに業績を擧げ、日本橋の本店の外、淺草雷門、日本橋室町、神田花田町等に支店を設け、本支相呼應して、刺烹の妙を揮つてゐる。氏は震災後、築地魚市場の移轉問題に關して東奔西走し、組合幹事としての全幅的な貢獻をなした。家庭には、幸子夫人との間に、兼弘、國治の二君及び光子、せつ子嬢あり、其の圓滿振りは近隣の羨望の的となつてゐる。

岩波伯太

明治十七年二月生
東京府下淀橋町柏木四六九番地

經濟學者は企業家を説明するにキャブテンオブ・インダストリーと稱して居るが、蓋し適評である。事業家として實業界に企業の船を進め、極東商事株式會社專務取締役として令名ある岩波伯太氏はスケート製作用場で聞えた下諏訪の生れで、岩波虎作氏の長男である。名鏡のような驚湖に玉の如き人格を鍛へ、松本中學を卒業後、東上して、直ちに身を實業界に投じた。早く東洋蓄電池株式會社を興し、專務取締役に推されて専心經營の衝に當つて既に力量の非凡さを見せて居たが、其後之を辭して極東商事株式會社の設立に力を注ぎ、爾來海外貿易業に超人間的努力を見せ、支那印度地方は勿論のこと遠く歐米に驥足を伸して着々功を收め、會社の礎石漸く固きを加へつゝあつた。然るに偶々昭和二年不幸にして祝融の胃す處となり、爲に事業は遂に一頓挫を來たすに至つたが、不撓不屈の氏は大に勇を鼓して之が復興に涙ぐましい奮闘を續けて行つた。當時同社は下渋谷に營業所を持つて居たが、此の機に際して下落合九七一の地に移轉し、倍舊の精力を傾注して、何等支障なく繼續して、事業の經營を見るに至つた。惟ふに我が國の貿易界は戦後年を追ふて不況の度を加へ、殊に擾亂の爲對支貿易悲境に陥れるのみならず、對米對英亦甚だ振ない有様である。かうした不況の中にあつて然かも堂々たる大會社と比肩して毫も遜色なき隆々たる同社の發展こそ眞に氏の敏腕を最も雄辯に物語るものであらう。家庭には長野縣人武居逸二郎氏の長女文子を、夫人として迎へ、二人の間に長女ふま子嬢、長男尚信君、次男尚茂君等の子女がある。



鈴木筆三郎
明治十六年八月生
東京府下蒲田町新宿一、二六三

蒲田町第九區長として令名ある我が鈴木筆三郎氏は、資性温厚にして篤實、レフアインされた人格の所有者である。そして稀にみる超人間的な努力の持主である。それは氏が孜孜として闘ひ、血を流し涙を落して進んで来た、苦難と忍従の過去が、呼びかけるやうに強く物語つてゐる。氏は神奈川県鶴見區矢向町の農家に三男として生まれたのであつた、穎敏な氏は夙に、欣求と思慕をもつて正則英語學校に學びまた高等文官講義録によつて堂々の功を積んだものだ。明治三十七年母堂の從弟が經營せる箱根の富士ホテルに入り六年間致々として精勵する傍ら米國に渡航せんとする目的で島實兵太夫の日本力行會に入會し、其の準備に餘念がなかつた。當時氏が正則英語學校の高等部に籍を置いて高等英語の研究にふけたのも其爲であつたが、偶々佛人エルゴット氏の知遇を得て日本郵船會社の司厨部に勤務することゝなつた。はじめ上海航路の春日丸に、また歐州定期航路の熱田丸に乗組んで上司の信用殊の外篤かつたが、渡米の素志が達せられぬ爲中途にして海上生活を断念し、明治四十四年懸望せられて京濱唯一の金物商鈴木家の養子となり今日に及んだのである。後エルゴット氏が銀座千正屋前にレストラン、フランセを開業したので望まれて之が經營の衝に當つてゐたが、後更に東京ステーションホテルの精養軒司厨部に入り、列車係主任としてダイナミックな奮闘を續けたものだ。斯うした受難の道程を経ただけに氏の性格は眞に親しむべく敬すべきもので、區長として町民の崇敬を一身に集めてゐる、趣味は語曲家庭にはやえ子夫人との間に四男がある。

横田 秀雄

文久二年八月生
東京府中野町小瀧一五六五番地
電話四谷 一一一三番

我が國法曹界の寶玉たり、功勞者たる法學博士横田秀雄氏の盛名は既に世の耳目に籍蓋して居る所改めて叙するまでもない。東京帝國大學法學部の出身で、拔群の成績で學窓を出づるや始め司法官試補となり、進んで東京地方裁判所判事となつた。さきに學窓當時より、學友儕輩に群を絶す成績を示して居たが、司直の府に入つて後いよく才識に精彩を示し、幾多紛糾錯綜せる難件を、快刀斷麻の英斷を以て處理し常に矚目を一身に宛め果進して千葉地方裁判所部長となつたのは未だ少壯の頃であつた。拔擢に次ぐに關連、早く東京控訴院長の顯職に重任を擔ひ、更に轉じて函館控訴院長として赴任、此の間世上の實際問題を裁斷する傍ら廣く各國法學を究理討檢して餘蘊なく、鬱然たる學殖は斯界上下の認むる所となつて居た大審院判事、同部長を経て司直最高府たる大審院長の榮職に昇り、其の創見と學殖とを自由に驅用して傳統の陋習を破る新判例を開き、天下の公道を顯彰して法の活用を以て時代順應の範を示した。曩きに明治四十一年積年の研究を發表して法學博士の學位を得、歐米諸國に派遣せられては我が國法學の進歩のために盡す所があつた。職を後進に譲つて退くや、學殖を傾けて早稲田、中央、日本各大學に教鞭をとり、更に明治大學長として一萬學徒の父と仰がれて居る。特に民法學に於て独自の地歩を占めて居ることとは世の知る所である。氏は長野縣埴科郡松町代の人、家庭にはひで子夫人との間に四男一女あり、長男の正俊氏は東京地方裁判所判事、令弟俊夫氏は現京城覆審部長として共に令名がある。

中 島 大

文久元年六月二十一日生
東京市小石川區金富町四八番地
電話小石川 二八〇八番

銀行は現代經濟社會の心臟である。就中國民の産業と最も適切なる關係あるは日本勸業銀行である。同行の理事者には老練熟達の実業家揃ひであるが、目下監査役として在任する中島大氏の如きは圓熟者の一人として世上早く其の力量を認むる所となつて居る。氏は雪に名を得た松本市北深志町に、戸田氏六萬石の舊藩士中島道葉氏の第四子として松本城下に呱呱の聲を揚げた人である。幼時大之助と稱し、父祖の資質を享けて天性雄心に満ち才氣溢れて居た。郷里の塾を終へて上京したのは實に年少十五歳の時で、初めて職を大藏省主税局に奉じて官海生活に入つた。後轉じて勸業銀行に入り大に忠勤を抽んで結果、次第に登用せられて債權課長に進み同行のために貢獻する所が尠くなかつた。後幾許もなくして勸業證券株式會社に入り同社の社長として聲望を傳へらるゝこと八九年、勸業銀行の事業を扶けて業績の大に見るべきものがあつたが、昭和二年二月遂に再度勸業銀行に聘せられて監査役に擧げらるゝに至つた。嘗ては日清役の際財政顧問として一ヶ年有半を京城に滞在したことあり、尙東京稅務監督局に入つて主税官補に任ぜられたる等官途に在職したる年限も極めて長い、猶目下氏が關係ある社は尠くない。繪畫を好み、南畫には自ら彩筆を揮ふと云ふ。父君は藩中名高い算數學者、失明して猶子弟教養に従つたと云ふ逸話もあり、郷里には今も頌徳碑の文字が其の徳風を偲ばせて居る。養嗣子工學士時雄氏は鳩山春子女史の冢多賀本家の出である。

林 利 藏

明治十六年九月廿七日生
東京府下澁谷町



多摩川の上流は水も清く、山も秀で、また地中は坦々として昔の武蔵野の面影を彷彿たらしめるものがある。そして其處は彼の維新の劍豪近藤勇の生地であり、三多摩壯士の本場で、こゝに生を享けた人々の多くに、豪放な性格の持主を見出すのも、自然と人、環境と性格の奇しきコンネクションを思はずにはゐられない。東京府江戸川上水町村組合助役たる我が林利藏氏は、殊に北多摩郡調布町の素封家の生れで、豪放的な氣分は傳統的に父祖の血を受けたからであらう。氏は私立中村塾に中等學科を修めた後、更に法學院大學に法律學、中央大學に政治經濟學を學んで、北多摩郡時書記となつたのは、明治四十一年の四月、氏が廿六歳の時であつた。次で大正五年十二月には東京府屬となり、神津島地役人、府下羽田町長職務を歴任して、九年十一月北豊島郡長に榮轉した。役人生活は之れだけだが頭腦明晰で事務に明るく年少氣鋭の良吏として到處で持て囃されたものだ。かくて十年七月、内務大臣の認可を得て東京府江戸川上水町村組合に主事となつて就任したが、後幾許もなく其の非凡の才能を認められて助役となり、引續き其榮職にあつて今日に及んでゐる。同水道事務は今や殆んど一切を擧げて氏が總攬してゐるのを見てその如何に非凡の手腕を有してゐるかを知らる事が出来る。尙同水道は工費一千數百萬圓を要した大事業で昭和三年七百萬圓の高利債を低利に借り換へる事の出來たのは全く氏の努力で、これによつて組合の財政計畫は確立し、經營は泰山の安きに置かれたのであつた。實に氏は組合の功勞者である。

小島 健次

明治卅二年二月十五日生
東京市芝區松本町四十四

文明は水より生れるといふ、まこと、遠いギリシャローマの文化發達史を繙く時、到る處に地中海の名が記されてゐるのを見て首肯されるのである。殊に東洋や西歐の文明が、大西洋や太平洋を越えて普及と向上の過程を辿つて來た事も、カンチス河や揚子江の水が、インドや支那文明を導いた事も、我々の熟和するところである。而して文明を生む水の力といふのは、水運の利便が文明の進化に寄與する力であつて、この水運の利便は水陸の聯絡如何によつて左右されるものである。されば海陸の荷役人を使役してこれに重要な役割を演じつゝある我が木村組の事業は大いに文明に寄與するものと云つていい。その木村組東京支店の代表者たる小島健次氏は高知縣土佐郡高知市農人町の人、嚴父を小島馬太郎氏と云ひ其の二男と生れた。氏は高知市立商業學校を卒業すると共に、家業たる製紙の輸出入業に従事したが、後感する處あつて單身福岡縣門司に赴き木村組に入つた。然るに後幾許もなくして氏は組頭木村清氏に見込まれて其の令妹を娶り、獨立して請負業を開始したのは大正九年の事であつた。大正十二年關東震災の時氏は九州方面より慰問品の輸送と配給を縣廳より依頼されて上京し偶々日本橋區蠣殼町の伊勢富運送株式會社々長山崎健一郎氏と知り及んで其の知遇をうけ、同社の仕事を引受けるやうになつた。かくて國際通運株式會社、大分セメント株式會社、土佐セメント株式會社等から信任されて、現在では海陸荷役人百五十餘名を使役するの繁榮を極めるに至つた。氏の將來、木村組の今後こそ正に期待すべきものがあらう。



菅 谷 孝

明治廿三年二月七日生
東京府下巢鴨一、七六三

人間は悲劇的喜劇役者であると、シエクスピアが言つてゐる。まこと、生れ出づると共に、與へられたキスケットを背負つて、睡眠と生きてゆかなければならない人間は、悲劇味たつぷりの喜劇役者であるかも知れない、だが不具者と呼ばれる人達の惨めな姿の何處に、喜劇役者の面影があるだらうか。人生の筋書きは悲劇であつても良い、けれどもせめて人間だけは、何も知らないで踊り抜く事の出来る喜劇役者であつてほしい、決してアンコールのない劇なのだから……さればこそ人々は健康な身を慾して己まないのである。こゝに於て後天的の病疾は勿論先天的の病氣も癒さんとする處の醫師の使命は重、且つ大なりと云はなければならぬ。我が菅谷孝氏は醫術でも至難な眼科の専門醫である。茨城縣方那行方村は氏の懐しい搖籃の地である。夙に千葉縣立佐原中學を卒業後、青雲の志を抱いて慈惠大學に入學し、優秀の成績を以て同校を卒業したのは、大正四年の山内の櫻が綻び初める彌生の頃であつた。然し生來知識慾の旺盛なる氏は、尙も同校の組織學教室に閉ち籠つて一ヶ年間の研究に耽り、更に慈惠病院の眼科にあつて實地研究を遂ぐることに二年、後河本重次郎博士に就て親しく其指導を受け益々其腕を磨いて行つた。かくて愈々確信を得るに及んで嚴父節哉氏が大正四年以來開設せる眼科醫院の後を受けて専ら之が經營の任に當り、以て現在に及んでゐる。人となり温厚、明晰な頭腦の持主で大に其前途を囑望されてゐる。夫人をやす子と云ひ其間に三女あり、家庭は和氣霽々として極めて圓滿である。

長 島 爲 吉

明治元年十一月生
芝區田町三の一七番
電話高輪二〇〇八番

氏の郷里は神奈川縣久良坂郡である。幼ない氏は令兄に従つて、鋤鎌をとつて田畑に働いてゐたが、當時わが國の狀勢を見るに、兩刀を佩びて大道を歩した士族階級は亡びて、王政復古の大業も着々として秩序を整へ、商工者によつての新興階級が駁々として經濟立國の覇權を掌握して行きつゝあつた。幼いながら明敏な氏は早くもこの點に留意し、志を立て、上京したのは僅か十五歳の時であつたと云ふ。かくて氏は、是非將來は材木商になつて一旗擧げてやらうと心に期し、深川區の老材木店土井忠太郎氏を訪れて、同店の少年店員になつたのであつた。主人忠太郎氏が最初の一瞥で見込んだ如く、氏は陰日向なく熱心に勤務し、黙々として大人も及ばぬほどに立ち働き、十三年の長い間を店務に従つた。そこで二十八歳の時に始めて希望に充ちた獨立の門出に立ち、田町三の十七番地なる現住所に戸を構へて、材木商を開業することになつた。勿論獨立とは名のみ内容は實に貧弱なものだつたのである。けれど堅忍不拔な氏の奮闘ぶりは、一日と酬ひられて家運の振興を招くやうになつた。これこそ經營の才に富む氏の商才にもよるもので、今日では資産十數萬に及ぶ大店舗になつた。一方氏は同業組合の幹事に推されること數回、なほ震災後卒先して共和會を組織し町民の共榮を計り、後町會に組織變更されるや再度選ばれて町會長の重職に在る等、公共のためには寢食を忘れて奔走を辭せない。往年素樸の一少年、今日の富と位置と人望とを築き上げた氏こそ、稀れに見る立志傳中の人物で、後進を勵起せしめるお手本となるに充分だらう。

池 田 士 郎

明治二十六年九月生
府下西大久保一五一番地

わが池田氏は廣島縣人である。總體に於て表中國の人には、銳角的な正義の血に燃ゆる肌合ひの人物が多い、氏はこの典型的な人物と云へよう。幼少の頃から藥種商を希望して、廣島藥學校に學び、卒業後は高等學理を研究するために、上京して東京帝國大學醫部附屬病院に入り、直接に知名の醫學者の下で、實地を合せ得て研究に力めた。かやうにして充分に自信がついた氏は、將來社會に名を成すには、單に藥學のみでは不十分であるとこゝろに想倒し、日本大學法學部に入つて法律學、社會學の研鑽に専念の歩を辿つたのである。やがて同大學を卒業したので最早鬼に金棒となつた氏は、大正二年に始めて藥種化粧品店を開くと共に、調劑を以つて一般の需めに應じたのである。その傍ら氏は段々と町政自治の方面にも頭を擡げ、町内有數の有識者として、かつは新進氣鋭の士として各方面からの歡迎を受け、大正十年に學務委員に推薦せられて、町内小學校の諸施設改良其他等々に亘つて、不斷の貢獻を拂つてゐる。なほ商友會幹事としては、之が創立以來策劃の勞と執り町内商家の共榮共存に、貢獻するところが甚大である。氏は年齢僅かに三十四歳にしか過ぎぬこの少壯さを以つて多くの老年閣を向ふに廻し、侃々の論陣を張るその熱情こそは、ともすると退嬰的な現代青年の清涼劑として、意義深いことではあるまいか。時代は青年のものであると云ふが、氏の如き青年の士が多くてこそ、青年の時代を劃する時期が來るのであらう。前途多望な氏のために、世の若人は一様に祝盃を高く翳さうではないか。



海野 泰一

明治二十五年四月三日生
北豊島郡板橋町金井窪六〇
電話 板橋 一〇一番地

群馬縣山田郡岡村は氏の思ひ出多い故郷である。餘り家計が裕福でなかつたため、氏は自らパンを労働に求めて走らなければならなかつた。かくて氏は東奔西馳して幼ない身を生活苦に直面したのである。その内に上京して偶々市内本郷田町の北村商店の店員に入ると、瞬く間にその才幹を發揮し、多くの同輩に掻き立てられて重用せられるやうになつた。そして主人は氏を愛弟のやうに寵愛したと云ふことである。が鶏口となるとも牛後となる勿れとの文句の如く、大きい希望を抱く氏は一店員として朽ちるのを屑しとしなかつた。氏は終に大正三年に勇ましくも獨立の門出に一步を踏み出して、工場を興し、金屬セロイド並に眼鏡レンズ及び眼鏡附屬品の製作業を開始したのである。大正三年と云へばかの歐洲大亂が勃發して、輸入品が内地市場に缺乏を告げやうとしてゐる際のこととして、氏のこの計畫は見事に的中した。その製品は非常な歡迎を顧客から購つた。まことにその出發點に於て祝福された次第である。一方氏は大いに力を得て生産機械の精巧と、職工の優秀な者を雇備し、只管に製品の改良を計つたので、聲價騰榮へに榮へて行き、今ではその總ての需要に應じきれないと云ふ繁昌ぶりである。抑も從來は同製作業はどうしても輸入品と拮抗することが出来ずわが國でも多くの製造業者が殆んど失敗の頁を繰返してゐると云ふ状態であつた。その困難な事業に従事して氏が今日の隆盛を得たといふことは、氏の天才的な經營手腕の結果だと云はねばならぬ。家庭に在つては父母なき後は伯母に仕へ夫人と子との間に一男一女がある。



飯塚造酒藏

弘化三年九月十五日生
府下瀧の川町二〇〇三番地

外來文明の毒盃をあふつた若き日本は、今や世をあげて文化生活に陶醉し、都會風潮は農村を浸すに至り、すみ馴れた農村生活を嫌うて、一圖に都會に走る多くの人生をみ出し、家をすて父母兄弟に離れて、又は愛人をして、都會に憧憬れる若い男女の群が多く、そこには禍された都市中心主義の文化が建設せられたのである。誠、世は輕佻浮薄、國家の基礎はこれによつて危ふからんとしてゐる。足の地につかぬ哀れの人々、そこにはどつしり落ちついた何物もなく、たゞ新しい流行と華やかな生活とを夢みてゐる。新しい外來の思想には食傷して、今や、若き日本は病的の狀態に陥つた。そして都會の文明はいやが上にも人々を神經質に弱らせる。ここにこの惡風潮と戦つて、あく迄も、會てありし、人々の心に呼びもどしたい。毒の華に掩はれた心の芽をも、一度よび醒したい。農業、園藝、あの自然の温か味に接する時、人々の本當の心は甦ると、かく絶叫しつゝ、旗を擧げて、着々とその地歩をかためつゝある郊外の町、それこそ、わが瀧の川である。瀧の川の苗圃といへば有名なものである。如何なる邊鄙な農村の人々と雖もその名を知らぬものはない。そしてこの一角の農園を今日の盛大になさしめたかくれたる功勞者こそ飯塚氏であるのだ。君の八十年の長い生活それは偏へに新しい輕佻な文化への挑戦であつた。父子相繼いで村議、町議等の名譽職にある外或は學務委員として、又は氏子總代公徳會長として町事に裨益するところ亦決して尠くはない。嗚呼、輝く老戰士の上に祝福あれ、われ等はかく叫び乍ら筆を擱く。



加藤平太郎

明治十五年九月十五日生
東京府下大森入新井新井宿一四五〇

生活は闘ひである。だが反抗的闘争のそれではない、然るに輕薄なる思想に癡痺した徒輩は、生活即ち闘争と心得えて、妄動的に建國の大精神に逆行せんとする、光輝ある帝國の歴史を汚毒するもの、これよりも甚しきはない、新社會の建設といひ新文明の創造といひ、建國の精神を忘却し、祖國を無視して出來得るものではない。されば國を愛し、國の前途を思ふものは、祖國を知り己れを知らなければならぬ。そして、國のために身を命を賭とした人々に限りなき感謝の辭をよせなければならぬ。だらう、之はまた國ばかりではなくて、町村に於ても亦同様である。入新井町會議員として知られた我が加藤平太郎氏は、町を思ふ點に於て、また町のために貢獻した點に於て、確かに町民の感謝を受けてゐる人である。町會議員に當選したのは、大正十四年であつたが、別に町警備員、區土木委員の要職にあつて、日夜専處するところもなく、入新井町の隆盛、町民の親睦に腐心してゐる。昭和二年、櫻新道に出火のあつた際には、消防小頭として奮闘し、ために右足に大負傷をした程である。亦もつて氏が如何に、自己の利害を超越して町のために盡してゐるかといふ事を知り得るだらう。傷ついても氏は、尙且つ町民の安寧を思ふの餘り、自ら消防組に止まり、現在會計として涙ぐましい奮闘を續けてゐる。氏はまだ在郷軍人團の幹事、評議員で、日露戦役に参加して遼陽にまで轉戦し、勳八等白色桐葉章を賜つた勇士である。書畫骨董に興味をもち、家庭にはいく子母堂と、しげ子夫人それに六人の子女があつて賑かである。

那珂端治

明治十九年二月二十六日生
東京市芝區愛宕下町二ノ四

我々は社會及び國家を構成する一つの分子である。従つて我々一個人の生活は、人類全体の生活であり、個人の死の集合は、即ち人類の死の意味するものである。茲に於て個人と密接な關係を有する醫術は、また國家社會への大きな貢獻だと云へる。我が那珂端治氏は實に國手を以て己が天職とし、恰も殉教者の如き敬虔なる態度を以て其職に精進しつゝある人格者である。雪で名高い新潟縣出雲崎は氏の夢寐にだも忘れ得ない懐しい故郷である。郷費を了へると共に上京して、日本醫學專門學校に學び、欣求と思慕をもつて醫學の研鑽に没頭したのであつた。螢雪の功なるに及んで池尾病院に入り、實地研究を積んだが、氏の人は夙に池尾氏の知る處となり、遂に院長代理として忠勤を抽んでゐた。然るに偶々不幸にして池尾氏の長逝するや、燃ゆるが如き犧牲精神を有する氏は全責任を一身に引受けて孤軍奮闘すること實に三ヶ年、かくて愈々主家の再興するに及んで小池氏を其後任たらしめ、自分は實に大正七年の事であつた。同院の專門は内科、小兒科、及び婦人科で、氏は常に慈母の如き親切さと、慈父のとき懇切とをもつて患者に接してゐるが、その獨特の手腕と多年の蘊蓄とは氏の信用を高からしめ、逐日隆盛を極めてゐる。氏人となり謹嚴、明哲な頭胸と仁俠の持主で眞に國手として推稱に値するものがある。蓋し氏が今後の發展こそ必ずや期して俟つべきものあらう。氏は又繁務の傍ら趣味として畫を好愛し美的情操を培つてゐる。



鈴木次郎吉

明治十年九月十日生
東京府下入新井町新井宿二七二四

成功は、イーチイオイングなものではない、それに血の出るやうな超人間的な努力が必要である。そして機をみるに敏な眼も、其の一大要素である。されば我が鈴木次郎吉氏の成功も、其の第一歩は當然、朝に星を戴き夕に月影を踏んで鋤鋤に親しんだ弱冠の頃から初まらねばならない。氏は額に汗して營々と家業に精勵する傍ら、先制的に苗木の栽培をはじめた。そして其れによつて得た金で別荘向の貸宅を建て、其の敷金で苗木を買ふ等、資金を巧に運用して、今日の地位を築くに至つた。氏の嚴父は善太郎氏と云ひ、其の長男に生れ、大正八年相續したのであつたが、氏は消防小頭を十年、組頭を二年つとめる等、家業にはけむと共に、日夜町内の共存共榮のために献身的な努力を惜しまなかつた。其の犠牲的精神と、献身的努力とは、かの大震災當時、寢食を忘れ、身を捨て、避難民の救護に奔走した事によつても知られるのである。氏はまた大正十五年日露戦役死者の偉靈を弔ふて満州を視察し大いに得る處があり、また塵芥焼却問題については仙臺、名古屋、大阪、京都、神戸等の各都市を見學して、其の徹底的手段を講ずるなど、町會議員になつてからの努力は殊に目覺しいものがあつた。氏はまだ穩健なる思想の所有者で支那問題に對しても確たる見解と深い理解をもつてゐる。長男秀吉氏は中學校卒業後第一聯隊に入り歩兵少尉となつて退營し、現在では入新井町青年團評議員、在郷軍人分會理事として知られてゐる。氏は眞言宗圓能寺線代、山手、日社神社子總代で家庭には富美子夫人との間に五女あり極めて圓滿である。

柿本庄六

明治七年五月十六日生
東京市下谷區中根岸町三

世に疾病ほど不幸なものはない、就中肉體を唯一の資本として、その日の細い煙を立てゝゐるルンペン・プロレタリアにとつての疾病ほど哀れなものはないであらう。然るに口に仁術を唱へながら權門に阿り、勢家に語ふ刀圭家の多い間にあつて、こゝろした薄倅な人々に、心から慈悲の念を以て熱い同情の涙を流し、更生の喜びを願つゝある我が柿本庄六氏の如きは、蓋し醫師の典型とも云べきであらう。岐阜縣大野郡上枝村は氏の忘るべからざる播磨の地である。夙に斐田中學を卒業すると共に青雲の志を抱いて上京し、慈惠大學に學んだ、明治三十四年、同校を卒へるや直に帝國大學醫學部選科の産婦人科に入り、衛生學教室及び國家醫學教室にあつて、實地に研究を續けて行つた。かくて明治三十九年遂に現住所に開業するに至つたが、茲に特筆すべきことは、これより先氏が大學在學中傍ら救療院を創立して貧民の施療に當つた事だ。然かも氏はオール・オア・ナッシングの生活を營んでる貧民達のために貯蓄を獎勵し、他日彼等が社會に出る時の資として藥價を貯金せしめたのであつた。氏は下谷區中根岸に病院を設立した後にも、またこの心をもつて貧民の救済と教化のために精進し、美しい人類愛に人々を感泣せしめてゐる。現在病院は外科、内科、X光線科等に別れ副院長には川上禮治博士がある。神田末廣町に分院があり、何れも隆盛を極めてゐる。氏は病院に研究室を設けて醫學の研究に餘念がない。家庭にはよし子夫人との間に女子師範附屬高女在學中の眞佐子嬢があり、至つて圓滿である。

岡秀寶

明治十九年四月廿五日生
東京市芝區三田小山町三

ダイヤモンド、ルビー、サファイヤが磨かれて、自力的な光りを放つやうに、太陽のやうな、青空のやうなそして靜かな海と湖を思はせるやうな、懐しみと親しみを持つてゐるところの人格も亦、寶石のやうに磨かれなければならぬ。従つて玉成された人格者であるところの我が岡秀寶氏は、苦惱と受難の難路を辿つて來た人であるといふ事が出来やう。また、逆境にあつても常に致々として奮闘して來た超人間的な努力が、今日のレファインされた人格を玉成したのでと云ふ事も出来るだらう。氏は明治十九年四月二十五日福島縣双葉郡富岡町に呱呱の聲を擧げたが、嚴父は岡義賢と云ひ、愛知縣海部郡飛島村の郷士大河内庄平の三男であつた。かくて氏は三歳の時父母に離れ、具に世の辛酸を嘗めたが、長ずるに及んで上京し經濟學を學んだ。明治三十九年徴せられて兵役に服し、除隊後再び學窓に入り、苦學力行を續けた。二十五歳の時郷男爵の知遇を受くるに至り、後石炭販賣業を開始し、三井物産株式會社の専屬特約店として、東京石炭商會を創立したのであつた。七年の秋召集されて兵站司令部附となり、西伯利亞に出張し、翌八年五月凱旋と共に功によつて勳六等に叙せられた。十年三月三井物産株式會社石炭部取扱に係る特種販賣機關として、同社の後援を得、三四石炭株式會社を創設し其の常務取締役となり今日に及んでゐる。氏は繁務の傍ら町會自治のためにも奔走し、近隣の崇敬を一身に集めてゐる。家庭には實科女學校出身の茂登子夫人との間に綾子嬢、敏男、賢治、豊、弘君等があり、圓滿である。



藤本茂

明治十六年十二月十九日生
東京市芝區榎坂町三

氏が夢寐だにも忘れ得ない、懐しの故郷は、三重縣の津市である。由来大平洋に面する、殊に南國の地に生を享けた人々は、北國や、日本海で育つた人々には見出す事の出来ない、燃えるやうな熱情を、胸底深く秘めてゐると云つても北國に生れた人々の特性とも云ふべき、鐵の様な強固な意志を全然持たない譯ではない。熱情の人であると共に意志の人であり、また理性の人でもあるのが、純南國の人である。それに津の町は歌にもある情緒豊かな處である。紫縮緬の様な伊勢灣の上には遙かに霞の様な知多半島を望み、安濃の沃野を距て、長谷山經ヶ峰が聳え、岩田、塔世川と共に白砂青松の阿漕浦をもつてゐる津市は、何物かを人々の胸に與へずには置かない、我が藤本茂氏の玲瓏玉の如き性格も亦故なしとしない。夙に縣立津中學校を卒業するや、將來醫を以て身を立てんと欲し、前途に輝く希望を抱いて帝都に出で、日本醫學專門學校に入學した。爾來斯學の研究に耽ること數年、優秀なる成績を收めて同校を卒業すると共に、北里研究所附屬病院に勤務し、活社會に最初の一步を踏出したのは、大正三年の事であつた。以來同所に止つて實地研究に身を委ねること約十一年、大正十二年現住所に内科専門の醫院を開業し、多年の蘊蓄と尊い經驗とを以て患者にまみえ、頗る繁榮を極めてゐる。氏は流石永く北研にわたつて特別に結核病に對しては頗る造詣が深い。人となり温雅にして頭腦明晰、諷曲に興味を有し豊かな情操を培つてゐる。家庭にはゆきえ夫人との間に立夫、正夫の二君及春枝、幸枝の二嬢がある。

倉持長吉

明治八年七月十一日生
東京市日本橋區馬喰町一ノ三

ある詩人が、搖籃の裡で聞いた、山と川との聲を一生忘れえないうで、多くの歌にうたつたやうに、執拗にも我々の心をとらへるのは、幼い時の印象である。そして、白布のごとく純真な脳裡に烙印された幼時の印象ほど、我々の一生に強い暗示と美しいユニアンスを興へるものはない、されば幼児が唯一の友達であるところの玩具は、母性愛や子守唄と同じやうに、人生に對しての重大性をもつてゐると云はねばならない、徒らに流行を追はず、營利に走らずして子供のためになる、所謂教育玩具の出現も當然な事だらう、故に斯界の雄たる豊田屋の主人としての我が倉持長吉氏の絶えまなき苦心が存在する所以である。氏は茨城縣の人、結城郡西豊田村に諏訪太郎氏の令弟として生れたが、明治二十五年十一月、倉持家を繼ぎ、前名昭を廢して先代の長吉を襲名するに至つた。氏は殉教者の如き敬虔なる態度をもつて、家業に精勵する傍ら、東京實業聯合組合副會長、對露輸出組合監事、南洋貿易振興會理事、東京信用組合理事等の要職に推され、殆んど遍處するところない有様である。殊に氏が馬喰町一丁目町會長としての努力は目覚ましいもので、同町に共存共榮の實が擧がり、町民相互の美しい親睦さも氏の力に負ふところが極めて多い。従つて町民からは、慈父に似たる信望と崇敬を送られてゐる。稀にみる高潔な人格者である。家庭には母堂なみ刀子自の外、貞淑の譽ある長子夫人及び二男二女あり、長男誠一君は慶應大學、二男守二君は東京高等師範附屬小學校、二女貞子嬢は跡見女學校在學中、長女和歌子嬢はお茶の水高女出身の才媛、入夫の福雄君は東大大學院在學中である。



清野薫

明治卅五年四月八日生
東京市芝區三田四國町二ノ二

ふるへるやうな情緒の南國には、主として熱情家が生れ、冷やかな理性の持主たる北國人が、陰鬱な北國のアトモスフィアに育つた事をみても大自然の感化の力が極めて強い事をハッキリと認識することが出来るだらう。されば高山と、清流に恵まれてゐる山梨縣が敬すべく、また親しむべき人格者を生むのも決して不思議ではない。山梨縣東八代郡右庄口村の風光明媚な地に生を受けた我が清野薫氏が、さうした性格の所有者であつて更らに環境の陶冶する偉大さを最も雄辯に物語つてゐる。氏は幼にして大度あり、大正六年前途に輝く希望を抱いて單身帝都に出で、叔父に當る志田寛治氏の下に寄寓し、同氏の經營にかゝる八代電氣鍍金工場に入つて、將來工業界に立つべき地歩を築くに共に、繁務の傍ら、築地工手學校に入學して苦學力行を續けて行つた。かくて優秀なる成績を以て卒業するや、知識慾の旺盛なる氏は、更に進んで高等工業學校の専門部に入り、螢雪の功なつて茅出度同校を卒業するに至つた。然るに氏は大正十二年に至り志田氏の後を受けて之が經營の衝に當ることになつたが、人一倍に熱心なる氏は、大正十四年七月醫術及鍍金研究の爲、獨逸を始め歐州各國を巡遊すること二年、大に新知識を齎らして歸朝し、幾多の改革を斷行して奮闘した結果、現在では小石川指ヶ谷町を始め、麻布廣尾町、及大崎町等に各分工場を有し、六十有餘名の職工が致々として氏の下に働いてゐる。氏は創始の才と明哲な頭腦の持主で、現に東京鍍金組合の芝區常任幹事として斯界に重きをなしてゐる。

江川吉藏

安政六年五月二日生
日本橋區岩代町一

受難に苦む荆蒔の路を辿つて、ついに光明の彼岸に達した人ほど尊いものはない。わが江川吉藏氏も又この苦勞人の一人として、推稱すべき人物だ。氏は千葉縣南足立郡新井村の出身である。十三歳で上京して本所區林町二丁目十二番地の吉田徳三郎氏を訪れ、その徒弟となつた。二十三歳まで同家に働いた氏は、完全な熟練木工となつて同所を辭して、それから數年の間は各地の請負業者の下で、建築請負に従事して熱心に技術の鍛錬に勵んだ後、三十歳の時に獨りして淺草區新福井町に居を構へ、茲に一人前の建築請負業者として一般の需要に應じたのである。氏の眞面目な性格と、技術の堪能さは瞬く間に人氣を呼び、同業者間でも認められて來たので、明治三十年三月に岩代町に移轉し、あの震災前に至る二十餘年間に、致々として家業の發展に精進したが、嗣子がないので實弟與三松氏の長男勝三氏を養子とし、過ぐる十三年以後勝三氏に自轉車店を営ましめ、自分は靜かに老後を樂んでゐる。けれど氏は普通一般の樂隱居とは事變り岩代町々會長及び同町青年團の顧問として、壯者を凌ぐ意氣を以つて後進の指導及び町内萬般の世話を受けて、懸命に町民の共存共榮を計り一日として倦むところがない。だから町民は常に氏を遇するに長老を以つてして、何事によらず世路風霜を嘗めつくしたこの大先輩の意見をお手本として町勢の發展を計つてゐる。町民の麗しい敬老の美德だと云へる。がこれとても氏の温厚な人格が然らしめてゐることで、兩者の相合ふところに町として的美風が培はれるのである。

秋本平十郎

明治二十五年一月五日生
小石川區指ヶ谷町一四六
電話小石川六〇一七番

小石川白山開發の殊勳者秋本鐵五郎氏はわが平十郎氏の嚴父である。小石川と云へば、ヒポコンデリーな騒音をあげる東京にあつては、最も閑靜な住宅地として、その眺望に、その利便に、文化人の疲勞を癒やすに好適な土地柄である。古老のお話によると、明治の中頃までは、この地一帯はまだ樹木鬱蒼として、高臺地方の如きは、空しく疎げられ、何人も今日の發展を夢想だもしなかつた相である。その時に他郷の人、秋本鐵五郎氏は早くもこの地に着眼し、今日の開發に資せられるところが莫大であつた。嚴父は埼玉縣人間郡富岡村の出身、明治三十九年に上京しこの開拓に専念したのであつた。平十郎氏も亦乃父の事業を輔けて計畫經營し、今日の成功を購つたのである。白山三業株式會社を創立して資本の集合に努め、やがて代表取締役として經營の任に盡瘁し、更に又その一方では、白山三業共濟會を起してその理事長の職につき、また共濟商工株式會社の創設に與つては、その取締役となつたのである。故に氏は、白山方面には多くの土地建物等を所有し、白山三業地には一千坪の新許可地を管理してゐる。現に指ヶ谷町會副會長として、また小石川區會議員として、區内自治政の樞機に參してゐる外、所得調査委員其他の公職等をも兼ねてゐる。氏は京華中學校の出身、趣味は武道に旅行とある。以て測遠尙武の氣象を養ふと共に、一面烟霞浩洋の性情を培はんとする眞面目を見るに足りやう。年齢三十四歳の少壯だとあるから、前途のほどを囑望されてゐるは當然のことと云はねばならぬ。

赤根祐次

明治十二年十一月三十日生
芝浦芝浦町三丁目三番地
電話 高輪 三九〇三番

萬國の労働者結束せよとは、獨りレツド、テロアを標榜するプロ學者の言葉ではなく、今や二十世紀の世界は、労働者群の正當なる、叫びを告げる時代である。その秋に當つて氏は、労働者の風紀を改善し、その道徳心に懇へ、自ら始め自ら働かんとするの氣風を涵養する労働自治會を組織し、よりよき無産労働者の慈父たらんとして精進してゐるのは、最も時代善に順應せる美事だと云はねばならぬ。そしてともすると矯激に墮さんとする労働者をして、正しい進路に辿らしむるは國運發展の上からも、喜ばしい事柄である。氏は山梨縣中巨摩郡西條村の出身、青少年にして横濱に出て市内火消し組合に入り、具さに辛苦を重ねること十五年に及び、次第に一方の頭領として仰がれるやうになつた。明治四十年上京して土木建築請負業を開始し、爾來居を芝浦に構へて營業の繁榮を計ると共に、同地の開發に當つた。その當時の芝浦の地は、漸く埋立工事を完了したばかりで、まだ眞剣に開拓の手を染める者がなく、空しく雜草の茂るにまかせた。荒蕪地であつたが、氏は細川力蔵氏等と協力して、その開發に専心した甲斐あつて、今では芝浦早頭巖壁も完成して、内國航路の汽船は何れも茲に繋留せられることになり、更に倉庫、工場、住宅等も續々建築せられ、二十餘萬坪の原野は一大市街地として、殷盛を誇るやうになつたのだ。裏面に潜む氏等の努力を忘れてはなるまい。氏は曾て南濱町副會長をつとめたこともあり、今は芝浦四ヶ町聯合會相談役の外、市内第二區四番組消防組頭に推されてゐる。夫人亦よく氏を助け、女丈夫として知られてゐる。

宮川波衛

明治十五年四月十八日生
牛込區早稲田南町八番地

豊穰な土地柄は庄内米を以て知られてゐたほどに、恵まれた自然の山形縣山形市は氏の故郷である、敦厚な人情と麗しい山水は、幼い當時の氏に薰化するところが大きであつた。山形市の素封家に生れた氏は、土地の中學を卒業後直ちに仙臺の第二高等學校に入學し、青葉城下で若人の血を燃やしながら、多幸な前途を胸に畫いて勉學にいそしみ、それから東京帝國大學工科大学土木科に進んで、斯學の蘊奥を極めたのである。工學士の肩書を得て卒業するや農商務省技師を振り出しに、千葉、岡山、新潟の各縣を歴任して、各地方に土木事業に參じてゐたが、遂に聘せられて大正十二年に東京市區劃整理局第一施業課長に就任することになつた。抑々區劃整理の地區には三種がある。(一)即ち國家が直接で施工する地區。(二)國家が國庫補助金を下附して助成する市の地區。(三)市が單獨で施工する地區である。そして(一)が十五地區(二)が二十地區(三)が三十一地區に分れてゐて、わが宮川氏はその(一)(二)の部に屬する地區を擔當し、多數の部下を督勵して、不斷の精進を續けてゐるのである。帝都は日本文化の代表地で、その地劃の整備は都會美のエッセンスでなければならぬ。特に第一施業課は、京橋、芝、赤坂、麴町の一部、本所、深川を抱擁し、最も區劃整理上至難な地域であるから、氏の敏腕に俟つところが多い。趣味としては觀劇を第一としてゐる。吉左が現れ、梅幸がおどるクラシズムに陶酔を購ふ氏の情緒は床しいものが多いといへよう。

井上伊三郎

明治十四年十月生
東京市京橋區南鍋町一ノ五
電話 銀座 一七六〇番

音楽と映畫とスポーツは、時潮に先行するをもつて唯一の誇りとする。所謂近代人の餘技と云ふよりは、むしろエレメントとも云ひつべきものである。モダンテイックなムードは、コンサートに、エールに、スクリーンに醸されるといつても過言ではあるまい。さればこゝに松竹キネマの躍進的な發展があるのだらう。加之近代人は、こうしたフレッシュな感覺に生きると共に、クラシックな陶酔をも捨てやうとはしない、夢幻的なアトモスフィア、錦繪情緒、懐古的、そうした歌舞伎劇がまた近代人に迎へられてゐるのは、ジャズ的な近代人の特性かも知れない、ともあれ、時と人に迎向することのない永遠性をもつた歌舞伎劇と映畫によつて、斯界に一大王國をなしてゐる松竹の前途こそ、測り知るべからざるものだらう。この松竹にあつて現に取締役の榮職を占め、我が演劇興業界に重きをなしてゐる井上伊三郎氏は東京府の人、井上吉之助氏の長男として、明治十四年十月、聲轂の下に産聲をあげたが、十八歳の時、嚴父の後を承けて家督を相續した。氏は始め軍籍にあり、精動をぬきんで從七位勳六等、陸軍中尉に昇進したが、後感ずる處ありて除を退き、演劇興業界に入つたのであつた。氏が今日の榮ある椅子を確保するに至つたまでの苦心と努力はまことに超人間的なもので、よく忍びよく闘つて、燦然たる奮闘史をつくつたのであつた。資性濃厚篤實、趣味には義太夫と撞球があり、同氣クラブの會員でもある。家庭には貞淑の譽高き貞子夫人との間に道子嬢がある。

中塚榮次郎

明治七年十二月生
東京市芝區白金三光町五六

粗惡な圓本や、低級出版が簇生して讀書界を攪亂せんとする秋、卓然屹立流俗の間に超越して、國民に美しい理智の實を結ばせやうと眞面目な高級出版に従事し、墮落せんとする我出版界に萬丈の氣を吐きつゝある人に、我が國民圖書出版株式會社社長中塚榮次郎氏がある。氏は一世の義人田中正造翁を生んだ野州の一寒村に生れたが、幼にして大度あり、年少十七才の時、青雲の志を抱いて渡米し、桑港ポリテクニック高等學校卒業後、桑港英語學校長として育英事業に従事し、大に其英才を讃えられたものだ。後コロンビヤ大學に學び、優秀なる成績を以て同校を卒業すると共に、マスター、オブ、ロー、マスター、オブ、デプロマシー、ドクター、オブ、ファイロメリーの學位を受け、更に歐洲各國を巡遊した。歐米に滞在すること實に前後十有七星霜、遂に新知識を齎して歸朝するや、直に國民文庫刊行會を創立して國民文庫其他を刊行し、傍ら英文雜誌「ジャパンマガジン」を主幹して理智の閃めきを見せ、後彼我貿易の發達に資する處が多かつた。大正九年時代の趨勢に鑑み、國民圖書出版株式會社を創立して之が社長となり熾烈なる責任觀念の下に福澤論吉全集、萬國圖案大系、及日本文學大系等幾多の高級出版を出し、明日の出版界に大きな暗示を與へてゐる。氏は又大正十五年十一月衆望を負ふて芝區會議員に擧げられ、又現に市會議員として重きをなしてゐる。氏人と爲り謹嚴、光風霽月の襟度と謙讓の美德を備へ、稀に見る正義の士で、趣味を讀書に有し、旺盛なる知識慾を満足せしめてゐると云ふ。鶴子夫人との間に一男一女がある。



松波 勝次

明治十六年十一月七日生
東京府下入新井町不入斗一三二八

成功へ運ぶ最も速い馬は苦難であると、セネカも言つてゐるやうに、苦
惨な艱路を血と涙で開ひ續けた人に依つて成功の榮冠は獲得されるのであ
る。我が松波勝次氏の成が功また奮闘の賜であつて、其の奮闘史の第一頁
は、日露戦役終結を告げて退營するや、青雲の志を抱いて單身石川縣鹿島郡
御祖村を後に上京した二十六才の時に始まらねばならない。嚴父久次郎氏
の三男に生れたが、生家は大きな米問屋であつたので、先づ帝都の土を踏
むや大森驛前に米商を開業し、大に身を粉にして働いたものだ。かくて大
正十年には現住所に、間口五間の大商店と倉庫二棟を新築するに至り、今
日では店員五名、賣上年額二百萬圓、納税高年二千餘圓と云ふ町内屈指の
大商店となつた。従つて氏は入新井町白米商組合長を十二年、東京白米商
組合評議員を八年つとめ東京の有力な米問屋として日本全國の各縣廳よ
り優待されてゐる。氏はまた家業の傍ら常に町内自治の爲にも奔走して十
一年より町會議員に二回當選、十二年入新井町西ノ町區長となり、震災當
時には避難民救護の爲に米倉を開放して人々を感激させ町長より感謝状を
贈つて厚く表彰された、現在では町會議員、西ノ町區顧問で、嘗て土木委
員たりし事もあつた。氏は愛郷心にも富んで、郷里の學校青年團等には過
分の寄附をなし、十五町歩余の地所を持つた郷里で二番の大地主であり、
宏大な別荘あり、又多額納税の資格者である。やがて多額議員としての氏
を貴族院に見る日も近い事であらう。家庭にはしき子夫人との間に錦城
中學在學の勝清、信夫兩君及びすみ子嬢がある。

江幡 俊男

明治二十年三月十一日生
東京市芝區伊皿子町七十一

文明が高調せられ、社會の生存競争が激甚になればなる程、新しい病が
次から次へと殖えて行く。強烈な色彩や、音響の裡に蠢めく都會生活者に
比較的耳鼻咽喉の疾患に悩む人が多いのを見て知られるのである。江幡
病院長として有名な江幡俊男氏は、多年獨逸に留學し、耳鼻咽喉及外科
に對して特殊の技能を有する人である。明治二十年三月十一日をもつて千
葉縣印旛郡佐原町に呱呱の聲を擧げたのであつた。氏はまづ郷費を終るや
遠く九州長崎縣立の平戸中學校に學び、同校を卒業すると共に歸郷して、
千葉醫學專門學校に入學し、優秀なる成績を以て校門を辭したのは、大正元
年の春であつた。かくて卒業後氏は直に義兄が經營せる岩島病院の外科に
勤務して、實社會に最初の一步を踏出し、新進氣鋭の醫師として大に奮闘
したものだ。職に留ること十一年、後轉じて淺草の千葉病院に勤務し、千
葉博士に私淑して専ら耳鼻科を研究し、大に其前途を嚆望せられてゐたが、
大正十一年燃ゆるアンピシヨンを胸に抱いて獨逸へ留學することになつた
爾來同地にあつて親しく泰西の醫學を研究し、震災後新知識を齎して歸朝
するや、直に招かれて職を茨城縣下妻病院に奉じ、多年の蘊蓄と、該博な
る知識とを以て信望を一身に集めてゐたが、大正十五年遂に現住所に病院
を創立して専ら之が經營の衝に當る事になつた。氏の専門は耳鼻咽喉科及
外科だが、流石に獨逸へ留學したわけであつて凡ての設備が整ひ、氏の眞學
な態度に對して、頗る殷盛を極めてゐる。資性廉直にして温雅、趣味
を音樂劇等に有する處を見れば氏も亦情の人たるを失はない。夫人を百合
子と云ひ貞淑の譽高く、家庭は極めて圓滿である。



金子源三郎

明治二十四年一月八日生
市外淀橋町角管四〇一

一、生徒の實力養成と共に各自の個性を尊重し、己が好める型に偏しな
いこと。二、實際的活動の出来る人を養成する事。三、健全なる思想の注
入に力める事。四、個人主義を排して協同的思想を養成する事。五、制度
設備等を改善して、生徒をして喜んで修學し得る様にすること。この五ヶ條
は實に四ツ谷商業實務學校々長たる金谷源三郎氏が躬行實踐しつゝある教
育方針である。氏は明治二十四年一月八日を以つて郡馬縣新田郡鳥之郷村
字長平に生れた。郷里に學を卒へた後、上京して東京高等商業學校教員養
成所に入り、明治四十四年卒業するや、遠く關西の地に赴き、神戸尋常小
學校の教師となり、教育界に第一歩を踏み入れた。氏はいたいな兒童に
對する教育が如何に至難のものであるか、又教育の如何に重要なかを知
ると共に、燃ゆるが如き愛着を感じて爾來己が人格養成に力を注ぎ、自己
をかへりみて毎日疚しさを覚えるやうと努力しつゝ、この教職に携はつた
のだつた。其の後姫路商業學校に教諭として聘されたが、教育の根柢はや
はり小學兒童の教養にありとなし、上京して淺草精美高等小學校の校長と
なり、彼の淺草六區の誘惑多き環境にある兒童に對してよく人格の光りを
與へ、薰化宜しきを得て父兄及び兒童から非常なる尊敬を受けた。大正七
年四谷商業實務學校長となるに及び、同校が夜學校にして生徒は多く惠ま
れざる位置にあるを思ひ、前記の如き綱領により、専ら着實なる主義の下
に兒童の心に確固不動の信念を扶植してゐるのである。華美を避けて飽く
までも質實に精進する氏の人格こそ現代にあつて尊いものであらう。

増田重徳

明治二十一年三月十日生

前には日本海の怒濤岩を嘯み、後には巍峩たる中國山脈が覆ひかゝつて
ゐる。かうした大自然の威嚇は鳥取縣人をして、おのづから精神の氣を養
はしめ、物質的に天恵を持たない代りに、精神的に發達せしめてゐた。我
が東京府會事務局書記長たる増田重徳氏は、實にかうした環境に育ぐま
れた人で、生地を鳥取縣西伯郡米子村とし、郷土的の感化を充分に受けて成
長したのであつた。少年期に於ける自然の讚美者たりし氏は、長ずるに及
んで土に對する憧憬を持つに至り、遂に氏を馳つて郷里なる農林學校に學
ばしむるに至つた。かくて農學の研究に幾春秋を累ねたが、年と共に氏の
燃ゆるが如き智識慾は旺盛として據頭し、氏の進取向上の精神に一層の力
を添へ、前途に輝く希望を抱いて上京し、日本大學に入學して只管雪の
功を積んだ。併し不幸病の爲に中途にして退學し、遂に健康の回復するに
及んで、職を東京府會事務局に奉じて書記となり、公的生活に最初の一步
を踏出したのであつた。以來、多年の蘊蓄と天賦の才能を發揮して職務に
精勵したが、囊中の雖は忽ち認められ、遂に拔擢せられて書記長となり、
以て今日に及んでゐる。元來此種の事務は複雑を極め頗る難事とされてゐ
るにも拘らず、常に不偏不黨あらゆる情實に超越して、公平に事務を遂行
する處儘かに其手腕の凡ならざるを最も雄辯に物語つてゐる。氏人と爲り
圓轉滑脱する交際に巧みで個性の圓滿に發達した人である。趣味を撞球に
持ち、而かも酒豪で玲瓏玉を轉すが如き喉の所有者である。夫人をかね
子と云ひ長男一郎外に長女一枝がある。

白鳥徳之助

明治十四年二月生
牛込區原町三ノ七五番地
電話牛込二六四〇番

蜿蜒として遠く遠州灘に注ぐ天瀧川の、遙か源に遡つて諏訪湖に近い長野縣上伊那郡は氏のふる里である。我が國近代地方文化の先驅となつて様々の波紋を描き出して長野縣下は、數へ來つて人材詢に缺かないが、就中伊那郡下よりは幾多の名士を産んで居る。嘗つては教育界の指導者として後進の扶翼に盡したる伊澤修二氏を始めとし、その令弟にして現に政界の重鎮たる前市長伊澤多喜男氏、さては警視廳中谷警務部長等數へ來れば赤門出の率に於ても此の附近は全國に冠たるものである。我が白鳥氏が、青少の頃發憤を忘れず自助獨立敬虔な態度とたゆみない努力で終始一貫今日の地位を築き上げたことも亦決して偶然ではない。氏は明治三十二年浦和稅務署臨時雇を振出しに、翌年小石川區役所に入つたが、其間會計課から經理課と轉々する内に囊中の餘は忽ち認められ、大正八年五月には主事に、九年には道路局主計課長更に十年には庶務課長とトク／＼拍手に果進して幾多の功績を残し、十一年には遂に小石川區長に擧げらるるに至つた。以て氏が凡骨にあらざるを窺ふことが出来る。かくて十三年轉じて東京市地理課長となり、後經理課の要職を占めてゐた、大正五年十二月には更に擧んでられて本郷區長の椅子に就くに至つた。かくの如く氏が名もない一雇員から身を起して現今の樞要なる地位を贏ち得た血と膏とを以て知られた過去の道程は儘かに現代の青年の語教訓たるを失はぬ。長い星霜を経て鍛え上げた丈けに圓轉滑脱で而かも其鮮かなる事務的材能に至ては東京市役所中第一人者を以て稱せられてゐる。

谷田志摩生

本郷區菊坂町七〇番地

一將功成萬骨枯る。それは餘りに悲惨な叫びではないか、死ぬるには聊か多く、生きには少ない金を支給せられてゐても、誰一人として温かい同情の涙を灑ぐ者もなく、悲惨な運命の下に措かれてゐる廢兵の生活を、克明に見せ付けらるるに及んで奮起し、廢兵も人間であるとの標語を掲げ自ら勇ましく第一線に立つて、或は當局に陳情し、或は街頭に獅子吼して、一意専心その待遇の改善に涙ぐましい程の奮闘を續けてゐる人に我が谷田志摩生氏がある。氏はその名が物語る如く三重縣鳥羽郡志摩の人、幼にして頭語稀に見る明晰な頭腦の持主で高等學校在學中高等文官試験に合格した程の秀才である。氏が未だ學窓にある時、日露の風雲急にして遂に干才を交ふるや、氏は直に海兵に徴されて出征し、而かも旅順港封鎖の際、決死隊として天津丸に乘込み、實に生死の巷を往來して殊勳を樹て、功七級金鷄勳章を賜つた。平和克復の際凱旋し、自己の尊い體験から廢兵の待遇改善を高唱し、或は政府に陳情し、或は街頭に立つて輿論の喚起に力めると共に、一方各市町村愛國婦人會等と連絡をとり、全國廢兵の住所を調査し、北海道に廢兵村の建設を企圖する等、あらゆる方法を講じて之が救済に當つたので、當局も氏の至誠に感動し遂に大正十二年恩給制度を改善するに至り、茲に宿志の一端を達することを得たが、之が爲氏は私財五萬圓を蕩盡したと云ふ。その功績の偉大なるを思ふと共に、斯の人は區會議員として本郷區民の有することは大なる誇りである。夫人節子又内助の功多、賢夫人として知られてゐる。

中村義惠

明治十一年六月十一日生
東京市芝區日ノ出町七

文化は水より生れるとか、まこと、歴史をひもといて、エヂプトの文化を尋ねる時、其處に洋々たるナイル河の流れがあり、釋迦を生んだ印度には、菩提樹を縫つて、水も豊かに流れてゐる、ガンヂス河があるのを見出すのである。ギリシヤ、ローマの榮華が、地中海から生れたと云ふ事を、否定する人があつても、南支那の發達が、揚子江から生れたといふ事を是認しない人はないであらう。まこと都會の發達は、水によつてもたらされるものが、甚だ多いのである。東京灣に面する芝浦が、最近著しい發展を遂げたのも、また築港にまつ處が、極めて多く、これがために奮闘して來た人々の努力は、推稱に値ひするものがある。即ち東京灣船舶荷役人請負組合長として知られた、我が中村義惠氏が其の一人である。氏は千葉縣市原郡千穂村白塚の人、夙に郷關を辭して、横濱市松陰町の安室勝吾氏の許に寄寓してゐたが、當時、困難とされてゐた芝浦に船を入れるべく、荒川敬氏が計畫するや、氏は之れに加つて東奔西走し、はじめて、第三長久丸が芝浦へ寄港したのは、大正七年の事であつた。爾來これに刺戟されて船舶の出入次第に頻繁となり、遂に大正十五年、芝浦棧橋の竣工と共に、今日の殷盛を見るに至つたのである。氏は現在釜山嶺山を始めとし、三陸汽船、大阪商船等の仕事を一手に請負ひ、荷役人夫二百餘人を使役して、斯界の牛耳をとつてゐる。氏人となり重厚内に一片稜々の氣骨を存し、義の爲、人の爲とあらば、敢えて水火の苦も辭せざる男性的氣魄と、涙とをもつてゐる、とく子夫人との間に戸板高女在學の信子嬢一人があり、家庭は極めて圓滿である。



皆川勇次郎

明治八年一月十六日生
東京府下入新井町新井宿二、三六〇

都會の膨脹は必然郊外の發展を意味する、だが最近郊外の異常な發展はそれ以外のより主要な分子を含んでゐる。即ち都會より郊外へといふ聲が、感覺をもつて生きやうとする近代人をアトラクトするに充分であること、文化住宅に適應した土地は郊外であるといふこと、それに、郊外發展のために種々畫策し、努力してゐる、郊外有志家の力とが、今日の發展を齎したことは云ふ迄もない。全く、郊外と云へば第一に大森を聯想せしむる位極めて短時日の間に急速度の發展を遂げしめた事は其裏面に有志の隠れたる大きな力のあることを忘れてはならぬ。我々は其の隠れたる功勞者の一人として茲に我が皆川勇次郎氏を擧げねばならぬ。氏は入新井町に生れ、入新井町に育つた。それ丈けに氏は人一倍愛町心もつよく、大正十四年には町會議員に當選したのであつた、又大森耕地整理委員、大井耕地整理委員としての功績もあり、八景坂世話人頭として十有餘年、消防小頭二年、副組頭二年を勤め、町内になくならない有志の一人として常に献身的努力を惜まなかつた。天祖神社氏子總代、大森俱樂部委員としても寄與する處多く、現在では大正十五年に創立された八景會の會長及び、八景坂區長の榮職に就き區内の信望と崇敬を一身に集めてゐる。氏は先代兼造氏の後を繼ぎ多くの地所家作持として幸運の一路を辿つてゐる。其處に私利私慾を超越した尊い努力が生れるのである。長男正一氏は入新井町々役場の庶務係長で、餘暇あれば、自治體研究のため各方面を視察する等、氏に似て儕輩の信望を博してゐる。

竹内健太郎

明治二十六年三月十一日生
東京市浅草區田町一ノ四三

人は、この世に生れ出でたからには、たとへそれが、苦難の山路でも、或は幸福の野でも、たどり、たどつて生きてゆかなければならない。人生は、生から死への連鎖であつて、死のメツカに歩みゆく可憐な順禮姿が、人生の赤裸々な姿であるとは云へ、病魔の呪に燃えた鞭を甘受しながら、生きてゆかねばならない人々は、あまりにも悲惨である。従つてこれらの人々に更生の喜びを與へんとする醫師の使命は、又とない尊いものである。我が産婦人科醫として有名な竹内健次郎氏は明治二十六年の春、千葉縣東葛飾郡小金町に呱呱の聲を擧げた。夙に京北中學を卒業すると共に、將來刀圭界に自己の進路の展げつゝあるを見て慈惠大學に學び、大正六年、優秀なる成績をもつて同校を卒業した。此前途ある若き醫學士は卒業後、直ちに職を水戸市の秋本病院に奉じ、同院の産婦人科にあつて實地研究に没頭すること三星期、後聘せられて山東省守備軍鐵道病院の囑託となり、産婦人科を擔當して其蘊蓄を見せ、大に其前途を囑望せられてゐた。職に止まること四ヶ年、後上海の福民病院に轉じて二ヶ年勤務し、大正十四年、現住所に獨立して醫院を開業するに至つた。氏の溢るゝばかりの温情と、眞摯なる態度とは其優秀なる技能と相俟つて、いやが上に信用を高め、家業は幸福の一路を辿つて、今日に至つてゐる。氏は極めて正義の念強く、然かも人に接するに毫も城府を設けず、眞に親しむべく敬すべき紳士である。夫人はたま子と呼び、發行、正明、清文君の三男があり、家庭は極めて圓滿である。



大島亨藏

明治三年四月 生

江戸川上水道は南葛、北豊島、南足立の三郡十二ヶ町村に給水し、工費一千三百四十萬圓、人口五十餘萬の生命を維持する大事業である。而してこの管理者であり創立者である我が大島亨藏氏の名はこの事業と共に永遠に傳へられなければならない。氏は北日本の秋田市の人、明治二十七年三月、縣立秋田師範學校を卒業して、直ちに縣下の小學校に教鞭をとつたが明治四十一年六月東京府屬となつて専ら教育行政に執掌し、次いで大正六年三月選ばれて、大島々司となり、更らに八年十一月南葛飾郡々長に榮轉した。そして高等官五等に叙せられ、從六位を賜つたのは、十一年の七月であつた。これより先、水道計畫が樹立されて工事に着手する間もなく資金難に陥つたので、氏は熱誠をもつて、安田銀行頭取安田善四郎氏を説き六百萬圓を融通せしむるに至つた。かくて工事完成に至るまで何等の醜態なる疑獄事件をも惹起せず、殊に工期九個月を短縮、及び工費百萬圓を餘して、之を第一期擴張費に充てるといふ、水道界稀にみる好成績を擧げたのであつた。氏は郡長當時、江戸川水道管理者をも兼ねてゐたが、大正十二年八月專任管理者を置く事となるや、氏は衆望を負つて其の榮職につき爾來繼續して果選せられて、今日に及んだのである。氏資性廉直にして恬淡、其生活も質素であるが、其の玉成された人格は多數の部下を崇敬せしめるに充分である。それは組合出入の請負師が水道工事の完成後、氏の爲めに銅像を贈呈せんとしてゐる一事でも推知する事が出来やう。氏は趣味として讀書を好み、寸暇を惜んで古今の良書を繕く外、俳句を良くし、忙中閑ある英雄振を示してゐる。



北村元吉

慶應三年十月二十五日生
赤坂區青山南町六ノ二六番地
電話青山一〇〇九五番
九六番

帝都藥種商界に重きをなし、而かも一方自治公共の念に厚く、過去數十年日夜國民の爲に奔走し、現に赤坂區會議員として名を馳せて居る人に北村元吉氏がある。氏は夙に藥學の方面に志し、砥礪學究に努むること數年、明治十七年早くも藥劑師に合格し、爾來斯業に不斷の努力を續け、藥種商として名を成すに至つたのである。當時は醫學さへ極めて幼稚なものであり、従つて從屬的な地位にある藥學及藥種類の方面に至つては化學發達の今日よりしては想像だも出来ない程であつた。而も氏は當時より學理的な化學作用に立脚する調劑をなし、同業者間に於て新進として目されて居たものである。爾來本邦の醫學界は急速な發展を遂げ、遂に今日の如き世界の先進國に比して毫も遜色なき程度に進んだが、之に伴ひて藥學にも亦独自の地位を作るに至つたので、斯業に督勵怠りなかつた氏の業績は大いに見るべきものあり、開業以來順風に帆をあげた如く今や名聲噴々たるものあるに至つた。氏は更に業餘自治公共に力を致し、之に奔走努力を續けること久しく、特に町内衛生方面には顯著なる功績を残し、曩には起つて衛生組合設立の要を説き、之が成立後も役員として常に事業遂行の要路に當り、町内の消毒、住民衛生思想の鼓吹、或は惡疫豫防に幾多の貢獻を擧げて居る。更に南町々會理事として盡瘁すること二十有餘年、其他副總代會計監督、町又總代學務委員等の要職を占め、現に區會議員として區政に參與し、の刷新發展に奔走して居る。かく人格に於て又功績に於て區の代表者たるの面目を維持する氏は、家庭に於ても三男八女の子福者である。

成田千里

明治十五年八月六日生
府下高田町巢鴨三六一五

教育界の權威として又恩人として名を馳せて居る東京市立第一中學校長成田千里氏は自然の美に恵れてその奇勝を誇る大吠呷に近き千葉縣海上郡銚子町の生れである。夙に教育界に身を立てんと志し、長ずるに及んで同縣立師範學校に入り日夜研鑽倦む所を知らず、或は學業の涵養に、或は人格の向上に、自己將來の重大なる責任を感じしつゝ、螢雪の功を積み卒業の後更に専門的に技能鍊磨の要ありとなし、笈を負ふて上京し東京高等師範學校に學び、刻苦精勵克く教育學の蘊奥を極め、明治四十三年拔群の好成績を以て校堂を出づるや、直ちに職を東京府立豊島師範學校教諭に奉じたのであつた。以來職に留まること九ヶ年、其間専ら心血を盡いで育英の事に當り、智育に體育に德育に之が向上を計り、大に成績の見るべきものがあつたが、然ゆるが如き氏の學究心は、再び氏を驅つて大正七年東京高等師範學校專攻科に學ばしめ、遂に優秀なる成績を以て卒業するや、職を東京市役所學務課に奉じ、時の課長澁谷徳三郎氏と協力して都下教育界の刷新に力を注ぎ、幾多の功績を齎した。職に止まること四ヶ年、次で府立第一中學校創設せらるるや、推されて之が校長となり、以來深遠なる學殖と、崇高なる人格とを以て育英事業にいそしんでゐる。氏は本年四十有五歳にして思慮益々圓熟し、其聰明にして溫雅なる資質と相俟つて愈々信望を高めてゐる。夫人を順子と云ひ貞淑の譽高く、現に職を東京府女子師範學校に奉じ、曩に文部省にり研究生として海外に派遣せられ、目下英京ロンドンに於て専ら新智識の研鑽に力めてゐる。



山尾市太郎

明治十九年二月十日生
神田區東紺屋町三二番地
電話大手一八七番

帝都一流の染物業者として一汎く其名譽を博する一方、現に神田區會議員として區政の樞機に參畫して貢獻する處極めて多く、其材幹を遺憾なく發揮して居る人に林芳治郎氏がある。氏は生粹の江戸つ兒として生れ、順天中學を卒業するや、名を工業界に成さんと欲して京都高等工藝學校に入學し、染色科に籍を置き、斯業の學理と實際とを研鑽し、卓越なる手腕を涵養して實社會に足を入れんとしたが、時偶々徴兵検査に合格して輜重兵第一大隊に入營し、よく軍規を奉じ居常班中の模範兵として目され、軍曹に陞進して除隊するに至つた。かくして再び實社會の人となつた氏は、既修の染色業に着手して絹布染色に主力を注ぎ、多數職工を僱勵して各方面の注文に應じたが、深く近代人の趣味と嗜好を研究して染色に不斷の創意と工風を凝らした結果は、獨特の技巧として大に名譽を博するに至つたのである。曩に東京博覽會の開催せらるゝや、多年の苦心創案に係る錦紗兩面染を出陳して一等賞の榮譽を荷ふに至り、關係方面に多大の刺戟を與へ斯界に一新紀元を劃したものであつた。かくて多年の研究と造詣は早くも認められて斯思の重鎮となるに至り、業務は逐年盛業に向つて現在ではあらゆる文化の粹を蒐めた流行の府たる三越吳服店の指定工場となり、滿都の紳士淑女の衣類は氏の監督の下に染色されて居るのである。氏は更に公共に盡す所多く、早くより在郷軍人分會理事、青年團顧問、町會理事等の要職を占めて居る外、先般區會議員に選出されたが、齡未だ四十二歳、將來の發展は期してまつべきである。

林芳次太

明治二十二年生
芝區烏森町一番地

曾て芝區會議員補缺選舉の際、區内理髮業者を背景に、憲政會の猛將横山勝太郎氏を向ふに廻はして羈を争ひ、敵の本壘に肉迫して心膽を寒からしめた闘士があつた。不幸志を得なかつたが、稀に見る争鬪戦として芝區民の視聽を敵たしたものであつた。此熱血兒こそ誰あらう。我が理髮業界の大立物として錚々の名を擡にしてゐる山尾市太郎氏である。氏は鳥取縣の産、夙に大志を抱き、播磨の地を後に遙々上京したのは、實に氏が十三歳の折りであつた。假令金剛不壞の決心を抱いてゐたと云へ、上京當時は流石に懐郷の念に馳られ、人知れず涙を咽んだことであらう。氏は上京すると間もなく質店に身を寄せたが、然し質屋營業其物は仁俠の氣に富んだ氏の性格とは餘りに隔りがあつた。そこで轉じて芝區愛宕下の米床と云ふ理髮店に入り、以來奮闘努力只管技術の修得に力め、十ヶ年といふ永の年月を恰も一日の如く主家の爲に忠勤を勤み、米床から巢立つて現在の地に花々しく理髮業を開いたのは實に明治二十五年の事であつた。所が優秀なる技術と、氣の利いた客の取扱ひとが人氣を呼んで、店は何時とも素晴らしい繁榮振り、到底一ヶ所では合に同はないので一時附近に支店を出してゐたが、現在では店舗を擴張し多數優秀なる技術者を雇入れて、鮮かな技能を見せ、一路幸運を辿つてゐる。氏はかうした繁忙の中にあつても常に心を公共の事に砕き、居町の共榮親睦は勿論、常に同業組合の樞機に參畫して貢獻する處極めて多く、其功績は定に没すべからざるものがある、夫人をはな子と云ひ三女がある。

小島富次郎

明治十六年十二月生
東京府下蒲田町新宿三六〇

磨き上げられた寶石の燦爛たる輝きに、云ひ知れぬ崇高な氣持を覺えるやうに、受難の人生を闊つてきた成功者の人格は、限らない尊崇の念と、慈愛に似た親しみを與へるものである。我が蒲田町名譽町長たる小島富次郎氏が實にさうした人格者であり、成功立志傳に列すべき人である。岐阜縣羽島郡中尾村の故郷を後に遙々上京したのは、日露の戦も終熄をつげた明治三十八年の事であつたが氏は直ちに月島機械株式會社に入り、此處に三ヶ年間汝々として忍苦の修業を積んだ。然るに偶々山本兼太郎氏の令兄山口俊太郎氏が月島工作所を創立するに及んで氏は拔擢せられて支配人兼技師となつた。亦以て氏が如何に非凡の才能を有してゐたかを知ることが出来る。かくて大正六年月島へ小島鐵工所を獨立經營して、水力電氣及び一般機械の製作に従事し、外國機械の輸入防壁の目的をもつて盛んに奮闘したものだ。後大發明をなすべきアンビションを抱いて、現住所たる蒲田町に、移つたのは、大正十年の事で、以來國家的事業を機械の發明に向つて新なる努力を繰返へしてゐる。此外氏は町政の刷新と自治の發達に心を注ぎ大正十四年町會議員に當選し、更に昭和三年一月、選ばれて蒲田町名譽町長となり自治の礎石を盤石の泰きに置くに與つて大に力があつた。氏は常に國家奉仕の觀念、他人に迷惑をかけざることを信條とし、物質慾に馳られて公共の利害を無視する人々には到底見られない殉教者の如き面影がある。趣味には梅若流の謡曲、團扇等があり、家庭には夫人ははな子との間に二男一女がある。尙長男靖一君は浦和高校在學中の秀才である。

秋口久八

明治廿二年二月八日生
東京市芝區高輪南町卅

闘争そのものゝやうな近代生活は、複雑で、躍動的激流的で、ジャズのやうなテムポをもつて營まれてゐる。されば人々は、癡痺と錯亂から脱れるべく、最近ドライブ、キャンピング、ビクニツク等を生活のリズムの中に織り込むやうになつた。殊にドライブは、モダンライフのシンボルとも云ふべき程であつて、自動車と近代生活とは刻々と近づき確く結ばれてゆきつゝある。従つてシボレー、フォード、オーランド等の名は近代人のコンモンセンスであつて、其の販賣店たる秋口野自動車會社の名も近代人に親しみ深いものの一つである。現に同社の社長として、斯界に令名を馳せてゐる我が秋口久八氏は滋賀縣の人、秋口久彌氏の二男として大上郡彦根町に生れたのであつた。年少十五歳の時渡米して、サンフランシスコハイスクールに學び、卒業後自動車界に君臨するフォード會社に入社すると同時に、フォードスクールに學び、自動車學を専攻すること四星期、後更に同社に於て六ヶ月間販賣見習をなし、轉じてキヤルフォード支店に勤務する事になつた。かくて職に留ること三ヶ年、大正八年歸朝して直に自動車販賣業を創始し、先づセールフレザー會社四國地方總代理店となつた次で同十三年フォード自動車會社の日本直營業を兼ね、大に特異性氣を發揮して自動車界に擡頭の地歩を占むるに至つた。現在氏は秋口野自動車會社社長たるの外、日本ゼネラル・モーターズ株式會社、シボレー及びオーランド特約販賣店の主腦者として、卓絶せる手腕を見せてゐる。氏は運動に趣味を有する米國仕込みの明るい性格の持主で、家庭には八重子夫人との間に二男がある。

勝亦查一

明治二十三年八月三十日生
東京市芝區三田四町十五
電話 三田 三七八七番

電氣と蒸気は科學の双生児である、けれども、二つは平凡な、月並な双生児ではない、電氣は、あらゆる方面に、時代の寵兒として歡迎され、刻一刻と蒸気の傳統的領野を躡食しつゝあるのである。其の理由は、電氣と蒸気との性質上の根本的差異もあるが、急流を有して、天恵の電氣國と稱せられる日本に於ては、電氣のみが水力によつて、安價に、簡単に無難に動力を得られるといふことも、經濟的理由の主なるものだらう。されば經濟的行詰れる日本に於て、今後益々利用さるべき動力は電氣であつて電氣事業の將來こそいよゝゝ有望にして、又この電氣機械の製作業の前途も祝福すべきものである。この電機製作所として斯界に名あるのが、我が勝亦查一氏の經營にかゝる勝亦電機製作所である。氏は靜岡縣富士郡吉永村の人、夙に上京して電機製作業に従ひ、大正五年四月、芝區三田四町に創業し、同年十月現在地に移轉、其の後再三擴張して今日に及んだのである。其の間氏は諸機械の不備缺點の改良及び能率本位の優秀品の發明に、苦心没頭して、遂に自動開閉器、開閉裝置、電路開閉器等のпатентを得たのであつた。現在の主なる製作品は、自動配電盤、特高低壓配電盤、油入開閉器、遮斷器及び特別高壓器具等で、納入先は、鐵道省、陸海軍各工廠、各電氣事務所、諸大會社工場等の各方面に亘り、年産額四十五萬圓を算してゐる。尙同工場の従業員は、六十有餘名に及ぶが、何れも氏の人格的指導によつて統一され、奮々たる和氣のうちに勇ましいハンマーの音

中村喜七

明治廿八年二月十三日生
東京市芝區月見町二ノ四

美を慾求して已まないのは人類の本性である、されば幾多の建築物も常に時潮と國民性を背景として生れ、其の材料として、構造美の豊富な花崗石、大理石が用ひられて來た。だがかの關東大震災は、これら天然石材が人類に永久的棲家を與へるものでない事を事實の上に立證した。即ち理想的建築材料は、美的であると同時に耐震耐火的でなければならぬ事がつたのである。かくて建築界にもたらされたのが劃期的セメント時代である。然してこの處女地を開拓したのが我が中村喜七氏であつた。氏は岩手縣二戸郡金田一村に生れたが、早くから天然石材が耐火的でなく、それに繊細微妙なる彫刻をなし得ないこと、また焼成品は製作上大きき及び色合等の制限を受ける缺點があるのを認め、如何にもして之に代るべき理想的材料を發明せんものと、大阪に於て之が研究に没頭してゐた。かくて大正十一年多年苦心の結果セメントの永久的硬化性を利用した中村式グラニツトを發見して、之が特許を受け、翌年グラニツト商會を創立して専ら之が經營の衝に當ることになつた。氏が藝術魂を打ち込んで所謂工業化せる此理想的建築材料は、忽ち時代の嗜好に投じ、年々幾何學級数的に其販路を廣め、昭和二年には東京に支店を設くるの盛況を呈するに至つた。現在其主なる納入先は、日本赤十字社を始め三越呉服店神戸支店、横濱正金銀行農工銀行本店、徳川公爵邸、陪審院等であるが、將來社會の進歩と共に、其發展は寔に計り知るべからざるものがあるであらう。氏は凡ての發明家に



堀内福雄

明治十二年二月十五日生
本所區外手町三四番地
電話 墨田一六一八番

聖クリストは、貧しき者は幸なり、と云つてゐる。その意味は決して貧乏を謳歌したのではなく、貧しき者のみの共有することの出来る不退轉の勇猛心を祝福してゐるのだ。死ぬるには多く、生きるには餘りに少い糧をしか與へられない時に、無産者は生活戰のために背水の陣を張らなければならぬ。其處に死を突破せんとする一大努力が拂はれるのだらう。吾等はその平和戰の闘士として、遂に今日の成功をかち得た人にわが堀内福雄氏を知る。氏は十二歳の時から店員奉公をして、幼ない身を生活の波に揉まれ揉まれてゐたが、二十歳の時に志を立て、上京し、神田區内の宮川電氣工場に入つて約五年間を精勵し、電氣メツキの術を修得した。同工場を辭してからは友人の經營に係る丸星電氣工場に入り、友人を扶けその業績を安きに置いたものだ。が自分も驕然として獨立の一步を踏み出したのは明治四十五年のことだ。現在の本所區外手町三十四番地に工場を設けたのである。そして電氣メツキ界に段々と頭角を現し、押しも押されぬ今日の成功をおさめたのだ。今では推されて同業組合評議員より、副組長にまで進み、同業者のために計るところが尠少でない。なほ又購買組合理事として消費者の利便に資してゐる。ところであの大震災の際には、悲惨にも愛妻及び家族十一名を失ひ、氏一人のみが奇蹟的に助かつた。その悲嘆の際にも同町々會々員と協力して、人命救助や配給品分配に奔走したとは、町民は一樣に泣かされたとのこと。尊い人間愛の顯現でなくてはならぬであらう。現に區會議員として區政刷新の一線に不斷の努力を續けてゐる。



中村豊吉

明治二十二年一月十二日生
淺草區聖天橋町一二

氏は茨城縣の出身である。郷里に在つた頃は服物の製造販賣業を營んでゐたが、二十四歳の頃驕然として感ずるところがあつて、上京して葬祭具製造所を創始し、經營に精勵し遂に今日の繁昌を招くやうになつた。同業組合間では夙に推舉せられて各種の役員となり、久しく淺草區支部長の職に在つたが、現在は東京葬祭具營業組合副會長に補せられて、組合員相互間の利殖と便益に奔走してゐる。それはかりか曾ては國勢調査委員、失業統計調査委員としては日夜馳驅して職責を全うし、先年の大震災に直面するや、自ら死生の間に出入して、罹災民の救助に身心を砕き、流言蜚語に迷ふ人々の心を慰撫する等、日頃モットウとする相愛の情を發揮して倦むところがなくつたと云ふ。將來此の生きた教訓に刺激せられた氏は町民相互の隣保共睦を計る自治團體の組織が、最も必要であることを痛感したので、震災直後有志と謀り、これが刻下の急務であることを力説して、町民の正しきセンションに訴へ、町會設立の實現を見るに至らしたのである。ために衆望は日一日とあがり、十四年度にはその手腕と徳望とを認められ満場一致を以て會長に推されたのである。そして今では町内の輿論を負ふて最もデモクラツトな見地にあつて、公共のために盡し、人格の人として尊敬を拂はれてゐる。氏は本年まだ漸く三十七歳で、早くもこの民望を擔ふとは、その凡庸の人にあらざるを察しえられる共に、思慮谷圓熟すべき域に入つて來たのである。前途に於ける活躍の程が想像されやう。夫人よね子との間に一男三女があり、和樂の實をあげてゐる。

熊谷廉平

明治十年十月五日生
小石川區掃除町二五

巨萬の富を祖先から繼承し、それでゐて安閑として徒食し、勤しも社會のために益するところのない人達の在るに比べて、粒々辛苦し玉なす汗によつて購つた財を、なほ惜むことなく公共のために散ずる人ほど尊い者はない。ツルゲネーフと云ふ言葉の名句に、ゴ・ツ・ビユ・ビユ（民衆の中に）と云ふ言葉があるが、かくの如き純情な人をわが熊谷廉平氏に見出すだらう。氏は宮城縣氣仙郡高田町の出身、郷黨を卒えてから漢學を専修したが、明治三十年に遂に東都に上つて世田ヶ谷聯隊新築工事に従事し、後向島天野工場に入つて汽車製造に従ひ、更に移つて清水組に入り、建築請負業の要諦を修得して獨立の素地を作り、花々しく土木建築請負業を創め、多年に亘つて修練した卓越な技能を發揮し、日を重ぬると共に斯界に重きをなすやうになつた。その主なる工事は實業の日本社新築修繕を初めとし、跡見女學校、築地盲人學校、加藤男爵邸、長谷川病院等牧學に違がない程である。かくて恒産をなすに至つて、氏は民衆の中に自らの正しい姿を見出すやうになり大正十二年 遂に徳望の歸する處推されて小石川八千代町會副會長となり。氏は常に町民のため犠牲的奉仕を怠らない、氏は又更に同十三年東京方面委員に推され管内の風紀並に生活の改善に力を注ぎ以て今日に至つてゐる。あの大震災當時に於ける活躍は實に目覚ましいもので、震災功勞者投票には大多數を以て功勞銀牌を贈られた程である。郷里の幼稚園建設の際には莫大な寄附金をしたとは、氏の人格の片影と看做されやう。夫人は子亦淑徳の譽が高い。

坂村米吉

明治元年七月二十二日生
芝白金臺町
電話高輪一六八九番

誠實を以て經と爲し勤勉を以て緯と爲し以て事を爲さば天豈に之を賞し之に授くるに成功の印綬を以てするに決して吝なるものではない。我が坂村米吉氏が三重縣の僻處より身を起して今日の成功を贏ち得たのは全く誠實と勤勉の賜である。氏は三重縣飲南郡機殿村に生れたが、幼にして胸中鬱勃たる霸氣と燃ゆるが如き功名心とを以て滿されてゐた氏は、その若さの何れ丈け小さな部分をもかうした片田舎に送ることは到底忍ぶ能はざる處であつた。仍で氏は遂に意を決して懐しい播磨の地を後に上京したのは明治二十三年の實に氏が二十二年の折りであつた。かくて氏は職を宮内省に奉ずること二ヶ年、頗る精勵恪勤の譽れが高かつたが、後將來實業界の前途有望なるに着目し、獨立してメリヤス業を始めセーター類の製造を營むに至つた。以來夙夜奮勵努力以て只管業務の刷新に力めて已まなかつた。然るに大正三年偶々歐州大戦の勃發するや我國の經濟界は之が影響を受けて俄かに好況を呈するに至り、各種の事業はそれからそれへと勃興し殆んど底止する處なき有様であつた。此間に介在せる氏の事業が獨り此好況から取殘される筈はなかつた。信用は日と共に加り販路は月と共に擴げ業務は益々賑盛を極むるに至つたので後之を株式組織に改め、現に氏は之が社長として經營の衝に當り斯界に異彩を放つてゐる。氏は又夙に公共の事に心を砕き自治の伸展に寄與し、現に芝區第二方面委員として管内居住者の風紀並に生活の改善に力を注ぎその活動は全く涙ぐましい程である。夫人をせい子と云ひ、養嗣子儀太郎氏は慶應理材科出身の俊才である。

杉山伸

明治十三年六月二日生
東京市下谷區入谷町三六〇



氏は島根縣の人雲州藩士杉山榮吉氏の次男として縣下廣瀬町に呱呱の聲を擧げた。夙に郷里の中學校を卒業するや、青雲の志を抱いて上京し、帝國大學醫學部選科に學び、明治四十年八月優秀なる成績を以て卒業したが向學心の篤い氏は其後更に數ヶ年醫科大學の内科小兒科等に於て實地研修し、學術共に大いに進んだ、超えて大正十一年三月、獨逸に留學してフライブルグ醫科大學に學び、醫學の全般に亘つて研究したが、特に婦人科内科の蘊奥を極めて、翌十二年三月ドクトルメヂチネの學位を得、更に歐米各國の大學を視察して、歸朝したのは十三年の一月であつた。かくて下谷區新坂町五番地に杉山病院を創設し、今日に及んだが、同院は外科、内科、婦人科X光線科の各般に亘つて設備整頓し、最近學術の粹を蒐め萬遺漏なきを期してゐる。また職員も各科のオソリタイを網羅し、院長の外顧問として醫學博士小池重氏、外科醫學博士中村邦氏、産婦人科醫學博士近江湖雄三氏、副院長醫學士長谷川秀氏、醫員二名、看護婦三十名の民間有數の病院である。されば最近躍進的の進歩をなしてゐる醫學界に順應した最新最良の治療と共に患者の信望を購ひ、遠近より娉集するの有様である。殊に氏は性來質實にして温厚、懇切にして丁寧、而も多趣味にして古典文學に通じ、和歌を能くし、或は書畫についての一隻眼あり、人格に性格に、同好の士の等しく推服する處である。また東京府醫師會議員、讀賣新聞社衛生顧問等の重職にあり、患者の慰藉と善導とに全生命を傾注してゐる。多望なる醫學界の明日を歩むひと云ふべきであらう。

三枝祐介

明治二十年四月五日生
東京府下谷町下谷追分一七〇
電話青山三〇七二番

高壯なビルディング、平滑なベアメント、壯麗なブリツヂ、これ等近代文明の象徴とも云ふべきものは、凡てセメントによつて形成されてゐる。未造から石造へ、石からセメントへと、進轉して、こゝに燦然たる文化を形成するものは、セメントなりとまで言はれるやうになつた。この前途益々有望なるセメント界にあつて、廣大な販路を有し、躍進的な發展を極めてゐるのが、我が三枝商店である。而して現にその取締役社長として不退轉な努力をつけてゐる我が三枝祐介氏は東京府の人、三枝祐吉氏の長男である。四十四年、嚴父のあとを繼いで家督を相續したが、これより先、氏は學序を追つて早稻田大學に學び、優秀な成績を収めて同校の商科を卒業したのは明治四十一年の春であつた。かくて卒業後直ちに職を東京瓦斯會社に奉じて、恪勤の譽れあつたが、大正四年、感ずる處あつて辭職し、翌五年獨立して建築材料業を開始するに至つた。爾來氏の美しい血と膏とを以て彩られた奮闘史はこゝに新しくその第一頁が開かるゝに至つたが遂に多年粉骨碎身した効あつて、大正十四年には資本金六十萬圓の株式組織に變更するに至り、自ら社長となり取締役に就任して、現在に及んだのである。日本橋龜島町の宏大な商店には、氏の雄々しき奮闘の姿を一日として見ざることもなく、其の熱と力は石炭セメント商としての三枝商店の名をいやが上にも高むるに至つた。氏人となり高潔、稀に見る人間味の所有者である。趣味には謡曲あり、家庭には共立女子職業學校出身の才媛なる春子夫人との間に二男三女がある。

當間 淺吉

明治十三年四月生
東京府下蒲田町新宿五一五

ローマは一日にしてならずとか、國家や大都市は勿論のこと、町村と雖も決して短日月の間に建設され得るものではない。されば其昔見る影もない羽田町が、今日の如くダイナミックな發展を遂ぐるに至つたに付ては、其間に幾多土地の有志の、涙ぐましい奮闘と努力が拂はれてゐる事を見逃す事は出来ぬ。現に羽田町第十四區長として令名ある我が當間淺吉氏が、多年同町の發展に致したる其功績は、將に特筆すべきであらう。嚴父兵之助氏は夙に池上本門寺日上聖人の近郷世話人及妙安寺の寺總代等を務め、土地の名望家として知られてゐた。氏は三十歳の時家督を相続し、専ら土地の發展に力を注いでゐたが、昭和二年衆望の歸する處推されて區長代理となり、更に同年十月區長に擧げられ精勵今日に及んでゐる。是より先き氏は新宿衛生組合部長を始め、新宿衛生組合理事及六郷内堀用水組合委員等に擧げられ、其職に留ること各二ケ年の長きに及んだが、然かも氏が公共の爲に盡瘁せる功績は、單に之に止まらず、大正六年以來引續き新宿耕地整理組合評議員として活動し、別に國勢調査委員としての功もあり、其他八幡神社の世話人係、妙安寺の寺總代として奮闘する等、町民の爲め、氏子の爲め殆んど寧ろ日のない有様である。此外氏は土地の安寧秩序を維持せんが爲め、自ら進んで消防組に入り、小頭を六ケ年勤むる等其犠牲的精神と献身的努力に至つては眞に涙ぐましいものがある。人となり温雅、趣味には新菊の栽培、盆栽等があり、家庭にはかね子夫人との間に在原中學校の信久君、東京高女在學中の順子嬢及びや子嬢とがある。



中根 重徳

明治二十一年四月卅日生
東京市芝區白金三光町三四〇

ジエーン・ラマークは、チラフの頭は高いアカシヤの枝にある葉を喰ふがために長くなつたのだと言ひ、生物體にある器官又は個體はそれを使用するか否かによつて進化又は退化するものなりと結論して、用不用説を提唱してゐる。だが有史前已に人體に不用となつたところの盲腸が今も尙退化することなくして、人々を苦しめ其の生命をうばつてゐる事は、造化の神の失念といふべきか、ラマーク説にも大龜裂を與へるものだらう、とまれば我が盲腸の疾患なる盲腸炎の治療は、從來切開手術を以て第一とされてゐたが我が中根重徳氏は、多年苦心研究の結果之を内科的に治療する所の新療法を發見し盲腸炎の治療に一新生面を開いたのであつた。氏は九州鹿兒島市の人、鷲頭早一氏の三男に生れ、八歳の時中根鐵五郎氏の養子となつた。旭川中學校を卒業して慶應大學に學んだが、後感する所あつて將來刀圭界に雄飛せんと志し、慈惠大學に入學した、かくて螢雪の功なつて同校を卒業するや直に職を森山醫院に奉じて實地に研究し、大正八年五月一日白金三光町四十三番地に獨立開業するに至つた。次いで十五年九月、現住所に本院を新築して、舊院を分院となし、内科、殊に小兒科を主として家運は隆盛の一路を辿つたのである。氏が盲腸炎についての特殊の技能を有することは一般に廣く喧傳せられ今では遠く横濱、仙臺等の各地方より患者が殺到する有様である。資性温雅にして襟度廣く明晰なる頭腦の持主である。家庭には操子夫人との間に、市立一中在學の巖君及び貞子、良子の二嬢あり、鬢々たる和氣が漂つてゐる。

森 長治

文久二年生
赤坂區青山高樹町八
電話 青山 一〇五九番

織物の産地として著名な山形縣米澤は、氏の幼時を物語る郷里である氏は代々米澤藩士であつて帯刀を誇つた家柄であつたので、其昔參勤交代の砌り江戸に上り、それより今日に至つてゐる次第。氏は學序に従つて修養を重ねると、やがて高樹町の現地に居を構へ、早くから公的生活へ踏み出したのである。特にその光風霽月に似た高潔な性格は、常に一點の私心をも執らず、只管なる奉仕を社會のために惜まないで、衆望は日を追ふて氏の身邊に集つてくるのであつた。氏は數回に亘つて區會議員の職に推され、區政振興上に縦横の畫策をなし、その才腕のほどを唄はれてゐる譯だ。のみか市學務委員、區學務委員に任ぜられては、育英事業のために不斷の献替に努めてゐる。なほ赤坂區青年團理事としては、過渡期にある若人達の進路をあやまらしめないやうに、至れり盡せりの指導誘掖に腐心してゐるのは涙ぐましいほどだ。自治會專任幹事に推されては、會員の共榮にその福祉を計り、更に高樹町々會理事長の任に在つては町民の隣保共榮のため只管なる寄與に殉じてゐる。赤十字社協賛員に推せられるや愛國救恤の大精神に生き、四海共濟の實を擧げやうと不轉の氣に燃えてゐる。その外東京地方裁判所土地鑑定委員を依囑せられては公正な意見を開陳して法の擁護に任じてゐる等、みな氏の仁俠的精神の具現であつて、特にあの名門千家男爵家が浮沈のどん底に陥らんとした際の如きは、私財を投じて救授した等の美譚がある。老齡ではあるがまだ鏗鏘として今後の活躍を暗示してゐる。家庭には子女五人あると。



關 朝 二 郎

明治八年一月四日生
四谷區片町十九番地

赤坂區田町三丁目七番地に呱呱の聲を擧げた氏は、やがて父君に連れられて四谷區に移轉し、四谷小學校より都文館中學と卒業した。當時生家の家産は傾きつくして拾收すべからざる窮狀にあつたので、氏は父君を助け只管世路風霜の苦酸を嘗めたものであつた。明治十五年に獨立後も無一文のことで、肩書の地でささやかな豆腐屋を開業して苦闘を重ねた。あの日清戰爭、北清事變にも従軍し、赤十字救護班に附屬して活躍したが、獨立後間もなく日露戰爭が突發したので、再び國難におもむいたのである。その間家にあつて氏の妻女よね子は、六人の子供を抱えて貧しい一家を支へたと皇國の美談として感激に價ひするものがある。凱旋と共に歸京した氏はそれより必死の活動を開始し、日に日に家運を挽回すると共に、やがて白米商を營むやうになり、今日の隆盛を購つたのである。今では多くの地所家作を有し、昔の苦闘を寧ろなつかしい思ひ出の種としてゐる。長男爲一君が近衛歩兵第一聯隊に入營、次男守次君が霞ヶ浦海軍航空隊に志願入隊して手不足を告げるやうになつたので、十三年に廢業したものゝ、十二年以來四谷救護班副班長として現在に至つてをり、あの震災當時は罹災救助のために寢食を忘れて奔走したものであつた。なほ國勢調査委員と勢調査委員として公的生活の完璧を期し、更に同區の名望家本田義成氏と濃厚相通じて、選舉運動等に活躍し區會議員に推されて侃々の論陣を張つてゐる。外に片町々會幹事長として、將た又東京市方面委員として、自治體並に公共事業に努め、衆望はますます高まつてゆくばかりである。

田淵源次郎

明治八年五月二十五日生
豊多摩郡千駄ヶ谷町八五六
電話四谷 三一二二番

世界の公園とも称せらる。瀬戸内海の中でも、特にその水光鳥影の明媚を誇る香川縣小豆郡小豆島は氏の故郷である。汽船に乗つて宇野港を發し、四國高松港に向ふ時、途上の煙波かすむ水平線上に、紫色に仄見える絶勝の小豆島を見出すだらう。氏の嚴父はこの島にあつて、累代の石材業を營んでゐた。同島は花崗石の産地として、その品質なり産出量なりは、夙に關西に冠絶してゐた。ために石材業者としての田淵家は、郷黨の間にあつて信望が頗る厚かつた。が可愛い子には旅をさせよとの父君の意思からして、氏は十二歳の時に上京して同業木本氏の徒弟に入り、只管營業の機微を修め他日飛躍の素地を築いて行つた。かくて遂に明治三十四年に榮ある立身の門出として、あの帝都の中の樞地にある京橋架橋工事に従ひ、典雅な純日本式な橋を完成したのであつた。その技術の堅牢と精緻な工風は同郷出身の先輩中野喜藏氏に認められ、同店の營業主任に招聘せられるに至つた。がその後獨立し、兩派關係した主なる工事を擧ぐれば、日本橋改築、鬼怒川水電堤塘工事、鍛冶橋改築、鰐橋擴築、笛吹川改修、國技館建設等枚擧げに追がなないが、明治神宮御造營に際して、莊嚴な神宮橋新設工事を拜命し、あの大工事を竣成したとは、特に一代の光榮である。昨今は嗣子千萬彦氏が營業方面を擔當し、東京は勿論全國的に花々しく活躍してゐる。また氏は頗る愛町の念に厚く新田電燈架設問題や、小田原電鐵問題等の重大な事件には、常に萬全進路の啓示をしてををつた。目下小田原電鐵の大工事を請負つて工事中。



狩谷正男

明治二十七年十一月三日生
府下十條町一二四九番地
電話 五一七九番

和歌山縣日高郡和田村は氏の出生地である。和歌山縣と云へば徳川御三家の一を以つて誇つた紀州侯の領地で、豊饒な土地と豊富な材木と、紀州蜜柑の産地として知られてゐる。それに紀州人は豪快な氣風の持主であつて、あの激濤を冒して江戸表にまで蜜柑を移入し、一躍天下の富豪になつた紀の國屋文左衛門も亦紀州人であつた。殊に彼文左はすこしも金錢に拘泥せず、千萬金を花街にばらまいて町人の意氣を示したあたり、紀州人たる面目が躍如としてゐるではないか。この獨立不羈の血潮の流れを承けたわが狩谷正男氏が、燃るやうな希望を小さい胸に抱いて上京したのは年齢僅かに十五歳の時であつた。まづ氏は親戚の間柄なる麻布富士見町和田防水布工場に兄弟見習として入つた。そこで氏は補助して一般職工と共に製造に従ふ傍ら、その賣捌き方法等も充分に研究し、他日獨歩の目を胸に描いては高なる血潮を躍らせたものだ。やがて遂に氏は多年の宿望を以て果鴨に工場を設け、單獨で經營を開始するに至つた。氏はまづ長い経験によつて得た技術により、在來の防水具はまだ不完全であることを見出し日夜その改良に腐心した結果、長時間に亘つて暴雨にも濡潤しない優秀品を製造するに成功したのであつた。ところが東京防水布株式會社の切なる懇望によつて工場長に招聘せられ、ある期間を同社のために働いたが、大正八年再び目黒町に護謄引防水布製造工場を設けて、現在の殷盛を物語るまでに成果をおさめたのである正に立志傳中の花形役者と云へやう。家庭には夫人とみ子との間に一男がある。



宮田哲雄

慶應三年八月生
日本橋區村松町三七番地
電話浪花 一二九三番

本邦醫學界の泰斗と仰がれ 天成の靈腕を揮つて患者の治癒に任じ、曠々たる名聲を擡にして居る醫學博士宮田哲雄氏は、茨城縣か生んだ逸材である。父君を藤七氏と云ひ、氏は其の長男に生れ、學序を趁つて明治二十六年當時私立醫學校の權威濟生學會を卒業し、二三の病院に轉動して後、一段の研究を志して帝國大學國家醫學科に學び、三十年優秀なる成績を以て卒業し、次いで傳染病研究所講習所、醫科大學皮膚科、微毒選科、病理解剖學科等に普く研鑽して、田代病院長代理を囑され、三十四年東京市醫及及び市傳染病豫防委員となり、三十五年には警視廳囑託醫として盡瘁し、三十八年渡獨してミュンヘン大學に遊び、四十三年卒業の後、更に大家の門を叩いて新智識の蘊蓄に力め、轉じて露國大學を見學し、四十一年歸朝して田代病院長となつた。翌年久松町に開業したが、大正四年移轉擴張して現所に私立病院を開設し、大正七年には論文「腸管破裂の起原と臨床實驗」及び動物試験に依つて研究確立せる診断症候を評論せる手術法を提出して學位を受けたが、曩にはドクトルメヂチネの稱號を獲て居り、益々學界に名を成すに至つて日本橋區會副會長、同醫制調査委員、同評議員、皮膚科泌尿科學會評議員等に推され、日新醫學會監査役、東京醫師信用購買組合建築組合常任理事の職をも負うてゐる。又職掌を離れても日本橋區に重きをなす公人で、區會に當選する事三回、大正九年には市議に當選し、目下尙學務委員、教育會評議員、久松町々會長に推されて盡瘁されて居る。氏又愛郷の念に富み、茨城縣人會々長同育才會監事に盡して居る。

奈良千萬彦

明治十七年十一月二十一日生
市外駒澤町下馬四七四

才識縦横行く所として可ならざるなきの人に市聯合青年團主事奈良千萬彦氏がある。氏は耶馬溪と別府温泉とで有名なる大々縣大分郡南庄内村の人である。郷賢を卒へて後、日本大學に學び、同校を優秀なる成績を以つて卒業するや、直ちに警視廳衛生課に入り、一ヶ年同課にあつて後、明治四十三年淺草區役所に轉じ、職に止ること十ヶ年、其間區内諸般の施設に盡瘁せるの傍ら、時勢の推移を洞察し都市計畫の重んずべきを知り、自ら率先して同志と共に都市協會を設け、理事として大に盡す處があつた。大正八年東京市に新に都市計畫臨時調査課が設置さるゝや、特に氏が都市計畫の造詣を深きを以つて迎へられて同課に入り、大に日頃の蘊蓄を傾けて専心業務に精勵し、市場問題を始めとし、公園墓地設立、遊興稅調査、路而改良計畫等幾多都市の重要問題に非凡の手腕を見せ、後道路局の新設せるや、更にその庶務課に入り、局長付秘書として大に天賦の才能を發揮したものだ。後教育局に新に社會教育課の創設せらるゝや、拔擢せられて社會教育課庶務掛長兼文化掛長に任じたが後文化掛長を專任するやうになつた。其間氏は八面玲瓏たる才幹を以て、町會の促進、自治紀念の制定、市民講座、婦人講座、商工青年講習會の研究並に設立に力を注ぎ、或は活動寫眞を利用して市民の自治的訓練に資し若くは區劃整理講演會を開く等、其功績は擧げて數ふべからざるものがある、かくて大正十四年十二月東京市聯合青年團主事となり今日に及んでゐるが、氏の深遠なる學殖と高潔な人格とは、總て青年團指導の上に燦然たる光を放つてあらう。

岸 本 研 次

明治十六年六月生
淀橋町角管 八〇〇
電話 四谷 一八二五

「醫は仁術なり」とは昔の漢方醫が醫書の巻頭に讀んだ言葉であつて、醫は決して單なる職業でない事を道破してゐるのであるが、現今に於ける醫業は全く職業化され、丁度藝術の職業化と共に悲しむべき時代現象となつて了つた。かうした時代にあつて、仁をモットーとして患者診療に當つてゐる人に、岸本醫院主たる岸本研次氏がある。氏は山梨縣中巨摩郡今諏訪村に生れ、冬は八ヶ岳風の寒風に心を練り、夏は灼熱せる釜無河原の熱氣に身を鍛へ、甲州人獨特な敢けず嫌な潮氣に富んだ氣性を郷土より惠まれて成長した。中學を郷土の地に終へるや、進むべき路を醫學に定め、東京に出で日本醫學專門學校に入つた。そして在學中、醫は単に術にのみ止まらず、寧ろ仁に重きを置かねばならないことを悟り、醫學を熱心に研究すると同時に、傍ら高潔なる人格の陶冶に心を砕いてゐた。かくて明治四十二年優秀なる成績を以て、日本醫學專門學校を卒業するや、直に我が醫界の權威たる北里研究所に入つて、親しく實地に就て學理を研鑽し、後聘せられて日原病院々長となり、多年の蘊蓄と卓越せる技能を以て聲望を擡にしてゐた。後職を辭し大正五年現住所に自ら醫院を設け専ら溢るゝが如き温情と赤誠を披瀝して患者の診療に従事してゐるが、それは氏の人格の光りと相俟つて、彌が上にも信用を増し、日を追ふて益々賑盛を極めてゐる。氏はかうして繁忙なる職務の傍ら、現に精華高等女學校々醫として、生徒の保健衛生の事に當り、信望を寬めてゐる。

佐 藤 三 郎

明治二十一年一月十一日生
荏原郡馬込村平張一四四

中央線を日野驛に降ると、そこには淋しい日野と云ふ田舎町がある。中央線開通以前は甲州街道の宿場として、相當の繁榮を見てゐたが、今は町とは云ふものゝ、一寒村を思はせるに過ぎなくなつた。併し武蔵野も正に盡きんとする山掛つた處だけに、地形に面白い起伏を見せ、加ふるに多摩川の清き流が一段の風致を添へてゐる。住民は一般に善良で純朴で、この美觀に相應しい感じを持つてゐる。保健衛生課主事として令名を擡はれてゐる佐藤三郎氏の生れたのはこの町である。氏は日野町の小學校を卒業するや、自分の家から程遠からぬ立川町に、東京府立第二中學校を選んで入學し、學科に運動に常に天才的閃きを見せ、教職員及學友に秀才を以つて謳はれてゐた。氏は中學卒業後家にあつて只管家業にいそしんでゐたが、感ずるところあつて東京に出で、明治四十五年四月市役所の雇員となつた。氏の鐵石の如き堅い決心は、よく氏をしてあらゆる苦難に堪へしめ精勵恪勤其物のやうな奮闘振りが永く上司の眼に止まらぬ筈はなかつた。大正四年五月遂に抽んで、事務員に擧げられ、更に大正十四年六月には保健衛生課の主事を拜命するに至り、以て今日に及んでゐるが、多年からうした方面の事務に携つてゐただけに職務の上には鮮かな事務の才能を見せゐる。氏は又外にも、四ツ谷簡易療養所にも勤務し、事務長として庶務會計の重任を帯び、物品の出納及び保管事務に執掌して遺憾なく其才能を發揮してゐる。氏は又大の運動好きで、野球に弓術に非常なる技術を持つてゐると云ふ。夫人を米子と云ひ、その間に長女和子がある。

大 塚 彙 之 丞

明治二十四年九月十一日生
芝區南佐久間町一ノ三番地
電話 青山 六九三二番



法曹界に少壯有爲の辯護士として令名を馳せてゐる大塚彙之丞氏は、茨城縣西茨城郡岩町大塚孫左衛門氏の三男として生れた。夙に學を好み、茨城縣立農業學校を卒業したが、心中燃ゆるが如き鬱勃たる雄心は、遂に氏を驅つて海の彼方、遠く臺灣の地迄赴かした。筑波嵐しの寒風に銀え氏の身體も、炎熱焼くが如き赤道直下にあつては、流石に異國の情緒に懐郷の念押へ難きものがあつたであらう。氏は渡臺後間もなく臺灣國語學校に入學して只管勉學にいそしんだのであつた。そして優秀なる成績を以て同校を卒業するや、直に同島の公民學校に教鞭を執り、大に島民の親善教育に力めたものであつた。然し氏はこうした異郷の地に、而かも教壇の人として一生を終止するには餘りに血の氣が多かつた。仍大正八年遂に意を決して上京し、將來法曹界に自己の正しい生活を見出さうと、茲に三度志を變へて明治大學に入學し、只管法學を専攻して涙ぐましい程の勉強を續けたものであつた。然しそれは纏て報ひられ、而かも同校三年在學中見事に優秀の成績を以て辯護士試験に合格したのである。かくて法曹界に最初の一步を印すると共に、一時辯護士徳岡梅吉氏の事務所にあつて實務に當つてゐたが、震災後久しく臺灣にあつて歩調を一にしてゐた法曹界の奇才山本辯護士が歸京するに及び、現住所に共同して法律事務所を設け、多年の蘊蓄を傾けて専ら訴訟事務に執掌してゐる。氏資性濃厚勤儉、一些事と雖もゆるがせにしない處に世の信望を博してゐる。趣味は野球に狩獵、照子夫人との間に今年生れた可愛らしい英子さんがある。

鶴 飼 長 三 郎

明治七年七月日生
赤坂區青山北町四ノ一〇二番地



東京府、建築界の泰斗として令名ある鶴飼長三郎氏を營繕課長に有することは、儘かに一つの誇りであらねばならぬ。氏は山紫水明を以て聞ゆる京都に生れたが、氏の生家は父祖十二代連綿として建築業を受け續ぎ、代々斯界に名聲を馳せてゐた山崎正し家柄である。即ち古くは京都本願寺の頭梁として知られ、又先代源三郎氏は宮内省内務省等の御用を達し、奈良大佛殿の大修繕を初め、築地本願寺京都西本願寺の建築に對してよくその重大なる責務を果したものであつた。斯かる榮ゑる家門の裡に人となつた氏は又幼時から傳統的に此方面に天才的閃きを見せ、而かも、氏は内地に於て斯業の研究を終るや、先づ新智識を歐米に求めんとし、明治卅一年渡米し、ハムボルド、ドローイングスクールに入り、茲に日夜研鑽を積むこと數年、卅四年七月業成りて歸朝し、父祖の職を襲つて名實共に家名を繼ぎ、更に之を發揚せんと努めたのであつた。尙氏は自家に於ける業務に自ら甘んぜず、官界生活を志し、宮内省内匠寮に入りて造神官司廳技手となり、更に本願寺技師に進み、後幾何もなくして東京府技師となつた。續いて大正七年聘せられて内務部營繕課長の要職を占め、爾來一意専心其の重大な責務を果し、今日に及んで居る。氏は又本願寺の命を帯びて、佛教關係の建築研究の爲古代美術の淵源地たる印度方面を視察すること前後二回に及び斯界に於ける一大權威たるの名聲を恣ま、に、其著書の如きも和洋住宅建築、各種商店建築圖案等外數種あり、更に實際事業に至つては數ふるに追なき程である。すが子夫人との間は極めて圓滿である。



細川力藏

明治二十二年二月八日生
芝浦區南濱町八番
電話高輪三三三三〇〇〇
九九九六八番

大東京の咽喉として、その玄關として尤も重要な位置を占めてゐる芝浦をして今日の發展を齎したのは一に吾が細川力藏氏の努力の賜と云ふも敢て過言ではない。氏は能登の産、日本海の怒濤の澎湃たる所、密雲層々低く垂れて北風飛雪を齎し、忽ち白銀の世界を現出する所、この雄大にして峻烈なる自然の下に人となつた氏が、夙く己に天下を呑むの概あつたこともうたづけるではないか。長ずるに及んで大鵬の志を懐いて東都に上り雄心勃々私に機を窺ひて羽翼を養つてゐたが、遂に雲を呼び風を起して天翔けるべき時は来た。即ち東京市が芝浦埋立地二十餘萬坪を民間に拂下げんとするや、機を見るに敏なる氏は同地の將來有望なるを達觀し、越後の石油王中野貫一氏を説いて之を譲受けしめ、自ら一切の管理に任じ、心血を澆いで之が開發に努力した結果、遂に今日の殷盛を極むるに至つたのである。かくて衆望の歸する處、推されて芝浦區議員に擧げられ、區政の根柢に參畫し、區會の中心人物として自治の伸展に寄與する處が少くない。此外氏は彼の有名なる火葬船問題を始めとし、ガスタンク撤廢運動、芝浦造船橋梁運成運動、芝浦地代値上反對運動等には常に急先鋒として第一線に活動し、從來芝浦發展の爲に致した功績は寔に擧げて數ふべからざるものがある。かくて業成り名遂ぐるに及び、松青く水清き風光明媚なる葉山一色の地を相して別荘を設け、清境に悠游して英氣を養つてゐる。夫人八重子は賢夫人として知られてゐたが、本年一月一男六女を置いて他界せられたことは寡に惜むべきである。

小林盈

慶應三年三月廿一日生
市外澁谷町下澁谷二二九
電話青山四〇一〇番

府立第三高等女學校創立當時より、よく生徒指導の任に當りて、その責務を果し、榮達を望まず而かも今日の教育界にあつて畏敬されるの人の同僚々長の要職を占むる小林盈氏がある。氏は長野縣長野市の出身で、明治二十五年東京高等師範學校を卒業するや、直に長野縣師範學校教諭として赴任し、同時に同附屬主事を兼任し、同校に在ること六年、偶々現今の普通教育の制度敷かるゝに及びその普及に盡瘁するところあつた。後青森縣師範學校長に榮轉し、在職四年専ら學徒の指導に任じ、傍ら冬期の家庭副業として手工を奨勵し、又發音の矯正に力める所があつたが、明治三十五年東京府立第三高等女學校の創立と共に同校長に聘せられ、爾來今日に至るまで廿五年間、よく重大なる責務を果して名校長の名を負ひ、現に全國高女協會理事長として女子教育界に貢獻する處が多い。氏は女子教育に當るや、其の方針を良妻賢母の養成に全力を擧げ、なほ皇室中心主義を奉戴してその訓育に努め、學藝の錬磨には内外の長所を取り、中庸の道を行くことに重きを置き、體育の發達と質實勤儉の美風を涵養せしむることに腐心してゐる。而かも氏は自ら持すること謹嚴で、その温健なる思想と着實にして中庸を得たる行動とは人々を畏敬せしむるに足るものがある。爲に同校の生徒並びに校友の氏を慕ふこと恰かも慈父の如く、其の發展は逐年見るべきものがあり、東都教育界に同校の名高きは實に氏に負ふもの大なりと云はねばならぬ。園藝を好み、特に菊作りには堪能のものだと云ふ。きよく夫人との間に農務省技師たる長男進氏外に三女がある。

久我常通

明治六年二月七日生
牛込區新小川町一ノ二
電話番町一一五〇番

今は時めく貴族院議員候補久我常通氏は、維新の元勳者として知られたる、久我通久氏の第一男として明治六年二月七日呱呱の聲をあげた。先づ氏が祖先を尋ねんに、遠く村上天皇の皇子二品中務卿具平親王の子右大臣師房の後である。師房始め資定王と稱し、寛仁四年從四位に叙せられ姓を源朝臣と賜ひ、師房と改めた。三代雅實に至つて姓を久我と稱する様になつたのである。かくて連綿相續いて氏が父君通久氏の世となつた。通久氏は天保十二年十一月二十八日を以つて京都に生れた。維新の際は大和國鎮撫總督となり、續いて東北遊撃軍の將となり、東北の各地に轉戦して偉功をたて、又兵艦數隻を率ひて函館追討に戦功を立てたものである。かくて明治十七年通久氏は遂に侯爵を賜はり華族に列せられた。かゝる名家にして赫々たる武勳に輝ける通久氏を父とし、高貴の家に生れた常通氏は、幼にして學に秀で、學習院に學んで優秀なる成績を以て卒業したが、音楽方面には殊に天才的の閃きを見せてゐたので、今は大阪に於て音楽會の總裁に推されてゐる。氏は又社會公共の事業にも盡力し、火災救護組合の會長として、町會の顧問となつて働いてゐる。外政界に於いては世襲議員として庶を貴族院議員に有し、議會に於て非常な政治的手腕を見せてゐる。又實業界にもその敏腕をふるひ、現に流山鐵道の顧問として、此の業の爲に非常な努力をしてゐる。我が國華胄界にありても特殊の名門の出であり、位高く才備はれる氏の如き人士が、斯くして有意義に活動せらるゝことは即ち又自治の榮えであるといひたい。



長沼政五郎

明治五年七月生
府下品川町御殿山七二七番地

自然は人を玉成する。幼時から暗い暴風や吹雪に慮げられて來た北國人は、到底南國の人に見ることの出来ない粘り氣を持つてゐる。東京府權度課長長沼政五郎氏は追分で名高い松前の生れで、幼い時から此荒ぶる自然の管の下に育ぐまれた丈けあつて、何處となくがつしりした剛健な素質を惠まれてゐる。氏は函館中學を卒業後、囑託として農商務省に入り、三十八年屬を拜命し、翌年度量衡講習所の講師として教鞭を執るに至つた。四十二年には根本的に度量衡の調査研究に従ひ、轉益する處極めて多く、大正六年には遂に技師せられて度量衡事務官に進み、越へて十年農商務省中央度量衡検査所長橋川司亮氏と共に度量衡の統一を計り、從來我國の度量衡を萬國共通のメートル法に改めんとして大に力を注いだものであつた。今日メートル法の實施を見るに至つたのは一面氏に負ふ處が大なると共にその卓抜なる識見に驚かざるを得ない。かくて大正十四年東京府に聘せられて權度課長の要職に就き、傍ら商工省囑託をも兼ね、精勵今日に及んでゐる。氏は從來講師として度量衡の講習會に臨むこと前後二十回、講習生を養成すること、實に五百餘名の多きに及び、現に久縣に度量衡の主任として配されてゐるものが尠くない。單に此一事に徴するも氏が如何に斯界に權威を有し且つ其功績の大なるかを知ることが出来る。令息弘毅氏は現に帝國大學政治科に學びて優秀の譽れ高く、柔道三段のしたゝかものである。氏が趣味を運動に有してゐる處を見ると、此親にして此子ありと云ふべきであらう。



佐藤 穂三郎

明治三年三月十三日生
府下小松川町逆井六一七番地

天下の險を以て知られてゐる碓氷峠に近い群馬縣碓氷郡坂本町は氏の懐かしい播磨の地である。幼にして俊敏、夙に郷里にあつて學にいそしんでゐたが、後教育家たらんと志し、群馬縣立師範學校を卒業後、進んで東京高等師範學校理科に入學し、明治三十一年優秀なる成績を以て卒業するや、直に母校たる群馬縣師範學校に教鞭をとり、同縣の教育界に資するところがあつた。當時氏は又運動部長として體育の發達を計り、特に今日の優勝旗制度を創案して之が指導に力めたといふ。在職十有三年、薫育大に擧りて多くの俊材を出した。彼の文學博士中村孝也、綿貫哲雄教授等も、氏の手しほにかけた人であるといふ。後縣立高崎高等女學校校長に榮轉し、同縣の女子教育界に大に貢獻するところがあつた。同校にあること十餘年、後大正九年十二月東京府南葛飾郡立小松川高等女學校校長に轉任した。當時の小松川高等女學校は實に微々たるものであつて生徒の數も百人を超さなかつた。氏之を憂ひ、同郡長と語りて銳意その發展を計つた結果、その努力現はれて漸時發展し、郡制廢止と共に府に移管されたが、引續き校長となり今日に至つてゐる。氏は専ら品性の陶冶と女子體育の發達に努力し、傍ら情操教育の必要を認めて音楽、讀書等を奨励してゐる。爲に小松川高女の成績見るべきものがある。氏は純にして高潔なる性格を有し、生徒の敬慕を蒙り、氏亦生徒を愛することによりて教育し、以て終生の事業とせられてゐる。定に至誠の士といふべきであらう。家庭には五男三女あり、長男瑞穂氏は秀才の譽高く、弘前高等學校教授として令名がある。



宮本 金七

明治十六年一月二十八日生
府下中野町中野四〇七六番地

多年食る程の執着と思慕を以て實業教育に身を捧げ、現に東京市視學として教育の刷新に力めつゝある我が宮本金七氏は、福島縣石城郡四倉町に呱呱の聲を擧げた。幼にして學究心に燃え、長ずるに及んで爰を負つて上京し高等工業學校教員養成所に入り、建築科に雪雲の功を積むこと多年、後優秀なる成績を以て卒業するや、直ちに熊本市立徒勞學校長として聘せられ、教育界に最初の一步を印するに至つた。在職三ヶ年、其間専ら力を子弟の教養に注ぐと共に幾多の改善を圖り、同校の發展に寄與する處が尠くなかつた。後大阪府立今宮職工學校に主席教員として招かるや、多年の蘊蓄を傾けて之が指導に任ずると共に、更に夜間を利用して補習教育を行ふ等、涙ぐましいまでの奮闘はあらゆる方面から感激的となつた。氏はかうして晝夜の別なく、教育に献身的の努力をしてゐる傍ら、關西建築協會理事として精勵したのであつた。其間實に十餘年、恰も一日の如く終始一貫火の出るやうな奮闘が繰返へされたのである。かくて大正十三年一月東京市の船室に動かされ、遂に大阪を後にして上京し、視學として職を教養局に奉じ、益々天稟の才能を發揮し、精勵今日に及んでゐる。今や漸く地を視學に得たことは、東京市の爲に定に喜ぶべきことである。氏は趣味として旅行を好み、業務の餘暇を見て或は郊外に或は山間を跋渉し、自然に親しむことを以て唯一の樂としてゐる。夫人をたけ子と云ひ、貞淑の譽高く、二人の間に二女がある。

市川 虎之助

明治二十三年十二月廿六日生
小石川區林町五十三番地
電話 小石川 一〇五三番

氏は現在の地に呱呱の聲を揚げた生粹の江戸つ見である。随つて氏が一人倍の濃厚な愛郷心に燃えて居るのも無理ならぬ事である。我が居町を愛するは誰しも人情の然らしむる所であるが、氏の如く其地に育まれて居るからにはその愛着ひとしほ濃かに、居所の發達は延いて我が家の繁榮にも等しいものがあるであらう。曩に東宮殿下御成婚の際、其盛典を記念せんが爲に水川園々記を草し、區内の有力者に頒布したのも、畢竟氏の熾烈なる愛郷心の發露と見ることが出来る。氏は幼にして學を好み、明治二十九年同地の明代小學校を卒業するや、中學講義録其他によつて獨學し、辛うじて燃ゆるが如き青年時代の智識慾を満足せしめたものだ。後父祖の業を繼いで薪炭商にいそしみ、専ら業務の刷新に力を注ぐと同時に、原産地から直接商品を購入して之を供給することに力めたので、業務日を遂ふて繁榮に赴き、遂に同業者中巔然頭角を抽んずるに至つた。氏は又曩に同志と共に同業組合を組織し、現に之が組合長として組合の共存和親の上に幾多の功績を齎してゐる。又一方に於ては町會の爲に貢獻する處極めて多く、從來林町々會長に擧げらるゝこと前後數回、現に顧問として之が指導誘掖に任じ、遂に衆望の歸する處推されて區會議員となり、區政の樞機に參して自治政の發展に寄與する處が少くない。此外氏は明化小學校後援會副會長として令名を馳せ、又區内十有六校中の無欲勤兒童に對して置時計を贈呈するなど、以つて氏の兒童教育に對する熱心さを最も雄辯に物語るものである。氏は狂歌に巧で雅號を笑坊といふ。

牛尾 房吉

明治五年九月十四日生
瀧ノ川上中里一番地

浮き世の變轉を飛鳥川に喩へて居るが、綾瀨の變遷も飛鳥のそれに譲らない。ついで此の間までは綾瀨川の歸帆は墨堤八景の一に數へられ、風流な江戸人の逍遙の場所とされ、榮種の花の散り敷くあたりをなだらかに迂回する川の邊に、蘆の草叢に歸る帆影の隱見する所などは如何にも風情多いものであつた。所が時の推移は、あの水鳥遊び釣りによき清流をして悪臭に満ちた濁流に代らしめ、野趣豊かな流域をば、工場軒を並べて細民集り住むの地帯とかへて仕舞つた。其上その氾濫は江東の住民をして恐怖心をそよらしむるに至り、府の河港課を構ます厄介物となつて終つた。わが牛尾房吉氏は目下同所改修事務所長として氾濫期の洪水に備へる完全な大改修に従事して居る人である。向島寺島邊の人々は如何に絶大な期待をよせて其の施設を見てゐるだらうか。氏は鳥取縣鳥取市の出身で、夙に鳥取縣土木講習所を卒へ、久しく同縣下及び群馬長野等の各縣廳に歷任し、土木課に勤務して主として河川の開鑿及び改修工事に従事して來たので、此の方面には多年の經驗と老練なる手腕を備へて居る人物である。大正十二年三月東京府に招致されて、府下の河川中難工事であり且つ重要工事である綾瀨川の改修を引き受け、同時に花畑運河の開鑿工事も兼掌して居る。氏は篤實にして事業に熱烈な愛着を有し、一度責を負つて擔當した工事に飽くまでもベストを盡すと云ふ責任觀念の強い性格の所有者である。目下その施設が着々奏功しつゝあるのは所以なしとせぬ。令閨輝子と三男一女の家庭を持ち、平和な慈光を放つてゐる。



佐藤傳四郎

明治二十六年八月二十九日生
荏原郡馬酸村三八一三

衣食足つて禮節を知るといふ古賢の言を引用するまでもなく、人間は食はずには生きて居られない。食ふ爲めには如何なる悪事をも顧みるの餘地は與へられないものである。都會文明が發達すればする程、益々世の生存競争は激烈になり、失業者は日に月その數を増し、その日の糧さえも得られなく、遂には世を怨み人を呪ひて社會の破滅を企てようとするが如き過激な思想を懐く者さえ出てくるやうになる。茲に於て世の安寧を維持し、彼等を救ふ爲めには、如何なる聖者の説法よりも、先づパンを與へる事である。吾が東京市社會局に於て職業課を設け、之等失業者の爲めにその糧を與へる事は、この意義に於いて實に重大なる事業と云はねばならない。吾が職業課長佐藤傳四郎氏は實にこの重大なる事業に對して熱誠を以て盡瘁してゐる人である。氏は山形縣最上郡新庄町の産、郷里新庄中學を卒業後、早稻田大學に入つて政治經濟を専攻し、同校を卒業すると直ちに増田貿易株式會社に入り、天津よりシベリヤ、モロコ、チベットの奥地に入り、且に辛酸を嘗め同社の爲めに羊毛の原産地を視察した。大正九年英國に渡り、ロンドン大學に籍を置き、更にフランスに渡り、彼地の社會事業を研究し、歸朝と同時に現在の椅子に坐り、多年の蘊蓄を傾けてこの事業に當つてゐるのである。氏は未だ獨身で、乗馬が何より好きであるといふ。性高潔で、北國人特有の眞摯の情を持ち、事に當つては熱誠忠實で、わが東京市をして、どん底に喘ぐ人の少きやうに導くこの事業は、氏に依つて一段の發展を見るべしとされてゐる。

榎戸雪藏

明治六年三月生
府下西多摩郡青梅町
電話 青梅 二二三

吾が榎戸雪藏氏は先代雪藏氏の長男として青梅町に呱呱の聲を擧げた。氏の家は安政年間から織物を業として立つてゐたが、先代雪藏氏が明治五年に店舗を擴張し、販路を廣めて今日の基礎を確定したもので、同町にある工場中最も古い歴史を持つてゐる。當主は先代の歿後雪藏氏を襲名してその業を受継いだのであるが、氏にしても矢張り青春の血のたぎつてゐる頃には、假令口には出さなかつたにしても、心の内には大なる理想を持ち、燃えるやうな功名心を秘め、自由の天地に翼を張ることを望んでゐた。而してその爲めには傳來の家業をも一時は振捨てる事をさえ心に思つた事もある。併し氏は爾來に孝心厚く、従つて此處に當然の結果として功名心と孝心との争闘が起らねばならなかつた。そして遂には熱烈な功名心も家を思ふ事厚い氏の孝心の爲には征服されなければならなかつた。かくて一度意を決して家業を繼ぐや、一意家業の興隆を圖り、日夜孜々としてその勞を積んだので、今日では青梅町に於ける最大の工場となすを得。その使用職工の數丈でも三百を越え、一ヶ年十五萬疋前後を生産する程の盛況を示してゐる。そして氏の家が同町の草分であると共に、先代より培つた人望は氏の代に至つて益々素晴しくなつた。氏は性質温厚、事に當つては細密周到、些事と雖も疏にせず、よく町事に盡瘁するので町民の氏をばはぐこと慈父の如く、現在では學務委員に推され、また同町會議員として同町の爲めに盡瘁してゐる。家庭は良妻賢母の名高きやす子夫人と三男二女あり、和氣篤々實に同町でも羨望の的であると聞く。

山崎達之輔

明治十三年六月十九日生
西巢鴨町宮仲二七五〇
電話 小石川 三三二〇番

氏は玄洋社肌の太つ腹な人物が多いことで知られてゐる福岡縣の人で、出生地は同縣三潞郡川口村である。幼少の頃早くもその俊英を郷黨の間に謳はれたと云ふから、梅檀は二葉より香しとの感を深うする。東京帝國大學法學部獨法科に入つて最高學理の蘊奥を討究し、明治二十九年に優秀な成績で卒業するや、若いちやきちやきの法學士として、まづ高等文官試験に合格し、官界へ乗出したのであつた。振出しは臺灣總督府參事官、最も難關とせられてゐる殖民地政治に參與すること數年の後に、文部省參事官兼書記官に累進し、間もなく文部省普通學務局長に榮轉し、やがて圖書館監督官に歴任し、鋭意職責に精勵したものである。その間中央衛生會委員臨時國語調査會委員、恩給調査會委員等にも推舉せられ、多忙な公職の兼掌に當りての温まるを見なかつた。かくて大正十三年に郷里三潞郡の民衆から推されて衆議院議員に當選し、見事中原の鹿を射止めた譯である。想ふに衆議院は邦家の國是を審議する中央の廟堂であつて、男子と生れて一度はこの檢舞臺に馳驅したいものだ。が事決して容易でなく、その舌鋒に於てその資力に於て、その學識に於て、衆に秀でたるに非ざれば實現し難い希望である。特に普選の實施せらるゝ今後にあつては、如何に金權を以てしても及び難いとされてゐる。その尊い議政壇上の人として氏の今日あるは、一面氏の人となりを窺知し得られるではないか。因に氏は長いその官界生活の間に在つて、わが國の文教制度に獻替された。功により正四位勳一等に叙せられて居る。夫人をみね子といひ、良妻を以て知られてゐる。

小里富次

明治十四年十二月生
芝區南佐久間町二の一八
電話 青山 四八四八番

氏は鶴飼ひで名高い長良川と、それに金華山を以て知られてゐる岐阜縣の人で、郷里は揖斐郡大野村である。幼少の頃に嚴父忠右衛門氏に伴はれて遙々と上京し、多年父君の膝下に在つてその材を磨き、父君の寵愛を一身に集めてゐた。當時氏は家は京橋區本八丁堀にあつて、銅地金商を營んでゐたのであつたが、氏の代になつてから明治四十五年に現在の地に移つてやはり同業を繼續し、その經營よろしきを得たので月を積み歳を重ねて事は今日の繁昌を見るに至つたのである。これこそ氏の不撓不屈な奮闘の賜であるといふやう。かくて氏はその傍ら公共の爲めに盡瘁し、數多い公共事業に對し常に忠實な公民としての襟度を忘れなかつた。現に南佐久間町青年會顧問として、春秋に富む身を以つて町内青年の指導誘致に努め、明の第二日本の建設に資してゐる。その外第二十三地區々刺整理委員として常に中正穩健の態度を以つて事に臨み、致々として帝都復興の爲め奮むところがないと云ふ。由來同町の青年會は、同時に町會の機能をも兼ねてゐるから、ある時は青年の指導機關であるが、ある時は町會として隣保親善並に町民の利福享有の實を擧げ、その事業の廣汎であつて、機能のデリケートなことは他町に比を見ないのである。従つてその勢力が大きいだけ、顧問は町民の尊敬する而かも識見のある人物でなければ動まらぬ次第である。氏の識徳兼備へてゐることはこの一事から推しても推知されやう。家庭には令室とく子との間に一女のぶ子嬢あり、目下戸板女學校に通中學である。

山岡萬之助

明治九年四月生 豊多摩郡中津谷六八八 電話 青山 二二二二番

由來司直の府には幾多の良材があるとせられてはゐるが、明智な頭腦と厚利な法理と、該博な法理論とに於て、山岡氏の如き人物は稀れであつたとの定評であるが、こゝに至るのは氏のアブノーマルな精進にもよるであらうが、一面又天質の賜だとも云へやう。氏は長野縣の出身である。信州と云へば山嶽の國であつて、すがすがしい高原の空氣、幽邃な樹木の繁茂は、この國特有な清澄な自然と相俟つて、筆に口に金に、幾多の俊才を出してゐる。それに信州人はその頭腦の良さと、議論に際しロジツクの合つてゐる思考力の豊かなこととで他地方に傑出してゐる。この血潮の流を拘んだ氏が今日あるは當然のことだらう。氏は明治三十二年七月に日本法律學校の課程を修了するや、同年十一月一擧にして判檢事登用第一回試験に合格し、直ちに司法官候補に任ぜられ、赴任したのは埼玉縣熊谷裁判所であつた。かくて三十八年四月には土浦區裁判所に轉じ、同三十九年七月東京地方裁判所判事に進み、未來を囑望せられた次第である。やがて獨逸留學を命ぜられ、横濱の埠頭より旅立つたのは明治三十九年のことであつた。彼の國では有名な學府ライプツヒ大學に學び、ドクトルユリスの學位を受け、歸朝後は控訴院判事、法律取調委員幹事、司法省參事官、監獄局長務に歴任し、大臣官房保護課長、臨時法審判會議幹事、司法省監獄局長萬國監獄常設委員會委員等の重職を経て、大正十一年刑事局長に任ぜられたが後之を辭し目下閑地に英氣を養つてゐる。動功によつて従四位勳三等に叙せらる。賢夫人永子との間に三男三女がある。



笹野嘉市

明治八年六月三日生 麻布區今井町二十一番地

氏の郷里は神奈川縣高座郡大澤村である。裕福でない家庭に人となつた氏は、自らが自らの手によつて運命の開拓に努めない限り、生涯を郷里で朽ち果てねばならぬ境遇に置かれてゐた。小作人の子は永久小作人の子、日稼ぎの人の子は永久に日稼ぎ人として、容易にその宿命の鐵鎖が断てないのは、現在の世相である。もしこの鐵鎖を切つて、自由な天地を開拓した人があるとしたならば、その人によつて拂はれた超人的な努力に、限りない讃辭をおくらなければならぬ。氏が故里の地を後にして上京したのは、僅かに十六歳の時であつた。十六と云へばまだ兩親の膝下であつてもない空想の塔を描いてゐるに相應しい年配である。その歳にあつて嵐のやうに生活の渦が巻いてゐる東京に飛出した氏は、まづ生きんがための總ゆる受難に苦闘した。氏は知人の世話で新橋驛運轉課に入り、やがて車輛檢査員となつて精勤すること約四箇年であつたが、その間は夜になると大倉商業學校夜學部に通學して苦學力行を続け、さしも至難だとせられてゐる苦學戦線をも見事に突破した。これこそ氏の精神であつて強靱性に富んだ性格と、たゆまぬ向學心の結果であつたと云へやう。あの日露の役が突發すると、氏は鐵道院から戦地に派遣せられ、奮闘してやまなかつた。歸國後幾多の事業に従ひ失敗の苦酸を嘗めた末、着手したのが洋服商であつたが、それ等の苦楚より得た尊き體驗は、經營のよろしきを得せしめて遂に今日の成功を齎らしたのである。夫人をかね子と云ひ、精謙の妻として良妻の譽れが高い。

野村毅

明治十二年八月五日生 麻布區鳥居坂警察署官舎

北海道第一の都、加賀百萬石の御城下として、その聲望を誇つてゐる石川縣金澤は氏の故郷である。父は前田藩の強者として代々その家柄を誇つたものだ。氏は靑少の頃から上京して學窓に教育をうけたが、やがて石川縣警察部に職を奉じて、警察界での第一歩を踏み出した。諸般の行政及び警察事務に精進してその才腕を認められ、大正三年六月内務省警保局附屬官に榮轉した。大正七年には更に福岡縣警視に任ぜられ、八幡警察署長として、最も多難なこの労働者街で、復雜した諸種の事件を、整然と處理して倦むところがなかつた。特に氏の在任中に、あの米騒動、日獨戰役動員事務、八幡製鐵所同盟罷業等の重大事件があつたが、何れも之に善處し赫々たる聲名を馳せたものである。でついに大正十年七月に、中央の檜舞臺でも最も重要な位置に當る警視廳監査課長として榮轉し、東京の裏面に巢喰ふ諸種の犯罪檢舉に従ひ、一面社會世相の改善と犯罪の防止とに盡した。がなほも推されて牛込神樂坂警察署長に任命せられ、山の手で最も繁華な地の治安に従つたのである。次いで現島居坂署長に轉じ、いよいよその練達の手腕を伸べ、帝都治安の任に一線を承はつてゐる次第。氏は嚴めしい官服の叔父さんとしては珍らしいまでに平民的な、それに謙讓な人格の所有者である。警察の民衆化が叫ばれてゐる今日、又と得難い人物だ。一方部下の指導薫育に心を砕き、署内に屢々學會を催して名士を招聘し、修養に資してゐるといふ。だから署員の氏を慕ふこと慈父の如く、常に成績は各署のお手本とせられてゐる相だ。みな氏の全人格の反映である。

宇都宮政市

明治十年二月生 下谷區北稻荷町五一 電話 淺草六二一四番

正しい人間愛に燃えて、正道高らかにヒューマニズムの錦幟を翻し、人為的な一切の差別を廢して、慈悲と威嚴と、正義と規矩とを執つてよろづの方面より社會の實相を觀察し、其内より則るべき準據を見出して以て人權擁護に殉ずるほど尊いものはあるまい。吾人はかくした敬虔な人を辯護士宇都宮政市氏に見出す。氏は愛媛縣の人宇都宮寅松氏の令弟である。氏は幼少の頃から法學に志し、ついで上京してその目的を達成したのであつた。だから一度法廷に立つや、その條理整然たる論旨と、その熱誠に溢る辯論とを以て、冤罪に泣く良民のため、満腔の辯護に努め、一意専心その罪の輕減又は雪辱に奔走するを常としてゐる。かくて聲名は日に日に高まり、氏を徳とするの人市井に充ち充ちてゐると聞く。一方氏は餘力を實業界に延べ、あの宇和島鐵道株式會社や筑波鐵道株式會社等の取締役として、手腕の程を認められてゐる。更に王子電氣鐵道株式會社には監査役として業務の執行を監督して遺漏なく、社運の隆盛に力を注いでゐる。なほ公的生涯では東京市政に參與すること數回、また下谷區會議員として區政に參與すること多年、常に紛糾錯雜せる民論を纏めて、脱線せしめなかつたのは異才とせねばなるまい。明治十年の生れと云へば本年度丁度五十歳である孔子の所謂知命に達せる歳なれば、之より出でて大いに成すあるの年齢であるから、前途のほどを期待してやまない。家庭にはかま子夫人との間に愛息孝君がある。多幸なりと云はねばなるまい。



山田友次郎
明治十四年二月十五日生
本所 區 横網町一
電話 墨田八六四(其他六)

有力者山田友次郎氏は、自治の貢献者として本編を輯するに當り漏らすべからざる人物である。氏は始め國家社會學等の研究に志して明治大學法科に學び、明治四十年卒業後は家業に就き、其の學殖を擧げて町自治のために注いだのであつた。之に先んじて明治三十七八年戰役に従軍し、彈丸雨飛の間を馳驅して君國に報じたが、天未だ命を奪はず、生還して勤七等に叙せられた。爾來文明の發達と共に貨物の運搬輻湊は日に多きを加へ、其の圓滿迅速なる運輸の與る力は多大なるものあるを見て、此の事業に着眼し、丸通運送店に加盟して、最も財貨の輻湊頻繁な兩國驛の要地を選んで開業し、自ら率先して貨物取扱の現場に立つて指揮督勵し、さし多数の貨物を吞吐する同所にあつて、處理整然毫も滯滞を見せなかつた此の熱心振りに、事業日を遂つて好轉して繁昌を告げ、多数の使用人を擁して一般の依頼に應ずるに至つたが、現在の多忙振りは盛大振りは羨望に價するものがある。これ亦早く洞察して着手した氏のすばしこさは敬服する。多数の労働者が手足の如く活動するもの、單純粗暴を常とする労働者なづける文の氏の愛撫熏陶の至す所であり、一人人格の閃めきが然らしむる所である。氏は目下勝浦町に支店を設け、全國に向つて貨物を取扱つて居り主として千葉方面を一手に取扱つて居る。氏は又愛校の麗しい心を以つて常に母校の隆替を慮り明治大學評議員となり、今次の復興にも多大の功を獻けて居る。近時自ら筆管を執つて著書に耽ると云ふ。前記の町會會長たの外種々役員に擧げられて盡瘁してゐる。趣味に著書乗馬等がある。



草野武雄
明治七年九月十六日生
麻布區飯倉片町二四番地
電話 青山六四七六番

氏は夙に普通教育事業の振興に關係する事三十年の久しきに亘り、麻布區學務委員としての獻替も既に十有六年に垂んとして居る。其の殆んど半世をさへげて黙々として盡瘁し、敢て功を誇らず名を求めず、高潔分を行へば以て足れりとする所定に畏敬するに堪えたるものがある。氏は南國の出身で、和歌山縣土族として舊家の家に人となり、天質聰敏、早く徳川家の經營に係る養正舎に入學を許され、幼にして大家に就いて學ぶ事を得た。かくて同校を了るや、更に當時唯一の學苑たる慶應義塾に學び、大いに智識の啓發に登雪の苦を積んだのであつた。同校卒業後は、時を普通教育事業に奉じ、偶々麻布區から學務委員に推舉せらるゝや、東奔西走よく責を任じて席の暖るを知らなかつた。抑も國運發展の素地は國民普通教育の向上にある。維新以來當路の人、民間の士相呼應して思ひを此處に致し、普通教育の普及に力めたる功あつて本邦は異常の發達を遂げたりと雖も、その進歩は又一般の自覺を促されて、それに奉仕する熱誠の人士あつて、以てこゝに至れるを看過することは出来ぬ。殊に近時國民の思想的過渡期に際しては、よくこれを指導して國民をして其の歸すべき所を知らしめ、國體を明かにし自覺を呼び起し、各々其の分を盡さしむるには普通教育の完備にまつの外はない。かく觀すれば我が教育界の前途未だ多端であり、氏の疾く此の處を重視して身を投ずる三十年、着々關係事業の完備に奉仕して實現を見つゝあつた所は、實に偉とするに足る。氏は今尙麻布區學務委員長として自ら牛耳を執つてその任に當つて居る。

石垣鶴吉

明治十九年六月三日生
芝區高輪臺町十

日本の富士と云ふよりも、實に世界の富士として誇る名山を背後に負ひ前には駿河灣を抱え、風光明媚を以つて知られたる静岡縣は氏の出生地である。氏は青年期の前半迄を富士川の流れ清きほとり庵原郡南河内村に過し、偉大なる自然の美に育まれて來たのであつて其の濃厚にして寛容なる性格は、全くこの大自然より知らずんゝの中に受けたものであらう。氏は又稀に見る明晰な頭腦の所有者で、幼にして已に近隣に稱せられ、長ずるに及んで益々天才的の閃きを見せ、小學校、中學校に於ては秀才を以つて讃へられ、高等學校の難關も見事にパスして遂には最高學府たる京都帝國大學理學部化學科に入學するに至つた。此處に於いて氏は専心化學の研究に没頭し、最高の學理を極めて大正八年には遂に理學士の榮冠をかち得たのである。かくて卒業後直ちに京都工業學校に就任し、應用化學科長として教鞭を執ることになつた。然し當時同校は創立日尙ほ淺く、従つて凡ての施設が完備してゐなかつたので、之が充實を計る上に於て氏は煩はすこととは一再にして止まらなかつた。後上京して東京府立第七中學教務主任となり、生徒間には非常な愛着されたものであつた。次いで大正十三年五月、氏は教職を退き、東京市に入りてセメント工場試験所長となり、翌年十二月には製管工場事務取扱をも兼任するに至つた。かうした事業は市の復興と相まつて益々多端を極め、殊に日本一の試験所であるといふだけに、セメント試験の如きも現に四五十萬樽の多きに達するの多忙ぶりであるが春秋豊かな氏の活躍には實に好個な所であらうといはれてゐる。



吉山眞棹
明治二十三年十一月十八日生
府下駒澤町上馬引澤八二七

動もすれば官學偏重の弊に陥り易き官公吏の間にあつて、而かも私學出身にして樞要の地位を占め、犀利なる頭腦、豊富なる學殖、明快なる事務的才能とを以つて令名を馳せてゐる人に我が東京市建築局庶務課長吉山眞棹氏がある。氏は南國情緒の豊かなる阿波の國徳島市に生れ、夙に郷費に學び、後雄圖を懷いて笈を東都に負ひ、日本大學法科に入學して法理の研究に没頭したのは大正初年の頃であつた。かくて大正八年法曹界の登龍門たる判檢事辯護士試験に應じて見事に合格するや、越えて同十年東京市主事として文書課の庶務掛長に任じ、精勵格勤大に其の手腕を發揮し、其前途を囑望せられてゐた。職に止まること二年、同十二年辭して法曹界の人となつたが、從來の關係上東京市の囑託辯護士となり、各種の訴訟事務に執筆し、得意の法理的蘊蓄を傾けて法曹界を闊歩したものであつた。かくて震災後帝都復興に資すべく、大正十三年四月再び東京市に入つて、建築局庶務課長の要職に就くに至つたのである。以來復興建築の促進並に復興助成株式會社の創立等の樞機に參画して寄與する處多く、其功績は定に没すべからざるものがある。氏は職務上都市問題の研究に多大の趣味を有する丈に、特に此方面に對する造詣深く、其如何に獨創的の見解を有するかは、從來氏の手に成つた幾多の著書によつても窺はれる。氏は又趣味の上から云つても、又は職務に對して常に學究的態度を以て臨んでゐる點から考へても、將來都市と終始すべく最も多くの特質を惠まれてゐるやうに思はれる。生來讀書を好み耽讀毎に夜半に至るといふ。



前田庄五郎

明治九年六月九日生
千駄ヶ谷町四九一番地

世を擧げて陶酔して、將に華奢遊蕩の最高潮に達した元祿年間、天下の士氣に一大センセーションを與へた四十七士の快學を通じて、普く天下の人心に長く印象附けた播州赤穂は氏が幼時を育んだ土地である。さきに郷里の中學校を卒へた氏は、東上して水産講習所に入學し明治三十一年修了して一年志願兵として歩兵第十聯隊に入營し、精勵格勤翌三十四年陸軍歩兵少尉に任じ、除隊後、直ちに職を農商務省に奉じて勸業調査所に勤務し、三十五年轉じて兵庫縣水産巡回教師となり、郷里の水産事業のため幾多の改善を施し、之が振興に預つて大に力があつた。翌三十六年第五回内閣勸業博覽會開催せらるるや、審査補助員に擧げられて手腕を揮ひ、同年技手として職を東京府に奉じた。かくて同四十三年遂に拔擢せられて高等官に進み、東京府技師に任じられた。此間同四十年東京勸業博覽會には審査委員に擧げられ、兼ねて會務の處理に任じ、更に大正三年大正博覽會事務に執筆し、同十一年の平和博覽會には理事者の一人として功績を擧げた。此外聯合府縣共進會に關しては、山梨、群馬、長野、富山、北海道等に派遣せられ、大に府の爲に氣を吐いたものだ。氏が東京府に職を奉じてより二十有餘年、其間心血を傾注して水産業の發達に貢獻したものである。彼の東京府漁業法發布當時の如き、從來個人の漁業免許狀を組合免許に改め、或は海苔及貝類の増收に、或は漁業術の改善に、其他小笠原、伊豆七島に於ける漁業組合の成立に資する等、其功績は定に没すべからざるものがある。氏の如きは實に我が水産界の恩人といふべきであらう。

淺野謙六

明治十五年十月十日生
日本橋區藥研堀町四一番地
電話浪花一八八四番

日本橋藥研堀にあつて夙に令名を馳せ、或は町會に或いは青年の指導に同地の發展に不斷の努力を惜しまない人に淺野謙六氏がある。氏は東北仙臺市に生れ、土地の小學を卒業するや岩手縣の一の關中學に籍を置き、將來成すあらんとし切嗟琢磨知識の收得に餘念がなかつた。卒業後は獨立自營實社會に一大雄飛を試みんとする内、歩兵第二十五聯隊に入營の身となり、その軍隊生活に於ては良く精勵軍規に服し、隊中の模範兵として常に上司の信望を得て居たが、偶々明治卅七年の交日露彼我の國交破れ、遠く滿蒙極寒の地に我軍擧つて征途に就くや、氏も亦之に参加すべく雄心勃々たるものがあつたが、不幸内地に止められて補充兵教育掛を命ぜられた。而かも氏は戰友の敵地に戈を交ゆるを思ひ、己の責務の重きを感じて後備兵を始めて初年兵に至る迄指導よく其の教育に心血を賤いたが、後幾何もなくしてその宿志は酬ひられて滿蒙の地に赴くや、奮闘に次ぐに奮闘を以つてし、彈丸雨注の間を馳驅して死地に身命を賭し、衆に拔んで、忠誠を盡した。後戰終るや歸國して戸山學校戰術科に職を奉じ、爾來三年精勵よく教練指導の任に當つて其の責を全うした。陛下の赤子として軍門に職責を果した氏は、退營後亦公共自治の爲に奔走し、同町青年會顧問、三縣會常任理事、日本橋旅館組合幹事等を兼ねて現在藥研堀町會長の要職にある。以つて氏の如何に自治の觀念に厚く、後進を誘導して其の手腕の卓抜なるかを知るに足るものがある。宏壯なる宮城館主たる氏は又斯界の重鎮としても聲望を擅にしてゐる。

櫻井功

明治十二年二月十五日生
日本橋區矢の倉町一二
電話浪花三四七番

櫻井病院々長とし、特に産婦人科の名醫として定評のあるのは櫻井功氏である。神奈川縣高庄郡海老名村の出身で、明治三十一年七月山口高等學校を修了し同三十五年東京帝國大學醫學科大學を卒業した。在學當時成績が優れて良かった爲、囑望されて直に母校たる東京帝國大學助手を命ぜられ、産科婦人科教室勤務として引續き研究に勵んでゐた。三十七年に一旦之を辭任したが、翌三十八年六月に、日露戰役のため豫備陸軍見習醫官に召集せられて、東京豫備病院澁谷分院勤務を命ぜられ、この國家の危機に盡瘁し、同年九月には陸軍二等軍醫に任ぜられた。同年十月三十日に召集解除となつたので暫く閑地にあつたが、三十九年二月に積年の希望である獨逸留學を敢行することとなり、彼地の碩學について只管産科婦人科を専攻し、故山に錦を飾つて歸朝したのは大正三年十月二十三日であつた。そして翌年二月十五日に東京市日本橋區矢の倉町十二番地の現住所に櫻井病院を創設し、爾來經營今に至つてゐる。同院にはなほ副院長二名と外敷名の専門醫が、病患者の治療に懇切を極めてゐると共に、看護婦長以下産婆二十名、及び事務長以下藥局生其他十數名の老大な人員を擁し、市内有數の私立病院として聲名を擧げてゐる。氏は又大正十三年六月までは、恩賜財團濟生會臨時三河島産婦院の院長をも囑託され、無産婦人のために仁術を施してゐた。趣味としては書畫骨董を愛好し、クラシックな色調の中に靜かな人生の姿を見出してゐる。夫人敏子との間に一男がある。

前田眞吉

明治十五年十二月生
本郷區彌生町三番地
電話小石川二一五二番

氏の家は歴代淺草に住み、刀鍛冶として武士の間に聲名を博してゐた名門である。祖父前田俊光氏がまだ世にあるとき、世は明治の維新となつたので、廢刀令の下るとともに、この由緒深い祖業をやめねばならなかつた。氏の父君眞吉氏は弱冠にしてかうした一家浮沈の難難に遭つたが、明敏な眞吉氏は、こゝに銃砲鍛冶及び外科醫療器具製作の二途を選んで立つた。而も當時わが國の醫學界は、未だ搖籃時代といふべきものであつたに拘らず、氏は只管海外製品に遜色ない嶄新な醫療機を製作に苦心し、且つ自らこれが先覺者を以て任じ、大いになす所があつた。かうしてその名が次第に高まるとともに、當時の醫學界の元老松本順氏は、門下生石黒忠應氏等を伴つてしばしばその工場を訪れ、その製作品を需めるに至つて名聲ますます高く、明治六年博覽會の萬國博覽會には、文部省の指令をうけてわが國代表出品の製作に任じ、萬丈の氣焔を遠く海外にまで吐いたものである。氏は眞吉氏の第四子として淺草に生れたが、十九歳にして父君の長逝するに及び、親族會議は氏の才幹を認めて長兄を越えて家督を繼がしめた。で氏の技は益々進み、ロンドン及びセントルイスの萬國博覽會では世界的名聲を博し、東京大阪に於ける國內博覽會に出品して亦金銀賞牌を授與されたこと一再でなく、近くは皇太子妃御産殿納入品御用命の榮譽に浴する等、今や斯界の先覺として敬服されてゐる。その他彌生町自治會會長の重責に任じて功績多く、夫人との間に三女あり、二女達子嬢は目下女子師範にあり、何れも才媛のほまれが高い。

宮寺良寛

明治十八年五月二日生
在原郡南品川町東廣町
電話 高輪 九二〇番

宮寺式保温劑の發明者として、斯界に珍重がられてゐるが宮寺良寛氏は、埼玉縣の人である。幼齡僅かに十四歳の時に上京し、神田工手學校に學び、同校を卒業してからは、苦學力行して慶應義塾の夜學部で勉強を怠らなかつたと聞く。卒業後やがて府下大井町石綿工場に入り、純勞働的な苦酸を嘗めながら具さに石綿の利用とその製法を實習したのである。抑も石綿は各種の工業原料品としてその用途が非常に廣汎であり、かつ各般の保温材料として、又はコンクリートの接合劑として、近代科學文明には無くてはならぬ必需品なのである、古書によると、往昔既に忍術の大家平賀源内はこの石綿によつて火用布を製織し、あつと世人を驚かしたと云ふ物語もある。氏はこの點に着眼して大いにその用途を廣めようと、幾多の失敗を繰返しても厭はず研究してゐる内、遂に氏獨特の保温劑を合成するに至つたのであつて、氏が今日の基礎を築くに至つたのは實にこの苦心があつたのである。その後氏は更に層一層研究を重ね、工夫に工夫を凝らした結果、今では六箇の專賣特許權を獲得し、盛んにその製造に従つてゐる。かくて日一日とその眞價を認められるやうになり、業績は愈々隆盛を極め今では數十名の常備雇工を使用しても、なほ需要に應じきれないと云ふ有様である。艱難汝を玉にすとは古い諺であつて、ともすると浮薄な現代人は一笑に附せやうとするが、氏の取り來つたプロセスを考へる時、衷心からその古語に禮讃を捧げざるを得ないと思ふ。實に氏の如きは刻苦して磨かれた玉である。



澤逸與

明治十四年一月四日生
府下落合町下落合
電話 牛込五〇一三番

氏は明治四十三年東京帝國大學工科出身の工學士である。大學卒業後は直ちに南滿洲鐵道株式會社に入つて、大いに出色の器を認められた。氏の郷里は茨城縣筑波郡三島村で、縣下でも有数の門閥家であり素封家であつたが、根が質朴剛健な氏は、ともするとかゝる富豪の子弟の陥り易い柔弱なところは尠しも見出されず、遠く母國を離れた荒涼たる滿洲の野に欣求と思慕を以て忠實に職務を遂行して怠らなかつた。かくて氏は大正六年まで氏の放棄な性格にも相應しいあの赤い太陽の沈む大陸の大自然の裡に浸つて彼の地で暮したが、同年歸國し、久原鑛業會社經營の日立鑛山に入つて勤務することになつた。堅鑛三千尺、下れば地獄と觀念して、ともすれば粗暴に流れ易い坑夫達を督勵し、慈父の如き温かい人間味を以て懇に指導してゐた。大正十一年に東京市電氣局教習所長として招聘され、大正十四年九月には運輸課長に進み、現在に至つてゐる。教習所長時代の功績と看做すべき幾多の内でも顯著なものゝ一つは、普通二ヶ月卒業であつた特別見習生制度を一ヶ年教育に延長し、優秀な技術員を養成して業務の進展に資したことであり、更に危険を伴つた急行電車を廢止せしめた等であつた。みな英斷に富む氏にして初めて敢行し得た事柄だと云はれてゐる。趣味としては武術を好み、擊劍に柔道に一廉の猛者として知られ、學生時代には學習院生徒の師範として、火の出るやうな猛練習を施したものだ。當時の院長乃木大將の氣に入つたのも、畢竟實實剛健な氏の氣風を愛であつた爲であらう。夫人との間に一男三女がある。

小杉久吉

明治二十一年生
上目黒一九二八
電話 青山 六六四番

氏の家は町内で有力な家柄として知られた小杉家の分家である。父君由太郎氏は、まだ上目黒一帯が、町政を施行されない頃、長期に亘つて村會議員の名譽職に推され、同地の發展に裨益するところが頗る多かつた。氏はその次男として生れ、人世の第一歩に於て、早くも己に祝福されてゐたと云へやう。それで幼ない頃から英明の聞えがあり、長ずるに及んで才識益々冴え、よく世路風霜の機微に通じ常に中正穩健の態度を持つて人に見ゆるので評判もよく町民の衆望は日一日と高まるばかりである。氏は多くの貸家を持つてゐるが、未だ一度として借家人との間に醜い紛擾を醸したことを聞かない。これこそ温情に徹した氏の麗しい人情味の顯現だと云ひ得られやう。更に氏は事業方面にも相當の識見と手腕を有し、目黒館の設立は一に氏の力に俟つものが多く、氏は又業務の傍ら町政の刷新については不斷の努力を拂ひ、従來町會議員に當選すること前後三期に及び、去る大正十五年の改選に際し町民の有志より推されて鹿を中原に争ひ大多數を以て見事に當選の榮を贏ち得て町會の一異彩を以て目されてゐる。かつては國勢調査員に擧げられ、更に土木委員、會計検査委員として各種の公職に日も足らぬと云ふ奔走ぶりである。なほ區劃整理評議員としても頗る盡瘁してゐる。その外に中目黒小學兒童保護者評議員に推され、町内兒童教育に盡してゐる。少壯なる氏がこの花々しい活躍を続けることは、ともすると老年閑のはびこりな時代にあつて、一服の清涼劑として青年を奮起せしむるに足ると共に、氏の前途の更に廣きをも想察させる。

小黒勝四郎

明治十五年一月生
麻布區新廣尾町三の一五五
電話 高輪 六三九七番

人生行路のその中で生活苦、住宅苦、結婚苦等々多數の苦字を背負ひ込んで、蹣跚と歩み続けねばならぬ世相を凝視する時、生きることの茶飯事に非ざるを考へさせられる。ましてや之等の行路難を押し切つて水平線上に頭を擡げるには非凡の士でなくては成就し得ぬ事柄である。それを想ひ之を思ふ時に、わが小黒氏の辿つて來た過去のプロセスは、驚嘆に値ひする血と涙の苦闘史であつた。氏は新潟縣長岡市殿町の出身である。二十一歳の春鬱勃たる功名心に燃えて上京し、まづ赤坂區内に堂々たる浴場を開設したが、事志と違ひて幾何もならずして廢業の已むたきに至つた。併し氏は毫も之に屈する色なく、更に進んで下谷區花園町に四千圓を投じて浴場を開設した。此時も天は此青年に幸ひせず、再び失敗を繰返へすに至つた強堅鐵の如き強固なる意志を有する氏は、三度浴場を設けて飽迄も初志の徹底に力めたが見事に豫想は裏切られ、遂に三度失敗の憂き目を招くに至つた。かくて困窮の極浪々多年、各所に奉公して靜かに機會の至るを待つてゐると、氏を愛する某知人の同情により、今度は方面をかへて白金志田町に新炭業を營み、妻女を娶つたのが二十七の時であつた。併し幸運は二人の上に恵まれず四度失敗の日が訪れて來た。仍で已むなく夫婦して職工となり社會のどん底を流れたが、其後糠粟、花屋等を経て運送業を開始して始めて鞏固な今日の地盤を築き上ぐるに至つた。氏の如きは眞に立志傳中の人たるを失はぬ。氏は現に町會の理事として公共のためにも不斷の寄與を計り、家庭には精練の夫人との間に三男がある。

淺見高明

明治二十三年十月生
本郷區龍岡町三十二番地
電話 小石川 七七二番

千葉縣流山町は氏の故郷である。學序を遂ふて仙臺醫學專門學校を卒業後は、上京して神田區淡路町風雲堂に入つて十餘年餘に亘つて勤続し、病患者のために蘊奥を傾けて治療に従つたものである。患家より絶大の信用を博してゐる風雲堂の聲價は、氏に負ふところが甚大であると云はれてゐた。かくて氏の醫術は入神の域にまで達したが、由來事業家的な才能を胸底に秘めてゐた氏は、大正五年遂に風雲堂を辭して、本郷區龍岡町三十二番地の現住所に店舗を開き、顯微鏡輸入販賣業を營むことになつた。そして顯微鏡製造元としては世界隨一の定評ある獨逸ザイツ會社と特約して、同社の日本一手販賣權を獲得し、大々的にその販賣に従つたのである。抑も顯微鏡はその構造が非常にデリケートなもので、しかもレンズの製作は露妙な技術を要し、醫學國にして科學國たる獨逸の外に優秀品は容易に製作し得られないのである。従つて同國ザイツ會社製作の顯微鏡は、内地製品は勿論他國品の到底追従し得ることの出來得ぬ程精巧で堅牢であることはいふ迄もない。それでゐて氏は常に誠實を旨として顧客の便を計り、價格の低廉を期してゐるために、醫學界の各方面より續々として注文殺到の好況を示し、牢固としてぬくことの出來ぬ現地歩を築き上げるに至つたのだ。しかも氏は龍岡町厚誼會の副會長に推され、町民の共榮に盡瘁し終始度しき公民生活に没頭し倦むところがない。麗しい氏の性格の顯現だと云へる。家庭には夫人との間に男子二人、女子四人があり、子實長者として圓滿な家庭を作つてゐる。

小林安太郎

明治二十一年十一月三日生
四谷區永住町二十二番地
電話 四谷 四二六一番

氏は四谷區永住町二十二番地の現住所で孤々の聲をあげたのであつて、現に多くの地所や家作を有して同地方での有數な資産家であるばかりか、代々の門閥家として知られてゐる。四谷小學校を卒業後日本中學に學んで俊英をめでられてゐただけに、非常にクリヤーな頭腦の持主である。と共に生粹の江戸つ子が持つ齒切れのよい明るい性格は、萬事に處して好感を抱かされ、氏の有する獨特の魅力を表現してゐる。中學卒業後は家事に従つてゐたが、大正十一年十二月十五日に東京市社會局より東京方面委員に推されてからは、常に社會施設や救濟方面に活躍して、無産階級のために度ましい温情ぶりを發揮してゐる。そして今もなほ同委員として不斷の努力を拂つてゐる。大正十一年に電氣局が、四谷町に待避線を設置せんとした際の如きは、氏は町民を鼓舞して徹頭徹尾之に反對し、遂に目的を貫徹した如きは、今もなほ町民によつて深甚の感謝を拂はれてゐる。更にあの帝都大震災當時に組織された自警團が、やがて永住町々會に組織變更されるに先立つて、氏は同志と共に極力奔走して之を實現せしめ、塚本辯護士を會長に、吉野、中里の兩氏を副會長に推薦し、自分は單に相談役として裏面での誘導につとめてゐる。なほ國勢調査委員をも命ぜられて倦むところがなかつたと云ふ。趣味としては讀書、郊外散策等で、茲に凡でない氏の間味が窺はれやう。

夫人すぎ子との間に三子があつて、長女久美子嬢はお茶水小學校に在學中である。

森田徳太郎

明治四年五月十六日生
府下下澁谷七九六番地

吉川榮治

明治十四年二月一日生
淺草區旅籠町二ノ十二
電話 淺草 四〇六〇番

會ては身を軍籍に投じて赫々たる武名を馳せ、今や東京市道路局埋物設掛長として異彩を放つてゐる人に我が森田徳太郎氏がある。氏の懐しい搖籃の地は和歌山縣有田郡箕島で、其の氣骨は幼少より已に儔友を壓し、聰明は衆に抽んでゐた。長ずるに及んで途を軍職に取り、陸軍士官學校を優等で卒業し、日清日露の兩役に従ひ、各地に轉戦して殊勳を樹て、陸軍少將までも進んで後職を退くに至つたが、氏が武人としての功績は已に從四位勳三等功五級と云ふいかめしい肩書が最も雄辯に之を物語つてゐる。だがこゝに最も推稱に價ひすべきは、生ある限り何處までも忠實に其職責を全うしやうとする氏の美しい責任觀念の現はれであつて、即ち普通の人だと已に氏の如く功成り名遂ぐれば閑地に餘生を送るべきなのに、氏は却つて之を肩しとせず、徹頭徹尾勞務に奉仕するが、即ち國家に對して忠であり尊い人間としての務めであると確信してゐるとである。かうした堅い信念の下に、氏は大正十一年十一月而かも市の一囑託として道路局に入り、熱實至誠以て只管理設物の研究に身を委ねてゐるが、其處に氏の偉大さがあり人格の閃めきがあるのである。殊に氏は同局に入つて以來自ら努めて吏務に通ずることに専念し、會て時めく將軍であつた人とは受けとれぬ位、謙讓そのものやうな態度を以て熱心に修練を積んでゐる。そこに又氏が度ましい國家奉仕の努力が見え、同時に衆人に愛敬せらるる所以も頷かれるのである。氏は子女九人と云ふ子福者で、内男二人は何れも帝大、農大の秀才と聞く。他は女子で何れも嫁して清福を惠まれてゐると。

三百年の間武家の政を擅にしてゐた徳川を倒し、遂に彼の維新の大業を成就したのは薩長土肥諸藩の先覺者の殊勳であつて、中でも長州の如きは其の策源地として多くの偉傑志士を出した。吉田松蔭を始めとして高杉晋作、木戸、伊藤、山縣等、近くは乃木大将も亦山口縣の人で、實に在々數ふべき程である。而してこの長州こそ又實に吾が吉川氏の郷里である。氏は明治十四年吉見村に生れ、傳來の家業に就いてゐたが、先輩志士の事蹟を慕うては其まゝ家郷に在るに堪えず、思ひはいつも遠く東都に走り勝であつた。明治三十年、氏は十八歳にして遂に意を決して東京に上つた。世に生馬の目を抜くとまで云はれる東京に、當時若年の身を以て田舎から飛込んだ氏の苦勞は、到底想像も及ばないものがあつた。併し一たび決意した氏の志は挫くべくもなく、よしや進む道こそ違ふとも、立身出世を願ふこの志をはいかでか遂げざるべきやと、自ら勵まし自ら努めつゝひたすら生業にいそしんでゐた。かくして爾來幾春秋、遂に獨立して二葉亭と稱する料理店を開業した。所がその構への風流なると、料理の珍味にして廉價なるとを以て盛に粹客の足を留め、今日當地一流の料亭として高評を博するに至つた。兎角斯様な水商賣を經營してゐる人には人格の疑はしい者が多いが、氏はどこまでも維新の志士の精神を體して清廉潔白であり、其上段いも甘いも嘗め盡してきてゐる丈に諸事の理解に富む所から、次第に衆望を擔つて今では代地町會理事に推され、同町自治の爲めに盡瘁してゐる。今や識見已に圓熟し、今後の活躍を期待されてゐる。

福垣金則

明治十年六月二十一日生
府下馬込村谷中一〇九二番地

東京市に入つて以來日尚ほ淺く、而かもよく事務を圓滑に處理して令名を馳せて居る一方、朝鮮統治の偉大なる貢獻者として推稱すべき人に福垣金則氏がある。氏は埼玉縣比企郡松山町に生れ、夙に官界生活を志し日夜學に研鑽し大いに得るところがあつたが、偶々日韓併合せられ總督府の設立を見る頃、氏は此處に赴任して粉骨碎身職務に精勵すること十數年、其の功績大いに見るべきものがあつた。由來氏は殆んど其の半生を朝鮮に過して居る程朝鮮とは關係深く、朝鮮統治の今日あるに至れるは勿論、溯つては彼我の親善に盡瘁した功、枚舉に遑なき數に達して居る。朝鮮と我國との關係に就ては今更論する迄もなく古來唇齒輔車の間柄にある。然るに偶々中途反目するの事件を惹起し、或ひは我に非禮を加ふる迄に至つたので茲に征韓論を主張するもの起り、遂に其論破れて明治十年西南の役を見るに至つたのである。氏が呱呱の聲を擧げたのは丁度此の西南役前後であつたが、長ずるに及んで此の難局に處し、能く之を解決し、後總督府を辭するに至つても尙海軍省平壤鑛業部に職を奉じ、前後二十年の歲月を彼の地に奮闘し、本年二月漸やく同部を辭し、歸朝して現在の職に就いたのである。されば氏が此の十數年と云ふ長年月に亘つて、朝鮮開發の爲に盡瘁し、孜孜として己れの利害に超越したる眞摯の態度は、幾多の計り知れない功績を残して居ることは言を俟たない事實である。氏は又所謂御役人肌を脱したる稀に見る多趣味な人で、謡曲、俳句は勿論、圍碁將棋等あらゆる技に長じ、夫々一家をなして居る。家庭は實に圓滿である。

宮澤節一

明治十八年八月一日生
芝區愛宕町二ノ一四
電話 青山 三六四一番

氏は長野縣上伊那郡片桐村の産である。夏なほその頂きに雪冠を戴き、峻峰天を摩するの西駒ヶ岳を後に控え、前には天龍川を隔て、荒川岳の雄姿を望むの山水雄大な地に育つた氏は、初めはその胸底には常に大きな理想を懐き乍らも、たゞ黙つて家業にいそしんでゐたが、十七歳の時遂に意を決して單身家郷を去りて東京へと志した。僅か十七歳の少年、しかもひよつこり生馬の目を抜く東京の眞中に飛込んで来たのである。無論大抵の覺悟ではなかつた。やがて赤坂溜池の清水製作所に職工として入り、苦辛十年骨身を碎いて働き、遂に大正八年には獨立して現在の場所工場を持つことが出来るやうになつた。勿論初めの頃は工場とは云はれぬほどの小さいものであつたが、氏の熱誠と努力は直ちに多方面の信用を擴ひ、みる／＼その大をなすに至つた。實に現在では東京に於ても洋家具製造工場としては有數のものであり、職工百有餘名を使用してなほ足らぬ程である。各一流百貨店の指定工場として、また警務監理局、東京地方專賣局、會計検査院等の官署を始め、三共製藥株式会社、帝國海上保險、東京火災、安田保全、三菱地所等の諸會社から、又澁澤、三井、高橋は清家等一流の顧客を得、年産額六十萬圓の多きに達すと聞く。なほ貴衆兩議院の燒失に際し、その洋家具は全部五十一議會前までに氏の工場より調達することになつた。之を見ても如何に現在の經營が大規模に、その信用が篤いかは覗ひ知る事を得よう。同氏の如きは實に成功立志傳中の人物として推稱するに足るものである。今惠夫人との間に二男三女がある。

高須勸次郎

明治十九年九月十七日生
芝區三田四國町三ノ一號
電話 高輪 三四〇八番

「醫は仁術なり」とは古來醫師の守るべきモットーとされてゐるが、眞にこれに叶ふべき醫師の尠ない今日、氏の如き仁慈にして同情深き人士を得ることは喜ばしい。氏は現に芝區三田四國町にあつて、卓拔せる技能と懇切なる治療とを以つて患者に當り、よく患家の信頼と尊敬とを得てゐる人である。愛知縣碧海郡櫻井村を故郷とし、中等教育を郷土に卒へ、後笈を負うて東部に遊學し、日本醫學專門學校に入學して、一般専門學を研究し、明治四十二年四月卒業して翌四十三年には内務省醫學開業試験に合格した。そこで斯界の權威三浦謹之助博士の主宰する帝國大學附屬病院三浦内科に助手として勤務すること三年、其間親しく實地に就て研鑽し、漸く機軸の熟するに及んで現住所に獨立して醫院を開設したのである。爾來専ら患者に對して親切丁寧を旨とすると同時に、多年の蘊蓄と卓越せる技能とを以て之が治療に當つたので、業績日を追ふて益々學り、遂に出張所を芝浦日の出町に設け、頗る殷盛を極むるやうになつた。氏資性温良にして一面任侠の氣に富み、貧者に對してもよく醫師の自分を發揮し、常に溢るが如き温情を以て之を迎へ、人によつて差別的言辭を敢へてするが如きことは斷じてない。殊に人に接するに毫も橋壁を設けず、常に明るく態度と、親しみやすい感じを以て應酬するあたり、恰かに醫師としての天職を能く理解せるものと云ふべきであらう。氏は本年四十一歳の働き盛りで、益々その人格の圓熟を得ると共に男として價値づけられるのは之からであつて、前途は實に洋々たるものとされてゐる。

龍山義亮

明治十五年二月五日生
下谷區谷中清水一

氏は越中高岡の地に生を享けた。高岡の地は後に白山の秀峯を負ひて前には日本海の浩波を望み、清冽なる庄川これを廻りて風光秀麗を極めてゐる。郷土の山川が人の性情に多大の感化を與へることは古來よくいはれてゐるが、氏の性格より見ればこの實頗る當つてゐる。又北陸地方の人士は人情に厚く、風俗醇雅であるとして知られてゐるが、氏はこの郷土的氣質をも具へてゐると見られる。勿論氏独自の修養切磋の功によるものではあらうが、而もなほこれ等環境の感化は見逃せまい。伏木港を控へたる高岡の市は、産業上同地方の中心であると共に、又教育の中心地であつた。かくて氏は向學の志望の燃ゆるがまゝに、學序を経て東京に出で、最高學府たる帝國大學文學部哲學科に席をおくやうになつた。三年の螢雪の功空しからず、明治四十一年七月優秀なる成績をもつて同大學を卒業され、同年九月文部省屬となつた、爾後五年間文部省にあつて本邦教育の爲めに盡力される内、大正二年五月選ばれて奈良縣女子師範學校長に榮轉して、舊平城京の地にあり、大正五年九月京都府女子師範學校長に榮轉し、平安の女子の教育に従事せられたが、翌大正六年七月千葉縣立女子師範學校長に轉じ、六年間房總教育界の爲めに盡力せられた。大正十二年四月、拔擢されて東京府立女子師範學校長に榮轉し、續いて同年十一月府立第二高等女學校長を兼任せられて今に至つてゐる。氏は人格高潔、温厚篤實にしに而も識見經驗併せ具へ、現今教育者多しと雖一猶稀に見るの篤學の士である。趣味はたゞ讀書だといふ。亦以て氏の態度を窺ふべきである。

柏木末吉

明治二十年二月二十七日生
本所區綠町一ノ三九番地
電話 墨田長 二三〇二番

近來我國に於けるメリヤス製造業の發達は驚くばかりで、それは單に國內の需用を充すばかりでなく、進んで精巧にして而かも優美なる製品を多量に海外に輸出するに至つたことは、我國工業界の誇りであると同時に、國産伸張の意味からしても甚だ喜ぶべき現象である。我が柏木末吉氏は都下メリヤス製造業者中の重鎮として我が製造工業界の爲に虹の如き氣を吐きつゝある人である。氏は福島縣岩瀬郡須賀川町の人で、幼にして才智業に優れ、未だ十三歳と云ふに雄々しくも單身上京し、我がメリヤス業界の先驅たる古川メリヤス製造所に入つて辛苦を積むことゝなかつた。居ること十年、更に二三の工場を遍歴して具に其製法を修め、機熟するに及び、本所區二葉町の地を下して業を営み、活社會へ獨立の第一歩を踏出したのである。以來専ら之が經營に心を砕き、多年の尊い經驗から要所二重縫ひ等の特色ある製品を市場に出した所、忽ち其實用的價値を認められ、非常に好評を博するに至つたので、更に大量製産を企て、同志を糾合して日本毛織メリヤス株式會社を起し、業績の大に見るべきものがあつたが、不幸にして彼の大正十二年の大震災の爲跡形もなく烏有に歸し、多年血と膏とを以て築き上げた努力も故に全く水泡に歸するに至つた。然し不撓不屈の精神を以て滿されてゐる氏は毫も屈する色なく、一落復興へと努力を重ねた結果、見事に頽勢を挽回し、目下其生産品は丸善のみにて實に二百五十萬圓の巨額を卸すに至つた、其他各一流の商店に卸され彌が上に聲價を高めてゐる。蓋し氏の如き稀に見る立志傳中の人である。

有馬淺雄

明治十七年二月十五日生
北豊島郡瀧之川町九〇七

堅い意志と燃えるやうな情熱とを以てすれば何事でも成就されぬことはない筈で、その例として現府會議員有馬淺雄氏を擧げることが出来る。氏は教育の發達で知られてゐる長野縣は伊那町在の出生である。だが氏の頃にはまだそれ程でなく、氏は當時の普通教育を受けたばかりで上京し、爾來獨力切磋して遂に現今の地位迄上るに至つたので、これこそ氏の堅い意志と熱い情熱とに歸せねばなるまい。氏は實に明治四十一年上京してより二十年間に於いて、瀧之川町名譽助役、東京府會議員等の外數多の要職を佩び、實業界にあつても九十九里漁業株式會社々長其他數種の會社に關係して、現に隆々たる聲名を馳せてゐるのである。初め氏は出京と同時に瀧之川村役場の一吏員として入つたが、其熱心は他と異り、當時新任の氏には村内の地理さへ詳かでないかつたので、退廳後は地圖を以て實地に踏査したとのことだ。これは一瑣事の如くであるが、已に凡人の思ひ付きではない。爾來萬事この熱誠を以て村政に盡瘁したので、遂に進んで有給助役となつた。其後村勢次第に發展するにつれ、村役場小學校等を改増築し、大正二年には町政を布くに至つたことなど皆氏が在任中のことであつて、大正二年には自治功勞者として府より表彰された。今では前記の外、稅政整理の促進を期したる府下五郡各町村を以て成る東京府稅務協議會々長、在郷軍人瀧之川分會々長、那教育會長、聯合青年團團長、五郡町村吏員互助會長等にも推されてゐる。澁澤子爵よりは早く其才を愛せられ、何くれとなく推輓を受けてゐることだ。空てる子また貞淑の聞えが高い。



中内彦次郎

慶應二年二月生
本郷區追分町三十番地
電話小石川一七三七番

渾身智を以つて充され、其言ふ處は如何に明論卓説でも、之を説く人の人格が劣等であつたなら、其處には何等の權威も生命もない。従つて人を感動せしむるには至らないのである。水晶の珠も名木の机上に置かれてこそ一段の光彩を發揮すると同じく、人の力も人格と相俟つて初めて眞の光りを發するものである。世には才智の優れた人は多い。然るに才識人格二つながら兼備してゐる人は稀れである。此二つの美德を惠まれた人に我が中内彦次郎氏がある。氏は生粹の江戸つ子で、夙に私塾に學び、後實業界に志し、各種の事業に従つて具に辛酸を嘗め、曩には動産保險會社等にも關係して天賦の才能を發揮したが、後質屋營業から更に轉じて下宿業を営み、千代田館と銘打つて斯業に従事し、専ら業務の刷新を行ひ、遂に今日の隆盛を見るに至つたのである。此外氏は夙に信用組合本郷金庫を組織して之が理事となり、組合の爲めに不斷の努力を傾注して倦む處がない。こうして氏は多忙なる業務の傍ら心を町勢の發展に注ぎ、町民の福祉を増進せんが爲、曩に町會成立の議を提唱し、遂に同志を糾合して追分東部町會を組織し、推されて會長となり、町民の共存共榮の爲に犠牲的奉仕を怠らない。其他氏は東京聯合青年團評議員、區内青年團理事等に推され、常に純眞な青年の指導誘掖に力むる外、衆望の歸する處所得稅調査委員に擧げられ、貢獻する處が極めて多いと云ふ。氏は思想圓熟、世路風霜の機微に通じ、常に中正穩健の態度を以つて人に接するので至つて評判がよい。現に徳望の隆々たるもの決して偶然ではない。



山下雅吉

明治十六年九月十八日生
小石川區仲町六
電話小石川七一六番

自分の力によつて社會的地位を築き上げた人程世に尊いものはない。我が山下雅吉氏が今日迄辿り來つた血と涙ににじむ過去の奮闘史は、儘かに現代青年の龜鑑たるを失はぬ。氏の出身地は神奈川縣である、夙に青雲の志を抱いて上京したが、氏の家庭は氏に學資を補給すべく餘りに貧しかつた。従つて氏は所謂苦學をするより外に途はなかつた。自分の力によつて糊口を凌ぐことさへ至難であるのに、まして其内から學資を得て苦學力行することの如何に惨なものであるかは此處に更めて記す迄もない。かくて漸く學力を得るに及んで家庭教師小學校教員等の事に携つて學資を得、物理學校清韓語學校等に登雪の功を積み、進んで専修大學の前身たる専修學校の理財科に入りて研鑽中、偶々中央新聞社に於いて記者の募集が行はれたので、氏は之に應じて首尾よく合格し、記者生活としての最初の一頁は開かれたのである。爾來氏は其蘊蓄を傾けて麗筆を揮ひ、其犀利なる觀察力と相俟つて紙上に異彩を放つてゐるが、後毎夕新聞社に聘せられ、地方版主任となりて恪勤の譽を得てゐた。かくて後隱みる處あつて操觚界を退き、塗料會社を起して之が社長となり、大に業績の見るべきものがあつたが、不幸中途病を得て退社し、大正九年新に化粧品製造販賣を企て、孔雀園と稱へ、目下椿油製造販賣に従事し販賣を極めてゐる。氏は又非常な精力家で、病中と雖も事を苟もせず、枕頭に某醫學士を招いて研究の結果農産物害蟲驅除劑を發明し、各代表的農園の激賞を得たので近く發賣すと云ふ。又以つて氏の人と爲りを知るべく、現に仲町々會長として信望が篤い。



石橋 政治

明治十六年十一月十四日生
北豊多摩郡梟町宮下一六七一
電話 小石川 六一二二三番

東京市議員！それは流石に我が東京二百萬市民が選りに選つて市政壇上に送つたわけであつて、少くとも傑出した多くの特長を持つ強者揃ひである。それ等の猛者が何れも政黨的色彩を異にしてゐるのであるから、市會は常に平靜な空氣の裡に何處となく恐ろしい激動の影を秘めてゐる。こうした潮流の眞つた中であつて、黨せず偏せず、公平に、而かも圓滑に事務を進捗せしめつゝある我が石橋政治君は、隨かに名書記長たるに耻ぢない。君が書記長の椅子に納つてから急に市會の空氣が明るくなつたやうな氣がするの、君に恵まれた慎密の思慮、明哲な頭腦、人心收攬術、事務的才能、さうした美德が然らしめるのである。君が懐しい搖籃の地は千葉縣山武郡蓮沼村である。郷里の千葉縣立中學校を卒業して上京するや、最初法律家たらんとして明治法律學校に學び、次で正則英語學校に入つて琢磨の功を積み、業成るに及んで明治四十一年東京市役所に勤務することになつた。即ち君の公的生活の第一頁が此處に開かれたのである。君が衛生課に勤務中の事であつた。従來舊式な努力叩筒と手車との撒水が、帝都の美觀上經濟上好ましくないのを見て、君は熱心に理事者を説得し、今日のやうな撒水自動車と叩筒を使用せしむるに至つたのだと云ふ。其後君は市會事務局に轉じたが、大正十一年八田書記長が京橋區長に榮轉するに及び、其跡を襲つて書記長となつたのである。大正十四年市議決機關調査の爲歐米に派遣され、新智識を得て歸朝したのであるから、今後大に刮目して見るべきものがあらう。

澤木 富次郎

慶應二年八月八日生
本郷區湯島天神町二の一二

明治より大正に亘る文化は、自由競争に基く新興階級の科學的文明である。曾て徳川時代にあつて武士階級が常に農工商の上に臨んで權勢を誇つてゐたが、維新以後所謂四民平等となつて世は開國進取の氣象と共に商工階級の人々は何時とはなく經濟的に武士階級を凌ぐやうになつた。と同時に西洋の文物は滔々として東海の孤島の岸を洗つた、射利輕薄の風潮は日を追ふて社會の上下に浸潤し、我國特有の忠良の美風良俗を破壊せんとしてゐる。此の時弊を矯正せんが爲め、常に第一線に立ち、一意専心民心の振興を叫び續けてゐる人に、わが澤木富次郎氏がある。氏は愛知縣の出身で、四十年來の久しきに亘つて現在の地に醫師を開業し、刀圭界に重きをなしてゐる。氏は人格高潔にして忠君愛國の念厚く、常に明治大帝の聖旨を奉體し、毎日必ず齋戒沐浴して勅語を淨寫し、以つて自ら三省に資するを日課とし、曩に長くも、聖上陛下が大詔を喚發せらるゝや、氏は此聖旨を深く國民の腦裡に徹底せしめんが爲、之を印刷して廣く公共團體に頒つた。其他、兩陛下の銀婚祝賀の際には忠實勤勉等即ち勅語の文字を燐寸のレツテルに記して民心の振興に力め、又湯島小學校同窓會開催の際に「克忠克孝」と題する著作を寄贈し、愛國の思想を喚起する等、其善行美事は殆んど枚擧に遑のない位である。氏は又町政自治の發展に盡す處極めて多く、氏の牛耳を執れる天二自治會が、町會の範を以つて目されてゐるのも一面氏の人格の反映と見ることが出来る。蓋し氏の如きは當代稀に見る處であらう。夫人明子との間に二男一女がある。

小川 清次郎

明治十六年八月八日生
豊多摩郡世田ヶ谷町二四四四
電話 牛込 六一六八番

帝都の復興は我が國有史以來の大難事業であると共に、これが達成には官民共に最善の努力を拂はなければならぬ。従つてこの事業に参加するものは、各能を競ひ、智を争ひ、相共に至上の力を致すべきは當然だらう。就中建築關係の諸事業は、直接にこの大業の第一線に活躍するため、その多忙さは想像に難くない。中にも小川清次郎氏の經營する小川組は、新進の銳氣を以て同業者間に傑出した實力を以て知られてゐる。小川氏は府下世田ヶ谷に生れ、幼少の時から建築界に驥足を伸さんと欲し、明治二十四年築地工手學校を卒業後、清水組に入り、二十有餘年の久しきに亘り同組の中堅として重用せられたが、明治四十二年に獨立して株式會社小川組を組織し、自ら陣頭に立つて一切の業務を統べ、技術員には優秀な人達を網羅し、日を重ね月を積んで隆盛の域に達せしめたのである。氏の請負による大工事は相生東海銀行、平塚海軍火藥庫、柳島栗原紡織會社工場、牛込森氏邸の如き枚擧に遑がない。これこそ、その誠實と技術の正確の象徴だと云へやう。氏はまた居町の小學校教育後援會理事長として、また工政會評議員として、社會の各方面に盡瘁するところが頗る多い。夫人のまさ子さん、は舊小田原藩士小山和興氏の二女で、貞淑の聞えが高く、氏の今日あるは夫人の内助の功があつた力強いとの噂である。長男浩一氏は米國ウイロン・ビジネス・カレッジを卒業して、目下滯米し、父君の業を學究的に研究してゐる。次男督君は早稲田大學理工科を卒り、共にその未來の程を囑望せられてゐる。

奥 秋 高 義

明治十四年生
芝區櫻田鍛冶町六番地
電話 銀座 二七八八番

甲州北都留郡の猿橋のほとり廣里村は氏の夢寐にだも忘れることの出来ない郷里である。猿橋と云へば日本三奇橋の一で、あの馬入川の流桂川の深淵に架せられ橋脚をなす安山岩の懸崖は、突兀として岷々たる奇相をなしてをり、伏せば靜かに深潭を瞰ふべく、そこには文字の如く猿公に因む傳説があるのだといふ。その幽邃な地に人となつた氏は、一脈の哲人味を帯びた氣風のあるのは當然のことだと云ひたい。氏は舊姓を高山といひ、幼ない頃に隣村の奥秋家に養嗣子として轉籍したのであるが、雄志空しくこの邊陲の地で埋れることを惜み、ついに上京して中等の教育課程を終ると、明治三十七年明治大學法學部に入り、三箇年の後には優秀な成績で卒業、やがて間もなく辯護士試験にパスしたのであつた。かくて事務所を開設すると、その該博な法理論と諳々と人倫の大綱を説く雄辯とは、氏の明るい正義觀に根ざす人格の閃めきと相俟つて、瞬く間に東京法曹界での重鎮としての位置を築いて終つた。氏は又事業家肌の才氣に富み、郷里に模範織物工場を設け、盛んに土地の名産甲斐絹を生産してゐるの外に有志と共に農産物會社をも創設し、彼の大日本種苗會社に對して農事の改良發達に裨益してゐる。なほ第一證券株式會社監査役、日本辯護士協會理事、辯護士協會常議員、革新法曹會理事の職務をも兼ね、櫻田青年團顧問として町民自治の助長にもつとめてゐる。氏は郷里から衆議員議員に立候補し、故あつて中止したが、近い將來にその榮冠を戴ふに至らうと期待されてゐる。

立花種忠

明治十三年一月生
入新井町新井宿二〇九三
電話 大森 一七二番

名門の出、動もすれば安逸を貪り、延いては世の擯斥を受くるに至るものがある。富多く位高きは由米人の視聽を集むるところ、一段の戒心を要する。我が立花種忠氏はこれに鑑みる所あり、身名流の胃を以て出で、社會公共の事に任じ、自らデモクラットの先驅者として奔走の勞を厭はないのは偉とすべきである。當家は高橋入道紹運鎮種の二男統増の裔で、後民部少輔直次と改め、慶長十八年徳川氏に從ひて常州柿岡の地五千石を賜り尋で筑後國三池に移り、封邑一萬石を食み、爾來八代を経て從二位種恭に至り、維新に當つて三池藩知事、華族學校長等に歴任し、明治十七年特旨を以て華族に列し、子爵を授けられた。當主は種恭氏の八男に生れ、夙に學習院に學んだが、後明治大學政治科に切瑳の功を累ね、三十六年舊名恭忠を改め、三十八年家督相續と共に襲爵を仰せ付けられたのである。かくて明治四十一年騎兵聯隊に入營して軍務に精勵し、果進して中尉に進んだ。除隊後は主として、在郷軍人會の爲めに力を注ぐと共に福島北海道等の未開墾地の開拓に従事し、大に與つて力があつた。後貴族院議員として國政に參與する傍ら、在郷軍人會審議員、荏原郡在郷軍人分會長として軍人精神の振興に力めて寄與する所が尠くない。氏は氣宇瀟灑にして光風霽月の如く、人に接するに墙壁を設けず、能く語り能く談じ、以つて遺憾なく平民振りを發揮して居る。尙町内自治にも多年寄與し、現に推されて町長となりに才腕を揮つて居る。其の熱と意氣とに至つては華界稀に見る所である。是男種勝氏は目下學習院高等科に在學中である。

市川彦兵衛

安政六年四月十二日生
四谷區新宿一の七八
電話 四谷 三二〇一番

都市の人口二百萬と稱してゐる。がこの數多い家の中でも四百年を關してゐる舊家は寥々曉の星の如きものであらう。まこと市川彦兵衛氏の家は四百三十年以前から江戸に居住して今日に至つてゐる。祖先がこの地に移住した頃はさだめし寂しい一寒村であつたに違ひない。草叢より出でて草叢にかくれる武藏野の月は、さぞ野趣を帯びてゐたであらう。その時代から連絡として續いて來た家柄のこととて、今でも千駄ヶ谷の順正寺に存してゐる過去帳及び墓碑をしらべてみると、同家についての色々な記録が残つてゐる。抑も氏の家は江戸幕府時代はずつと米穀商を營み、雲州松平家を始め他の各大名家へ出入し、米穀の用達を司り、當時江戸きつての老舗だつた。廢藩と共に陸軍方面の御用達となり、あの日清日露の兩戰役の際の如きは、第一師團・近衛師團等へ納米して、すこしも遺漏なく、報國の誠をつくしたと云はれてゐる。一方氏は隣保共榮の重望を負ふて四谷區會議員に當選すること三期、その間區民の大問題であつた新宿合併問題區内小學校建設問題、慶應大學建設等に關係し、常に正鵠な區民の輿論を輿論とし寢食を忘れて活躍し、遂に優秀な成果を收め大いに同志の間に重きをなしたものである。又曾ては選ばれて東京市會議員にも當選し、自治の樞機に參畫して大にその敏腕を盡へられたものであつたが、今日では所謂功成り名遂げて靜かに晩年を樂しんでゐる。併し同業者の懇請もだし難くして、四谷區米穀検査委員及び四谷米穀商組合長を兼ねて、老ひの身をささぐ、このために懇切に斡旋してゐるとは麗しい話である。

吉野忠雄

明治廿一年十一月十六日生
東京市外池袋大原一三七八

關東大震災の爲に、悲惨のかぎりをも嘗め盡した民衆は、映畫と云ふよりは寧ろ廣く娛樂に飢えたのであつた。殺風景極まる焼け木材のバラツク生活に苦痛を感じ、何處かに潤ひを求めねばならなかつたのは、人間本來の性からみても當然な要求である。この痛切な要求の爲め、淺草公園は異常の活氣を呈して、映畫界の變態的發展となつた。この時、氣勢凄まじく、目覺しい活躍をしたのは、本部を開西に持つ帝キネであつて、それは一に東京支社長が吉野忠雄氏の力にまつ處が多い。氏は學序を追つて、慶應大學を卒業するや、叔父の經營する開西醫學校に入つた。而して性來藝術的天分の豊かなる氏はこうした處に其若さのどれ丈け小さな部分をも消すことを好まなかつた。居ること半ヶ年にして氏は遂に現帝キネ株式會社々長山川氏の許へ行つたが此の時己に將來映畫界に名をなすべく運命づけられたのである。かくて帝キネは大正九年五月、資本金五百萬圓をもつて開西の地に雄々しく産聲をあげた。當時は演藝と映畫であつたが翌十年の春に至つて、映畫専門となり、次第に映畫界に其の名を認めらるゝに至つた。大阪府中河内郡小坂町小坂に撮影所があつたが、昭和三年七月中河内郡長瀬に、一萬坪に亘る東洋一のプロダクションを設けるに至つたのである。この躍進的な發展は實に、震災直後による我が吉野忠雄氏の活躍に、胚胎するものと云つてよからう。氏は現に東京支社長として我が映畫界に重きをなしつつあるのみならず、その男性的氣魄と温情とを以て衆人敬慕の的となつてゐる。夫人を菊野と呼び其の間に祐宏君、市子、政子、兩嬢がある。

鈴木篤眞

明治廿九年五月一日生
東京市麻布區新堀町十



古川橋病院々長として令名ある我が鈴木篤眞氏は福島縣の人、田村郡瀧根村が、その夢寐だにも忘れえない懐しの故郷である。福島縣と云へば、噴煙濛々として絶える事のない磐梯山と、波碧漣澌油を流した様な猪苗代湖と、そして碧潭白流の阿武隈川、只見川に恵まれた風光佳絶の地である。また白河の關趾あり、安達ヶ原あり、飯盛山、會津鶴ヶ城趾のある、歴史の地でもある。自然の美は、人をして恍惚たらしめると共に、陶冶せずにはおかない力強い何物かをもつてゐる。由緒ある歴史は、懐舊的情緒と共に、一脈の奮起を與へずにはおかない。されば福島縣人が高潔な人格をもち、血と涙を多分に持つてゐるのも當然な事だらう。我が鈴木篤眞氏が醫師として申分のない人であるのも、こうした爲ではあるまいか。氏は福島縣立石川中學校を卒業後、前途に輝く希望を抱いて上京し、日本醫學專門學校に入學した。かくて大正九年の春優秀の成績を以て同校を卒業するや、更に帝國大學の近藤醫學博士に師事して實地研究に没頭すること三ヶ年、後轉じて職を東京市の病院に奉じてゐたが、大正十五年遂に機熟するに及んで、現住所に古川橋病院を開業するに至つた。爾來拮据經營専ら業務の擴張に力を注いでゐる。専門は一般外科だが、特に内臟外科に就いては獨特の手腕と、尊い幾多の經驗とを有し、斯界に重きをなしてゐる。氏人となり温厚、患者に對しては極めて懇切で、殊に義侠の念に富んでゐる。家庭には貞淑の譽高い芳枝夫人との間に一男達雄君がある。

東條直吉

明治十年二月十五日生
東京府下羽田町鈴木新田

西洋の諺に「理髪師は若からざるべからず、醫師は老ひざるべからず」と云はれてゐる。醫師は眞に學理よりも實地で、尊い幾多の経験を有する老練家にして初めて名醫と云ひ得るのである。現に多士儕々たる我が刀圭界に於て遙かに群を抜き、荏原郡醫師會長として令名ある人に、東條直吉氏がある。氏は明治十年二月十五日を以て、深川區佐賀町に孤々の聲を擧げた生粹の江戸ついでである。夙に國手として身を立んと志し、學序を追ふて慈惠大學に學んだ。爾來幾春秋を醫學の研鑽に重ね、優秀な成績を以て同校を卒業したのは、明治三十年の春であつた。かくて卒業後氏は直に和泉病院に勤務して、實社會に最初の一步を踏出し、致々として他日擡頭の地歩を築いて行つた。職に在ること二ヶ年、明治三十二年自ら確信を得るに及んで、現住所に獨立して醫院を開業するに至つたのである。以來多年の蘊蓄と、尊い經驗とを以て一般の施療に従事したが、其懇切なる診療振りと、獨特の技能とは忽ち信望を以て酬ひられ、家運は一路幸運を辿つてゐる。之より先き氏は衆望の歸する處推されて荏原郡醫師會長となり、會の發展並に會員の親睦と福祉に寄與する處極めて多く、現に町醫、校醫として活動する外、警視廳の囑託をも兼ね、斯界に重きをなしてゐる。氏人となり襟度廣く、内に溢るゝばかりの温情を湛え、對者をして自ら尊敬の念を抱かしむる徳望を備へてゐる。夫人をせい子と云ひ、貞淑の譽高く二人の間に慈惠大學在學中の正養君、慶應大學中學部在學中の養雄君と、今一人芝中學在學中の信君の三男あり、何れも氏に似て聰明である。



大崎清作

明治九年八月廿一日生
東京市小石川區西丸町六十七
電話小石川一三八〇番

東京市會から國會へと、雄々しくも馬を陣頭に進めて、見事中原に鹿を射止めた我が大崎清作氏は、多年東京市會議員として、自治體の發達に貢獻し、常に市民の心を心として一意市政の刷新に向つて邁進した燃えるやうな愛市中心の所有者である。斯うした美しい犠牲的精神を有する氏にして初めて民衆の意志を議會に反映せしめ得るのではあるまいか。まこと我が大崎清作氏こそは腐敗せる政界を照す一の光明であらねばならぬ。氏は山梨縣の出身で、少年時代を甲府中學校に學び、青雲の志を抱いて上京すると共に、江戸當時からの素封家として知られた小石川の大崎家に囑望され、同家を繼いだのであつた。氏は致々として家運の興隆をはかる傍ら、夙に自治の發展に力を注ぎ、小石川區議として十餘年間を區政のために盡精し、大いに衆望を得て市會議員に當選すること四期に及んでゐる。そして現在では市會の重鎮として、市參事會員復興委員として、其の高邁な識見を傾け、其高潔な人格と男性的氣魄とを以つて、常に紛々たる世評に超越し、市政の刷新に雄々しい歩ゆみを續けてゐる。明治三十八年氏は居住地の西丸町に共陸會を組織して町の自治的訓練の第一歩に資し、また自費を投じて青年文庫を設置し、後進者の黨團を計る等、自治制上に長く記念すべき美談を持つてゐる。曩に氏は市會議員として歐米を視察し、「歐米の實際をみて」の書を著して其の識見一層の閃めきをみせた。昭和三年山梨縣より代議士に選出された氏の前途は、洋々たるものがある。家庭にはよし子夫人との間に六人の子女がある。



小林安右衛門

明治七年十月十日生
日本橋區米澤町二の五番地
電話三五五八番

帝都に於いて最も古い歴史を有する菓子舖立花屋の主人として、常に盛業を續けて一般顧客に満足と與えんと共に、一方溢るゝばかりの自治觀念の發露を以つてよく町事に奔走し、町民の爲に終始一貫自己の利害に超越して盡瘁しつゝある人に小林安右衛門氏がある。氏の生家は八代を數える程の老舖で、嘗て其の祖先が兩國廣小路の取締役を勤める傍ら菓子店を營みしに始まり、爾來代々彌増に業務の隆盛を見るに至り現に市内一流の商店として重きをなして居る。更に氏は同町會中隨一の功勞者として町民に喝仰されて居る。由來同町會は實に明治四年の創立にかゝるもので、當時は吉川、三柳、横山町三丁目、米澤町三ヶ町の六ヶ町が兩國陸會を組織し爾來大正二年に至る迄の數十年、各町の共同的伸展を圖つて止まなかつたが、氏は當時より同會の役員として常に町事に奔走し、幾多の見るべき業績を残して居る。後同會が分離して新たに米澤三ヶ町會の創立を見るに至るや、氏は推されてその副會長となり、會長井口氏と共に益々事務の進歩自治の發展に奔走し、遂には自治體の恩人と迄稱せらるゝに至つたのである。現在は町會と直接の關係はないが、猶其の裏面に於て隱然その中心勢力として發展に資する處多く、一方第十五地區整理委員、神田明神百八十ヶ町の氏子總代たるの外、實業方面にも力を延ばし、東洋自動車株式會社社長、東京自動車組合日本橋第三支部副部長、東京菓子改良組合會計長、日橋菓子製造業組合會計長等の要職にあり、斯界に於ける元老として令名がある。家庭には夫人の外伯母及び子女八人がある。



牧野賤男

明治八年二月二十六日生
麹町區有樂町三の二

曩に正義を標榜して府政壇上に獅子吼し、府會の大勢を左右して其驕名を擡にした我が牧野賤男氏が、亦法曹界の重鎮として斯界に重きをなしてゐる處を見ると、氏は儘かに棟梁の材たるを失はぬ。明治八年二月二十六日、有名なる儒者牧野仲氏の三男として、雪に名高い新潟縣佐渡郡川町に生れた。氏の父が有名なる儒者だけに、氏が漢學に秀でゝゐた事は云ふ迄もない。併し中學も卒へて上京する頃には自分の進むべき路が法律の上を開けてゐる事を見出した。こゝに於て氏は明治法律學校を経て更に中央大學に學び、専ら法律學を専攻して之が蘊奥を極め、三十一年優秀なる成績を以て卒業するや、直に法曹界の登龍門たる辯護士試験に應じて見事に合格し、少壯有爲の辯護士として雄々しくも法曹界の第一線へ乗り出したのである。氏は翌年横濱に於ける外人殺傷事件に對して、治外法權撤廢第一審の辯護人となり、外國に對し我が法曹界の爲に萬丈の氣を吐いたものだ。次で翌年、二六新聞が娼妓自由廢業の叫びを擧ぐるや、氏は三宅磯夫に人権擁護に力めたものであつた。其外氏が社會の爲に貢獻したることは枚擧に遑がない程で、徹頭徹尾正義に殉ずるの士であつて、その信念が磐石に至るのである。氏は又日蓮宗の信奉者で、氏が刀杖瓦石をも怖れぬ氣魄も由來する所がある。府會議員として、府政刷新に貢獻した事も多く、市民の有する中樞的人物とされてゐる。



稻垣金四郎

慶應二年八月生
府下中野町中野四〇五〇番地
電話中野一 一二番

内にあつては家業の各種々苗の販賣に精勵し、出で、は中野町會議員、仲町區長、土木委員等の要職を占め、自治公共の爲に盡瘁して止まない人に稲垣金四郎氏がある。氏は慶應二年現住所たる中野町に生れたが、氏の生家たるや實に同地の草分けとも云ふべく、而も連綿として今日迄既に五代に及んで居る。氏の祖先が始めて此地に來た頃は、實に見る影なき荒涼たる草原で、月は草より出で、草に入るの觀があつた。斯る未開の地が茲に全く面目を一新して今日の如く既賑を極むるに至つたのは、一に懸つて氏が父祖の功績に俟つもの多く、全く同地隨一の恩人といふべきである。斯る由緒深き家に人と成つた氏は、早くも二十歳にして書記として役場に入り、爾來殆ど助役代理として敏腕を揮ふこと五ヶ年、其後明治三十五年東京府農事試験所が此の地に設立されるや、氏は率先して農事研究會を起して斯業の改良發達を計り、寄與する所が尠くなかつたが、更に氏は溢るゝ許りの公共的精神を以て、土地の特志家と相計り、私財を抛つて或は橋梁を修築し、或は道路を改修する等献身的に努力し、遂に町民喝仰の的となり、推されて町會議員に當選すること二回、氷川神社の宮總代たること十數年、其間よく敬神の至誠を以つて總代たるの責務を果した。其他學務委員、衛生委員、土木委員等に擧げられて幾多の功績を残して來たが、更に昨年四月區制の施行せらるゝに當りて仲町の區長に推され、自己の利害に超越して益々同地發展に盡しつゝある。尙氏は家庭にあつては八十七歳の老母に仕へて孝養至らざるなく、長男の外に令孫四人がある。



山内太一

明治十六年九月九日生
府下高田町高田一五〇一番地

愛知縣滌美郡泉村は、現東京市視學として令名ある我が山内太一氏の懐しい幼時を物語る故郷である。氏は性來明智なる頭腦の所有者で、小學校から中學校を卒業する迄常に首席で押通し、天才的閃めきを見せてゐた。卒業後將來身を育英の業に捧げんと欲し、上京して東京高等師範學校本科數物科に學び、切磋琢磨の功を累ね、明治四十三年優等の成績を以つて卒業するや、直ちに東京府豊島師範學校教諭となり、精勵大に力むる處があつた。職に在ること十星霜、恰も一日の如く勤め上げ大正八年東京府豊島師範學校附屬小學校主事を拜命した。其後拔擢せられて東京市視學となり、教員講習所の講師を兼ねて今日に及んでゐる。氏は從來各所の講習會に臨んでゐるが、殊に大正十三年度から十四年度にかけて開いた講習會の如きは、土曜日毎に五十名宛四回に及んだ程だが、氏は常に緊張した態度を以て之に臨み、毫も倦む處がなかつた。單に此一事を以てするも、氏が如何に精力が絶倫で教育に熱心なるかを想像するに難くない。氏は又特に教授法に秀で、その溢るゝばかりの蘊蓄を以て、極めて平易に、而かも自然に生徒の腦裡に印象づける丈の強い力と魅力とを持つてゐる。其堂々たる體軀は、裕福と云はんよりは寧ろ圓滿なる性格を象徴し感情に走らず、理性を以て事に當るので、生徒は何れも大なる尊敬と親しみを以て迎へてゐるとの事だ。視學としても頗る公平無私で、各方面の推稱を購つてゐる。夫人は謠曲を能くし、能に堪能だと云ふ。夫妻相和して情操の美しさを示す所、教育者として間然する處がない。

土屋大吉

明治十一年十月廿六日生
麻布區三河臺町十六番地
電話青山五一二九番

山峽の盆地、青草に蔽はれた高原、半島伊豆はかうした自然に恵まれて畜牛業は盛んである。環境は人間を支配する、此處に嗚々の聲を擧げた氏は幼少時から畜牛業を以て終始せんと志したのは、蓋し當然の事であらねばならぬ。年十九才始めて上京牧舎の人となつて朝夕致々として倦まず勤勞したが、間もなく賣肉業の三枝商店に入り實地を習得するに及んで獨立し芝白金に搾牛商を営んだ。年齒僅に廿四才である。併し事志と違ひ遂ひに中途にして廢業するの己なきに至つたが、不撓不屈の精神を有する氏は徹頭徹尾初志を貫徹せんと欲し、明治四十一年現住所に賣肉業を開いた。之れ實に氏が今日の基礎をなすそもこの端緒である。歐州大戦は各方面に大なる刺戟を與へたが、就中市民の生活様式に急激なる變化を及ぼして來たそして市價調節の一方として新に公設市場が到る處に産れて來た。時勢に一達眼を有する氏が此處に眼を付けぬ筈はない。即ち市設置町市場と別に私設青山市場に賣店を設けて其の目的の一端を達する事を得たが、爰に特筆すべきはこと恰かも市場と反對の立場にある同業組合員間に氏は絶大な信望を有し推されて東京賣肉同業副組合長となつた事だ。以て如何に氏が調和性に富み、且篤實なる人格であるかを知る事が出来る。氏は又公共事業の爲に繁忙な生活の餘暇を割いて、西部三河臺町會長の公職に就き且つ、三河臺小學校保護者會幹事及會計主任としてその力を延べてゐる。氏資性温良玉の如く人格の高潔にして襟度の廣き稀に見る處である。

西尾保

明治二十年三月九日生
四谷區坂町八二
電話四谷一二九四番

幕末維新の人傑、陽明學派の横井小楠に薫陶を受けて、明治政府に對し一種の革命運動を起した肥後人は、明治大正の文化を導びくに大きな犠牲を拂つた殉教者であつた。氏はこの肥後人の血をうけて、今や販賣争奪の激烈な關東砂利業界に、孤軍奮闘を續けてゐる人である。熊本縣飽託郡小島町に嗚々の聲を揚げた氏は、夙に郷黨の秀才と謳れ、その將來を囑望されてゐた。氏は九州學林の雄、秀才の集まりを以て聞へた熊本濟々費に入學し、鋭敏な理智と透徹せる頭腦とにより早くも衆望を抜きんじ、同校を卒業するや、阿蘇噴煙のすさまじい意氣と、奔流奇巖に砕くる球磨川の清楚な心を以て、遠く帝都に笈を負ひ、一意専心學究にいそしみ、優秀の成績を以て東京高等工業學校電氣機械科を卒業した。恰も明治四十一年、日露戰役後にして吾が國の經營多忙を極め、朝鮮滿洲内蒙古の開發に國家畢生の力を注ぎ、擧げて新人の渡來飛躍を俟つ時であつた。氏は此の時滿洲洲鐵道會社の招聘に應じ、技師として渡滿し電氣工業の蘊奥を傾けて滿洲に於ける富源の開發に必死の努力を續けた。斯くして滿鐵に在ること十年間、滿鐵の大陸政策に貢獻する處頗る大きく、氏の名聲また吾が電氣界に噴々なるものがあつたが、大正八年財界好況の潮流に乗じ、氏は朝鮮電氣興業株式會社を創立同時に電氣部長の要職についたが、年余にして辭職し大正十三年より獨立して砂利採取業を經營し、目下斯界の重鎮として信望を博してゐる。氏は八面玲瓏たる才幹を有し、靜子夫人との間に三男があ

藤澤平八

文久三年四月九日生
四谷區新宿貳丁目三十八

環境は人を造る。偉大なる自然の感化を有する信州が、古來幾多の俊魁を輩出してゐることは毫も怪しむに足らない。現に新宿貳丁目町會長として有名なる藤澤平八氏も信州の人、夙に此偉大なる自然の感化裡に豪放不羈の資質を培ひ、將來政界にその驥足を延べんと欲し、明治十三年櫻も綻びそめんとす陽春三月、笈を帝都に負ふて幾多の政客と交り、只管風雲を望んで己まなかつたが、時偶々親戚の福澤氏が、撞球臺の輸入を開始した爲氏は遂に初志を翻して實業界へと志し、入つて之が支配人となつた。かくて斯界の事情に精通するに及び、明治廿七年瑞西人ワゲン氏と提携して附屬品の輸入を開始し、業績の大に見るべきものがあつた。然るに大震災以來俄かに同業者の増加するに遇ひ、斷然斯業を抛ち撞球の必需品たる優良スレート採掘業に指を染め、夙夜奮闘努力の結果、今日では宮内省を始め、陸海軍省各官衙銀行會社等の需要に應じ盛況を極めてゐる。然かも持つて生れた政治的趣味は、現町會投立に際して其職務となり、更に本年三月の改選に際し衆望の歸する處推されて町會長となり自治の礎石と磐石の安きに置くに與つて大に力があつた。此外氏は長野縣吉田驛の設置運動の急先鋒となつて活躍する等其功績は定に没すべからざるものがある。氏は又青年子弟を愛すること極めて厚く、氏の後援の下に名をなせるものも尠からずと云ふ。人情紙より薄き現代に於てまことに傳ふべき美談たるを失はぬ。氏は人格高潔にして旅行を好み、長男正一氏は銘木の採取に興味を有し、長女しず子は撞球の選手として知られてゐる。

森莊輔

元治元年七月十五日生
淺草區馬道六丁目
電話 淺草 七四四番

齡古稀に垂んとするも尙鏗鏘として公共事業に奔走しつゝある我が森莊輔氏の如きは蓋し稀である。氏は淺草に産聲を擧げた生粹の江戸ツ子で、明治三十七年から大正七年まで薄利多賣主義をモットーとして米穀商を營んでゐた、利慾に超越した其の營業振りは忽ち顧客の信用を博し家運逐日隆盛に赴いた。かくて衆望の歸する處推されて、東京白米商同業組合の部長に推され、斯界に嶄然頭角を抽んでゐるが、偶々米騒動が勃發して以來斷然廢業して了つた。それは社會から恰も白米商が暴利を貪るが如く誤解されるのが、正直一途な氏に取つて何よりも苦痛だつたからである。次で氏は新に現代の乾物經節商を營むに至つたが、氏は單にこれに満足せず傍ら大森の濱端に工場を設立して製紐事業に指を染め、今では遠く支那地方にも輸出し製品の優秀と生産能力の大を以て知られてゐる。大正十年青年團設立と共に副團長の椅子につき、青年團の發達に資する所極めて多くの榮職にあつて、町内の發展、町民の親睦に粉骨碎身の努力を續けてゐる又國勢調査、市勢調査には調査員となり、或は第一期の納稅組合長に推選せらるゝ等町内ではなくてはならない有志の一人である。氏となり温雅思慮周密にして仁俠の氣に富む。而かも趣味を公共事業に有する處、その人格の高潔なるを知るべく、町民敬慕的となつてゐるのも蓋し當然の事であらう。家庭はなみ子夫人との間に製紐業に精進してゐる息子榮一君がある。

榎並晋六

慶應三年二月二十八日生
芝區田町二丁目十一番地
電話 高輪 二〇七四番

氏は神田祭りでも名高い神田區に生れた生つ粹の江戸ツ子である。芝で生れて神田で育ち、今じあや火消しのまともひもち」こうした歌に出てくるいなせな兄い姿、何といつても神田祭りの宵闇みは若い人達にとつて唯一の楽しみであつたらう。云ふ迄もなく、氏にはこの神田ツ子特有の仁俠の氣が體一杯に溢れてゐるのである。さればこそ、一機械工から身を立て、今日の成功を見ることも出来たのだ。二十歳の頃榎並家に養子となつたが、しかし當時の榎並家は家計豊かでない、ために一度は實家に歸つては見たものゝ、一度養家を繼いだ以上は、徒らに生家に徒食することは、男子の本領でなかつた。幾ばくもなく横須賀工廠に入り機械職工に加はつた、後現芝浦製作所の前身である田中製作所に轉じ、精勵格勤只管技術の鍛錬に心がけ、芝浦製作所と改稱さるゝも尙引續いて同所にあつたが、この間の氏の刻苦、よく零細をつんで蓄へた小資本と一方從業中に得た機械構成の智識とは遂に氏をして獨立せしめ芝區三田四國町の地に一小工場を營ましむるに至つた、これ氏の今日の基礎である。かくて次第に發展して漸次工場を擴張するに及び、後、幾ばくもなく再轉して現地を選んだのである。今や新機械の製作を以て製絲家方面の需要に應じ、その製品は何れも好評を以て迎へられてゐる。又繁忙の間をさいてよく町事に盡瘁し、擧げられて町會長の榮職につくに至つた。

氏は本年六十歳、鏗鏘として猶壯者に讓らず夫人をくに子と呼び、内助の擧れがたかい。



淺海清一

明治二十七年二月七日生
荏原郡目黒町上目黒一九四四
電話 青山 三〇八八番

澄潤とした青壯者の意氣は、常に明るい世界の建設にあづかつて偉大である。利害を超越し、名利を逐はぬところに、あらゆるものを淨化するこゝとが出来たのだ。この意味からして目黒町々會が、年齢三十三歳の淺海清一氏を抱有してゐることは、同會のために歡益を高く翳さざるを得ない。抑も氏の家は同地方での素封家として知られ、幼ない頃からその英明なるを讀へられてゐた。麻布中學校に學んでゐる頃に父君が長逝せられたので、氏は直ちに家督を繼いだのである。かくして一年志願兵として輜重兵第一大隊に入營し、少尉に任ぜられたのは大正三年のことであつた。従つて歸宅後は同地在郷軍人會評議員として今もなほ活動を續け、次いで同町青年會が組織せられんとするや、氏は率先してその成立に多額な金員を以て寄附し、今日あるに至らしたものである。かくて氏は副會長に推されて指導の任に當つてゐる。一方同町小學校内に青年練武會を設置して、青年の心身練磨と徳操の涵養に勵み倦むところがない。大正十四年には町民に推されて同町々會議員に選ばれ、年齒漸く而立に達した身を以て、一心不亂に町民の福利を計ることのみ没頭してゐる。かつて同町にガスタンクが設置せられやうとする際の際の如き、同町の安寧上一身を犠牲にして反對の狼火を擧げ、遂に町民をしてその熱誠に動かさしめ、初志の貫徹を完ふした等は、氏の理想家肌な純情と熱烈なる實行家たるを物語るものだらう。趣味として旅行と狩獵大自然の脈膊に親しむところに氏の面目が躍如としてゐるではないか。夫人いは子さんは才媛を以て知られてゐる。

見山正賀

明治六年五月十七日生
小石川區大塚仲町四一
電話小石川四〇五九番

二十一歳の時に早くも東京府属となつた氏は、明治三十一年十月に現東京市役所が獨立すると共に入つて内局勤務を命ぜられたのであつた。驚くなれそれより實に二十九年の長い歳月が流れてゐる。しかるになほ致々として業務に倦むことなく、東京市吏員中での最高古参者とし、かつは生半引として尊重せられてゐるのである。否、獨りわが東京のみではなく全東京市役所きつての長老だと云ふべきであらう。同三十四年には内局主幹に進み次に内記課長となり庶務課長をも兼任し、創業時代の市政事務に参畫して縦横の切れ味を見せたものだ。明治四十四年には本郷區長に任命せられて十年間を勤続し、名區長を以て鳴らしたものと聞く。現に同區内の小學十一校の内一二校を除く外は、みな氏の區長在職中に建築せられたものばかりである。大正十年二月には東京市收入役に就任し、會計課長を兼ねて現在に至つてゐる。氏が市役所内記課長時代こそは、東京市が國際的に認められて来た頃で、日英同盟に基く兩國親善のためコンノート殿下が御來朝になり、之に對する東京市民の白熱的歡迎方法等は、氏の献策によるところが大きであり、更に日露戰爭凱旋歡迎等も氏がその趣向方法にあつたのであり、なほひろむことなく一層の盡瘁に勵みつゝあるは、市政史上長く記載さるべき功勞者と云へやう。夫人みな子との間に三男があり、長男は藏前高工を卒業後名古屋逓信局に勤務、次男は養子に、三男は目下早稲田大學に在學中、何れも父君に似て穩健着實將來を囑望されてゐる。

三輪信太郎

明治二年九月生
神田區裏猿樂町三番地
電話大手一五六六五番
六八七三番

帝都の中央神田區に聳えてゐる病院延壽堂こそは、わが國小兒科醫界の北斗星として、突々たる光輝を放つてゐるが、この大病院こそ醫學博士三輪信太郎氏の經營によるものである。氏の郷里は石川縣金澤市である。百萬石の富裕を誇つた前田家の城下であつただけ、何處となく長閑な氣分、金澤の街よりは、政治家とか軍人とかの華やかな舞臺での成功者は割に少ないが、その代り名利にこだはらない學者肌の人物は相當に多く輩出してゐる。氏の如きもその典型的な人だと云へる。明治二十三年に第一高等學校を優秀な成績で卒業した氏は、進んで東京帝國大學醫學部に入つて、最上學理の研鑽に没頭した。卒業後もその逸材を囑望せられて同大學附屬病院に助手として奉職し、専ら小兒科の實地經驗に専念し、明治二十八年十一月には私費を投じて遠く獨逸に留學して、三ヶ年の間を異郷の客舎にあつて斯界の大家の指導を受け、三十一年十一月に該博智識を抱いて歸朝直ちに迎へられて母校に教鞭をとり、三十二年十二月には醫學博士の最高學位を授與せられた。越えて三十四年助教に任命せられ、同四十年に至るまで學徒の薫育に勵み、小兒科講座を擔當してゐたが、大正四年に自ら延壽堂病院を設立して門戸を張るや、忽ち今日の盛況を招いたのである。因に氏は學界への功績によつて從五位勳五等に叙せられ、日本醫師會理事に任ぜられて、わが國刀圭界の龜鑑となつてゐる外に、神田區醫師會副會長、裏猿樂町々會長をも兼ねており、更に實業界方面にも曠足を伸べ久米同族會社監査役として知られてゐる。

石井榮

明治七年 月 日生
東京府下蒲田町北蒲田一四九

質實剛健の氣風と、光風霽月の人格をもつて、人々の崇敬と信望を一身に背負つてゐる我が蒲田在郷軍分會長石井榮氏は、退役の陸軍砲兵中佐である。氏は東京市牛込區二十騎町八に呱呱の聲を擧げた生粹の江戸ッ兒、牛込愛日小學校を卒へると共に十五歳にして幼年學校に入學した。次いで士官學校に進み、優秀なる成績を以て同校を卒業したのは、明治二十八年の春、日清戰役の眞最中であつた。かくて雄々しくも軍人生活にその榮ある一步を踏み出して馬關に赴き、後幾許もなく少尉となり臺灣の守備に轉じた。後馬關、下關の砲兵聯隊に勤務し、更に長崎要塞司令部隊長を経て朝鮮兵器所長に異進した。氏が彼のステツセル將軍の一行を露國に返送したのも實に此時の事であつた。次で長崎要塞大隊長、臺灣澎湖島隊長、第九師團兵器所長等の要職に歴任し明治三十三年には拔擢せられて浦賀射撃學校の職員となつた。氏はまた鳴門要塞に備砲を備付けた人で、大正二年砲兵中佐に進み同年遂に思ひ出多き軍隊生活を去るに至つた。然るに翌年衆望の歸する處推されて牛込在郷軍人分會長となり、更に七年牛込區會議員に當選して、學務委員をも兼ね別に通俗教育會長となり、恩給増額問題に關與して奮闘した事は普く人の知る處である。此外氏は大正九年岡田和四郎氏等と共に在郷校談話會を組織し、別に良民會の理事として重きをなしてゐたが、大正十一年蒲田町に移轉すると間もなく、推されて蒲田在郷軍人分會長となつた。資性剛毅、日蓮上人の崇拜者で趣味を讀書、園藝等に有し稀に見る好丈夫である。

江波戸貢

明治廿六年一月廿四日生
東京市芝區三田三ノ一三



社會生活は、經濟を基調として營まれるものなりとのマルクスの唯物史觀が迎へられ、有産對無産、支配者對被支配者の間に、反抗の氣分や、闘争の意志が擡頭して来た。物質文明といふ増埒の中に、人々は血で血を洗ひながら阿修羅の様になつてゐるが、今日の現状である。其處には物質慾がとぐろを巻いてゐるばかりで、人間らしい愛も情もない様である。だがいかに物質慾が浸潤しても、人間のもつ潜在意識は冒せるものではない。美しい人間愛とか、父性愛、母性愛とかは、常に人間の魂を包んでゐる。それは修羅の様に相争ふ人達の誰かが、妻を愛し子を愛する事でも知る事が出来るだらう。實に愛情は文明や思想の如何に左右せられるものではない、されば血を流しても驚かない、物質萬能の人と雖も、小兒科醫が持つてゐる美しい人間愛を見て感謝しないものはないであらう。我が江波戸貢氏は多くの人々から充分なる感謝を受けていゝ人格者である。千葉縣匝瑳村は氏の懐かしい故郷である學序を追ふて大正二年縣立中學を卒業するや、將來醫師たらんと志し、慈惠大學に入學した。大正六年雪の功成つて同校を卒業すると共に、直に京橋の福田病院に勤務し活社會に最初の一步を踏出したが、大正十年九月遂に確信を得るに及んで、現住所に醫院を開業し小兒科醫として斯界に令名を馳せてゐる。氏は競馬、野球、ランニング等に趣味を有する丈に、快活な明るい性格の持主で、頗る正義觀の強い親しむべき友愛の人である。家庭には千代子夫人との間に潔君、及びきく子と子嬢があつて賑かである。

石和田八郎

明治十一年二月十五日生
東京市神田區久右衛門町五
電話 浪花七二八番

東京府會議員として、又神田區會の重鎮として、自治政の刷新と發達に超人間的の才腕と健闘振りを見せ、而も國政壇上の人として、明日を囑望されてゐる人に、我が石和田八郎氏がある。氏は神田に生れた純粹の江戸つ子、神田小學校より共立中學校に、更に中央大學の前身たる東京法學院に進んで、法律學の蘊奥を極めたが、篤學の氏は尙も欣求と思慕を以つて東京外國語學校に露西亞語を學び、また日本大學に籍を置いて、研鑽すること數ヶ年に及んだ。卒業後氏は日本大學評議員に擧げられ、常に闘士として陣頭に立つたが、殊に母校々々の改築、敷地の擴張問題に際し、資金を調達すべく地方遊説に奔走した氏の努力と、理事者たる水野鍊太郎、山岡萬之助の諸氏を説伏し得た氏の熱誠とは、大に特筆すべきであらう。此外氏は日本橋實業新聞を刊行して實業の振興を助成し、借地保護新報を興して借地人の保護と、權利擁護に献特し、轉じて東京毎日新聞社に入り偉大なる筆を振つて東都操縦界に其の令名を轟はれてゐたが、大正十五年大東通信社を引受け今日に及んでゐる。神田區民の衆望を擔つて氏が區議に當選したのは二回に及ぶが、其の間區劃整理の不合理を剔抉して制度の改善を叫び、また震災直後火災保險金請求の烽火をあげ、國稅減免運動の急先鋒となり、更に震手問題、休銀問題の勃發するや、預金者救済の爲めに奮起する等、公共の爲に粉骨碎身の奮闘を續けてゐたが、昭和三年遂に衆望の歸する處推されて東京府會議員に當選し、斯界に重きをなしてゐる。

廣瀬直幹

明治八年一月生
東京市芝區三田四國町

社會を戰場にたとへた人があつたが、都會は血をもつて血を洗ふの激戦が演ぜられる一大修羅場であると云つてもいいだらう。そして其處に、赫赫たる武勳をたてる勇士と、また徒らに、死屍を疊々と横へるところの哀れな敗殘者の群のあることは、更に更らに、都會と戰場を近づけて、其處に醒い鬱陶氣さへも感ずるだらう。殊に二百萬の市民を擁する東京市に於ては、生活の百パーセントが實に、血みどろの闘争を母體とする生活であつて、生存のためかひに疲勞し切つた人々の、悲惨な姿は、街路の至る處に、公園のベンチに、其の激戦の程を物語つてゐる。されば東京市に於ての自由労働者及び失業者の救済、労働者に關する社會的施設、即ち病院食堂及び宿泊所等の改善と増設、市民生活の向上と安定を目的とする機關の完備、等々の社會問題は、社會局の活動と共に大なる重大性をもつてゐる。この秋、社會局長として全幅的の効果をあげてゐるのが廣瀬直幹氏である。氏は香川縣人豊田官吾の二男に生れ先代トセの養子となり明治四十年家督を相続した。これより先學序をおつて京都帝國大學に學び、同校を卒業したのは明治三十八年の事であつた。次いで北海道、群馬、和歌山各縣の事務官及び長野、徳島、長崎各縣の内務部長、宮崎縣の知事に歴任した、また關東廳内務部長兼博物館長として令名をばせ、歐米各國視察のため出張した事もあつた、昭和三年時の市長市來乙彦氏に認められて東京市社會局長の椅子を占め今日に及んでゐる。家庭にはてふ子夫人との間に一男一女がある。



遠藤貞徳

明治十六年二月廿日生
赤坂區榎坂一番地
電話 青山 一三二八番

毛織工業界の鬼才だと云はれてゐるのが藤原氏は、芝區宇田川町三十一番地に生れた純粹の江戸つ子である。府立第一中學を優等で卒業後は、金澤高等學校に進み、更に東京帝國大學機械工學部に入つて、メカニズムの學理に蘊奥を極めたのであつた。卒業と同時に東洋紡織會社に招聘せられたのが、明治四十二年のことである。かくて同社で氏は精緻なる機械装置並に修繕等の重要な作業の監督たること二箇年間、同四十四年のこと、わが國毛織工業界の權威である東京毛織株式會社の招聘に應じて、轉社したのであつた。その勤直なる性格と明哲なる頭腦とを以て部下を指導するに温情を以てし、職工を遇するに無差別的な平民ぶりを發揮し、しかも寛裕宜しきを得たので業皆悦服し、業績は着々としてあがつて行くばかりであつた。この精勵ぶりが社の認めるところとなつて、遂に大正五年には抜擢されて世界各地の視察を命ぜられた。氏はまづ毛織物原料の産地として著名な南亞を訪れて、産地の状態を研究し、それより歐洲各地の優秀な毛織物會社を訪れ、具に巧妙な製法を學んだものである。一ヶ年の後に歸朝した氏は再び社會を帯びて、印度、支那、滿蒙方面の視察に出張したのである。これは原料輸入の方法、製産品の販路擴張の重大使命であつたのである。かくてまた一年四箇月の間を、旅にあつた氏は、歸朝後一躍して大阪工場長に任ぜられ、後に大垣工場長をも兼擔して、その新しい經營の才腕を振つたものだ。間もなく東京工場長となり今では同社の最高首脳部に在つて、目覚ましい活躍を續けてゐる。

三俣精一郎

明治二十四年一月十一日生
荏原郡品川町宇西廣町一四三

府下品川町にあつて、特殊の乾電池製作業を經營し、之に關する數多い特許を有して同業者間に異彩を放つてゐるのはわが三俣氏である。氏は千葉縣津郡神州村の人常吉氏の長男として生れた。家は農業であつたが、性來霸氣に充ちてゐた氏は、十八歳の時決然上京して、まづ黒田電池製造所に入つて、蓄電池の製作に没頭すること十數年、更に日本電池製作所に轉じて、大形蓄電池の秘法を具に研究すること一箇年、ついに大正九年獨立して工場を設け、生産工業界に第一歩を乗出し、大正十一年更に現在の場所に移轉し業績の進展に意を注いだのである。永いその過去に於て自ら職工としての試練を経て來ただけに、その製品の堅實と價格の低廉は、他の追従を許さぬものがあり需用家の賞讃を得て今日の繁昌を築き上げたのであつた。抑も乾電池は非常に輕便であつて、液體電池の不便を補ひ而かも取扱ひが容易である點から、その用途は日と共に普及して來たのである。氏の工場は主としてラチオ用の乾電池の製作に従ひ、乾電池製造法、電話製造法、信號ランプ製造法の三箇の實用新案特許を有してゐるので、よく同業者の競争を凌駕し、その販路は内地は云ふに及ばず、支那朝鮮にまで及んでゐる。氏は黒田電池製作所に居た當時に、餘閑を利用して築地電機學校を卒り、爾來今日まで一日として電機製作の研究を怠せしことがなかつたとは、氏の性格を裏書きしたものである。氏は三歳の時母と死別し、十八歳で父を失ひ、爾來苦勞のありつただけを嘗めただけに貧者に對しては深い同情がある。夫人をそめ子といひ、一男二女がある。

赤羽彌吾司

明治十一年十二月三日生
本所區綠村四ノ二九
電話 墨田 四七一六番

君は長野縣松本市の人、今や五十歳の働き盛り、鍼力印刷製罐業者として、押しも押されぬ第一人者である。その経営にかゝる赤羽製罐所は帝都第一の稱あり、使用人六十餘名に達し、その年産額は五十萬圓を越ゆるといふ。何といつても花々しい活躍振りである。その需要先きといへば大和ゴム製作所、古河工業試験所、小林製菓、長井商店、小川商店、興一社、裕製油所、小澤商店、東京飼料會社等、何れも帝都における一流の大商店をはじめ、遠く仙臺若生製菓株式會社及び風月堂等、何れもその地で大會社大商店との取引を有し、前途ますます洋々たるものがある。而し乍ら一方君の今日ある歴史を緝く時、それは實に、一篇の苦闘史である。半生をあげて精進したその涙ぐましい程の奮闘が遂に今日の盛大をなさしめたのである。君は早くから大志を抱いて北海道に渡り、砂金採集事業、及開墾事業等に従ふこと三年餘、而しその努力は空しく水泡に歸した。しかし君の意氣は決して衰へず、上京して司法省に入り、勤むること三年、その後製罐業の有望なることに着眼し、大正四年現在の地に工場を創め、あらゆる新工夫を凝して需要者の嗜好に投じた爲め、こゝに業績次第に顯著に赴き遂に帝都製罐業者中、第一人者たるの榮譽をかち得たのである。君はまた帝國メートル法普及會理事長として公事に盡瘁すること多年、衆望日に多きを加へてゐる。其背志を立て、家郷を出で、幾度か窮途を経て遂にこゝに至る。過ぎ來し方を回顧しては氏たるもの必ずや感慨の深きものがあらう。亦立志傳中の人といふべきである。

遠藤久四郎

明治二十三年五月卅三日生
豊多摩郡澁谷町下澁谷四元
電話 高輪 五〇三六番

険しい山岳に富み、加ふるに水量も亦豊富である關係上、わが國に於ける電気事業は、驚くべき長足の長歩をしたと同時に、今後もより以上に發展すべき前途を有するものといへるのである。だから之に従屬する各種の事業も、盛況を物語つてゐるのはいふ迄でもない。その電気機械製造界で異彩を放つてゐるのは、府下澁谷遠藤電気機械製作所である。同所は遠藤久四郎氏の經營するところであつて、主として發電機、モートル變壓機、抵抗器特別配電盤、各種送電用具の製作を行つてゐる。その昔獨眼龍正宗公の權勢を振つた、宮城縣宮城郡岩切村に生れた氏は、青葉城を以つて誇る仙臺市の仙臺中學校を卒業し、更に同地の高等工業學校に學んだが考へるところがあつて断然中途で退學し、大正元年上京して高田商會、明治電氣株式會社等に職を奉じ、具に電氣機械製作の實地を究め、大正八年に明治電氣を退いて現在の場所に工場を建て、獨立して製作を開始した。所が製品の優秀と經營の確實とによつて業績々々として進み、其納入先も東京電氣會社、逓信省、市電氣局、鐵道省、陸軍省、東京電燈株式會社を始とし、玉川、王子、武藏野、城東、池上の各電氣鐵道會社や仙臺、盛岡新潟、北海道の各地に及び好評を博してゐる。創業當時にあつて白面の一書生に過ぎなかつた氏が、かく異常な成功を購つたことは何を暗示してゐるかは贅言を要しないであらう。氏は趣味として語曲を好み、業餘常にそのポエチカルな古文の語曲本を前に、豊かな藝術に陶醉を求めてゐる。夫人をてる子と云ひその間に、一男があり團樂の實を擧げてゐる。



千浦節

小石川區表町七十九

武士道的精神を最も地方的に色濃く現してゐる地方は九州である。實に九州はかうした精神の象徴であり又特色である。正義の爲には自己を顧ない犠牲的精神の如きは現世には全く珍らしい、そしてこれが最も貴重な宗教的徳的な美點である。この精神を生命として、灰色の世に毅然と雄々しくも立つてゐる九州の内でも特にこの色彩の最も濃厚なのは佐賀縣人である。わが電氣局經理課主事契約掛長千浦節氏は、佐賀縣佐賀市に於いてた尊い地方的精神に恵まれて生を享けたのである。氏は幼にして才智衆に優れ加ふるに不撓不屈の精神と負けず嫌ひな氣質とを持つて中學校、高等學校に優秀な成績を擧げ、大正五年には遂に最高學府たる京都帝國大學をこれ又抜群の成績を以て卒業した。卒業後は直ちに大阪伊藤忠合名會社に入り、實務の上に卓抜なる技能を見せ次いで東印殖殖株式會社に轉ずるに及んで、益々底知れぬ程の才能を發揮し、専心會社の爲に力めたものだ。かくて大正十一年三月には東京市役所に入り、現職たる電氣局經理課契約掛長となつたが、翌大正十二年、戦慄なしには思ひ起す事の出来ない大震災に直面した、氏は茲に九州人たるの本性を遺憾なく發揮し、全く自己を忘れた尊い犠牲的精神を以て遠く京阪地方に出張し、物品購入の重責を完了した事は氏の功績の中でも特筆すべきものである。氏人格高潔にして思慮周密、美術を好愛すること甚しく、東西古今の名畫を蒐集し閑を得れば展覧して興を遣ると云ふ。高雅なる襟懐想ふべきである。滋子夫人との間に三男がある。

兒玉晋

明治十六年十月十日生
府下青梅町水源林公舎

東京市の水道は其源を遠く甲州に發し、水神祠のあるみづひ澤は落合の北方三里の奥、將監峠の山嶺で海拔實に六千三百尺、老松古杉鬱蒼とした幽寂境である。その水神鎮座の巨岩下に湧々として湧き出づる清冽な岩清水が底石を洗ひ、樹下を這ひ、川となつて曲折萬谿を流過し二晝夜の後水道の蛇口から二百萬市民の臺所に注ぐのである。此水源の涵養に多年の蘊蓄と、卓抜なる技能を以て不斷の努力を續けてゐる人に、わが東京市水源林事務所長たる兒玉晋氏がある。氏は大西郷を産んだ鹿兒島縣出身で、日置郡串木野村を懐しい搖籃の地とし、明治十六年十月十日を以つて生れた。夙に自然を愛し土に親んで將來を終せんとし、學序を経て東都に遊び、農科大學に入學して斯學の堂奥を探り明治四十三年優秀なる成績を以て卒業するや、直に職を郷里の縣立農業學校に奉じて教鞭を取り、實社會へ最初の一步を踏出したのであつた。以來心血を注いで子弟の教養に任じ深遠なる學殖と、高潔なる人格とは相俟つて、學生の敬慕の的となつたのだ。かくて郷里に幾春秋を累ねて後、東京市に聘せられて水源林事務所技師となり、更に大正四年拔擢せられて所長任ぜらるるに至つたが元來此水源林の事業は明治四十四年に始まり、當時漸くその緒に就いたばかりであつたので氏は鋭意、植林の保護並に水源の涵養に力を注ぎ其功績は定に没すべからざるものがある爲人となり調達にして思慮周密、而かも部下を愛すること篤く稀に見る友情の人である。趣味を山岳旅行に持ち、大自然の懷ろに抱かれて豪爽の氣を養つてゐる。



高橋林之助

文久三年一月生
大崎町上大崎町四七三

米國の黄金王として名に負ふロツクフェラーが、曾て北京より東京に乗り込み、富の威力を輝かした豪盛振りを見た時、平素社會公共の幸福に思ひを潜めてゐた氏は、自己の老齡をも忘れて愕然として嘆ずらく、古の聖者は百世に輝く道を説きて永く後人の心に生きてゐるのに、富力を一代に誇るも其極まる所は果して何處であらう。一朝天壽盡くれば忽ち素莫として開ゆる所なきに至る。而も富力は、積めば積む程多くの罪業を社會に積むのであつて、その反面にはそれだけ呪咀怨嗟の聲がある。氏今や世界第一の富豪として盛名を馳するも、畢竟亦この類のみ、然るに悲しくも彼は意満ちて遂に永遠の生を忘れてゐる。彼をしてその罪障の代りに永久の名を成さしめるには、彼に誨へてその積める資財の總てを社會に投せしむるの外なしと、仍て先づ彼をして世界公共の爲に一億圓を割かしめんとした。併し當時故あつて之を果さなかつたが、後更に書を書きつけてこの意をば氏に通じ、その決意を促したといふことである。事や聊か奇響であるが、以て平生民の懐ける理想を想ふべきである。故に此の行實にありても常に公共の事に努力し、明治三十四年村會議員に選出されし以來、引續いて公職にあり、大正十三年町長に推されて今に至るまで、殆ど全生命を町の發展に注いでゐるのである。氏の如きは實に意義ある自治の指導者といへやう。其上積善の餘慶、長男順之助氏は慶大出身で目下大崎運送株式會社社長次男良之助氏は帝大工科出身の俊才で、郵船會社勤務を望て今は帝大教授であり外に女子四人があつて清福を得てゐる。

服部金松

明治十三年八月生
芝區芝浦町二丁目三番地

芝浦二丁目町會創立以來の幹事として而かも芝浦開發の功勞者として令名ある服部金松氏は、愛知縣西海郡の片田舎に人となつた。明治三十七年青雲の志を抱いて大阪に出で、奮闘努力専ら自己の運命の開拓に力め、在ること十年、堅固萬難を排して一貫尚ほ一日の如きものがあつた。此間氏は大阪毎日新聞社に入り、其職を精勵する所があつたが、後同社を辭して上京し、牛込に於て料理店を開業し珍味佳肴能く一夕の宴を備すものとして満足せしめ、業績の見るべきものがあつた。かくて將來芝浦埋立地の有望なるに想到し現在の地に金登喜亭と銘を打つて料理店を開き、階上の如き實に善美を盡したもので、一時非常な賑盛を極めてゐたが、後鑑みる處あつて之を廢し、目下閑地にあつて只管英氣を養つてゐるが、將來の活躍を期して俟つべきものがあるであらう。氏資性濃厚誠實にして謙讓の美德を備へ殊に世路風霜を嘗め盡した苦勞人丈けあつて一人一倍思ひ遣りが深く温言能く人をして懐かしむるものがある。氏は又公共の事に志厚く夙に隣保共睦と町勢の發展に資せんが爲町會設立の必要を提唱し、同志と共に東奔西走して芝浦二丁目町會を組織するに至つた。爾來引續き之が幹事に擧げられ、常に中正穩健なる意見を把持して町會の中堅人物となり、居町の共榮福祉に寄與する處極めて多く、曾て自宅を開放して町會の事務所に提供し、或は大正十二年の大震災當時は挺身罹災者の救護に任じ晝夜を忘れた程だと云ふ。以て氏が如何に公共心に篤く一面亦涙の人たるかを窺ひ知ることが出来る。徳望の隆々たるもの決して偶然ではない。

木村儀男

明治二十四年五月二十五日生
府下大崎二番地
電話高輪四九三一番

府市に於ける名物男として操縦界に其名を轟はれてゐる木村儀男氏は、徒手空拳を以て今日の成功を贏ち得た稀に見る苦學力行の士である。雪に名高い越後中蒲原郡小須戸町は氏の幼時を物語る懐しい故郷である。幼にして才智業に優れ、早くも十三歳の時青雲の志を抱いて上京し、新聞配達として生活苦に直面しながら傍ら學校に通ひ、涙ぐましい程の奮闘を續けたものであつた。其後操縦界に入り一時横須賀にあつて敏腕を揮つてゐたが、大正二年轉じて讀賣新聞社に入社し、時の編輯長國木田北斗氏及斯界の書宿五木田素川氏等に其才幹を認められ、大に重用せられたものだ。後中外商業新聞社に轉じ、幾何もなくして外交部長に抜推せられ、大いに天賦の才能を發揮し、同社の爲に貢獻した。後帝國新聞社副社長となり、専ら之が經營に任じ業績大に見るべきものがあつたが、震災後東京毎日新聞社に入社し、現に理事として斯界に重きをなしてゐる。之より先、氏は夙に時代の趨勢に鑑み、府市政の閑却すべからざるを痛感し、社會部記者を糾合して廳内に現都政記者會の前身たる武藏野俱樂部を創立した。以來氏は府市政記者會中の先覺者として縦横に其奇才を揮ひ、隠然たる勢力を把持してゐる。曾て府會議長選舉の際、氏は故大石保氏を候補者に推薦して大多數を以て當選せしめたるが如き、氏の手腕と勢力とを最も雄辯に物語るものである。此外氏は震災直後帝都の復興に資せんが爲、土木建築請負業三多摩組を興し、現に之が顧問として不斷の努力を續けてゐる。氏資性豪放磊落、今後の活躍は期して待つべきものとされてゐる。

永峯浦次郎

文久元年十一月生
淺草區新旗籠町一番地
電話淺草五〇六八番

近時急速の發展をなしたつゝある我國セルロイド界に鶴名を馳せ、斯界に重大の貢獻をなしたつゝある人に永峯セルロイド株式會社長永峯浦次郎氏がある。由來我國に之が輸入されたのは遠く明治十七八年の頃だが、爾來今日に至る僅に數十年間に全く隔世の感がある迄に長足の進歩發展を來した事は、如何にその需要が大なるかを想像するに足るものである。氏の明敏なる頭腦の閃きは夙に思ひを斯業の將來に馳せ、セルロイドが我國に輸入せられて以來只管同工業に没頭し、幾多の難關を突破して數十年奮闘の賜は、良く現在の盛業を見るに至つたのである。即ち目下はその經營する本社を東京市外龜戸町一丁目に置き、加工場を府下尾久町に設け、數多の優秀なる職工を養成して完備せる設備の下に本邦代表的優良品を製作し、殆んど全國的に其の販路を廣め、斯界稀に見る盛況を呈してゐる。競争激甚の間に立つて、かく嶄然他の追従を許さざる状態に到達した所以のものは、要するに製作品の優秀なることが大なる原因をなしてゐることは云ふ迄もないが、その半面には本邦セルロイド界に幾多の功績を残して其の改良と發達に資したる氏の奮闘の跡をも決して見逃すことは出来ない。「常に向上心は凡ての發達の根基となる」氏は之を信條にして現狀に甘んずることなく不斷の改良研究に努力を惜まず、尙も止み難き研究心の發露は、曩に歐素先進國を視察し、蒸氣加工法を始め本邦に實施する等見るべき幾多の業績がある。大正九年業務擴張と共に個人經營より會社組織に改め、三人の兄弟克く事務の進歩を圖り、精勵之努めて居る。



中桐春太郎

明治五年二月一日生
小石川區大塚下町八二番地

多年土木事業に携つて幾多の功績を収め、現に東京府下水調査事務所長として令名ある工學士中桐春太郎氏は、明治五年二月一日を以て生れた。氏は夙に將來土木界の有望なるを思ひ、學序を追ふて東京帝國大學土木工學科に學び、只管専門學の蘊奥を究め、明治三十一年優秀なる成績を以て卒業するや、直に技師として職を廣島縣廳に奉じ、實社會に最初の一步を踏出したのであつた。かくて同三十九年六月技師として韓國統監府に招かれ、大に多年の蘊蓄を傾けて土木事業其他に獻身的の努力を拂ひ、大に功績の見るべきものがあつた。明治四十三年九月日韓合併共に此地を去り、四十四年四月宮城縣の技術師となり、翌年五月拔擢せられて技師に進み精勵大に力むる所があつた。氏はこゝにも優秀なる技術を發揮し、同縣土木事業の上へ一新紀元を劃する迄に至つた。大正六年五月秋田鑛山専門學校に講師として囑託せられ、土木建築測量等を擔當して教鞭を執つたが、其豊富な學殖は、多年の經驗と相俟つて學生間に非常な尊敬を拂はれたものだ。氏が食するほどの學究心の賜だと云へやう。後幾何もなく辭して上京し、大正十年四月東京府運河調査囑託となり、五月には多年の功績により遂に三等官の待遇を受けるに至り、昇進して下水調査部長となり、精勵今に及んでゐる。氏となり遠識明敏にして而かも責任觀念が強く、一度職務に當るや、精勵寸時も捨てぬと云ふ稀に見る熱心家である。今後我が東京府下に於ける下水の改良は、氏の力に俟つものが少くないであらう。曩に功により正五位勳五等に叙せられてゐる。

田中謙

明治十七年七月六日生
府下平塚町戸塚二九一
電話 高輪七五九番

東洋貨幣協會の創立者として、我が國錢貨研究の第一人者と評され、又帝國煉瓦株式會社取締役、東京製靴株式會社監査役、田中製革所の代表社員として、實業界にも敏腕をふるいつゝある田中謙氏は、伊豫松山藩士田中孝吉氏を父として、芝區に呱呱の聲をあげた。氏の伯父を田中新太郎氏と云ひ、舊藩主の命に依り、明治十年北米合衆國に渡りて皮革製造事業を研究して歸り、最新學理を以つてこれが事業を創設し、我が國皮革業界の始祖として、此の方面の進展に非常に功があつた。これ氏が今日皮革業界に名をなす以所のものとはなつたのである。氏は又若き頃より錢貨の蒐集研究に興味を持ち、長ずるに及んで益々その歩を進め、系統的歴史的に東西古今のあらゆる錢貨を蒐集し、大正七年東洋貨幣協會を創立しその蒐集研究になる錢貨の公開發表をなし、同志を語ひてこれが發表機關を造つたのである。氏が錢貨館に集めし貨幣は實に五萬三千を越へ、内外古今の珍貨の多き事は實に驚くばかりである。往年東伏宮宮殿下の台覽を添けなうし、身に餘る光榮に面目を施したのもその多年の努力が酬ひられたのである。氏は又これが研究發表の爲、月刊の機關雜誌を發行し、學界に非常に貢獻してゐるが、就いて見るに、遠く物々交換時代よりの人類の進化を目の當り見るの感がある。それは氏が組織的にしかも洩れなく各時代の物を整理して置くからである。氏の苦心を跡が窺はれる。趣味を狂歌に持ち、家庭には夫人ふで子、長男謙吉君、二男邦彌君、三男勉君、長女けふ子、二女久美子の二女があり、勉君は出で、他家を繼いでゐる。



中西市藏

明治廿二年三月十三日生
東京市芝區芝浦三丁目一番地
電話 高輪四六五〇番

百鍊の鐵にして初めて鋭利甲を裁つべく、磨かざる玉は、一塊の瓦石と何等擇ぶ處がない。それは獨り鐵や玉ばかりではない、人も血と涙の洗禮を受け、艱難の道程に忍苦の修業を積んでこそ、初めて玉成せられるのである。裸一貫から身を起して今日の成功を贏ち得た我が中西市藏氏が、從來歩み來つた過去の道程を見るに及んで、我等は初めて人間努力の尊さを知るのである。艱難汝を玉にす、げに氏の如きは立志傳中の人として、現代青年の範とするに足るであらう。氏は本所區龜澤町に生れたが、家庭は餘り裕福でなかつた爲め、氏は少年の頃より労働に服すべく餘儀なくせられ、最初東京堅鐵製作所に入り、二ヶ年間血の出るやうな修業を續けて行つた。そして漸く腕の出来るに従ひ、更に石川島造船所に轉じ、十三ヶ年と云ふ長の年月を致々として懸命に働いたものだ。而かも其間氏は餘暇をぬすんで本所實科工業學校を卒業する等、其奮闘と努力とは實に涙ぐましいものがあつた。かくて大正六年六月多年辛苦の甲斐あつて、本芝三丁目に獨力を以て鐵工場を經營するに至つたが、時恰も歐洲大戰に遭遇し、經濟界の好況時代であつたので、家運はいやが上に乗せて行つた。氏が永遠に搖ぎなき富の礎を築いたのも實に此時であつたのである。こうして昭和二年の秋には現住所に大なる工場と住宅を新築し、今では職工廿有餘名を使役し頗る隆盛を極めてゐる。氏はつづさに世の辛酸を嘗めた苦勞人丈けに思遣りが深く、家庭にははな子夫人との間に二男二女がある。

野田孫一

明治十八年二月生
東京市淺草區馬道五ノ二

純正科學と自然科學の凡ての原理と、其の精を集めた醫學は現代科學の華である。と同時にそれを合理的に應用して人間の身體、精神作用生活に接するところの意味に於て、醫學は科學と人生の全面的接觸であるといはねばならない、されば醫學は枯淡無味な科學者であつてもならないし、多情多感なノベリストであつてもならない、こゝに於て我が野田孫一氏こそ眞に醫師の典型とも云ふべきであらう。氏は千葉縣の人、角田政吉氏の二男に生れ、明治四十四年帝大醫科を卒業するや、直ちに郷里の北條町に醫院を設け、異數の發展をとげたものだ。かくて大正三年、野田家を繼ぐに及んで上京し、淺草觀音境内に病院を建設し、氏は院長として患者に接する外、博士二名を招聘して、内科、外科、産婦人科を各々擔當せしめ、其の懇切丁寧なる態度と、卓絶した技能とは忽ち患者の信用を購ひ、門前市をなす如き繁榮を極むるに至つた。殊に地の利と人の和を得たる野田醫院の名は、淺草界隈のみならず、遠く市内各區に喧傳され、各方面から今後の發展向上を囑望されてゐる。氏は又激務の傍ら公共の事に盡瘁し、夙に淺草區會議員に擧げられ不退轉の勇氣と努力を以て區政の刷新に當り、且つ復興事業の最難關たる區劃整理事業に、委員として、着々効果を収め、其の公平無私なる態度は、區民の信頼と崇敬を一身に集めてゐる資性濃厚篤實にして正義の念強く稀にみる人格者である。夫人きみ子は、また能く、氏を助けて病室の整理或は使用人の指導、患者の慰問等に、女性特有の優しさを見せ、良妻賢母の譽れを擅にしてゐる。



橋本彌平

明治三十四年生
東京府下羽田町字羽田一三二五

國かはねば生きてゆけないのが現代である。國よ者は考へねばならない
また慰安を振り、生氣を養はねばならない、人間の眞實を知り、道義の奥
底を見極むべきである。されば讀書は單なる低徊趣味やベダンテイツタの
所産ではなくて、實に闘争と苦難の最尖端ある今日では、萬人の生活の中
に浸潤する大きな力を持つてゐる。従つて我が橋本彌平氏が羽田町民のた
めに私設圖書館を創立した事は、其の價値、其の効果に於て即やける社會
事業と云はねばならない。氏は埼玉縣北埼玉郡の人、夙に埼玉縣立中學校
を卒へて上京し、早稻田大學文科に通つた。在學中運動に熱中し、天晴れ
テニス選手であつた。かくて遠く北海タイムス新聞社に入りて、社會部に
二年勤務したが、大正十五年現住所なる羽田町に轉ずると共に同社を辭
し、今日では日刊東京民友新聞社の顧問となり、同紙に寄稿してゐる。か
くて昭和三年、御大典を永遠に記念せんが爲め圖書館設立を畫策したが、
羽田町の財政貧弱なるため、氏は三千餘圓の私費を投じて建設し、更らに
五千餘圓を以つて、普ねく良書を蒐集し、之が完璧を期するに至つたので
ある。而して氏は尙、これに止まらず、隣接せる百坪の地所に、一千六百
餘圓の豫算を以て平家木造建の簡易宿泊所を建設すべく、腐心努力してゐ
る。其の殉教者の如き献身的努力と犠牲的精神とは、氏が若き社會事業家
としての、未知數なる將來を強く暗示するものである。氏の生家は苗字帯
刀を許された二十八代の舊家だけに勅選貴族院議員、道會議員等を叔父に
もつてゐる。氏はテニス、獵銃、寫眞等に趣味あり、幸枝夫人は才色兼備
の譽が高い。

岩崎清七

元治元年十二月十八日生
東京市小石川區小日向臺町二ノ八
電話 小石川 七四八六番

瓦斯は生活の必需品で、今では電燈と共に、文化生活になくはならぬ
ものとなつて來た。最近東京瓦斯會社が都市の膨脹と共に、異數の發展を
遂ぐるに至つたのも、明かに此間の消息を物語つてゐる。我が岩崎清七氏
は多年同社の社長として之が經營の衝に當り、同社の礎石を盤石の泰きに
置くに與つて力ある人である。氏は栃木縣の人、先代清七氏の長男にして
明治十六年十二月家督を相続し同時に幼名清吉を改むるに至つた。夙に大
志を抱いて渡米し、エール大學に學んだ。卒業後新知識を齎して歸朝する
や、直に實業界に身を投じて、各種會社の事業に携り、天賦の商才と、快
刀亂麻の手腕を揮つて活躍し、大に其前途を囑望せられたものだ。後東京
瓦斯會社の副社長となり事業經營に理智の閃めきを見せてゐたが、昭和二
年四月推されて社長となり、精勵今日に及んでゐる。氏は又別に米穀及醬
油醸造業を営む外、東京商業會議所議員、日本味噌株式會社、日本味噌株
式會社及警械セメント株式會社の各社長、帝國火藥工業、東京榨油、東京
火災保險、蒲郡鹽港線各株式會社取締役、安部幸商店、日清紡績、白山水
力電氣、千代田、日米信託各株式會社監査役等を兼ね、實業界に重きをな
してゐる。氏人となり剛毅、一度意を決すれば飽迄初志を貫徹せざる已
まざる鐵石の意志と、負けじ魂とを持つてゐる。殊に精力が絶倫で意氣壯
者を凌ぎ、又東海山人と號して漢詩を能くし、暇あれば時に詩を賦して閑
日月を樂むと云ふ。夫人を千代子と云ひ貞淑の譽高く、二人の間に三男三
女がある。

中村正雄

芝區三田四國町二の三號
電話 高輪 三四八五番

醫化學上今や鍼灸術は、かうして、立派に價値づけられる事になつた。
往年にあつて一部の人達からは全々非科學的のものであるかのやうに誤解
を受けたこともある相だが、尠く共現在の鍼灸術は、最新醫學に根據を置き
最もサイエンティフィックなことで治療界に大きい役割を演じてゐる譯で
ある。さてわが中村正雄氏の、父庄五郎氏は、この鍼灸術の權威として帝都
の斯界で重きをなしてゐた。が庄五郎氏は僅か十八歳の時に上京して、其
頃の名鍼灸師として知られてゐた烏森・山岸の兩師に就いて具に修業を積
むこと十數箇年に及んだとの事だ。そして二十八歳の時に現在の場所を獨
立開業した。その學理的でありかつ先天的な施術の適確さは、たちまちの
内に非常な信用を博し、患者は陸續と門戸を訪れると云ふ有様で、日に月
に財をなしたのである。現に多くの家作と地所を有して數萬の富を貯蓄す
るに至つたと云ふ。が惜しいことには過ぐる大正十三年十月十八日 秋風
に木の葉の散るにさも似て、嚴父庄五郎氏は歸らぬ鬼籍の人となつて終つ
た。病狀は腦貧血であつたと云ふ。でその長男に當るわが正雄氏が父君の
業を繼承して、父君にも倍して家業に勵んでゐる云ふ。氏は大正十三年度
に國家の干城として歩兵第一聯隊に入營し軍務に服したが、同時
に國家の持主として知られ、よく母君のい子に孝養を怠らぬ。と同時に
非常に兄弟思ひで、四人の兄弟は常に和氣藹々として家庭の團樂を樂んで
ゐる。趣味は大弓であると。因に父君の出生地は埼玉縣南埼玉郡大山村新
井新田である。

外池千太郎

明治十一年六月五日
本所區相生町二の五二三號
電話 本所 四六〇七番

立志傳中の人の辿つて來たプロセスを凝視してみると、まづその獨立に
際しては決して資本の大小を問はない。たゞ如何にその輕少な資本を巧み
に運用するかと云ふことに腐心し、粒々辛苦の努力を以つてその増大にの
み没頭する。勿論かく云ふと如何にも陳腐な話であるが、その事實を貫徹
するか否かが即ち成功、不成功の分水嶺なのである。わが外池千太郎氏
が自轉車販賣及び自轉車貸業を初めた時には、僅か百圓の金を資本とした
のに過ぎなかつた。それが現在では百三十餘名の職工を抱擁して、東京に
於ける斯界での重鎮としての現位置を築き上げるに至つたのだ。まづ勇氣
である、まづ果斷である。而して後に周密なプランと明晰な經營法を以つ
てすればよい。抑も氏は深川區和倉町の出身で、十三歳の幼時から、富澤
町の呉服店に丁稚として、二十歳の頃まで苦闘した。そして先づ獨立し
て下駄の鼻緒製造に約十年間の久しい間従つてゐたが、一向に業績が振は
ないので、自轉車業に着手したのである。それから氏は、知人藤原氏から
月賦で自轉車を購入しては、之を他に賣却して利益を求め等、その經營
は文字の如くに苦心慘憺を極めたものであつた。が財界の好轉と共に大正
八年頃までには、非常な巨利を收めて莫大な産をなすに至つたのだ。そこ
で氏は自轉車製造に手を染め、工場を建設して大々的に業績の伸展に力め
た結果、昨今では年に一萬五千臺餘の製造高に達してをり、その製造に係
るエスティ、相生、ピクトリア等の三種の自轉車は、優秀品として名聲噴
々たるものがある。夫人とく子との間には一男幸太郎君がある。

並木安右衛門
明治六年八月生
本郷區湯島六丁目二四番地
電話小石川八四九番

いふ迄もなく自治體は國家組織の單位であり、自治は政治の基調である。各個相和衷協力して隣保扶導の任を盡さば憲政の妙諦に盡く。近時市内各町に於て組織的有機體たる町會の相ついで組織さるゝを見るのは吾人の欣幸とする所であつて、各個の胸に目醒めつゝある自治への自覺の表現されて行く所に、躍如として一般の政治的向上を示して居る。而しながら多衆相より相圖りて一の事を行ふにあつては、常に先頭指揮唱導の任に當るの士を要する。團體事業の成否は有志首唱者の素質如何に據つて支配される事が甚だ多い、我等は有志諸家の家事の外に東奔西走公事に盡瘁して居る貢獻に對して深甚な謝意を表してやまない。わが並木安右衛門氏は竹内源兵衛氏の第三子で明治二十八年先代安右衛門氏の養嗣子と成り、明治三十三年家督を相続して前名政吉を改め祖父の業を繼いで味噌製造に一意従事した、鋭意改良を試みた結果漸次良質のものを出すを得て取引奮に倍するに至つて家業いや榮ゆるを見るに至つた。地下の嚴父も破顔會心のよろこびを禁じ得ないであらう。氏は忙中常に居所の自治に心を砕き、卒先之が發展を圖つて居たが、去る十四年町會の必要を痛感して有志と携へて湯島六丁目町會を創立し、衆議の囑する所となつて牛耳を執つて相互共同の樞機を握つて居るが、理想家の氏は尙幾多の改革を實現し様と努めて居る。先年の震災の際家事を放棄して罹災者應急救護の任にあたられた麗しい心事は取つて以つて範とするに足るものである、本年五十四歳、謹直温厚の士である。家族には妻女とし子との間に五男二女がある。

堀津長右衛門
文久三年七月十一日生
日本橋區通り四丁目
電話大手七二番

現在の城東小學校がまだ補習學校と云つてゐた當時に、氏はその校長さんとして約二ヶ年間に育英事業のために盡瘁したものである。教育界出身だけに非常に勤直な人柄で、所謂そのかみの孔孟の學でかためたと云ふ清潔白々な人である。が學校制度改正と共に辭職して親譲りの銘茶、茶器、茶の湯道具の販賣店を營み、孜孜として家業に勤んで現在に至つてゐる。抑も同店は徳川の享和年間から現住所の日本橋通り四丁目に在るのであつて、同家は町内有数の舊家として知られてゐる。先代長右衛門氏は明治元年頃から町總代の副長として、何くれとなく町内の世話を盡き、非常に徳望をおさめてゐた好人物で、氏も父君の意思を繼いで町總代の副總代として在ること五箇年、衛生組合法が施行せられるや同町に於ける最初の衛生組合長に推舉せられたものだ。これより以前のこと即ち明治初年頃に地主を中心とした地主會とも云ふべき、六の部會が同町内に在つたが、色々の情弊が錯綜してゐて充分の機能を發揮することが出来ないで、氏等は卒先提唱してその組織内容を改善を計り、會則を改正して大いに刷新面目を改めた。つまり會員の範圍を擴張して、選舉制によることにしたのである。がこの六の部會の勢力たるや非常に強大なもので、今でも町内の輿論を左右する實力を有してゐる。氏はこの會の會計として數年間互り盡力してゐた。夫人との間に三男三女あり、長男長一郎氏は慶大商科出身の俊才であり、男の兄弟三人はみな協力して老いた父君を扶け、家業の發展に邁進してゐる。趣味は茶の湯と謡曲。



守屋初重

明治十九年二月七日生
東京府下入新井町不入斗三三三

近代人と云つても、まだ薄暗い煤けた傳統の雰圍氣の中に生活してゐる。だから狂悽的なジャズを受する半面に、錦繪や浮世繪を喜ぶのがと勇敢に斷定した人がある。だが傳統云々といふことなくとも、鋭敏な感覺をもつて生きようとする近代人が、香りの高い海苔を賞味するのは、誰しもが理解することの出来る當然の心理だらう。されば海苔業の將來もまことに恵まれたもので、この海苔商として大森の中樞地に、間口五間の堂々たる店舗を構えたのが、我が守屋初重氏である。氏は現入新井町々會議員で海苔問屋なる守屋寅吉氏の令弟で、現住所に分家として支店を開設したのは明治四十三年の事であつた。爾來、顧客本位、誠實勤勉をモットウとして商業道徳に終始し、日夜奮闘した甲斐あつて、第五回内閣勲業博覽會及び東京府主催の品評會に三等賞を得る等、遂に今日の隆盛を極むるに至つた。納税額年三百餘圓で大森一の店家であるといふ。これより先氏は世田ヶ谷の野砲兵十四聯隊に入り、明治四十四年頃より在郷軍人理事として會計事務に執筆し、現入新井町長立花種忠子爵が在郷軍人會長時代、氏は副會長として三ヶ年其の職にあつた。また繁務の傍ら町政のためにも奔走し、入新井町向區の會計を三ヶ年勤めたが、昭和二年の四月、向區々長に推選されて現在に及んだのである。また警井神社委員、及び小學校保護者會評議員として、常に町民の中堅となり、町の發展、町民の親睦のために力を注いでゐる。謹嚴實直の人で、偉大なる體格の所有者であると共に稀にみる奮闘家である。旅行を好愛し、家庭には六人の子女がある。

久保田金四郎

明治十七年二月十九日生
東京市麹町區有樂町二ノ二

この世の生活は、涙の谷ではない、試みの場所でもない、生活は云ふべからざるよき何物かである。この世の生活の喜びは無限である。たゞ私達がこの世の掟のために、私達に負はされたことを成し遂げることによつて其の喜びを得さへしただけのことである。人生は絶えざる喜びでなければならぬ、また喜びでありうると、文豪トルストイ翁は云つてゐる。まこと我々がなすべき事を忠實になし、行くべき道を卒直に行つたならば、我々は不安と悲哀を一蹴して、滾々と盡きざるエターナルな幸福の裡に、晏如として生活出来る筈である。然るに種々なる社會的事情はこの幸福感や生活を制約する。即ち警察權によつて防止され豫防されてゐる犯罪等も其の一つである。されば警察廳にあつて刑事部長の椅子を占め、献身的に精進してゐる我が久保田金四郎氏の貢獻も、社會に及ぼすところ極めて大なりと云はねばならない。氏は香川縣の人、久保田好藏氏の二男に生れ學序を追つて、明治大學法科を卒業したのは、明治四十年の事であつた。翌四十一年辯護士試験に見事に合格して、大正三年六月東京地方裁判所檢事を任命されたのであつた。これ氏が官界に踏みこんだ第一歩であつて、大正九年以來、愛媛縣、福島縣等の警察部長に歴任し、また京都府産業部長に拔擢せられる等、天稟的の手腕と、深遠なる學識とを到るところに現はして、果進の一路を歩ゆんで行つたのであつた、かくて十二年官を辭したが、氏の英才は惜まれて、昭和二年田中内閣成立と共に警視廳書記官に任ぜられ、現在刑事部長の要職にあつて令名を擡にしてゐる。



福島義之

明治廿二年二月生
東京市芝區新堀町十二

謎の北極を征服した巨人、アムンゼンは、實に雪深いノールエーが生んだ稀にみる意志の人であつた。雪に明け、雪に暮れる北海の天地に生を享けた我が福島義之氏も、亦超人間的な意志の所有者である。氏が今日金融界の鬼才として重きをなしてゐるのは、實に其の剛健なる意志と不慮の努力に依つて築き上げられたものに外ならない。郷愛を了へると共に磯谷郡南尻別村字大谷地の故郷を後にして札幌市に出で、職を鐵道管理局に奉じ、其の傍ら同局講習所に雪の功を積んだ、かくて大正二年樺太の王子製紙株式會社機械部を経て六年十一月三菱美唄炭鐵工業所技手となり、大に其前途を囑目せられた。然し將來實業界に驥足を延べんとする氏は十年の初夏前途に輝く希望を抱いて上京し、秘かに機會の到來を待つてゐた。偶々近身細川力蔵氏が芝浦商事株式會社を創立するや、直ちに氏は聘されて同社に入り格勤の譽れが高かつたが、後幾許もなくして同社の解散すると共に明愛貯蓄銀行に轉じ同社の中堅として大に其才能を證へられてゐた、昭和二年自ら世の趨勢に鑑み獨力を以て本芝四丁目十六番地に芝浦商行を經營し、土地建物及び一般金融を取扱ふに至つた。かくて氏の奮闘努力と事業の堅實とは忽ち斯界に信用を博し、現に市内の各區及各郡に三ヶ所宛の支店を有し近く株式組織に改められるまでの隆盛を極めてゐる。氏資性穩健にして内に不撓不屈の意志を藏し、其風華に接する人に限りない親しみと懐しみを與へずにはゐない。家庭にはやす子夫人との間に長男敏男君の外、實、義信君の三男及び美恵子嬢あり、常に霑々たる和氣が漲つてゐる。

片山鬼作

明治十七年九月一日生
東京府下高田町雜司ヶ谷四七八

人生は戰場である。修羅場である。そしてこの闘ひに勝つた者は、其處に歡呼の戰捷記念碑を残し、負けた者は、悲惨荒涼たる死屍の墓碑を残すのである。而も血みどろの墓碑を風雨にさらす人の何と多いことか、人誰れしも其の門出に於て、收殘者を顧みのではない、漂々しい凱旋の姿を胸に描いて出征するのである。だが勝鬨と微笑に迎へられる勇士の何と少ないことか、人々はその悲惨な收北を意志の薄弱と怠惰の結果として死屍を鞭打たうとする、けれども人生の戰場は、闘ふ者にとつて自由の天地であるだらうか。否、闘争の武器としての學問さへも餘暇と學資のない生活によつて制約される有様であつて、爲めに自暴自棄となり、徒らに收殘の墓碑を残してゆく者の多いのは我々のよく知るところである。されば之等の人々に研學の道と與へることは、人生の勇敢なる闘士に自由の天地を開拓してやることに外ならない。よつてもつて研數學館主我が片山鬼作氏の偉大なる社會的貢獻をこゝに見いだすのである。氏は愛媛縣今治市の人、夙に吳市の土井塾に學んで後獨學し、三十七八年の日露戰役に出征、勳八等に叙せられ、大正元年以來教育事業に携り、専心育英のために獻身的努力をこつたのであつた。即ち大正十一年十二月研數學館主となり、翌十二年獨立經營となして、獨學者のために最善の努力をばらひ、數學に英語に名實共に研數學館をして研學者の機關たらしめ着々効果を擧げていつたのであつた。實に氏こそある意味に於ての救世主といふべきだらう。家庭には茂美夫人との間に正男君と義子嬢あり、至つて圓滿である。

昭和四年十二月三日印刷
昭和四年十二月九日發行

(非賣品)

東京市芝區芝公園十五號地の一

ラヂオ協會

日本ラヂオ總覽編纂部

東京市芝區芝公園十五號地の一

松浦孝治

東京市芝區愛宕町三丁目二二

牛丸勝三郎

不許複製

編輯兼
發行者

右代表者

印刷者

印刷所

東京市芝區愛宕町三丁目二二

東洋印刷株式會社

83
463

終